高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説

国語編

平成 30 年 7 月

文部科学省

ま　え　が　き

文部科学省では，平成 30 年 3 月 30 日に学校教育法施行規則の一部改正と高等学校学習指導要領の改訂を行った。新高等学校学習指導要領等は平成 34 年度から年次進行で実施することとし，平成 31 年度から一部を移行措置として先行して実施することとしている。

今回の改訂は，平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申を踏まえ，

① 教育基本法，学校教育法などを踏まえ，これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし，生徒が未来社会を切り拓(ひら)くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。その際，求められる資質・能力とは何かを社会と共有し，連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること。

② 知識及び技能の習得と思考力，判断力，表現力等の育成とのバランスを重視する平成 21 年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で，知識の理解の質を更に高め，確かな学力を育成すること。

③ 道徳教育の充実や体験活動の重視，体育・健康に関する指導の充実により，豊かな心や健やかな体を育成すること。

を基本的なねらいとして行った。

本書は，大綱的な基準である学習指導要領の記述の意味や解釈などの詳細について説明するために，文部科学省が作成するものであり，高等学校学習指導要領第 2 章第 1 節「国語」について，その改善の趣旨や内容を解説している。

各学校においては，本書を御活用いただき，学習指導要領等についての理解を深め，創意工夫を生かした特色ある教育課程を編成・実施されるようお願いしたい。

むすびに，本書「高等学校学習指導要領解説国語編」の作成に御協力くださった各位に対し，心から感謝の意を表する次第である。

平成 30 年 7 月

文部科学省初等中等教育局長

髙　橋　道　和

目次

第１章　総説 …… 1
　第１節　改訂の経緯及び基本方針 …… 1
　　１　改訂の経緯 …… 1
　　２　改訂の基本方針 …… 2
　第２節　国語科改訂の趣旨及び要点 …… 6
　　１　国語科改訂の趣旨及び要点 …… 6
　第３節　国語科の目標 …… 21
　　１　教科の目標 …… 21
　　２　科目の目標 …… 26
　第４節　国語科の内容 …… 29
　　１　内容の構成 …… 29
　　２　〔知識及び技能〕の内容 …… 29
　　３　〔思考力，判断力，表現力等〕の内容 …… 41
　第５節　国語科の科目編成 …… 63
　　１　科目の編成 …… 63
　　２　各科目の構成 …… 64
第２章　国語科の各科目 …… 68
　第１節　現代の国語 …… 68
　　１　性格 …… 68
　　２　目標 …… 69
　　３　内容 …… 71
　　４　内容の取扱い …… 102
　第２節　言語文化 …… 109
　　１　性格 …… 109
　　２　目標 …… 109
　　３　内容 …… 112
　　４　内容の取扱い …… 134
　第３節　論理国語 …… 144
　　１　性格 …… 144
　　２　目標 …… 144
　　３　内容 …… 147
　　４　内容の取扱い …… 173
　第４節　文学国語 …… 178
　　１　性格 …… 178

２　目標 …… 178
３　内容 …… 181
４　内容の取扱い …… 205
● 第５節　国語表現 …… 209
１　性格 …… 209
２　目標 …… 209
３　内容 …… 212
４　内容の取扱い …… 242
● 第６節　古典探究 …… 246
１　性格 …… 246
２　目標 …… 246
３　内容 …… 249
４　内容の取扱い …… 269
● 第３章　各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い …… 274
１　指導計画作成上の配慮事項 …… 274
２　内容の取扱いに当たっての配慮事項 …… 278
３　総則関連事項 …… 281

付　録 …… 283
付録１：学校教育法施行規則（抄）…… 284
付録２：高等学校学習指導要領　第１章　総則 …… 289
付録３：高等学校学習指導要領　第２章　第１節　国語 …… 307
付録４：教科の目標，各科目の目標及び内容の系統表
（高等学校国語科）…… 326
付録５：中学校学習指導要領　第２章　第１節　国語 …… 336
付録６：教科の目標，各学年の目標及び内容の系統表
（小・中学校国語科）…… 346
付録７：高等学校学習指導要領　第２章　第８節　外国語 …… 358
付録８：小・中学校における「道徳の内容」の学年段階・
学校段階の一覧表 …… 380

第１章　総　説

第１節　改訂の経緯及び基本方針

１　改訂の経緯

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが，成人して社会で活躍する頃には，我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予測が困難な時代となっている。また，急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては，一人一人が持続可能な社会の担い手として，その多様性を原動力とし，質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

こうした変化の一つとして，進化した人工知能（AI）が様々な判断を行ったり，身近な物の働きがインターネット経由で最適化される IoT が広がったりするなど，Society5.0 とも呼ばれる新たな時代の到来が，社会や生活を大きく変えていくとの予測もなされている。また，情報化やグローバル化が進展する社会においては，多様な事象が複雑さを増し，変化の先行きを見通すことが一層難しくなってきている。そうした予測困難な時代を迎える中で，選挙権年齢が引き下げられ，更に令和４年度からは成年年齢が 18 歳へと引き下げられることに伴い，高校生にとって政治や社会は一層身近なものとなるとともに，自ら考え，積極的に国家や社会の形成に参画する環境が整いつつある。

このような時代にあって，学校教育には，子供たちが様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め，知識の概念的な理解を実現し，情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

このことは，本来我が国の学校教育が大切にしてきたことであるものの，教師の世代交代が進むと同時に，学校内における教師の世代間のバランスが変化し，教育に関わる様々な経験や知見をどのように継承していくかが課題となり，子供たちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化する中で，これまでどおり学校の工夫だけにその実現を委ねることは困難になってきている。

こうした状況の下で，平成 26 年 11 月には，文部科学大臣から，新しい時代にふさわしい学習指導要領等の在り方について中央教育審議会に諮問を行った。中央教育審議会においては，２年１か月にわたる審議の末，平成 28 年 12 月 21 日に「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申」という。）を示した。

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申においては，“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し，連携・協働しながら，新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し，学習

指導要領等が，学校，家庭，地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう，次の6点にわたってその枠組みを改善するとともに，各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と，教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施，学習・指導の改善・充実）
④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）

これを踏まえ，文部科学省においては，平成29年3月31日に幼稚園教育要領，小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領を，また，同年4月28日に特別支援学校幼稚部教育要領及び小学部・中学部学習指導要領を公示した。

高等学校については，平成30年3月30日に，高等学校学習指導要領を公示するとともに，学校教育法施行規則の関係規定について改正を行ったところであり，今後，令和4年4月1日以降に高等学校の第1学年に入学した生徒（単位制による課程にあっては，同日以降入学した生徒（学校教育法施行規則第91条の規定により入学した生徒で同日前に入学した生徒に係る教育課程により履修するものを除く。））から年次進行により段階的に適用することとしている。また，それに先立って，新学習指導要領に円滑に移行するための措置（移行措置）を実施することとしている。

2　改訂の基本方針

今回の改訂は平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ，次の基本方針に基づき行った。

（1）今回の改訂の基本的な考え方

①教育基本法，学校教育法などを踏まえ，これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし，生徒が未来社会を切り拓（ひら）くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。その際，求められる資質・能力とは何かを社会と共有し，連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること。
②知識及び技能の習得と思考力，判断力，表現力等の育成とのバランスを重視する平成21年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で，知識の理解の質を更に高め，確かな学力を育成すること。
③道徳教育の充実や体験活動の重視，体育・健康に関する指導の充実により，豊かな心や健やかな体を育成すること。

(2) 育成を目指す資質・能力の明確化

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申においては，予測困難な社会の変化に主体的に関わり，感性を豊かに働かせながら，どのような未来を創っていくのか，どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること，こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し，学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。また，汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ，知識及び技能と思考力，判断力，表現力等とをバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが重要とされた。

このため「生きる力」をより具体化し，教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得)」，イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養(かん))」の三つの柱に整理するとともに，各教科等の目標や内容についても，この三つの柱に基づく再整理を図るよう提言がなされた。

今回の改訂では，知・徳・体にわたる「生きる力」を生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら，授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため，全ての教科等の目標や内容を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で再整理した。

(3)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

子供たちが，学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには，これまでの学校教育の蓄積も生かしながら，学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要である。

特に，高等学校教育については，大学入学者選抜や資格の在り方等の外部要因によって，その教育の在り方が規定されてしまい，目指すべき教育改革が進めにくいと指摘されてきたところであるが，今回の改訂は，高大接続改革という，高等学校教育を含む初等中等教育改革と，大学教育の改革，そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革という一体的な改革や，更に，キャリア教育の視点で学校と社会の接続を目指す中で実施されるものである。改めて，高等学校学習指導要領の定めるところに従い，各高等学校において生徒が卒業までに身に付けるべきものとされる資質・能力を育成していくために，どのようにしてこれまでの授業の在り方を改善していくべきかを，各学校や教師が考える必要がある。

また，選挙権年齢及び成年年齢が 18 歳に引き下げられ，生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなる中，高等学校においては，生徒一人一人に社会で求められる資質・能

力を育み，生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが，これまで以上に重要となっている。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）とは，我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点を学習指導要領に明確な形で規定したものである。

今回の改訂では，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項を総則に記載するとともに，各教科等の「第３款　各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」等において，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めることを示した。

その際，以下の点に留意して取り組むことが重要である。

①授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく，生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」，「対話的な学び」，「深い学び」の視点で，授業改善を進めるものであること。

②各教科等において通常行われている学習活動（言語活動，観察・実験，問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

③１回１回の授業で全ての学びが実現されるものではなく，単元や題材など内容や時間のまとまりの中で，学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか，グループなどで対話する場面をどこに設定するか，生徒が考える場面と教師が教える場面とをどのように組み立てるかを考え，実現を図っていくものであること。

④深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は，「どのような視点で物事を捉え，どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり，教科等の学習と社会をつなぐものであることから，生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ，教師の専門性が発揮されることが求められること。

⑤基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には，それを身に付けさせるために，生徒の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら，確実な習得を図ることを重視すること。

（4）各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進

各学校においては，教科等の目標や内容を見通し，特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力，情報活用能力（情報モラルを含む。以下同じ。），問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために教科等横断的な学習を充実することや，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。これらの取組の実現のためには，学校全体として，生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育内容や時間の配分，必要な人的・物的体制の確保，教育課程の実施状況に基づく改善などを通して，教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求めら

れる。

このため，総則において，「生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努める」ことについて新たに示した。

(5) 教育内容の主な改善事項

このほか，言語能力の確実な育成，理数教育の充実，伝統や文化に関する教育の充実，道徳教育の充実，外国語教育の充実，職業教育の充実などについて，総則や各教科・科目等（各教科・科目，総合的な探究の時間及び特別活動をいう。以下同じ。）において，その特質に応じて内容やその取扱いの充実を図った。

第２節　国語科改訂の趣旨及び要点

１　国語科改訂の趣旨及び要点

中央教育審議会答申においては，小・中・高等学校の国語科の成果と課題について，次のように示されている。

○　PISA2012（平成 24 年実施）においては，読解力の平均得点が比較可能な調査回以降，最も高くなっているなどの成果が見られたが，PISA2015（平成 27 年実施）においては，読解力について，国際的には引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの，前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。これは，調査の方式がコンピュータを用いたテスト（CBT）に全面移行する中で，子供たちが，紙ではないコンピュータ上の複数の画面から情報を取り出し，考察しながら解答することに慣れておらず，戸惑いがあったものと考えられるが，そうした影響に加えて，情報化の進展に伴い，特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で，読解力に関して改善すべき課題が明らかとなったものと考えられる。

○　全国学力・学習状況調査等の結果によると，小学校では，文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること，目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。中学校では，伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや，複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること，文章を読んで根拠の明確さや論理の展開，表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。

○　一方，全国学力・学習状況調査において，各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けた学校の割合は，小学校，中学校ともに 90%程度となっており，言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている。しかし，依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり，更なる授業改善が求められる。

○　高等学校では，教材への依存度が高く，主体的な言語活動が軽視され，依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり，授業改善に取り組む必要がある。また，文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること，多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること，国語の語彙の構造や特徴を理解すること，古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

これらの成果と課題を踏まえて改訂した高等学校学習指導要領の国語科の主な内容は，次のようなものである。

（1）目標及び内容の構成

①目標の構成の改善

国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」と規定するとともに，教科の目標を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理した。また，このような資質・能力を育成するためには，生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせることが必要であることを示している。

科目の目標についても，教科の目標と同様に，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理した。

②内容の構成の改善

三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ，従前，「話すこと・聞くこと」，「書くこと」，「読むこと」の3領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を，〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕に構成し直した。

〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕の構成を図示すると，次のとおりである。

平成21年告示学習指導要領	平成30年告示学習指導要領
A　話すこと・聞くこと （1）指導事項 （2）言語活動例 B　書くこと （1）指導事項 （2）言語活動例 C　読むこと （1）指導事項 （2）言語活動例 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 （1）ア 伝統的な言語文化に関する事項 イ 言葉の特徴やきまりに関する事項 ウ 漢字に関する事項 （「国語総合」の場合）	〔知識及び技能〕 （1）言葉の特徴や使い方に関する事項 （2）情報の扱い方に関する事項 （3）我が国の言語文化に関する事項 〔思考力，判断力，表現力等〕 A　話すこと・聞くこと （1）指導事項 （2）言語活動例 B　書くこと （1）指導事項 （2）言語活動例 C　読むこと （1）指導事項 （2）言語活動例 （「現代の国語」の場合）

「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」は，国語で的確に理解し効果的に表現する上で共に必要となる資質・能力である。したがって，国語で的確に理解し効果的に表現する際には，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことの「思考力，判断力，

表現力等」のみならず，言葉の特徴や使い方，情報の扱い方，我が国の言語文化に関する「知識及び技能」が必要となる。このため，今回の改訂では，資質・能力の三つの柱に沿った整理に基づき，従前の3領域1事項の内容を踏まえ，国語で的確に理解し効果的に表現するために必要な「知識及び技能」を〔知識及び技能〕として明示した。

この〔知識及び技能〕に示されている言葉の特徴や使い方などの「知識及び技能」は，個別の事実的な知識や一定の手順のことのみを指しているのではない。国語で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く「知識及び技能」として身に付けるために，思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められるなど，「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」は，相互に関連し合いながら育成される必要がある。

こうした「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」の育成において大きな原動力となるのが「学びに向かう力，人間性等」である。「学びに向かう力，人間性等」については，教科及び科目の目標においてまとめて示し，指導事項のまとまりごとに示すことはしていない。教科及び科目の目標において挙げられている態度等を養うことにより，「知識及び技能」と「思考力，判断力，表現力等」の育成が一層充実することが期待される。

なお，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域において，どのような資質・能力を育成するかを(1)の指導事項に示し，どのような言語活動を通して資質・能力を育成するかを(2)の言語活動例に示した。

(2) 科目構成の改善

中央教育審議会答申においては，高等学校の国語科の課題と科目構成の見直しについて，次のように示されている。

○　高等学校の国語教育においては，教材の読み取りが指導の中心になることが多く，国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと，話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」，「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと，古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

こうした長年にわたり指摘されている課題の解決を図るため，科目構成の見直しを含めた検討が求められており，別添2－1に示した資質・能力の整理を踏まえ，以下のような科目構成とする。（別添2－4を参照）

なお，以下の科目構成の説明において，「学びに向かう力・人間性等」については特に言及していないが，全ての科目において育成されるものである。

○　国語は，我が国の歴史の中で創造され，上代から近現代まで継承されてきたものであり，そして現代において実社会・実生活の中で使われているものである。このことを踏まえ，後者と関わりの深い実社会・実生活における言語による諸活動に必

要な能力を育成する科目「現代の国語」と，前者と関わりの深い我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し，これを継承していく一員として，自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目「言語文化」の二つの科目を，全ての高校生が履修する共通必履修科目として設定する。

○　共通必履修科目「現代の国語」は，実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目として，「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」以外の各事項を，「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成する。

○　共通必履修科目「言語文化」は，上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目として，「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」を中心としながら，それ以外の各事項も含み，「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成する。

○　選択科目においては，共通必履修科目「現代の国語」及び「言語文化」において育成された能力を基盤として，「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面のそれぞれを主として育成する科目として，「論理国語」，「文学国語」，「国語表現」を設定する。

　また，「言語文化」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため，ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究」を設定する。

○　なお，共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」において育成された能力は，特定の選択科目ではなく全ての選択科目につながる能力として育成されることに留意する必要がある。

○　選択科目「論理国語」は，多様な文章等を多面的・多角的に理解し，創造的に思考して自分の考えを形成し，論理的に表現する能力を育成する科目として，主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成する。

○　選択科目「文学国語」は，小説，随筆，詩歌，脚本等に描かれた人物の心情や情景，表現の仕方等を読み味わい評価するとともに，それらの創作に関わる能力を育成する科目として，主として「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する。

○　選択科目「国語表現」は，表現の特徴や効果を理解した上で，自分の思いや考えをまとめ，適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目として，主として「思考力・判断力・表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を育成する。

○　選択科目「古典探究」は，古典を主体的に読み深めることを通して，自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として，主に古文・漢文を教材に，「伝統的な言語文化に関する理解」を深めることを重視するとともに，「思考力・判断力・表現力等」を育成する。

○　また，「古典探究」以外の選択科目においても，高等学校で学ぶ国語の科目として，探究的な学びの要素を含むものとする。

○　なお，高校生の読書活動が低調であることなどから，各科目において，高校生が

それぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実，読書活動の展開が必要である。

このことを踏まえ，今回の改訂では，共通必履修科目として「現代の国語」及び「言語文化」を，選択科目として「論理国語」，「文学国語」，「国語表現」及び「古典探究」をそれぞれ新設した。

共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」は，答申に示された高等学校国語科の課題をそれぞれ踏まえて新設している。

「現代の国語」については，主として「話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』，『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」という課題を踏まえ，特にこうした課題が，実社会における国語による諸活動と関係が深いことを考慮し，実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として，その目標及び内容の整合を図った。

一方，「言語文化」については，主として「古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらない」という課題を踏まえ，特にこうした課題が，古典を含む我が国の言語文化への理解と関係が深いことを考慮し，上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として，その目標及び内容の整合を図った。

共通必履修科目を1科目の総合的な科目ではなく，2科目新設したのは，これらの科目を，それぞれの課題を踏まえた，これからの時代に必要とされる資質・能力を明確にした科目として設定することにより，高等学校国語科の課題の確実な解決を図るためである。

選択科目については，答申を踏まえ，共通必履修科目「現代の国語」及び「言語文化」において育成された能力を基盤として，「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面のそれぞれを主として育成する科目として，「論理国語」，「文学国語」，「国語表現」をそれぞれ新設した。また，「言語文化」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため，ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究」を新設した。

「論理国語」については，主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成するため，実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成を重視した科目として，その目標及び内容の整合を図った。

「文学国語」については，主として「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成するため，深く共感したり豊かに想像したりして，書いたり読んだりする力の育成を重視した科目として，その目標及び内容の整合を図った。

「国語表現」については，主として「思考力・判断力・表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を育成するため，実社会において必要となる，他者との多様な関わりの中で伝え合う力の育成を重視した科目として，その目標及び内容の整合を図った。

「古典探究」については，ジャンルとしての古典を対象とし，自分と自分を取り巻く社

会にとっての古典の意義や価値について探究し，生涯にわたって古典に親しめるようにするため，我が国の伝統的な言語文化への理解を深める科目として，その目標及び内容の整合を図った。

これらの選択科目については，共通必履修科目で育成された資質・能力を基盤として，さらにどの資質・能力を育成するかを明確にした選択が可能となるよう設定している。

科目構成の改善について図示すると，次のようになる。

平成 21 年告示学習指導要領	平成 30 年告示学習指導要領
【共通必履修科目】 国語総合（4 単位）	【共通必履修科目】 現代の国語（2 単位） 言語文化　（2 単位）
【選択科目】 国語表現（3 単位） 現代文Ａ（2 単位） 現代文Ｂ（4 単位） 古典Ａ　（2 単位） 古典Ｂ　（4 単位）	【選択科目】 論理国語　（4 単位） 文学国語　（4 単位） 国語表現　（4 単位） 古典探究　（4 単位）

（単位数は標準単位数）

(3) 学習内容の改善・充実

〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕の各指導事項について，育成を目指す資質・能力が明確になるよう内容を改善した。

①語彙指導の改善・充実

中央教育審議会答申において，「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」と指摘されているように，語彙は，全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。このため，語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。

語彙を豊かにするとは，自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。具体的には，意味を理解している語句の数を増やすだけでなく，話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに，語句の意味や使い方に対する認識を深め，語感を磨き，語彙の質を高めることである。このことを踏まえ，小・中学校との系統を重視し，科目の性格を踏まえて指導の重点となる語句のまとまりを示すとともに，語句への理解を深める指導事項を示した。

②情報の扱い方に関する指導の改善・充実

急速に情報化が進展する社会において，様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり，情報同士の関係を分かりやすく整理したり，発信したい情報を様々な手段で表現し

たりすることが求められている。一方，中央教育審議会答申において，「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり，文章で表された情報を的確に理解し，自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されているところである。

話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり，その関係を捉えたりすることが，話や文章を正確に理解することにつながり，また，自分のもつ情報を整理して，その関係を分かりやすく明確にすることが，話や文章で適切に表現することにつながるため，このような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。

こうした資質・能力の育成に向け，「現代の国語」及び「論理国語」に「情報の扱い方に関する事項」を新設し，「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示した。

③学習過程の明確化，「考えの形成」の重視，探究的な学びの重視

中央教育審議会答申においては，ただ活動するだけの学習にならないよう，活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため，平成 21 年告示の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理している。この整理を踏まえ，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域において，学習過程を一層明確にし，各指導事項を位置付けた。

また，全ての領域において，自分の考えを形成する学習過程を重視し，「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。

さらに，「考えの形成」のうち，探究的な学びの要素を含む指導事項を，全ての選択科目に位置付けた。なお，「国語表現」については，特定の指導事項ではなく「書くこと」の学習過程全体に探究的な学びの要素を位置付けている。

④我が国の言語文化に関する指導の改善・充実

中央教育審議会答申においては，「引き続き，我が国の言語文化に親しみ，愛情を持って享受し，その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため，伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされている。

これを踏まえ，「伝統的な言語文化」，「言葉の由来や変化，多様性」，「読書」に関する指導事項を「我が国の言語文化に関する事項」として整理し，その内容の改善を図った。

⑤「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実

中央教育審議会答申においては，高等学校国語科の課題として，「話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』，『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」と指摘されている。このため，共通必履修科目の〔思考力，判断力，表現力等〕における「話すこと・聞くこと」，「書くこと」の授業時数を増加している。

また，「古典探究」を除く科目において，〔思考力，判断力，表現力等〕に「書くこと」の領域を設け，論理的な文章，文学的な文章，実用的な文章を書く資質・能力の充実を図った。特に，論理的な文章を書く資質・能力の育成については，近年，大学の初年次教育において，論文やレポートなどの書き方に関する講義が必要となっていることなどを踏まえ，「現代の国語」や「論理国語」を中心に充実を図っている。

各科目の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の構成

	〔思考力，判断力，表現力等〕		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	○	○	○
言語文化		○	○
論理国語		○	○
文学国語		○	○
国語表現	○	○	
古典探究			○

（○印は設定あり）

(4) 学習の系統性の重視

国語科の指導内容は，系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに，螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し，資質・能力の定着を図ることを基本としている。このため，小・中学校を受けて，〔知識及び技能〕の指導事項及び〔思考力，判断力，表現力等〕の指導事項と言語活動例のそれぞれにおいて，重点を置くべき指導内容を明確にし，その系統化を図った。（系統表参照）

(5) 授業改善のための言語活動の創意工夫

中央教育審議会答申においては，国語科における学習活動は「言葉による記録，要約，説明，論述，話合い等の言語活動を通じて行われる必要がある」と示されている。

そこで，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域において，どのような資質・能力を育成するかを⑴の指導事項に示し，どのような言語活動を通して資質・能力を育成するかを⑵の言語活動例に示すという関係を明確にするとともに，各学校の創意工夫により授業改善が行われるようにする観点から，従前に示していた言語活動例を言語活動の種類ごとにまとめた形で示した。これらの言語活動は例示であるため，各学校では，これらの全てを行わなければならないものではなく，これ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

なお，当該領域において示した資質・能力は言語活動を通して育成する必要があるが，従前と同じく，例えば，話合いの言語活動が，必ずしも「話すこと・聞くこと」の領域の

資質・能力のみの育成を目指すものではなく，「書くこと」や「読むこと」における言語活動にもなりうることに示されるとおり，育成を目指す資質・能力（目標）と言語活動とを同一視しないよう十分留意する必要がある。

(6) 各領域の授業時数，取り上げる教材の明確化

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導事項に示した資質・能力が確実に育成されるよう，これまで共通必履修科目の「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域に示していた授業時数を，複数の領域をもつ全科目について設定するとともに，主として「読むこと」の指導で取り上げる教材について，科目の性格に応じて，より明確に設定した。

各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

	〔思考力，判断力，表現力等〕		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	20 ～ 30 単位時間程度	30 ～ 40 単位時間程度	10 ～ 20 単位時間程度
言語文化		5 ～ 10 単位時間程度	【古典】 40 ～ 45 単位時間程度
			【近代以降の文章】 20 単位時間程度
論理国語		50 ～ 60 単位時間程度	80 ～ 90 単位時間程度
文学国語		30 ～ 40 単位時間程度	100 ～ 110 単位時間程度
国語表現	40 ～ 50 単位時間程度	90 ～ 100 単位時間程度	
古典探究			※

（※「古典探究」については，1 領域のため，授業時数を示していない。）

(7) 読書指導の改善・充実

中央教育審議会答申において，「読書は，国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。」とされたことを踏まえ，各科目において，国語科の学習が読書活動に結び付くよう，〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付けるとともに，「読むこと」の領域では，学校図書館などを利用して様々な本などから情報を得て活用する言語活動例を示した。

(8) 各科目の要点

【現代の国語】

・実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置き，全ての生徒に履修させる共通必履修科目として新設している。

・小学校及び中学校と同様に，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方

に関する事項」,「(2)情報の扱い方に関する事項」,「(3)我が国の言語文化に関する事項」の3事項,〔思考力，判断力，表現力等〕においては,「A話すこと・聞くこと」,「B書くこと」,「C読むこと」の3領域から内容を構成している。

・〔知識及び技能〕では,「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において,「実社会において理解したり表現したりするために必要な語句」などに関することを取り上げている。また,「(2)情報の扱い方に関する事項」において,「主張と論拠など情報と情報との関係」,「個別の情報と一般化された情報との関係」,「推論の仕方」などに関することを取り上げている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」では,「相手の反応を予想して論理の展開を考える」,「論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価する」,「話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫する」などの指導事項を示すとともに,「話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う」,「集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」では,「読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫する」,「根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫する」などの指導事項を示すとともに,「論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する」,「調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」では,「目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深める」などの指導事項を示すとともに,「異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」に関する指導については，20 ～ 30単位時間程度,「B書くこと」に関する指導については，30 ～ 40単位時間程度,「C読むこと」に関する指導については，10 ～ 20単位時間程度を配当するものとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」に関する指導については，中学校国語科の書写との関連を図り，効果的に文字を書く機会を設けることとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の教材は，現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章としている。

【言語文化】

・上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を

置き，全ての生徒に履修させる共通必履修科目として新設している。

・〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の2事項，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A書くこと」，「B読むこと」の2領域から内容を構成している。

・〔知識及び技能〕では，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において，「我が国の言語文化に特徴的な語句」，「本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果」などに関することを取り上げている。また，「(2)我が国の言語文化に関する事項」において，「古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解する」などに関することを取り上げている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」では，「自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫する」などの指導事項を示すとともに，「本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」では，「作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈する」，「作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつ」などの指導事項を示すとともに，「我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする」，「和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」に関する指導については，5～10単位時間程度，「B読むこと」の古典に関する指導については，40～45単位時間程度，「B読むこと」の近代以降の文章に関する指導については，20単位時間程度を配当するものとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の教材は，古典及び近代以降の文章とし，日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに，我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう，我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げることとしている。また，必要に応じて，伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができることとしている。

【論理国語】

・共通必履修科目により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成する科目として，実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

・〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱

い方に関する事項」,「(3)我が国の言語文化に関する事項」の3事項,〔思考力，判断力，表現力等〕においては,「A書くこと」,「B読むこと」の2領域から内容を構成している。

・〔知識及び技能〕では,「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において,「論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句」,「文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方」などに関することを取り上げている。また,「(2)情報の扱い方に関する事項」において,「主張とその前提や反証など情報と情報との関係」,「情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法」などに関することを取り上げている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」では,「情報の妥当性や信頼性を吟味しながら，自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠をそろえる」,「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にする」などの指導事項を示すとともに,「社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして，自分の考えを短い論文にまとめ，批評し合う」,「設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々な観点から自分の意見や考えを論述する」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」では,「主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈する」,「人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深める」などの指導事項を示すとともに,「論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，批評したり討論したりする」,「学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み，自分の考えを論述したり発表したりする」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」には，探究的な指導事項を設けている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」に関する指導については，50 ～ 60単位時間程度,「B読むこと」に関する指導については，80 ～ 90単位時間程度を配当するものとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の教材は，近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章とすることとしている。また，必要に応じて，翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができることとしている。

【文学国語】

・共通必履修科目により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力，判断力，表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する科目として，深く共感したり豊かに想像したりして，書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

・〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の2事項，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A書くこと」，「B読むこと」の2領域から内容を構成している。
・〔知識及び技能〕では，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において，「情景の豊かさや心情の機微を表す語句」，「文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法」などに関することを取り上げている。また，「(2)我が国の言語文化に関する事項」において，「人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用」などに関することを取り上げている。
・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」では，「読み手の関心が得られるよう，文章の構成や展開を工夫する」，「文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫する」などの指導事項を示すとともに，「自由に発想したり評論を参考にしたりして，小説や詩歌などを創作し，批評し合う」などの言語活動を例示している。
・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」では，「語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈する」，「設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める」などの指導事項を示すとともに，「作品の内容や形式について，書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりする」，「演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる」などの言語活動を例示している。
・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」には，探究的な指導事項を設けている。
・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」に関する指導については，30 ～ 40単位時間程度，「B読むこと」に関する指導については，100 ～ 110単位時間程度を配当するものとしている。
・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の教材は，近代以降の文学的な文章とすることとしている。また，必要に応じて，翻訳の文章，古典における文学的な文章，近代以降の文語文，演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができることとしている。

【国語表現】

・共通必履修科目により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力，判断力，表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を育成する科目として，実社会において必要となる，他者との多様な関わりの中で伝え合う資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。
・〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の2事項，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A話すこと・聞くこと」，「B書くこと」の2領域から内容を構成している。
・〔知識及び技能〕では，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において，「伝え合う

目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣い」，「自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句」などに関することを取り上げている。また，「(2)我が国の言語文化に関する事項」において，「自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用」に関することを取り上げている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」では，「自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いる」，「互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫する」などの指導事項を示すとともに，「異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する」，「話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評する」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」では，「読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫する」，「読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりする」などの指導事項を示すとともに，「文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する」，「紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」に関する指導については，40 ～ 50 単位時間程度，「B書くこと」に関する指導については，90 ～ 100 単位時間程度を配当するものとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の教材は，必要に応じて，音声や画像の資料などを用いることができることとしている。

【古典探究】

・共通必履修科目「言語文化」により育成された資質・能力のうち，「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため，ジャンルとしての古典を学習対象とし，古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し，自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

・〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の 2 事項，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A読むこと」の領域から内容を構成している。

・〔知識及び技能〕では，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」において，「古典を読むために必要な語句」，「古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色」などに関することを取り上げている。また，「(2)我が国の言

語文化に関する事項」において，「我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係」などに関することを取り上げている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」では，「作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察する」，「関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める」などの指導事項を示すとともに，「古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする」，「古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる」などの言語活動を例示している。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」には，探究的な指導事項を設けている。

・古文及び漢文の両方を取り上げるものとし，一方に偏らないようにすることとしている。

・〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の教材は，古典としての古文及び漢文とし，日本漢文を含めるとともに，論理的に考える力を伸ばすよう，古典における論理的な文章を取り上げることとしている。また，必要に応じて，近代以降の文語文や漢詩文，古典についての評論文などを用いることができることとしている。

第３節　国語科の目標

１　教科の目標

21 世紀は知識基盤社会の時代であり，新しい知識，情報，技術が，社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増している。一方，そうした知識，情報，技術をめぐる変化の早さは加速度的となり，情報化や国際化といった社会的変化が，ますます複雑で予測困難なものとなってきている。その中にあって，国語で理解し表現する資質・能力は，人々の知的活動や創造力が最大の資源である我が国において，社会の変化に主体的に対応できる力を支える基礎的・基本的な資質・能力として，今後一層必要性を増してくると考えられる。また，そのような国語の資質・能力を総合的に身に付けていくことは，人間形成の上でも必要不可欠なことである。

高等学校国語科は，従前，社会人として必要とされる国語の資質・能力の基礎を確実に育成することを重視しており，今回の改訂でもそれに変わりはない。これを充実させるためには，生徒の生涯にわたる社会生活全般を視野に入れた指導が欠かせないが，とりわけ，学校生活にあっては，その生活全体の中で国語に対する関心や理解を深め，国語に関する資質・能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，生徒の言語活動を充実するよう努めることが大切であり，それには学校全体の共通理解が必要である。その中心となって，生徒の言語に関する能力の育成を目指し，直接かつ計画的に指導するのは国語科であり，この意味で，高等学校国語科の果たす役割と責任は極めて大きい。

高等学校国語科においては，以上のような教科の役割，性格に基づいて，小学校及び中学校の指導との一貫性を図りながら，生徒の発達の段階に応じた指導を目指した次のような教科の目標を立てている。

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

(2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を伸ばす。

(3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに，言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

この目標は，次に示す小学校及び中学校の目標を受けたものである。

〈小学校〉

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表

現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

(2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。

(3) 言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

〈中学校〉

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 社会生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

(2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。

(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに，言語感覚を豊かにし，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

高等学校国語科は，これらの目標を受け，小学校，中学校及び高等学校の一貫性を図るとともに，高等学校の段階に即して，より高い目標を掲げている。

この目標は高等学校国語科の全体の目標であり，これが各科目の目標に個別化され，それぞれの科目の指導を行うこととなる。

教科の目標では，まず，国語科において育成を目指す資質・能力を**国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力**とし，国語科が国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

言語は，言語形式とそれによって表される言語内容とを併せもっている。平成21年告示の学習指導要領においては，「国語を適切に使う能力と国語を使って内容や事柄を適切に表現する能力」，「国語の使い方を的確に理解する能力と国語で表現された内容や事柄を的確に理解する能力」の両方の内容を含んだものとして，「国語を適切に表現し的確に理解する能力」を示していたところである。今回の改訂において示す**国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力**とは，国語で表現された内容や事柄を的確に理解する資質・能力，国語を使って内容や事柄を効果的に表現する資質・能力であるが，そのために必要となる国語の使い方を的確に理解する資質・能力，国語を効果的に使う資質・能力を含んだものである。

的確に理解する資質・能力と，**効果的に表現**する資質・能力とは，連続的かつ同時的に機能するものであるが，表現する内容となる自分の考えなどを形成するためには国語で表現された様々な事物，経験，思い，考え等を理解することが必要であることから，今回の改訂では，「的確に理解」，「効果的に表現」という順に示している。

言葉による見方・考え方を働かせるとは，生徒が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため，「言葉による見方・考え方」を働かせることが，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。

また，言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては，言語活動を通して資質・能力を育成する。言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成するとしているのは，この考え方を示したものである。

今回の改訂では，他教科等と同様に，国語科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。

生涯にわたる社会生活とは，高校生が日常関わる社会に限らず，現実の社会そのものである実社会を中心としながら，生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している。広く社会生活全般を視野に入れ，社会人として活躍していく高校生が，**生涯にわたる社会生活に必要な国語**の特質について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。具体的には，内容の〔知識及び技能〕に示されている言葉の特徴や使い方，話や文章に含まれている情報の扱い方，我が国の言語文化に関する「知識及び技能」のことである。こうした「知識及び技能」を，生涯にわたる社会生活における様々な場面で，主体的に活用できる，生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となる。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。

生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で，思いや考えを伝え合う力を高め，思考力や想像力を伸ばすことを示している。具体的には，各科目の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に示されている「話すこと・聞くこと」，「書くこと」，「読むこと」に関する「思考力，判断力，表現力等」のことである。

伝え合う力を高めるとは，人間と人間との関係の中で，互いの立場や考えを尊重し，言語を通して的確に理解したり効果的に表現したりして，円滑に相互伝達，相互理解を進めていく力を高めることである。国際化，情報化など，変化が激しく予測が困難な現代社会では，一人一人が良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的に関わることが特に求められる。言語の教育としての立場に立つ国語科としては，「伝え合う力」を高めることを通して，そうしたことに確実につなげることが重要となる。

思考力や想像力を伸ばすとは，言語を手掛かりとしながら創造的・論理的に思考する力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすことである。思考力や想像力などは認識力や判断力などと密接に関わりながら，新たな発想や思考を創造する原動力となる。こ

うした力を，未知の状況にも対応できる「思考力，判断力，表現力等」として育成することが重要となる。

従前，物事を深く，広く，豊かに感じ取りかつ味わうことのできる資質・能力を身に付けることを「心情を豊かにし」としていたが，今回の改訂では，深く共感したり豊かに想像したりする力である想像力に位置付け，それを伸ばすことを求めている。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことを示している。

言葉のもつ価値には，言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうしたことを価値として認識することを示している。

言語感覚とは，言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で，相手，目的や意図，場面や状況などに応じて，どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直観的に判断したり，話や文章を理解する場合に，そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができることである。

言語感覚については，小学校では養う，中学校では豊かにするとしているものを，高等学校では磨くとし，より高いものを求めている。言語に対する知的な認識を深めるだけでなく，言語感覚を磨くことは，一人一人の生徒の言語活動を充実させ，自分なりのものの見方や考え方を形成することに役立つ。こうした言語感覚の育成には，多様な場面や状況における学習の積み重ねや，継続的な読書などが必要であり，そのためには，国語科の学習を他教科等の学習や学校の教育活動全体と関連させていくカリキュラム・マネジメント上の工夫も大切である。さらに，生徒を取り巻く言語環境を整備することも，言語感覚の育成に極めて重要である。

我が国の言語文化の担い手としての自覚をもつとは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などの担い手としての自覚をもつことである。

生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うとは，小学校及び中学校の目標を更に発展させたもので，国語を尊重するだけでなく，生涯にわたりその能力の向上を図る態度を育成することまでを目指している。我が国の歴史の中で育まれてきた国語が，人間としての知的な活動や文化的な活動の中枢をなし，生涯にわたる一人一人の自己形成，社会生活の向上，文化の創造と継承などに欠かせないからである。国語に対する自覚や関心を高め，話したり聞いたり書いたり読んだりすることが，生徒一人一人の言語能力を更に向上させていく。その中で，社会の一員として，国語を愛護し，国語を尊重し

て，国語そのものを一層優れたものに向上させていこうとする意識や態度も育っていくのである。

教科の目標の中に示した資質・能力は，有機的に関連し合うものであり，そうした関連に十分留意して，効果的な指導がなされるようにしなければならない。また，理解と表現の資質・能力も個別に存在するのではなく，両者は密接に関わっている。このことは，話すことと聞くこととの関連を考えれば一層明確になる。話したり聞いたり書いたり読んだりする言語活動の密接な関連の中で，表現と理解の資質・能力を調和的に育成していくことが大切となる。

2　科目の目標

各科目の目標は，教科の目標に示す(1)，(2)，(3)に対応して，次のように示している。

	知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
現代の国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
言語文化	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
論理国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的，批判的に考える力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

文学国語	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
国語表現	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。
古典探究	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標，(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標，(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標である。

(1)の「知識及び技能」に関する目標は，「現代の国語」，「論理国語」，「国語表現」では，同じとなっており，身に付ける国語の知識や技能が，中学校の「社会生活に必要な国語の知識や技能」から，**実社会に必要な国語の知識や技能**へと高まっている。「言語文化」，「文学国語」，「古典探究」では，**生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける**ことについては同じとなっている。さらに，「言語文化」と「文学国語」では，**我が国の言語文化に対する理解**，「古典探究」では，**伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする**ことを求めている。

(2)の「思考力，判断力，表現力等」に関する目標には，考える力や共感したり想像したりする力を伸ばすこと，伝え合う力を高めること，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにすることなどを，科目の性格に応じて示している。

考える力については，「現代の国語」，「言語文化」，「国語表現」，「古典探究」では，**論理的に考える力**，「論理国語」では，**論理的，批判的に考える力**，及び**創造的に考える力**，「文学国語」では，**創造的に考える力**の育成に重点を置いている。**共感したり想像したりする力**については，「論理国語」を除く全ての科目で，**深く共感したり豊かに想像したりする力**の育成に重点を置いている。**伝え合う力**については，「現代の国語」，「言語文化」，「論理国語」，「文学国語」では，**他者との関わりの中で**，「国語表現」では，**実社会における他者との多様な関わりの中で**，「古典探究」では，**古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で**伝え合う力を育成することを求めている。**自分の思いや考え**については，全ての科目で，**広げたり深めたりすることができるようにする**ことを求めている。

(3)の「学びに向かう力，人間性等」に関する目標には，言葉がもつ価値への認識を深めること，読書に親しむこと，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養うことを，科目の性格に応じて示している。

言葉がもつ価値については，全ての科目で，**言葉がもつ価値への認識を深める**ことを求めている。読書については，「古典探究」を除く科目では，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させる**こと，「古典探究」では，**生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させる**ことを求めている。**我が国の言語文化**については，共通必履修科目では，**我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち**，選択科目では，**我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う**ことを求めている。

このような「学びに向かう力，人間性等」は「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

第４節　国語科の内容

１　内容の構成

国語科の内容は，〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕から構成している。今回の改訂では，国語科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，そのうち「知識及び技能」の内容を〔知識及び技能〕として，「思考力，判断力，表現力等」の内容を〔思考力，判断力，表現力等〕として示している。なお，「学びに向かう力，人間性等」の内容については，教科及び科目の目標においてまとめて示すこととし，内容において示すことはしていない。

〔知識及び技能〕の内容は，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」の３事項を基本的な構成としている。

〔思考力，判断力，表現力等〕の内容は，「話すこと・聞くこと」，「書くこと」及び「読むこと」からなる３領域の構成を維持しながら，(1)に指導事項を，(2)に言語活動例をそれぞれ示すとともに，(1)の指導事項については，学習過程を一層明確にして示している。したがって，(2)に示している言語活動例を参考に，生徒の発達や学習の状況に応じて設定した言語活動を通して，(1)の指導事項を指導することは，これまでと同様である。

なお，資質・能力の三つの柱は相互に関連し合い，一体となって働くことが重要である。このため，この内容の構成が，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕を別々に分けて育成したり，〔知識及び技能〕を習得してから〔思考力，判断力，表現力等〕を身に付けるといった順序性をもって育成したりすることを示すものではないことに留意する必要がある。

２　〔知識及び技能〕の内容

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

言葉の特徴や使い方に関する事項である。

「言葉の働き」，「話し言葉と書き言葉」，「漢字」，「語彙」，「文や文章」，「言葉遣い」，「表現の技法」に関する内容を整理し，系統的に示している。

○言葉の働き

言語が共通にもつ言葉の働きに関する事項である。自分が用いている言葉の働きを客観的に捉えることは，国語科で育成を目指す資質・能力の重要な要素である。言葉がもつ働きに改めて気付くことで，生徒は言葉を自覚的に用いることができるようになる。このため，言葉の働きを「古典探究」を除く全ての科目に新設した。

「現代の国語」では，**認識や思考を支える働き**，「言語文化」では，**文化の継承，発展**，

創造を支える働き，「論理国語」では，**言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働き**，「文学国語」では，**想像や心情を豊かにする働き**，「国語表現」では，**自己と他者の相互理解を深める働き**があることを理解することを示している。

なお，外国語科においては，「英語コミュニケーションⅠ」の〔思考力，判断力，表現力等〕の(3)「②　言語の働きに関する事項」において，「言語活動を行うに当たり，例えば，次に示すような言語の使用場面や言語の働きの中から，五つの領域別の目標を達成するためにふさわしいものを取り上げ，有機的に組み合わせて活用するようにする。」として「コミュニケーションを円滑にする」，「気持ちを伝える」，「事実・情報を伝える」，「考えや意図を伝える」，「相手の行動を促す」といった言語の働きの例を示している。このことを踏まえ，指導に当たっては，外国語科における指導との関連を図り，相互に指導の効果を高めることが考えられる。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解すること。
文学国語	国語表現	古典探究
ア　言葉には，想像や心情を豊かにする働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。	

〇話し言葉と書き言葉，言葉遣い

話し言葉と書き言葉，言葉遣いに関する事項である。

中学校での学習を踏まえ，話し言葉と書き言葉を適切に使い分けられるようにするために，高等学校では，話し言葉と書き言葉それぞれの特徴や役割，表現の特色を理解するための内容を示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。		

文学国語	国語表現	古典探究
	イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けること。	

〇漢字

漢字の読みと書きに関する事項である。

漢字の読みの指導については，中学校修了までに，小学校学習指導要領第 2 章第 1 節国語の学年別漢字配当表（以下「学年別漢字配当表」という。）に示されている漢字 1,026 字に加え，学年別漢字配当表以外の常用漢字の大体を読むことを求めていることを受け，高等学校では，共通必履修科目「現代の国語」及び「言語文化」において，**常用漢字の読みに慣れ**ることを求めている。

漢字の書きの指導については，中学校修了までに，学年別漢字配当表の漢字 1,026 字について，文や文章の中で使い慣れることとしていることを受け，高等学校では，共通必履修科目「現代の国語」及び「言語文化」において，**主な常用漢字を書き，文や文章の中で使う**ことを求めている。

なお，「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のウ及び「言語文化」の〔知識及び技能〕の(1)のイは同一の指導事項となっており，指導に当たっては，両者の関連を図り，計画的に行うことが重要である。

現代の国語	言語文化	論理国語
ウ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。	イ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。	
文学国語	国語表現	古典探究

〇語彙

語感を磨き語彙を豊かにすることに関する事項である。

語彙は，全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力の重要な要素であるが，中央教育審議会答申において，高等学校国語科の課題として，「国語の語彙の構造や特徴を理解すること」が指摘されている。このため，国語科の全科目に指導事項を設け，語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。

今回の改訂では，語句の量を増すことと，語句についての理解を深めることの二つの内容で構成している。

語句の量を増すことに関しては，「現代の国語」では，**実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増す**，「言語文化」では，**我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し**，「論理国語」では，**論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し**，「文学国語」では，**情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し**，「国語表現」では，**自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し**，「古典探究」では，**古典を読むために必要な語句の量を増す**とするなど，指導する語句のまとまりを示している。これらは，あくまでも指導の重点とする語句の目安を示したものであり，これ以外の語句の指導を妨げるものではない。重点として示された語句のまとまりを中心としながら，学習の中で必要となる多様な語句を取り上げることが重要である。

語句についての理解を深めることについては，「現代の国語」では，**語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解**すること，「言語文化」では，**我が国の言語文化に特徴的な語句の文化的背景について理解を深める**こと，「古典探究」では，**古典に用いられている語句の意味や用法を理解**することを示している。

こうした語句を話や文章の中で使うことを通して，生涯にわたる社会生活の中で使いこなせる語句を増やし，確実に習得していくことが重要である。

語感を磨き語彙を豊かにするためには，語句の量を増すことと，語句についての理解を深めることの両面が必要である。

現代の国語	言語文化	論理国語
エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

文学国語	国語表現	古典探究
イ　情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

〇文や文章

文，話，文章の構成や特徴に関する事項である。

文の構成については，中学校までの学習を踏まえ，「現代の国語」及び「論理国語」では，**文の効果的な組立て方や接続の仕方**，「古典探究」では，**古典の文の成分の順序や照応**についての理解を求めている。

話や文章の構成については，「現代の国語」では，**効果的な組立て方や接続の仕方について理解する**こと，「論理国語」では，**効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深める**こと，**文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深める**こと，「国語表現」では，**実用的な文章などの構成や展開の仕方**，「古典探究」では，**古典の文章の構成や展開の仕方**について理解することを示している。

また，文章の特徴について，「言語文化」では，**文章の意味は，文脈の中で形成される**こと，「文学国語」では，**文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴など**，「国語表現」では，**実用的な文章などの種類や特徴**，「古典探究」では，**古典の作品や文章の種類とその特徴**についての理解を求めている。

なお，これまで「話や文章の形態」としていた内容は，「話や文章の種類」という言葉で示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。	ウ　文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。 エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

文学国語	国語表現	古典探究
ウ　文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。	エ　実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めること。	イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。 ウ　古典の文の成分の順序や照応，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

〇言葉遣い

敬語を含め広く相手や場に応じた表現や言葉遣いについて学習することを意図している。

「現代の国語」では，**正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使う**こと，「国語表現」では，**伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分ける**ことを示している。

なお，この指導事項については，「話し言葉と書き言葉」と一体化して示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。（再掲）		
文学国語	国語表現	古典探究
	イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けること。（再掲）	

〇表現の技法

表現の技法の種類とその特徴に関する事項である。

中学校での学習を踏まえ，表現の技法についてその名称とともに理解し使うことを示している。

「現代の国語」では，**比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使う**こと，「言語文化」では，**本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解する**こと，「文学国語」では，**文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使う**こと，「国語表現」では，**省略や反復などの表現の技法について理解を深め使う**こと，「古典探究」では，**古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深める**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。	
文学国語	**国語表現**	**古典探究**
エ　文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使うこと。	オ　省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うこと。	エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。

(2) 情報の扱い方に関する事項

話や文章に含まれている情報の扱い方に関する事項である。

急速に情報化が進展する社会において，様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり，情報同士の関係を分かりやすく整理したり，発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められている。一方，中央教育審議会答申において，「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり，文章で表された情報を的確に理解し，自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されているところである。

話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり，その関係を捉えたりすることが，話や文章を正確に理解することにつながり，また，自分のもつ情報を整理して，その関係を分かりやすく明確にすることが，話や文章で適切に表現することにつながるため，このような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。今回の改訂では，これらの資質・能力の育成に向け，「情報の扱

い方に関する事項」を新設した。この事項は，「情報と情報との関係」，「情報の整理」の二つの内容で構成し，「現代の国語」及び「論理国語」に系統的に示している。

〇情報と情報との関係

情報と情報との様々な関係に関する事項である。

各領域における「思考力，判断力，表現力等」を育成する上では，話や文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり，自分のもつ情報と情報との関係を明確にして話や文章で表現したりすることが重要になる。

このため，平成 21 年告示の学習指導要領では「A話すこと・聞くこと」，「B書くこと」，「C読むこと」の各領域において示していた内容も含まれている。今回の改訂では，話したり聞いたり書いたり読んだりするために共通して必要となる「知識及び技能」として改めて整理し，基本的なものを取り上げて系統的に示している。

「現代の国語」では，**主張と論拠など情報と情報との関係，個別の情報と一般化された情報との関係**，「論理国語」では，**主張とその前提や反証など情報と情報との関係**について示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。 イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。		ア　主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。
文学国語	国語表現	古典探究

〇情報の整理

情報の整理に関する事項である。

情報を取り出したり活用したりする際に行う整理の仕方やそのための具体的な手段について示している。こうした「知識及び技能」を，言語活動の中で使うことができるようにすることが重要である。

「現代の国語」では，**推論の仕方を理解し使う**こと，**情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使う**こと，**引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理**

解を深め使うこと，「論理国語」では，**情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使う**こと，**推論の仕方について理解を深め使う**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ウ　推論の仕方を理解し使うこと。 エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。 オ　引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理解を深め使うこと。		イ　情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。 ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。
文学国語	国語表現	古典探究

(3) 我が国の言語文化に関する事項

我が国の言語文化に関する事項である。

我が国の言語文化とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの，つまり文化としての言語，またそれらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。今回の改訂では，これらに関わる「伝統的な言語文化」，「言葉の由来や変化，多様性」，「読書」に関する内容を「我が国の言語文化に関する事項」として整理した。

〇伝統的な言語文化

伝統的な言語文化に親しみ，その特質などを理解することに関する事項である。

中学校での学習を踏まえ，高等学校においても引き続き親しむことを重視するとともに，言語文化の担い手としての自覚が深められるよう，我が国の言語文化の特質や，我が国の文化と外国の文化との関係について理解したり，古典に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景，必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解したりすることに重点を置いて内容を構成している。

言語文化の特質や，外国の文化との関係についての理解については，「言語文化」では，**我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解する**こと，「文学国語」では，**文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深める**こと，「古典探究」では，**古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深める**ことを示している。

作品や文章の歴史的・文化的背景，必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについての理解については，「言語文化」では，**古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解する**こと，**古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解する**こと，「古典探究」では，**古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深める**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
	ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。 ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。	

文学国語	国語表現	古典探究
ア　文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深めること。		ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。 イ　古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。

〇言葉の由来や変化，多様性

言葉の由来や変化，多様性に関する事項である。

時間の経過や地域の文化的特徴による文字や言葉の変化，文体の変化，古典の言葉と現代の言葉とのつながりなどに関する内容を示している。

今回の改訂では，中学校書写との接続を意識して，共通必履修科目「言語文化」において，**文字の変化**について理解を深めることを新設している。

言葉や文字の変化については，「言語文化」では，**時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化**，「古典探究」では，**時間の経過による言葉の変化**について理解を深めることを示している。文体の変化については，「言語文化」では，**言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深める**ことを示している。古典の言葉と現代の言葉のつながりについては，「言語文化」では，**古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解する**こと，「古典探究」では，**古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深める**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
	エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。 オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。	

文学国語	国語表現	古典探究
		ウ　時間の経過による言葉の変化や，古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

〇読書

読書の意義と効用などに関する事項である。

読書は，国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。自ら進んで読書をし，読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために，国語科の学習が読書活動に結び付くよう発達の段階や科目の性格に応じて系統的に指導することが求められる。

なお，読書とは，本を読むことに加え，新聞，雑誌を読んだり，何かを調べるために関係する資料を読んだりすることを含んでいる。

「現代の国語」では，**実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用**，「言語文化」では，**我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用**，「論理国語」では，**新たな考えの構築に資する読書の意義と効用**，「文学国語」では，**人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用**，「国語表現」では，**自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用**，「古典探究」では，**先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用**について理解を深めることを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。	ア　新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。
文学国語	国語表現	古典探究
イ　人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。	ア　自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。	エ　先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

3 〔思考力，判断力，表現力等〕の内容

A 話すこと・聞くこと

「話すこと・聞くこと」の指導事項

内容の⑴は，学習過程に沿って，次のように構成している。

○話題の設定，情報の収集，内容の検討

○構成の検討，考えの形成（話すこと）

○表現，共有（話すこと）

○構造と内容の把握，精査・解釈，考えの形成，共有（聞くこと）

○話合いの進め方の検討，考えの形成，共有（話し合うこと）

「A話すこと・聞くこと」領域の構成

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th rowspan="2">学習過程</th><th colspan="2">⑴ 指導事項</th><th colspan="2">⑵ 言語活動例</th></tr>
<tr><th>現代の国語</th><th>国語表現</th><th>現代の国語</th><th>国語表現</th></tr>
<tr><td>話すこと</td><td>話題の設定</td><td rowspan="3">ア</td><td rowspan="3">ア</td><td rowspan="20">エ（情報を活用する活動）
ウ（話し合う活動）
アイ（話したり聞いたりする活動）</td><td rowspan="20">オ（情報を活用する活動）
エ（話し合う活動）
アイウ（話したり聞いたりする活動）</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td>情報の収集</td></tr>
<tr><td></td><td>内容の検討</td><td rowspan="2">イ</td><td rowspan="2">イ
ウ</td></tr>
<tr><td>構成の検討</td></tr>
<tr><td></td><td>考えの形成</td><td rowspan="2">ウ</td><td rowspan="2">エ</td></tr>
<tr><td>表現</td></tr>
<tr><td></td><td>共有</td><td rowspan="2">ア
（再掲）</td><td rowspan="2">ア
（再掲）</td></tr>
<tr><td>聞くこと</td><td>話題の設定</td></tr>
<tr><td></td><td>情報の収集</td><td rowspan="4">エ</td><td rowspan="4">オ
カ</td></tr>
<tr><td></td><td>構造と内容の把握</td></tr>
<tr><td></td><td>精査・解釈</td></tr>
<tr><td></td><td>考えの形成</td></tr>
<tr><td></td><td>共有</td><td rowspan="3">ア
（再掲）</td><td rowspan="3">ア
（再掲）</td></tr>
<tr><td>話し合うこと</td><td>話題の設定</td></tr>
<tr><td></td><td>情報の収集</td></tr>
<tr><td></td><td>内容の検討</td><td rowspan="3">オ</td><td rowspan="3">キ</td></tr>
<tr><td></td><td>話合いの進め方の検討</td></tr>
<tr><td></td><td>考えの形成</td></tr>
<tr><td></td><td>共有</td></tr>
</table>

上表のとおり，今回の改訂では，学習過程を一層明確にし，各指導事項を位置付けた。なお，ここに示す学習過程は指導の順序性を示すものではないため，指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。また，「話題の設定，情報の収集」に関する指導事項は，「話すこと」，「聞くこと」，「話し合うこと」に共通する指導事項である。「内容の検討」は，「話すこと」，「話し合うこと」に共通する指導事項である。

なお，「話すこと・聞くこと」の学習は，話し手と聞き手との関わりの下で成立する学習であるため，「話すこと」，「聞くこと」，「話し合うこと」の各指導事項は相互に密接な関連がある。

〇話題の設定，情報の収集，内容の検討

目的や場に応じて話題を決め，話したり聞いたり話し合ったりするための材料を収集・整理し，伝え合う内容を検討することを示している。「話すこと」，「話し合うこと」に共通し，また，その他の指導事項と密接に関わるものである。

話題の設定については，「現代の国語」では，**実社会の中から**，「国語表現」では，**実社会の問題や自分に関わる事柄の中から**集めることを示し，発達の段階や科目の性格に応じて話題を決める範囲を広げている。

情報の収集及び内容の検討については，「現代の国語」では，**様々な観点から**，「国語表現」では，**他者との多様な交流を想定しながら**，情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討することを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。		
文学国語	国語表現	古典探究
	ア　目的や場に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め，他者との多様な交流を想定しながら情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。	

〇構成の検討，考えの形成（話すこと）

自分の思いや考え，主張の合理性などが伝わるように話の構成や展開を考えることを通

して，自分の考えを形成することを示している。

話の構成については，自分の考えや主張の合理性が伝わるよう，「現代の国語」では，**相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫する**こと，「国語表現」のイでは，**相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫する**ことを示している。また，自分の思いや考えが伝わるよう，「国語表現」のウでは，**具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫する**ことを示している。

なお，構成を考えながら改めて材料を収集・整理するなど，必要に応じて柔軟に学習を展開することが重要である。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にするとともに，相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。		
文学国語	国語表現	古典探究
	イ　自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。 ウ　自分の思いや考えが伝わるよう，具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫すること。	

〇表現，共有（話すこと）

聞き手に分かりやすく伝わるように表現を工夫することを示している。

「現代の国語」では，**話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように**，「国語表現」では，**相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように**，表現を工夫することを示している。音声表現は，そのままでは形に残らないものであるため，表現を工夫することが重要である。

現代の国語	言語文化	論理国語
ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。		
文学国語	国語表現	古典探究
	エ　相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。	

〇構造と内容の把握，精査・解釈，考えの形成，共有（聞くこと）

話の展開や論点などに注意しながら聞き取り，聞き取った内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価したりして，自分の考えを形成することを示している。

話を聞く際の視点としては，「現代の国語」では，**論理の展開を予想しながら**，「国語表現」のオでは，**論点を明確にして自分の考えと比較しながら**，カでは，**視点を明確にして**，聞くことを示している。

その上で，「現代の国語」では，**話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して**，「国語表現」のオでは，**話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して**，自分の考えを広げたり深めたりすることを示している。また，「国語表現」のカでは，**話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして**，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることを示している。

聞き取ったことを比較したり評価したりするためには，聞き手自身が話題に対して一定の立場や考えをもっていることが前提となる。そのため，「話題の設定，情報の収集」の段階から，聞き手としてどのような立場に立ち，何を聞こうとするのかを意識することなどが重要である。

現代の国語	言語文化	論理国語
エ　論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の		

仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。		
文学国語	国語表現	古典探究
	オ　論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすること。 カ　視点を明確にして聞きながら，話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして，自分の思いや考えを広げたり深めたりすること。	

〇話合いの進め方の検討，考えの形成，共有（話し合うこと）

話合いを効果的に進め，互いの発言を踏まえて，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫することを示している。

話合いは，話すことと聞くこととが交互に行われる言語活動であり，それぞれの生徒が話し手でもあり聞き手でもある。話合いの過程では，「話すこと」と「聞くこと」に関する資質・能力が一体となって働くため，指導に当たっては，「話すこと」に関する指導事項と「聞くこと」に関する指導事項との関連を図ることが重要である。

考えを形成することについては，「現代の国語」では，**論点を共有し**，「国語表現」では，**互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど**して，話し合うことを示している。

また，話合いを進行することについては，「現代の国語」では，**話合いの目的，種類，状況に応じて**，「国語表現」では，考えの形成と一体化しながら，**話合いの仕方や結論の出し方を工夫する**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
オ　論点を共有し，考えを広げたり深めたりしなが		

ら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。		
文学国語	国語表現	古典探究
	キ　互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。	

「話すこと・聞くこと」の言語活動例

内容の⑵には，⑴の指導事項を指導する際の言語活動を例示している。

「現代の国語」のア，イ，「国語表現」のア，イ，ウには，話し手がある程度まとまった話をし，それを聞いて，聞き手が同意，質問，反論，批評などを述べる言語活動を示している。

「現代の国語」のウ，「国語表現」のエには，目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論などの言語活動を示している。

「現代の国語」のエ，「国語表現」のオには，集めたり調べたりした情報を資料などにまとめ，聴衆に対して説明する言語活動を示している。

各科目の言語活動例は，次のとおりである。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動。 イ　報告や連絡，案内などのために，資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞いて，質問したり批評したりする活動。		

ウ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。 エ　集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動。		
文学国語	国語表現	古典探究
	ア　聴衆に対してスピーチをしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする活動。 イ　他者に連絡したり，紹介や依頼などをするために話をしたり，それらを聞いて批評したりする活動。 ウ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する活動。 エ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評する活動。 オ　設定した題材について調べたことを，図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ，聴衆に対して説明する活動。	

B　書くこと

「書くこと」の指導事項

内容の⑴は，学習過程に沿って，次のように構成している。

○題材の設定，情報の収集，内容の検討

○構成の検討

○考えの形成，記述

○推敲

○共有

「B書くこと」領域の構成

	学習過程	(1) 指導事項					(2) 言語活動例				
		現代の国語	言語文化	論理国語	文学国語	国語表現	現代の国語	言語文化	論理国語	文学国語	国語表現
書くこと	題材の設定	ア	ア	ア	ア	ア	ウ（情報を活用して書く活動） アイ（論理的な文章や実用的な文章を書く活動）	ア（文学的な文章を書く活動）	エ（情報を活用して書く活動） アイウ（論理的な文章や実用的な文章を書く活動）	アイウエ（文学的な文章を書く活動）	オカ（情報を活用して書く活動） アイウエ（論理的な文章や実用的な文章を書く活動）
	情報の収集			イ							
	内容の検討										
	構成の検討	イウ	イ	ウ	イ	イウ					
	考えの形成			エオ	ウ	エオ					
	記述										
	推敲	エ		カ	エ	カ					
	共有										

上表のとおり，今回の改訂では，学習過程を一層明確にし，各指導事項を位置付けた。なお，ここに示す学習過程は指導の順序性を示すものではないため，指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。

○題材の設定，情報の収集，内容の検討

目的や意図に応じて題材を決め，情報を収集・整理し，伝えたいことや表現したいことを明確にすることを示している。

「題材の設定」については，「現代の国語」では，**実社会の中から**，「言語文化」では，

自分の知識や体験の中から,「論理国語」では,**実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について**,「文学国語」では,**文学的な文章を書くために**,「国語表現」では,**実社会の問題や自分に関わる事柄の中から**集めることを示し,発達の段階や科目の性格に応じて題材を決める範囲を広げている。

「情報の収集」及び「内容の検討」については,「現代の国語」では,**集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して**,「言語文化」では,**集めた材料のよさや味わいを吟味して**,「文学国語」では,**選んだ題材に応じて**,「国語表現」では,**情報の組合せなどを工夫して**,伝えたいことや表現したいことを明確にすることを示している。

なお,「論理国語」のイは,「情報の収集」及び「内容の検討」についての指導事項である。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　目的や意図に応じて,実社会の中から適切な題材を決め,集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して,伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め,集めた材料のよさや味わいを吟味して,表現したいことを明確にすること。	ア　実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について,書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集,整理して,目的や意図に応じた適切な題材を決めること。 イ　情報の妥当性や信頼性を吟味しながら,自分の立場や論点を明確にして,主張を支える適切な根拠をそろえること。
文学国語	国語表現	古典探究
ア　文学的な文章を書くために,選んだ題材に応じて情報を収集,整理して,表現したいことを明確にすること。	ア　目的や意図に応じて,実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め,情報の組合せなどを工夫して,伝えたいことを明確にすること。	

〇構成の検討

文章の構成を検討することを示している。

検討の際に意識することや検討の視点として,「現代の国語」のイでは,**読み手の理解が得られるよう,論理の展開,情報の分量や重要度などを考えて**,「言語文化」では,**自分の体験や思いが効果的に伝わるよう**,「論理国語」では,**立場の異なる読み手を説得す**

るために，批判的に読まれることを想定して，「文学国語」では，**読み手の関心が得られるよう，**「国語表現」のイでは，**読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，**ウでは，**読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，**文章の構成や展開を工夫することを示している。

なお，「現代の国語」のイ，ウでは，「考えの形成」及び「記述」とともに，「言語文化」のイでは，「考えの形成」，「記述」，「推敲」及び「共有」とともに一体化して指導事項を示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。 ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。	ウ　立場の異なる読み手を説得するために，批判的に読まれることを想定して，効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。
文学国語	**国語表現**	**古典探究**
イ　読み手の関心が得られるよう，文章の構成や展開を工夫すること。	イ　読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，文章の構成や展開を工夫すること。 ウ　読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫すること。	

〇考えの形成，記述

記述の仕方を工夫し，自分の考えや主張，事柄などが的確に伝わる文章にすることを示している。

「現代の国語」では，**根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫する**こと，「言語文化」では，**文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫する**こと，「論理国語」のエでは，**多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にする**こと，オでは，**文章全体の論理の明晰さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫する**こと，「文学国語」では，**文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫する**こと，「国語表現」のエでは，**自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫する**こと，オでは，**自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫する**ことを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	エ　多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にすること。 オ　個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。
文学国語	**国語表現**	**古典探究**
ウ　文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。	エ　自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫すること。 オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。	

○推敲，共有

読み手の立場に立ち，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分が書いた文章の特長や課題を書き手自身が捉え直したりすることを示している。

「現代の国語」では，**目的や意図に応じて書かれているかなど**を，「論理国語」では，**文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなど**を，「文学国語」では，**文章の構成や展開，表現の仕方などについて，伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているか**などを，「国語表現」では，**読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなど**を，確かめたり吟味したりすることを示している。

これらの視点については，学習過程の各段階を踏まえ，特に，当該科目で重点としている内容を中心に取り上げることを想定している。

現代の国語	言語文化	論理国語
エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	カ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。
文学国語	**国語表現**	**古典探究**
エ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	カ　読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	

「書くこと」の言語活動例

内容の(2)には，(1)の指導事項を指導する際の言語活動を例示している。

「現代の国語」のア，イ，「論理国語」のア，イ，ウ，「国語表現」のア，イ，ウ，エには，主として論理的な文章や実用的な文章を書く言語活動を，「言語文化」のア，「文学国語」のア，イ，ウ，エには，主として文学的な文章を書く言語活動を，「現代の国語」のウ，「論理国語」のエ，「国語表現」のオ，カには，主として情報を活用して資料などをまとめる言語活動を示している。

各科目の言語活動例は，次のとおりである。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。	ア　特定の資料について，様々な観点から概要などをまとめる活動。
イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。		イ　設定した題材について，分析した内容を報告文などにまとめたり，仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。
ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。		ウ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして，自分の考えを短い論文にまとめ，批評し合う活動。
		エ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

文学国語	国語表現	古典探究
ア　自由に発想したり評論を参考にしたりして，小説や詩歌などを創作し，批評し合う活動。 イ　登場人物の心情や情景の描写を，文体や表現の技法等に注意して書き換え，その際に工夫したことなどを話し合ったり，文章にまとめたりする活動。 ウ　古典を題材として小説を書くなど，翻案作品を創作する活動。 エ　グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど，共同で作品制作に取り組む活動。	ア　社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く活動。 イ　文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する活動。 ウ　説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える活動。 エ　紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。 オ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理したり話し合ったりして，自分や集団の意見を提案書などにまとめる活動。 カ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを，報告書などにまとめる活動。	

C　読むこと

「読むこと」の指導事項

内容の⑴は，学習過程に沿って，次のように構成している。

〇構造と内容の把握

〇精査・解釈

〇考えの形成，共有

「C読むこと」領域の構成

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th rowspan="2">学習過程</th><th colspan="5">⑴ 指導事項</th><th colspan="5">⑵ 言語活動例</th></tr>
<tr><th>現代の国語</th><th>言語文化</th><th>論理国語</th><th>文学国語</th><th>古典探究</th><th>現代の国語</th><th>言語文化</th><th>論理国語</th><th>文学国語</th><th>古典探究</th></tr>
<tr><td rowspan="4">読むこと</td><td>構造と内容の把握</td><td>ア</td><td>ア</td><td>アイ</td><td>ア</td><td>アイ</td><td>アイ（論理的な文章や実用的な文章を読む活動）</td><td>オ（本などから情報を得て活用する活動）
イウエ（文学的な文章を読む活動）
ア（論理的な文章を読む活動）</td><td>オ（本などから情報を得て活用する活動）
アイウエ（論理的な文章や実用的な文章を読む活動）</td><td>カ（本などから情報を得て活用する活動）
アイウエオ（文学的な文章を読む活動）</td><td>オカキ（本などから情報を得て活用する活動）
アイウエ（文学的な文章を読む活動）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">精査・解釈</td><td rowspan="3">イ</td><td>イ</td><td>ウ</td><td rowspan="3">イウエ</td><td>ウ</td></tr>
<tr><td>ウ</td><td>エ</td><td>エ</td></tr>
<tr><td>エ</td><td>オ</td><td>オ</td><td>オカ</td></tr>
<tr><td>考えの形成
共有</td><td>オ</td><td>カ</td><td>カ</td><td>キク</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>キ</td><td>キ</td><td></td></tr>
</table>

上表のとおり，今回の改訂では，学習過程を一層明確にし，各指導事項を位置付けた。なお，ここに示す学習過程は指導の順序性を示すものではないため，指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない。

また，〔知識及び技能〕の「読書」に関する事項との関連を図り，生徒の日常の読書活動に結び付くようにすることが重要である。

〇構造と内容の把握

叙述に基づいて，文章がどのような構造になっているか，どのような内容が書かれているのかを把握することを示している。「構造と内容の把握」とは，叙述を基に，文章の構成や展開を捉えたり，内容を理解したりすることである。

「読むこと」の領域を設けていない「国語表現」を除く全科目において，文章の種類を踏まえた上で，内容と構成を的確に捉えることを示している。

その上で，論理的な文章と実用的な文章を教材とする，「現代の国語」では，**論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握する**こと，「論理国語」では，**論理の展開などを的確に捉え，論点を明確にしながら要旨を把握する**ことを示している。特に，実用的な文章について，「現代の国語」では，**要点を把握する**こと，「論理国語」では，**資料との関係を把握**することを示している。

文学的な文章も教材とする「言語文化」では，**内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉える**こと，「古典探究」では，**構成や展開などを的確に捉える**こと，文学的な文章を教材とする「文学国語」では，**内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉える**ことを示している。

また，「古典探究」では，内容を的確に捉える際に，**古典特有の表現に注意**することを示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などを的確に捉え，論点を明確にしながら要旨を把握すること。 イ　文章の種類を踏まえて，資料との関係を把握し，内容や構成を的確に捉えること。
文学国語	国語表現	古典探究
ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉えること。		ア　文章の種類を踏まえて，構成や展開などを的確に捉えること。 イ　文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。

〇精査・解釈

構成や叙述などに基づいて，作品や文章の内容や形式について，精査・解釈することを示している。「精査・解釈」とは，作品や文章の内容や形式に着目して読み，目的に応じて意味付けたり考えたり評価したりすることなどである。

「言語文化」のイでは，**作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え**，「論理国語」のウでは，**主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈する**ことを示している。

「言語文化」のウでは，**文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価する**こと，「論理国語」のエでは，**文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価する**ことを示している。

「文学国語」のイでは，**語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈する**こと，ウでは，**他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察する**こと，エでは，**文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察する**こと，「古典探究」のウでは，**文章の構成や展開，表現の特色について評価する**ことを示している。

「言語文化」のエでは，**作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深める**こと，「論理国語」のオでは，**関連する文章や資料を基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深める**こと，「文学国語」のオでは，**作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深める**こと，「古典探究」のエでは，**作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察する**ことを示している。

以上のように，「精査・解釈」に関する資質・能力について，学習過程ごとに整理して示している。

なお，「現代の国語」のイでは，「考えの形成」，「共有」とともに一体化して指導事項を示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。	ウ　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。
	ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。	エ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。

	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。	オ　関連する文章や資料を基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深めること。
文学国語	国語表現	古典探究
イ　語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈すること。 ウ　他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察すること。 エ　文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察すること。 オ　作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深めること。		ウ　必要に応じて書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈するとともに，文章の構成や展開，表現の特色について評価すること。 エ　作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。

〇考えの形成，共有

文章を読んで理解したことなどに基づいて，自分の考えを形成し，探究することを通して自分の考えを広げたり深めたりすることを示している。

「考えの形成」とは，文章の構造と内容を捉え，精査・解釈することを通して理解したことに基づいて，自分の既有の知識や様々な経験と結び付けて考えを広げたり深めたりしていくことである。

「言語文化」のオでは，**作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつ**こと，「論理国語」のカでは，**人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深める**こと，「文学国語」のカでは，**作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深める**こと，

「古典探究」のオでは，**古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりする**こと，カでは，**古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりする**ことを示している。

「論理国語」のキでは，**設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に，必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりする**こと，「文学国語」のキでは，**設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める**こと，「古典探究」のキでは，**関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める**こと，クでは，**古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりする**ことを示している。なお，この学習過程においては，いずれの指導事項も，探究的な学びの要素を含むものとして示している。

以上のように，「考えの形成，共有」に関する資質・能力について，学習過程ごとに整理して示している。

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。	カ　人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深めること。 キ　設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に，必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。
文学国語	**国語表現**	**古典探究**
カ　作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めること。 キ　設定した題材に関連する複数の作品などを基		オ　古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。 カ　古典の作品や文章などに表れているものの見

に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。		方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。 キ　関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。 ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

「読むこと」の言語活動例

内容の⑵には，⑴の指導事項を指導する際の言語活動を例示している。

「現代の国語」のア，イ，「言語文化」のア，「論理国語」のア，イ，ウ，エには，主として論理的な文章や実用的な文章を読んで理解したことや考えたことを表現する言語活動を示している。

「言語文化」のイ，ウ，エ，「文学国語」のア，イ，ウ，エ，オ，「古典探究」のア，イ，ウ，エには，文学的な文章を読んで考えたことなどを論述したり話し合ったりする言語活動を示している。

「言語文化」のオ，「論理国語」のオ，「文学国語」のカ，「古典探究」のオ，カ，キには，主として本などから情報を得て活用したり探究したりする言語活動を示している。

各科目の言語活動例は，次のとおりである。

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。 イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を	ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。 イ　作品の内容や形式について，批評したり討論し	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，批評したり討論したりする活動。 イ　社会的な話題について書かれた論説文やその関

伴う文章を読み，理解したことや解決したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	たりする活動。 ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。 エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。 オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。	連資料を読み，それらの内容を基に，自分の考えを論述したり討論したりする活動。 ウ　学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み，自分の考えを論述したり発表したりする活動。 エ　同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。 オ　関心をもった事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書や短い論文などにまとめたりする活動。
文学国語	国語表現	古典探究
ア　作品の内容や形式について，書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。 イ　作品の内容や形式に対する評価について，評論や解説を参考にしながら，論述したり討論したりする活動。 ウ　小説を，脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。		ア　古典の作品や文章を読み，その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動。 イ　同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。 ウ　古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢

		詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。
エ　演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる活動。		エ　古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。
オ　テーマを立てて詩文を集め，アンソロジーを作成して発表し合い，互いに批評する活動。		オ　古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。
カ　作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。		カ　古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動。
		キ　往来物や漢文の名句・名言などを読み，社会生活に役立つ知識の文例を集め，それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

第５節　国語科の科目編成

１　科目の編成

科目は次の６科目である。

科目名	標準単位数
現代の国語	2
言語文化	2
論理国語	4
文学国語	4
国語表現	4
古典探究	4

科目の編成に当たっては，これまでの関連する科目を踏まえつつも，答申に示された資質・能力の整理を踏まえ，全ての科目を新設している。

このうち，全ての生徒に履修させる共通必履修科目は「現代の国語」及び「言語文化」である。

「現代の国語」は，実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として，〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」，〔思考力，判断力，表現力等〕における「Ａ話すこと・聞くこと」，「Ｂ書くこと」，「Ｃ読むこと」の領域から内容を構成した科目である。

「言語文化」は，上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として，〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」，〔思考力，判断力，表現力等〕における「Ａ書くこと」，「Ｂ読むこと」の領域から内容を構成した科目である。

選択科目は，「論理国語」，「文学国語」，「国語表現」及び「古典探究」の４科目である。いずれの科目も，共通必履修科目「現代の国語」及び「言語文化」で育成された資質・能力を基盤として，関連する内容を発展させた科目である。

「論理国語」は，実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成を重視した科目として，〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」，〔思考力，判断力，表現力等〕における「Ａ書くこと」，「Ｂ読むこと」の領域から内容を構成した科目である。

「文学国語」は，深く共感したり豊かに想像したりして，書いたり読んだりする力の育成を重視した科目として，〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事

項」,「(2)我が国の言語文化に関する事項」,〔思考力，判断力，表現力等〕における「A書くこと」,「B読むこと」の領域から内容を構成した科目である。

「国語表現」は，実社会において必要となる，他者との多様な関わりの中で伝え合う力の育成を重視した科目として,〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」,「(2)我が国の言語文化に関する事項」,〔思考力，判断力，表現力等〕における「A話すこと・聞くこと」,「B書くこと」の領域から内容を構成した科目である。

「古典探究」は，生涯にわたって古典に親しむことができるよう，我が国の伝統的な言語文化への理解を深める科目として,〔知識及び技能〕における「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」,「(2)我が国の言語文化に関する事項」,〔思考力，判断力，表現力等〕における「A読むこと」の領域から内容を構成した科目である。

各科目の内容の構成の関係を図示すると，次のようになる。

各科目の内容の構成

	〔知識及び技能〕			〔思考力，判断力，表現力等〕		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	情報の扱い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	○	○	○	○	○	○
言語文化	○		○		○	○
論理国語	○	○	○		○	○
文学国語	○		○		○	○
国語表現	○		○	○	○	
古典探究	○		○			○

（○印は設定あり）

2 各科目の構成

各科目は,「目標」,「内容」,「内容の取扱い」から成っている。

各科目の目標のうち，共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」については，これらの履修によって教科の内容の基本となるものを全面的に受けた総合的な言語能力を育成する科目であり，これらの科目の目標の実現が教科の目標の実現につながるものとしている。選択科目である「論理国語」,「文学国語」,「国語表現」及び「古典探究」の４科目は，共通必履修科目の目標を受けつつ，各科目の性格や特色に応じた目標を掲げている。

各科目の内容については，これまで共通必履修科目には,「A話すこと・聞くこと」,「B書くこと」,「C読むこと」及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していたが，今回の改訂では，全科目において,〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断

力，表現力等〕で構成している。さらに，〔知識及び技能〕には，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」の3事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕には，「話すこと・聞くこと」，「書くこと」，「読むこと」の3領域をそれぞれ示し，科目の性格や特色に応じて，構成している。また，〔思考力，判断力，表現力等〕の3領域の内容には，全科目において，(1)として指導事項，(2)として言語活動例を示している。

共通必履修科目のうち，「現代の国語」については，〔知識及び技能〕における3事項，〔思考力，判断力，表現力等〕における3領域を全て示しているが，「言語文化」については，〔知識及び技能〕における2事項，〔思考力，判断力，表現力等〕における2領域を示している。これは，義務教育との系統性や，これまでの共通必履修科目の内容を踏まえながら，共通必履修科目を，科目の性格や特色に応じて，2科目設定しているためである。選択科目については，これまで内容を領域等別の構成としていなかったが，今回，選択科目である「論理国語」，「文学国語」，「国語表現」及び「古典探究」の4科目は，それぞれの科目で育成を目指す資質・能力を明確にするため，共通必履修科目と同じく，〔知識及び技能〕における3事項，〔思考力，判断力，表現力等〕における3領域から，科目の性格や特色に応じて，それぞれ構成している。

各科目の内容の取扱いについては，今回の改訂で，各科目で育成する資質・能力の明確化を図ったことから，各科目における領域別の授業時数や，指導に当たって配慮すべき事項，教材の取扱いなどについて，これまでより明確に示している。

各科目における領域別の授業時数については，答申に高等学校の国語教育の課題として「話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』，『書くこと』の領域の学習が十分に行われていないこと」が示されたことなども踏まえ，1領域のみの「古典探究」を除く全科目において，〔思考力，判断力，表現力等〕における各領域の授業時数を示している。なお，示した授業時数は，標準単位数における時数であり，単位数の増加が行われた場合には，増加した単位の割合に比例した時数が確保される必要がある。

各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

	〔思考力，判断力，表現力等〕		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	20 ～ 30 単位時間程度	30 ～ 40 単位時間程度	10 ～ 20 単位時間程度
言語文化		5 ～ 10 単位時間程度	【古典】 40 ～ 45 単位時間程度
			【近代以降の文章】 20 単位時間程度
論理国語		50 ～ 60 単位時間程度	80 ～ 90 単位時間程度
文学国語		30 ～ 40 単位時間程度	100 ～ 110 単位時間程度
国語表現	40 ～ 50 単位時間程度	90 ～ 100 単位時間程度	
古典探究			※

（※「古典探究」については，1 領域のため，授業時数を示していない。）

指導に当たって配慮すべき事項のうち，共通必履修科目については，〔思考力，判断力，表現力等〕の「書くこと」に関する指導について，中学校国語科の書写との関連を図り，効果的に文字を書く機会を設けることを示している。これは，文字に関する学習の接続について，答申に「実社会・実生活に生かすことや多様な文字文化に対する理解を深めること」が示されたことによるものである。

教材の取扱いについては，各科目の性格や特色に応じて，主として「読むこと」の教材をより明確に示している。

各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における教材の取扱い（抜粋）

現代の国語	【読むこと】 ○現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章
言語文化	【読むこと】 ○古典及び近代以降の文章とし，日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを含める ○我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう，我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げる ○必要に応じて，伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる
論理国語	【読むこと】 ○近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章 ○必要に応じて，翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができる
文学国語	【読むこと】 ○近代以降の文学的な文章 ○必要に応じて，翻訳の文章，古典における文学的な文章，近代以降の文語文，演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができる
国語表現	【話すこと・聞くこと】 ○必要に応じて，音声や画像の資料などを用いることができる
古典探究	【読むこと】 ○古典としての古文及び漢文とし，日本漢文を含める ○論理的に考える力を伸ばすよう，古典における論理的な文章を取り上げる ○必要に応じて，近代以降の文語文や漢詩文，古典についての評論文などを用いることができる

また，第３款には，各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いに当たって配慮すべき事項を示している。

第２章　国語科の各科目

第１節　現代の国語

１　性格

知識基盤社会の到来，地球規模の難問の数々，AI（人工知能）に象徴される情報科学の発達など，これからの社会はこれまでの常識や判断では対処しきれないものとなることが予想される。このような予測困難で複雑な社会に主体的に関わり，他者と協働して課題を解決したり，様々な情報を見極め，知識の再構成を行い，新たな価値を生み出したりする資質・能力の育成は喫緊の課題となっている。こうした資質・能力の育成のためには，言語能力が重要な役割を果たすことは言うまでもなく，国語科に求められる責務は大きい。

義務教育段階での到達点を引き継ぎ，社会との接点がより近くなる高等学校段階では，論理的思考力，相互に交流する力，情報の適切な判断力といった実社会で求められる言語能力の育成に主眼をおいた国語教育が一層求められている。

「現代の国語」はこのことを踏まえ，実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置き，全ての生徒に履修させる共通必履修科目として新設した。小学校及び中学校国語科と密接に関連し，その内容を発展させ，総合的な言語能力を育成する科目として，選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤，とりわけ言語活動の充実に資する国語の資質・能力，社会人として生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

そのため，様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう，小学校及び中学校と同様に，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」の３事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A話すこと・聞くこと」，「B書くこと」，「C読むこと」の３領域から内容を構成している。実社会に生きる国語の資質・能力の育成を目指すため，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」を充実させるとともに，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，これまで指導が十分でないとされてきた表現力の育成を目指すため，「A話すこと・聞くこと」，「B書くこと」の指導事項を充実させている。

2 目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様，「現代の国語」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。中学校第3学年において「社会生活に必要な国語の知識や技能」としていたものを受け，「現代の国語」では，**実社会に必要な国語の知識や技能**としている。

実社会とは，私たちが生きる現実の社会そのものである。**実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける**とは，学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも，社会人として活躍していく高校生が，他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。**論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力**については，中学校第3学年において「養い」としていたものを受け，**伸ばし**としている。また，**伝え合う力**の育成については，中学校第3学年で「社会生活における人との関わりの中で」としていたものを受け，**他者との関わりの中で**と発展させている。**他者**とは，広く社会生活で関わりをもち，世代や立場，文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには，こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達，相互理解を進めていく必要があり，状況や場面に応じた他者との関わりの中で，必要な事柄を正確に伝え，相手の意向を的確に捉えて解釈したり，効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

なお，この目標については，共通必履修科目としての性格を踏まえ，「言語文化」と同じとしている。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，中学校第3学年において「認識する」としていたものを受け，「現代の国語」では，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，中学校第3学年において「読書を通して自己を向上させ」としていたものを受け，「現代の国語」では，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ**るとしている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち，生涯にわたる読書習慣の基礎を築き，社会人として，考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては，中学校第3学年において「我が国の言語文化に関わり」としていたものを，「現代の国語」では，教科の目標と同じく，**我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち**とし，より高めている。**我が国の言語文化**とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「現代の国語」では，これらのうち，現代社会に生きて働く言語の価値に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては，小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり，全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は，国語科だけではなく他教科等も含めて，社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては，こうした態度を，**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は，以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力，人間性等」は，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

なお，この目標については，共通必履修科目としての性格を踏まえ，「言語文化」と同じとしている。

3 内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。

イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。

ウ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。

エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。

カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。

○言葉の働き

中学校第２学年	現代の国語	言語文化
ア　言葉には，相手の行動を促す働きがあることに気付くこと。	ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。

ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。

小学校第１学年及び第２学年のアの「事物の内容を表す働き」，第３学年及び第４学年のアの「考えたことや思ったことを表す働き」，第５学年及び第６学年のアの「相手とのつながりをつくる働き」，中学校第２学年のアの「相手の行動を促す働き」を受けて，「言葉の働き」のうち，認識や思考を支える働きについて理解することを示している。

認識とは，事物の内容を捉え，考えたり思ったりしたことを基に，その本質や意義を理解することである。また，**思考**とは，文字通り思うことと考えることであるが，認識の結果得られた情報を精査し，構造化し，推論し，論理を構築していくことでもある。**認識や思考を支える**とは，それらを確かなものとする際に言葉が不可欠であることを示している。

この指導事項は，〔知識及び技能〕や〔思考力，判断力，表現力等〕に示す様々な内容に関連するが，例えば，認識したことや思考したことを明確に関係付けるという観点から，〔知識及び技能〕の(1)の「エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解

し，話や文章の中で使う」こととの関連を図り，指導の効果を高めることが考えられる。

〇話し言葉と書き言葉，言葉遣い

中学校第２学年	現代の国語	言語文化
イ　話し言葉と書き言葉の特徴について理解すること。	イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。	
中学校第３学年		
エ　敬語などの相手や場に応じた言葉遣いを理解し，適切に使うこと。		

イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。

中学校第２学年のイ及び第３学年のエを受けて，話し言葉と書き言葉の特徴や役割，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うことを示している。

話し言葉と書き言葉の特徴については，中学校までに，話し言葉が相手（聞き手）の反応やその場の状況などの影響を強く受けるものであるのに対して，書き言葉は書き手が十分に考え推敲を重ねて文章を作成したり，読み手が必要なときに読み返したりすることができるものであることを学習している。こうした特徴を踏まえ，「現代の国語」では，話し言葉と書き言葉には，独自の役割があることを理解し，それぞれを適切に使っていくことを求めている。

話し言葉は，相手（聞き手）の反応やその場の状況を見ながら，いまここで自らが話していることを，相手が理解しているか，共感しているか，あるいは，その話し方が，その場にとってふさわしいか，伝わりやすいかなどについて確かめて，その場で，相手とのコミュニケーションが成立するように，工夫することができる。そうした工夫を行うことを通して，自分の考えを確かなものにしたり，相手を説得したり共感を得たりする役割を果たす。話し言葉の種類には，演説，説明など，自分が話すことの主体である独話と，討論，会議，相談など，双方向のやりとりとなる対話とがある。

書き言葉は，書きながら形にしたものを客観視し，読み返し，推敲を加えていくことで，整理された情報による，正確で説得力をもった表現になるよう，工夫することができる。そうした工夫を通して，自分の考えを確かなものにしたり，読み手に確実に情報を届けたりする役割を果たす。また，そうした整った内容を，読み手が必要なときにいつでも参照できるようにしておく役割も果たす。書き言葉は，主として報告書，論文，文学作品，歴史，記録，公文書，法律などで用いられる。

このような**特徴や役割**の違いは，それぞれの表現に次のような特色をもたらすことになる。話し言葉は，切れ目がはっきりしない短い文を重ねたり，繰り返しや省略も頻繁に

行ったりする一方で，話す速度や，声の調子，身振りや表情など，言葉以外の手段で伝えたいことを補うことができる。一方，書き言葉は，文を相互の関係を明確にして並べたり，省略や繰り返しをすることなく，主語，述語，修飾語などを，書き手の目的や意図に応じて順序よく組み立てたりすることで，書き手の意図が，その場を離れても誤りなく伝わるように工夫することができる。また，話し言葉と書き言葉では，使われる語彙に違いがあることもあり，例えば，「ちょっと」と「少々」，「なので」と「したがって」では，書き言葉で前者の語を使うと不適切になる場合も考えられる。このように，話したままを書いたり，書いたままを話したりするのではなく，書き言葉と話し言葉の違いを理解した上で，それぞれを適切に使っていくことが必要である。

また，話し言葉には，即時的に消えていくという特徴もあるが，現代では，文化審議会国語分科会『分かり合うための言語コミュニケーション（報告）』（平成 30 年 3 月）（以下「国語分科会報告」という。）で「打ち言葉」と呼ばれている SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）等における即時的性格をもった書き言葉の媒体や，音声を中心としながらも持続性をもつ画像・映像媒体も登場しており，従来の，話し言葉と書き言葉の違いだけでは捉えきれない状況が生じている。

正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮するとは，相手や状況に応じて最も適切な言い回しを選択するということである。

国語分科会報告も踏まえ，**正確さ**とは，互いにとって必要な情報を間違いなく伝え合うことであり，**分かりやすさ**とは，互いが十分に情報を理解できるように，表現を工夫して伝え合うことである。また，**適切さ**とは，場面や状況，相手の気持ちに配慮した話題や言葉を選び，適切な手段を通じて伝え合うことであるが，同旨を国語分科会報告では「ふさわしさ」としている。**敬意と親しさ**とは，伝え合う者同士が近付き過ぎず，遠ざかり過ぎず，互いに心地良い距離感に立って伝え合うことである。

正確さを求める余りに分かりにくくなったり，分かりやすさを優先する余りに正確さを欠くことになったりすることがないようにするとともに，場面の状況に応じた言葉の特徴や役割をもたせることができているか，敬語を含む待遇表現や親しさを示す表現が相手との心理的な距離（親疎の関係）を適切に保てているかに留意することが求められる。

〇漢字

中学校第 3 学年	現代の国語	言語文化
ア　第 2 学年までに学習した常用漢字に加え，その他の常用漢字の大体を読むこと。また，学年別漢字配当表に示されている漢字について，文や文章の中で使い慣れること。	ウ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。	イ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。

ウ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。

漢字を読むことについては，中学校第３学年のアを受けて，**常用漢字の読みに慣れ**ることを示している。中学校までに常用漢字の全ての音訓を学習するわけではない。そのため，新しく出てくる漢字の音訓を学習させることは言うまでもないが，中学校で学習済みの漢字の音訓についても注意を向けさせ，その習熟を図る必要がある。

漢字を書くことについては，中学校第３学年のアを受けて，**主な常用漢字を書**けるようになることを示している。

高等学校の共通必履修科目においては，中学校までの漢字の学習の上に立ち，常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに，主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることを求めている。文脈に応じて書く際には，どの語を漢字で書きどの語を仮名で書くと読みやすくなるかを考えさせることも重要である。

また，国語科をはじめ各教科・科目等における学習用語の多くは漢字で表記されていることを具体的な用例で示したりするなど，生徒の学習意欲が高まるよう工夫する必要がある。

なお，漢字の指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域における学習と関連付けながら，**文や文章の中で使う**資質・能力の育成が求められる。したがって，基礎的な漢字の習得ができていないなど生徒の実態にもよるが，漢字の学習のみをまとめて取り出して練習したり，短時間のテストなどを継続的に実施したりして指導することは望ましくない。

また，内容の取扱いの(2)のアに示しているとおり，「言語文化」の内容の〔知識及び技能〕の(1)のイの指導との関連を図り，計画的に指導することが求められる。漢字の学習について，例えば「言語文化」と同一の指導が無計画に行われるなど，二つの科目における漢字の学習の関連が図られることなく漢字に関する知識・技能が偏ったものとなることのないよう十分留意する必要がある。

○語彙

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し，慣用句や四字熟語などについて理解を深め，話や文章の中で使うとともに，和語，漢語，外来語などを使い分けることを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

中学校第３学年のイを受け，「現代の国語」では，これに**実社会において**を付加し，現実の社会に出た際に理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すことを求めている。

語句とは，文を構成する単位となるものであり，「目」，「一目（ひとめ）」，「目標」などの語のほか，「目が高い」，「目が届く」など，語と語が組み合わさって全体としてある意味を表す慣用句や，「岡目八目」，「一目瞭然」などの四字熟語，あるいは，「決して～ない」など語と語との結び付きなどを指す。このような，語と語の組み合わさり方，結び付き方のことを，「語句の構造」という。また，日本語の語句には，和語，漢語，外来語という種類があり，和語は漢字か仮名，漢語は漢字，外来語は片仮名で書くという原則があることや，和語は，意味や用法によって異なる漢字を書き分けたり，漢字と仮名を書き分けたりすることがあることについて理解することが必要である。

語彙とは，ある言語体系の中で用いられる語句のまとまりのことである。例えば，「人間活動を表す語彙」といえば，人間が身体や精神あるいは言語などによって行う様々な活動を表す語句の全体を意味する。そのうち，要望や要求に関する語彙を例に取れば，「要請」，「請求」，「所望」，「懇願」などの語句を理解するとともに，相互の意味の違いによって使い分けることができるようになることが求められる。これらの漢語名詞は「する」を付けて動詞としても働くことや，「求める」，「訴える」などの和語や，「アピール（する）」，「クレーム」などの外来語，「申し入れる」，「拝み倒す」のような複合語，「情に訴える」，「後生だから」といった慣用句など，様々な種類の語句と関連付けて習得させる必要がある。このような語句相互の関連性のことを**語彙の構造**という。

以上のような，語句や語彙の構造の中で個々の語句がもつ特色を踏まえて，積極的に使っていくことが求められる。

このようにして語句や語彙の構造及び特色を理解した上で個々の語や句を使っていくことが，語感を磨くことにつながり，それによって語彙を豊かにすることができるようになる。

〇文や文章

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ウ　話や文章の種類とその特徴について理解を深めること。	オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。

オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。

文の組立て方については，中学校第３学年のウを受けて，成分を効果的に組み立てる方法を理解する必要がある。**効果的な組立て方**とは，例えば，「山田さんは書記に選ばれた」

と「書記は山田さんが選ばれた」とでは，同じ事実を表す文であるが，前者は，「山田さん」に焦点が当てられているのに対して，後者は「書記」に焦点が当てられた言い方である。伝えたい力点がどちらにあるかによって，文の組立て方の効果が変わってくることを理解することが求められる。

話，文章の効果的な組立て方については，例えば，話や文章のひとまとまりを構成する話段や，段落の内部を構成する複数の文の中に，話題を端的に表す中心文があり，その中心文を，段落のどの位置にどのように置くかによって話や文章の伝わり方が変わってくることなどを理解する必要がある。一般に，話題提示や問題設定の場合は最初に，結論表明や問題提起の場合は末尾に置くと，効果的に伝わると考えられている。

また，例えば，意見文の場合，設定した課題に対する賛否を最初に記してから，その根拠を述べる方法などが考えられる。説明文の場合は，結論を先に述べてから根拠を示す構成（頭括型），根拠を示してから最後に結論を述べる構成（尾括型），結論を先に述べてから根拠を示し再度結論を述べる構成（双括型）などが考えられる。報告文では，いつ，どこで，何（誰）が，何をしたかについて，決まった型にしたがって正確に書くことが求められる。

接続の仕方については，中学校第１学年の「エ　接続する語句の役割について理解を深める」を受けて，「現代の国語」では，単に接続詞などの接続の語句だけではなく，文の成分同士の接続，文と文との接続，段落（話段）と段落（話段）との接続について，理解する必要がある。語句同士，文の成分同士，文同士，段落（話段）同士には，必ず何らかの関係があるが，その関係が明確になるように，配列を工夫したり，適切な接続表現（接続詞，副詞，接続助詞など）を選んだりすることが必要である。

〇表現の技法

中学校第１学年	現代の国語	言語文化
オ　比喩，反復，倒置，体言止めなどの表現の技法を理解し使うこと。	カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。

中学校第１学年のオを受けて，比喩，例示，言い換えなど実社会の様々な場面で用いられる表現の技法や直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し，文章の中で適切に使うことを示している。

比喩とは，あるものを別のものでたとえて表現することである。直喩や隠喩，擬人法などの比喩の種類などについて，理解をより確かなものとするとともに，話や文章の中で効果的に使うことを求めている。

例示とは，物事の仕組みを分かりやすく説明したり，相手に同意を求めたりする場合に，具体的な例を示すことである。相手の理解を促す適切な例を挙げることは，順序立てて論理的に説明したり主張したりするよりも効果的な場合がある。

言い換えとは，他の言葉に置き換えることである。「何回も練習する」を「反復練習する」と言い換えることで，改まった感じにしたり，「人気のない住宅地」を「閑静な住宅地」と言い換えることで，イメージを落ち着いたものにしたり，「相手の心を斟酌する」を「相手の心を思いやる」と言い換えることで，分かりやすく柔らかい感じにしたりするなど，言い換えは様々な効果をもたらす。

これらに加えて，承諾する際にそのことを強調して「私が引き受けない理由などあるもんですか。」という「反語」や，困難なことを強調したいときに「無理なものは無理」という「同語反復」など，様々な修辞がある。

直接的な述べ方や婉曲的な述べ方とは，例えば，「当番を代わってほしい」とお願いするのが**直接的な述べ方**であり，同じお願いでも「今日は当番なのに急な用事が入ってしまって…」のように背景にある事情や状況を示すことで，相手に自分の意向を汲んでもらうような言い方をするのが**婉曲的な述べ方**である。婉曲的な述べ方では，「遠回しに言わないで」，「もっとはっきり言ってほしい」，直接的な述べ方では，「そんなにはっきり言わなくても」，「もう少し遠回しに言ってほしい」というように，それぞれ反感を買ってしまうような場合があることを踏まえておくことも重要である。交渉する場面や頼み事をする場面，あるいは共感，納得を促すような場面などにおいて，それぞれの述べ方の特徴をよく理解し，適切に使い分けることが大切である。また，はじめに本題から離れたことを述べ，場を和ませてから本題に入るような進め方，相手に話を受け入れやすい心的状況を作る情緒に訴えるような述べ方も婉曲的な述べ方と言える。なお，いきなり本題に入る直接的な述べ方が必要な場合もあるので，相手や状況に合わせて使い分けることが求められる。

(2) 情報の扱い方に関する事項

(2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。
イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。
ウ　推論の仕方を理解し使うこと。
エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。
オ　引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理解を深め使うこと。

〇情報と情報との関係

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めること。	ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。 イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。	

ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。

中学校第３学年のアを受けて，主張と論拠など情報と情報との関係について理解することを示している。

主張とは，要求や依頼，批判や共感などを自分の意見として述べ，相手を説得したり納得させたりすることをねらいとするものである。読んだり観察したりすることを通して疑問や思い付きが生まれ，それを明らかなものにするために，仮説を立てて検証することが必要な場合もある。仮説とはある現象や出来事の理由や仕組みを推論し，たどり着く最も妥当な説明のことである。

論拠とは，主張がなぜ成り立つかを説明するための根拠と理由付けのことであり，根拠のみならず，主張が妥当な理由付けに支えられていることを示すものである。

例えば，生徒会執行部が「今年から文化祭の出し物は，お化け屋敷や迷路ではなく演劇にすべきである」ということを全校生徒に向けて主張する場合，「アンケートによると，文化祭では娯楽的側面よりも文化的側面を重視すべきだという生徒の意見が多いからだ」という根拠だけでなく，「娯楽的側面を重視しすぎると遊んでいるように見られてしまい，文化祭の存在意義が疑問視される懸念がある」と理由付けすることで，主張の妥当性を説明することができる。

このように，「現代の国語」では，「（なぜなら）～だからだ」という「～だから」の部分が，根拠として妥当なものであることを明確に示すことが重要となる。

イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。

中学校第３学年のアを受けて，個別の情報と一般化された情報との関係について理解することを求めている。

個別の情報とは，実体が明確だが他のケースにそのまま当てはめることのできないものである。一方，**一般化された情報**とは，実体は明確ではないが全体的な傾向などが分かり，対策を立てたりする場合の目安を得ることのできるものである。具体的な個別の情報の共通点を見付け，一般化された情報を得ることで，真実や本質に近付いていくことができる。

これは，例えば，「ニンジン，ダイコン，レタス」を「野菜」という語でまとめる，上位語と下位語の関係とは異なる。上位語，下位語の関係は，具体的なものの共通点を捉え

て共通のラベルを付す点にある。一方，個別の情報と一般的な情報との関係は，共通点を捉える点は同じであるが，単に共通のラベルを付すのみではなく，一つ一つの個別の情報を相互に関係付けることが求められる。

したがって，個別の情報をもっているだけでは，情報を活用していることにはならない。それぞれの情報の共通点を見いだし，一つの概念にまとめることで，一般化された情報を得ることが大切となる。なお，共通点や傾向などを探るための着眼点をどう捉えるかも重要な問題である。個別の情報を一般化するには，それぞれがどのカテゴリに所属するかを適切に捉えることが大切である。このように，自分の考えの妥当性を示すには，個別の情報と一般化された情報とを適切に関係付ける力を身に付けることが必要となる。

中学校では，具体と抽象との関係について学習しているが，抽象化することによっても，本質や真実に近付くことができることを踏まえて，理解を深めることが求められる。

〇情報の整理

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。	ウ　推論の仕方を理解し使うこと。 エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。 オ　引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理解を深め使うこと。	

ウ　推論の仕方を理解し使うこと。

中学校までに学習した「情報の整理」について理解を踏まえ，推論の仕方について理解し，様々な状況において自分の考えや立場を明確にすることができるようになることを示している。

推論とは，ある事実を基に未知の事柄を推し量ることであり，**推論の仕方**には演繹（えき）的な推論と演繹（えき）的ではない推論（帰納，仮説形成など）があると考えられている。

演繹（えき）的な推論とは，例えば，「全ての脊椎（せき）動物は背骨をもつ。クジラは脊椎（せき）動物である。したがって，クジラは背骨をもつ。」のように，一般的な前提を個別の事例に当てはめていく推論のことである。演繹（えき）的な推論では，はじめに示した前提が正しければ，論理的に正しい結論を得ることができる。物事をいろいろ知り，それらを個別の事例に当てはめていく場合，一般的なことに適切に当てはめることができれば，目前の個別の現象の意味を理解することができる。

演繹（えき）的ではない推論は，例えば，「猿の仲間は背骨を持つ。鹿の仲間は背骨を持つ。猫の仲間は背骨を持つ。クジラの仲間は背骨を持つ。」という個別の事例を積み上げ，「した

がって，全てのほ乳類は背骨を持つ。」という一般化された法則を導く推論などのことである。

演繹（えきの）的ではない推論は，見たものがどうなっているかを踏まえて，見ていないもの，あるいは見えないものがどうなっているかを考えるため，新しいことを見付けていくには有効であるが，導かれた結論が常に正しいとは限らない点に注意する必要がある。したがって，実社会で情報と情報とを関係付ける際に，個別の事例を積み上げて一般化する場合には，導かれた結論が正しいかどうかを慎重に吟味することが重要となる。

このように，推論の仕方には，様々なものがあることを理解し，その限界にも留意して実際に使うことが求められる。なお，これらの推論の仕方は決して特別なものではなく，日常的な思考の中でもよく使われているものである。そのことを踏まえた上で，高校生として，これらを意識的に使うことが求められる。

エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。

中学校第３学年のイを受けて，情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深めて使うことを示している。

情報化が進展し様々な情報が氾濫している現代社会においては，情報の妥当性や信頼性を十分吟味する必要がある。中学校までは，情報の信頼性の確かめ方に重点が置かれていた。「現代の国語」では，信頼性に加え，妥当性も視野に入れるとともに，「確かめる」だけでなく，吟味することが求められている。

情報の妥当性には，その情報が正しいものであるということに加えて，その情報を根拠として挙げる場合などに，根拠としての適切さを欠いていないことが必要となる。その情報がいくら正しいものであっても，何かを主張するための根拠としてふさわしいものとなっていなければ，その主張は説得力をもったものにはならない。中学校では，情報自体の信頼性を確かめることに重点が置かれていたが，「現代の国語」では，活用する場面にふさわしい情報かどうかを**吟味**することが求められている。

情報の信頼性は，その情報が確かなものであるかどうかを出典の示し方から確認するだけでなく，誰が，いつ，どこで発信したものかを確認することも重要となる。また，様々な情報を収集し吟味した上で，真偽や事実誤認の有無という観点から，確かなものかどうかを吟味することも求められる。「現代の国語」では，情報の吟味の仕方に様々な方法があり，集めた情報を相互に関係付けながら，その情報が信頼できるものか，妥当なものかを見極めて使っていくことが求められている。

指導に当たっては，例えば，〔思考力・判断力・表現力等〕の「Ｂ書くこと」(1)の「ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。」や，「Ｃ読むこと」(1)の「イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。」との関連を図ることが考えられる。

オ　引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理解を深め使うこと。

中学校第１学年のイを受けて，引用の仕方や出典の仕方，それらの必要性について理解を深め使うことを示している。

論文などを書く場合には，自分の考えと他人の考えとを明確に区別して示すことが必要である。そのため，自分が参考にした書籍や論文の一節，および図表やグラフ，絵，写真などを引用する場合には，**出典**を明示することが重要となる。

引用とは，書籍や論文の一節や文，語句などをそのまま抜き出すことである。**出典**とは，引用元の書籍などの典拠のことである。具体的には，書名（タイトル），編著者名，出版年などを指す。ウェブサイトを閲覧した場合には，アドレスや閲覧日を示すことが求められる。これらは，著作権に留意するとともに，情報の受け手が引用部分について，引用元に遡って内容を確認できるようにするためのものである。

「現代の国語」では，**引用の仕方**，**出典の示し方**を理解するだけでなく，引用することによって自らの主張を補強し説得力を高めることができることなど，引用の必要性についても理解を深めることが求められる。また，引用の仕方や出典の示し方を誤ると，自らの主張の妥当性や信頼性を失う危険があることについて理解を深めておくことも必要となる。

(3) 我が国の言語文化に関する事項

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
　ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。

○読書

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
オ　自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理解すること。	ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。

中学校第３学年のオを受けて，実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

実社会との関わりとは，政治や経済，社会などの幅広い分野の出来事と自分自身の関わりについて考えることを指している。そのためには実体験だけでなく，読書を通して新しい知識を得たり，自分の考えを広げたり深めたりすることが必要となる。具体的には，例えば，新書などを読むことを通して様々な分野における考え方に触れることが求められる。その際，一冊の図書をじっくりと読むだけではなく，数冊の図書を読み比べながら，それぞれの趣旨の違いを捉えたり，重要な部分に焦点を当てて検証しながら読んだりする

ことも考えられる。

〔思考力，判断力，表現力等〕
A　話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。
イ　自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にするとともに，相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。
ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。
エ　論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。
オ　論点を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。
(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動。
イ　報告や連絡，案内などのために，資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞いて，質問したり批評したりする活動。
ウ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。
エ　集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動。

〇話題の設定，情報の収集，内容の検討

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　目的や場面に応じて，社会生活の中から話題を決め，多様な考えを想定しながら材料を整理し，伝え合う内容を検討すること。	ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。	

ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。

目的や場に応じて，適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討することを示している。

「現代の国語」では，中学校との接続を考慮し，話題を設定する範囲を**実社会の中から**としている。

目的や場に応じるとは，何のために，誰を対象に，どのような条件で話したり聞いたり話し合ったりするのかを具体的に考え，それらにふさわしいかどうかを判断することである。ここでの**場**とは，話すことが実際に行われる個々の様々な状況を指す。

実社会の中から適切な話題を決めるとは，実社会の事象や話題（社会的な話題，国際的な話題，文化的な話題，地域に関する話題など）について，テレビや新聞，インターネットなどの様々な媒体を通じて伝えられることに加えて，必要に応じて予備的な調査を行ったり専門的な研究の成果を踏まえたりして，目的や場にふさわしい話題を選択することである。

様々な観点から情報を収集，整理するためには，話題となる事柄自体が多様な側面をもつこと，立場や文化的背景の相違などから様々なものの見方や考え方が存在することなどを理解する必要がある。その上で，資料に当たったり関係者にインタビューをしたりなどして幅広く調べ，目的に応じて整理することを求めている。対象とする文章の種類や内容，分野の幅を広げるとともに，図書館の目録やウェブページを検索するなど本や文章を手に入れる方法や場についても適切に選択する必要がある。なお，ウェブサイトの情報には，その信頼性や妥当性に十分留意する必要がある。

また，情報を整理する際には，分類，比較，関係付けを行い，それぞれの共通点を見いだして組み合わせたり，幾つかをまとめて抽象化したりすることで，話題に対する個々の情報の重要度や位置付けなどを明確にすることができる。その際，参加する生徒全員で検討の過程を共有できるよう，ICT などの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，XY チャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。

伝え合う内容を検討する際には，知っていることや思い付いたことを自由に出し合う話合い（ブレーンストーミング）を行うなど，発想や視点を広げることが重要である。

また，伝え合う内容を検討するためには，目的や場に照らしてふさわしいかどうかを考えることや，話題を選択するために必要な観点や基準を事前に確認することが必要となる。選択の観点や基準としては，例えば，自分の意見をもった上で更に，かつ他者の意見を聞いてみたい話題であるか，参加者に共通の問いが生じているか，解決を急がなければならないかなどに加えて，話題の大小や順序性，聴衆の関心の有無などが考えられる。

特に伝え合う内容がより実務的な場合には，その目的に即して内容を検討する必要がある。例えば，海外の姉妹校との交流で「日本文化に親しむ」ための企画の内容を話し合う際には，「どの日本文化をどのように取り上げるか」という内容の面から，相手校の関心の高さや理解度なども事前に調査し検討に加えることだけでなく，準備期間，費用，場所や時間の確保などの条件の面についても検討することによって，初めて実現可能な企画案

となる。このように目的の達成（得たい結論）に必要な観点を見いだすことで内容をより具体的に検討することができる。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(2)の「イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。」，「エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

○構成の検討，考えの形成（話すこと）

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　自分の立場や考えを明確にし，相手を説得できるように論理の展開などを考えて，話の構成を工夫すること。	イ　自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にするとともに，相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。	

イ　自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にするとともに，相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。

中学校第３学年のイを受けて，自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にし，話の構成や展開を工夫することを示している。

中学校第３学年においては，話し手（自分）の考えについて，聞き手（相手）が納得できるように，論理の展開を考えながら，話の組立てを工夫することを学習したが，「現代の国語」では，聴衆（相手）にどのように意味や内容が把握されるのかを念頭に置き，その反応を予想した上で論理の展開や話の組立てを考えることを示している。

自分の考えが的確に伝わるとは，自分の考えが間違いなくかつ過不足なく相手に伝わることである。そのためには，自らの意見の論拠を箇条に分けて示したり，考えをまとめるに至った過程をたどりながら接続表現を用いて説明したり，結論を簡潔にまとめて話したりするなどの工夫が考えられる。

相手の反応を予想するとは，相手の表情や態度，行動で示される賛意，疑問，反対などをあらかじめ想像することである。そのためには，取り上げる話題について，対立する立場など異なる意見についての理解を深めること，相手（聴衆）の立場や話題に対する理解の度合いを事前に把握しておくことなどの工夫が考えられる。

話の構成や展開を工夫するとは，話の組立て（話の骨組み）や話の進め方を工夫することである。論理的に説明するためには，筋道を明確にしたり，結論を先に出し，後から説明を加えたり，聞き手の関心を引くために具体的なエピソードから始めたりするなど，目的と相手（聴衆）にふさわしい話の構成や展開を工夫することが必要である。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇表現，共有（話すこと）

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ウ　場の状況に応じて言葉を選ぶなど，自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。	ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。	

ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。

中学校第２学年のウ，第３学年のウを踏まえ，相手の理解が得られるように表現を工夫することを示している。

実社会では多様な聴衆を対象とし，的確に伝えるとともに速やかに用件をやりとりすることが考えられる。その際，相手の理解が得られない部分を的確に捉え，臨機応変に表現を工夫する必要がある。そのためには，話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりすることなどが重要である。

話し言葉の特徴を踏まえて話すとは，内容が相手（聞き手）に正確に伝わるように，〔知識及び技能〕の(1)のイの話し言葉の特徴を考慮し，適切な言葉を選んで話すことである。例えば，同音異義語を用いることによって誤解が生じないよう，分かりやすい説明を加えたり言い換えたり，強調すべき点については，呼び掛けの言葉や反復，感動詞などを用いたりするなどの表現の工夫が考えられる。

場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いるためには，目的を踏まえるとともに，実際に話す状況に照らしながら，それらの効果を考える必要がある。ここでの**資料**とは，話題に応じて，本だけでなく新聞，パンフレットやチラシ，ポスター，公示・通達・契約書などの文書など，その種類は多岐にわたる。また，図表やグラフなどについても，既成のものを引用するだけでなく，必要に応じて，元の資料と照らしてその信頼性を確認したり，情報を整理，分析し，新たに作成したものを用いたりすることなどが考えられる。資料を用いる際には，その内容の重要度を明確にし，話す内容との関係を十分考慮しながら適切に用いることが重要である。

また，**機器**には，マイクやスピーカーなどの拡声装置，タブレット型も含むコンピュータ，実物投影機（書画カメラ），大型提示装置（プロジェクターや電子黒板）などが挙げられる。聴衆の人数や年齢構成，会場の大きさなどを踏まえ，どの機器をどこでどのように用いるかを選択する必要がある。機器の使用に当たっては，その機器が有する機能を踏まえ，相手の立場に立って，音声の聞きやすさや情報の見やすさを考慮し，全体の流れを俯瞰（ふかん）した上で適切な場面で用いることが求められる。例えば，発表する際には，単に情報を視覚化するだけでなく，示したい内容を強調したり，取材し記録した内容を再現した

り，提示した資料を投影しその画面にその場で情報を書き込んで説明を補ったりするなど，聴衆の理解を促す工夫が考えられる。また，資料や機器を用いることによって，主張，結論や論拠だけでなく，どのように考えたのかという思考の過程についても効果的に伝えることができる。さらに，コンピュータのプレゼンテーションソフトを用いることによって，情報の加工や図表などを取り込んだスライドの作成も従前に比べ容易になっている。加えて，タブレット型コンピュータにおけるカメラ機能，録画機能など複数の機能を活用することによって，即時に相手と情報を共有，確認したり，相手の反応を踏まえ画面を切り替えたり，口頭で説明しながら書き込み保存したりするなど，場に即応した双方向性のある発表が可能となっている。なお，これらの機器の特性である，操作や情報共有の利便性については生かしながらも，視覚情報の量と質については，〔知識及び技能〕の(2)との関連を図りながら十分に検討する必要がある。

こうした工夫に加えて，**相手の理解が得られるように**するためには，相手に応じた待遇表現の選択，場面や情報，用いる機器に応じた話し方の選択などを挙げることができる。また，譲歩や説明などの文と文の組立てや比喩や例示などの修辞法を工夫することで，相手の共感を引き出し，理解が進むことも考えられる。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。」や「カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

○構造と内容の把握，精査・解釈，考えの形成，共有（聞くこと）

中学校第3学年	現代の国語	言語文化
エ　話の展開を予測しながら聞き，聞き取った内容や表現の仕方を評価して，自分の考えを広げたり深めたりすること。	エ　論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。	

エ　論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。

中学校第3学年のエを受けて，論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすることを示している。

論理の展開を予想することは，聞き手が話の内容を的確に聞き取るために必要なことである。論理の展開を予想するためには，要点を的確に聞き取り，主張や結論，話の筋道な

どを想定することが求められる。例えば，先に結論が出された場合は，続く例示との関係を考えながら聞き，要旨を捉えることが必要である。

なお，予想する論理の展開は，聞き取る時点によっては，一つに絞ることができない場合も多い。論理の展開を予想しながら聞くことを通して，想定した話の筋道などに矛盾はないか，予想した幾通りかの論理の展開のうち，妥当性の高いものはどれかなどを考えながら聞くことが重要である。

話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するためには，聞いたことをそのまま受け入れるのではなく，聞いたことを対象化して検討し，判断することが必要である。そのためには，情報そのものの信頼性や妥当性を検討することに加えて，情報と情報との関係の妥当性を検討することが大切である。

聞き取った情報を整理するとは，情報の重要度や順序性などに着目し，目的に応じて比較，分類，関係付けることである。そのためには，話し言葉の特徴を踏まえ，必要な情報を後の整理に役立つよう的確に書き留めることが重要である。また，情報の整理に向けて，分からなかったことや説明を求めたいことなどを的確に質問できるようにすることも大切である。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(2)の「ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。」，「イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。」，「ウ　推論の仕方を理解し使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

○話合いの進め方の検討，考えの形成，共有（話し合うこと）

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
オ　進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い，合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。	オ　論点を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。	

オ　論点を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

中学校第３学年のオを受けて，論点を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫することを示している。

話合いを行う際には，目的を理解し共有することが重要である。**話合いの目的**の例として，「発想を出し合う」，「感想や反省の交流」，「理解を深める」，「意思決定」，「合意形成」などが挙げられる。

話合いの種類とは，その話合いの目的に応じて選択する方法や形態のことである。

発想や意見を出し合う話合いには，参加者が自由に発想を出し合い，意見の一致を求めないブレーンストーミングや座談会，意見の交換を目的として自由に話したり話し合ったりするフリートーキング，短時間で全員を話合いに参加させることを狙うバズ・セッション，特定のテーマについて自由に話し合い，更に創造的なアイディアを生み出すワールド・カフェ（構成員を交替し，情報を視覚化しながら意見の交流を図る話合い）などがある。これらの話合いでは，出たアイディアや意見の交流の結果を報告するなどして，発想の広がりや考えの深まりを確認することが大切である。

討論には，ディベート，シンポジウム，パネル・ディスカッション，フォーラムなどが挙げられる。

ディベートは，ある論題に対して，肯定・否定，賛成・反対などの対立した立場に分かれ，一定の手順に従って討論する話合いであり，多角的に論題を検討し，論題に対する理解を深めることができる。ただし，現実の社会では肯定・否定だけでは解決できない問題も存在する。そのため，討論の結果，それぞれの立場から明らかになった問題点などを確認し，新たな問題の設定や整理に役立てることが必要である。

シンポジウムやパネル・ディスカッションは，一つの問題に対し，様々な考えをもつ者が聴衆の前で討議を行い，聴衆も質問や意見を述べるものである。シンポジウムは，一般に，その分野・領域の専門家が登壇し，参加者の討議や交流に向けた基調講演や話題提供が行われることが多く，聴衆はその問題についてその意見を聞いて理解を深めたり意見を交流したりすることが主な目的となる。

一方，パネル・ディスカッションは，ある意見の代表者が登壇し意見発表が行われるため，基本的に聴衆も対等に話合いに参加することとなる。

フォーラムは，元来，全体での討議の後，多数決で賛否を問うものであったが，現在では，全体での討論会の後，参加者間の交流も活発に行われることが多い。

また，問題解決，関係者間の調整，意思決定，合意形成などの実務的な目的のため，一定の議題をめぐって論議をし，一定の結論を得る話合いが会議である。参加者間の利害が伴う点から司会，記録などの役割を担い，一定の手順に則（のっと）って進行すること，基本的な原理を理解することなどが求められる。

いずれの話合いも実例を参考にするなど形式や手順の理解を深めつつ，実際に取り組みながら工夫を重ねることが重要である。

論点とは，議論の中心となる問題点や議論の要点のことである。**論点を共有**するためには，司会者や提案者などが話合いの過程で出た意見と論の展開を確認したり整理したりしながら，問題点に対する共通理解を図ることが求められる。その際，図表などで論の展開を可視化するなど，参加者全体に分かりやすい工夫が必要である。例えば，意見が対立している場合，論点を共有する過程で，そのように考える根拠を求めたり，反例を示したりすることで，立場の違いだけでなく，発言の意図に対する理解を求めることができる。その結果，双方の意見が一致することを見いだしたり，新たな発想を得たりすることが，**論点を共有し，考えを広げたり深めたり**することである。

表現の仕方については，論理的な側面ばかりではなく，表情や視線，声の調子などの情意的な側面にも配慮する必要がある。また，相手や場の状況を的確に捉え，直接的な述べ方か婉曲的な述べ方かなど，効果的な表現の技法を選択することも効果的である。

進行の仕方については，小学校第３学年及び第４学年のオの「進め方」から中学校第３学年のオの「進行の仕方」に至るまで系統的に指導している。このことを踏まえ，少人数での話合いにおいても司会者や提案者などを立てるようにすることや，全ての参加者が話合いの経緯を振り返ったりこれからの展開を考えたりすることなど，話合いの進め方について，指導の工夫をすることが大切である。

例えば，意思決定のための会議の場合，話合いを始める前には，決める内容や判断基準，時間の制限などの条件（議題の確認，進行手順の確認）について，参加する全員が理解しておくことが必要である。話合いの最中には，参加者は自分の意見や立場を論拠と併せて明らかにするとともに，前の発言との関係（賛成・反対あるいは補足など）を考慮し，論点を意識した発言をすることが求められる。その上で，司会者は，論点がずれないように，また，状況に応じて本筋に戻すよう働き掛けるなどの役割を果たすことが求められる。

結論の出し方とは，話合いを経た上での意見のまとめ方のことである。例えば，全員による合意を必要とする，多数決で決める，部分的な賛成や留保などを認めるなど，様々な結論の出し方が考えられる。話合いをまとめたり結論を出したりする際には，枠組みや問題の設定などの部分的な合意の有無や論点ごとの共通点や相違点を明らかにするとともに，それぞれの意見の共通点を見いだし，整理することが必要である。

実社会では，異なる立場や考えを前提にして話し合い，最終的な意見をまとめるものの，その結論は必ずしも全員が納得できるものになるとは限らない。場合によっては，一つの結論に収斂されず，部分的な留保を残す結論になることもある。あるいは，次回までにさらなる調査を必要とする結論や，目的に応じて参加者や論題の変更を要する結論になることも想定される。いずれの場合でも，この話合いで得た結論を次の話合いに役立てるよう，建設的な話合いの見通しをもつことが重要である。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。」，(2)の「ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇言語活動例

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　提案や主張など自分の考えを話したり，それらを聞いて質問したり評価などを述べたりする活動。 イ　互いの考えを生かしながら議論や討論をする活動。	ア　自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動。 イ　報告や連絡，案内などのために，資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞いて，質問したり批評したりする活動。 ウ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。 エ　集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動。	

ア　自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動。

話し手が自分の考えを話したり，聴衆が同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動を示している。

自分の考えについてスピーチをする際には，目的や場に応じて，話題に対する話し手の意見や考え方を相手に分かりやすく伝えることが重要となる。相手から**同意**を得るためには，聞き手に話し手の考えを的確に理解してもらい，共感を得ることが前提となる。そのためには明確な根拠に加えて前提となる論拠や条件を示すことが必要である。**同意したり，質問したり**するとは，単に話の内容を理解するだけでなく，聞き手が主体的に相手に関わることを意味する。例えば，相槌を打ったり，明示的に語られなかったことを尋ねたりすることが必要である。

論拠を示して反論するとは，述べられた意見を支えている根拠や理由付け，前提が正しくないこと，あるいは論理の展開に飛躍があることなどを論証することである。

イ　報告や連絡，案内などのために，資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞

いて，質問したり批評したりする活動。

資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞いて，質問したり批評したりする活動を示している。

資料に基づいて必要な事柄を話すとは，資料を用いて具体例や根拠などを示しながら，目的に応じた内容を話すことである。**資料**は，文字だけでなく，図表，映像や音声など，幅広い媒体に基づいて用いる必要がある。その際，場や状況，聞き手の関心や理解の状況などを十分吟味して，話し方を工夫することが重要である。例えば，その資料が，配付資料なのか提示資料なのか，資料の情報が，伝える中心的な内容なのか伝える内容を補完するものなのかなどによっても，話し方は変わってくる。

批評とは，対象とする事柄について，そのものの特性や価値などを，根拠をもって論じたり評価したりすることである。ここでは，例えば，聞き手が聞き取った内容や表現について話の相互関係や妥当性について根拠を示しながら論じたり評価したりすることである。

ウ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。

目的に応じて話合いの仕方の種類を選び，他の記録を参考にしながら議論や討論を行う活動を示している。

多様な考えを引き出す話合いの代表的な例として，ブレーンストーミングが挙げられる。また，ワールド・カフェなどのように，構成員を交替し，情報を視覚化しながら意見の交流を図るなど，相互理解が円滑に進むような工夫も考えられる。互いの意見は尊重し出された意見を批判しない，多くの意見を創出することが目標であるなどの基本的なルールをあらかじめ理解する必要がある。

他の議論や討論の記録などとしては，実社会で行われる議論や討論を記録した音声や映像，会議録など文字による記録などが考えられる。これらを参考にして話合いや進行の仕方について批評し，自分たちの議論や討論に生かすことを示している。

エ　集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動。

情報を編集し資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動を示している。

集めた情報を資料にまとめるとは，伝えたいことを整理し，文章や図表などを用いて資料を作成することである。伝える目的や場，対象に応じて形式や媒体を選択することが必要である。例えば，言葉と図表の割合を考えながら，フリップ，ポスター，スライドなどを作成したり，引用したり加工したりしてまとめることなどが考えられる。

聴衆とは多数の聞き手のことである。相手が聴衆の場合，話し方は非公式な場での気軽な話し方とは異なり，公的な性格を強めた改まった場となるため，話し手との関係や聴衆の興味・関心などを考慮して発表する必要がある。

B　書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。
ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。
エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。
(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。
イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。
ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。

○題材の設定，情報の収集，内容の検討

中学校第3学年	現代の国語	言語文化
ア　目的や意図に応じて，社会生活の中から題材を決め，集めた材料の客観性や信頼性を確認し，伝えたいことを明確にすること。	ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。

ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。

中学校第3学年のアを受けて，目的や意図に応じて，適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすることを示している。決める題材については，中学校の「社会生活」を受けて，「現代の国語」では，**実社会の中から**としている。

目的や意図に応じてとは，何のために，誰に対して，どのような意図をもって書くのかなどを具体的に考え，題材や伝えたいことなどがそれらに合っているかを判断することである。

実社会の中から適切な題材を決める際には，目的や意図との関連に留意し，それが社会的に有益なものであるか，報告，提言，広報など，どのような形で還元するかなどについ

ても考慮することが求められる。また，国語科の既習内容だけでなく，実体験や他教科等での学習経験と関連付けて，適切に選択する必要がある。例えば，「地域を流れる河川が，人々の暮らしに与えている影響の報告」，「地域の伝統や文化を継承し，持続発展可能な社会を作るための提言」，「安心安全に暮らせるまちづくりのためのシンポジウムの広報」など，年齢や性別などを超えて，一定の幅をもった人々の間で共有可能なものが考えられる。その上で，題材に対する個人的な体験や知識だけを情報とするのではなく，フィールドワークを実施したり，複数の媒体を活用したりするなどして，情報を幅広く収集することが必要である。

集めた情報の妥当性とは，その情報が正しいものであるということに加えて，その情報を根拠として挙げる場合などに，根拠としての適切さを備えていることであり，その情報が置かれる場の中で相対的にかつ不断に判断されるものである。

情報の信頼性とは，その情報の発信源などから，その情報が確かなものであると判断できることである。その際，出典の示し方から確認するだけでなく，誰が，いつ，どこで発信したものかを確認した上で判断する必要がある。

また，**吟味**するとは，集めた情報の正誤や適否について詳しく検討することであり，書く内容を明確にすることである。中学校の「整理する」ことを受け，文章を書くに当たって，自分が集めた情報が適切であるかどうかを判断していくことを示している。

情報を吟味する際には，分類，比較，関係付けを行い，それぞれの共通点を見いだして組み合わせたり，幾つかをまとめて抽象化したりすることで，題材に対する個々の情報の重要度や位置付けなどを明確にすることができる。その際，検討の過程を明確にできるよう，ICT などの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，XY チャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。

なお，特にインターネットの情報を材料とする際には，著作権や個人情報に配慮するなど，情報の取扱いに十分に注意する必要がある。

〇構成の検討，考えの形成，記述

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　文章の種類を選択し，多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて，文章の構成を工夫すること。	イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。
ウ　表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章	ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種	

になるように工夫すること。	類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。	

イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。

中学校第３学年のイ及びウを受けて，読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫することを示している。

読み手の理解を得るとは，自分の主張を筋道立てて主張し，読み手にその内容を正しく捉えてもらうことである。**論理の展開**を考えるとは，結論や主張を導くための筋道の通った考えの進め方について考えることである。また，**情報の分量や重要度などを考え**るとは，文章の構成や展開を工夫する際に，読み手の関心や知識などを想定した上で，読み手との共通点や相違点が明確になったり，伝えたい情報を的確に伝えたりできるように，情報の分量の多寡や重要度の高さ，情報の種類などを考えるということである。

文章の構成や展開については，〔知識及び技能〕の(1)のオのうち，「文章の効果的な組立て方や接続の仕方」との関連を図った上で，想定する読み手や伝えたい情報などに照らし合わせ，頭括型，尾括型，双括型などの文章の組立て方や，推論の仕方を使い分ける必要がある。

ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。

中学校第３学年のイ及びウを受けて，自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫することを示している。

自分の考えや事柄が的確に伝わるとは，書き手が伝えたい考えや事柄が，間違いなくかつ過不足なく読み手に受け止められることである。

根拠の示し方には，文章で示すか図表やグラフを用いて示すかといった，示す方法に関することと，自分の実体験（１次情報）に基づくか，聞き書きなど他者の体験の引用（２次情報）によるか，新聞等で得られた情報（３次情報）を利用するかといった情報の種類に関わることの両方が含まれている。想定する読み手や伝えたい情報の種類などを検討した上で，最もふさわしい方法を選択する必要がある。

また，**説明の仕方**には，例えば，出来事や事実などを説明する場合には，全体を俯瞰（ふかん）した後に細部を説明する仕方や，部分の説明を積み重ねて全容を説明する仕方などが，意見や考えを説明する場合には，箇条書きなどキーワード等を示して手順を説明する仕方や，主張と論拠のみを簡潔に示して説明する仕方，主張と論拠に併せて多くの具体例を示し詳細に説明する仕方などがある。

これらを，自分の考えや伝えたい事柄に合わせて組み合わせ，読み手に間違いなくかつ過不足なく伝わるように記述していくことが求められている。

ここでの**文章の種類**とは，論理的な文章（説明，論説，評論など），実用的な文章（記録，報告，報道，手紙など）のことであり，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章の種類をいう。これを踏まえた，書くことの指導における言語表現の種類としては，説明，記録，報告，意見，主張のための文章，通信や伝達を目的とした文章などがある。

文体，語句などの表現の仕方を工夫するとは，書く目的を実現するのにふさわしい，文体，語句，修辞，言葉遣いなど表現の仕方に様々な工夫を凝らすことである。例えば，語句の選択に当たっては，相手に応じて，より平易な語句を用いることが求められる場合や，和語を用いるか漢語を用いるかなど，文章の種類や文体にふさわしい語句を用いることが求められる場合などがある。

〇推敲，共有

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
エ　目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて，文章全体を整えること。 オ　論理の展開などについて，読み手からの助言などを踏まえ，自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。	エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）

エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

中学校第３学年のエ及びオを受けて，目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることを示している。

目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめるとは，書いた文章を俯瞰（ふかん）して読み直し，読み手の立場に立って，目的や意図に応じて書かれているかなどについて点検することである。例えば，地域の名所を説明する文章を書く場合，何のために説明するのか，想定する読み手は誰か，特に説明したい名所はどこかなど，書き手としての目的や意図に照らして表現されているかを確認することである。**文章全体を整え**るとは，一定の観点を意識して，文章の一部ではなく全体を点検し，必要に応じて修正することである。

読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直すとは，書いた文

章を他者に読んでもらった後で助言や感想などを得て，自分の文章の特に優れた点や改善すべき課題を客観的な視点から改めて認識することである。指導に当たっては，教師が読み手として助言などをするだけでなく，生徒同士による学習活動としての相互評価を行ったり，地域の人々など実社会の他者から助言などを得たりすることが望ましい。相互評価を行う際には，単に印象を述べ合うだけでなく，意図が十分に伝わっているか，表現が効果的に使われているか，使われている情報や主張そのものに妥当性があるかなど，一定の観点に基づいて根拠を示し合うことが必要である。また，実社会の中で出会うであろう，不特定多数の読み手を想定し，書き手との関係性を踏まえた上で，助言などを行うことも大切である。

〇言語活動例

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　関心のある事柄について批評するなど，自分の考えを書く活動。	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。
イ　情報を編集して文章にまとめるなど，伝えたいことを整理して書く活動。	イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。 ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。	

ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。

論理的な文章や実用的な文章の本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動を示している。

ここでの**論理的な文章**とは，現代の社会生活に必要とされる，説明文，論説文や解説文，評論文，意見文や批評文などのことである。一方，**実用的な文章**とは，一般的には，実社会において，具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章のことであり，新聞や広報誌など報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書などの実務的な文章，法令文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。また，インターネット上の様々な文章や電

子メールの多くも，実務的な文章の一種と考えることができる。論理的な文章も実用的な文章も，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章である。

書く目的や意図に応じてこれらの文章を読み，必要な情報を収集して，その**本文**や関連する他の**資料**を適切に引用しながら，**自分の意見や考えを論述する活動**である。

なお，本文や資料を引用するのは，自分の意見や考えを論述する目的に照らして必要であるためであり，「C読むこと」ではなく，あくまでも「B書くこと」の言語活動であることに留意する。引用には，その情報を根拠として示すことによって自分の意見や考えを補強して説得力を高めたり，論点を提示したりする役割などがある。引用した部分と自分の意見や考えとを明確に書き分けること，資料には必ず出典を明記することなど，論述する際の基本的なルールについて留意する必要がある。

イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。

読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動を示している。

手順書とは，一般に，業務や作業を適切に行うための方法や基準を解説した文書のことであり，取扱説明書（マニュアル）もその一つである。**紹介文**とは，読み手が知らないことや知りたいと想定されることを伝える文章のことである。人や物の紹介には，推薦書，本の紹介，部活動の紹介，製品のカタログ，広告，宣伝などがあり，その範囲は幅広い。言語活動としては，例えば，図書の貸し出しの手順を示す掲示物やマニュアル，さらには図書館そのものの利用規程を書いたり，地域の魅力について簡潔に紹介したりする活動が考えられる。いずれも，**読み手が必要とする情報**を的確に捉えたり想定したりすることが重要である。

案内文とは，情報を知らせることにより参加や協力などを呼び掛ける文書のことであり，式典やイベントなどの行事の案内文などはその一例である。また，**通知文**とは，自分の意思やある事実などを特定の読み手に伝える文書のことである。会議の決定事項等の公的な通知から近況報告的な私信まで様々な種類がある。いずれも，一定の書式が成立しており，その形式を踏まえることが必要である。

ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。

調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動を示している。

報告書とは，社会的な事象の中から客観的な事実を抽出し，第三者に周知することを目的とした文書であり，その原因や対策などに触れることもある。例えば，地域周辺の危険箇所を調査し，明らかになった事実を周知するために報告書としてまとめるなどの活動が考えられる。その場合，それらを紹介する際，要点を的確に伝えるために再整理したものが**説明資料**といえる。

報告書や説明資料は，結果的に，実社会と密接に関わるものとなることが望ましい。そのためには，調べたことを単純に羅列するだけでは不十分であり，思考の過程を経て導き

出された考察が含まれている必要がある。

C　読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
　ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。
　イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。
(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。
　ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。
　イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。

○構造と内容の把握

中学校第3学年	現代の国語	言語文化
ア　文章の種類を踏まえて，論理や物語の展開の仕方などを捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。

中学校第3学年のアを受けて，文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握することを示している。

文章の種類とは，ここでは現代の社会生活に必要とされる論理的な文章や実用的な文章を指す。論理的な文章とは，現代の社会生活に必要とされる，説明文，論説文や解説文，評論文，意見文や批評文などのことである。一方，実用的な文章とは，一般的には，具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章のことであり，新聞や広報誌など報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書などの実務的な文章，法令文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。また，インターネット上の様々な文章や電子メールの多くも，実務的な文章の一種と考えることができる。論理的な文章も実用的な文章も，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章である。

文章の種類を踏まえるとは，これらの文章は，書かれる目的や表現方法，書式などが異なるため，それぞれの文章の特徴を捉えた上で読むことの対象とするということである。

内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉えるとは，その文章が書き手の主張を支えるために，材料としてどのようなものを選び，それをどのように組み立て，どのような筋道で考えなどを述べているのかを，文章の叙述を基に的確に捉えることである。

要旨とは，文章の内容の中心的な事柄や書き手の考えの中心となる事柄のことである。また，**要点**とは，一続きの文章のみではなく，主として箇条書きや図表などを含む実用的な文章の場合に，内容の中心となる事柄を指す。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇精査・解釈，考えの形成，共有

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　文章を批判的に読みながら，文章に表れているものの見方や考え方について考えること。	イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。
ウ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について評価すること。		ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。
エ　文章を読んで考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつこと。		エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。
		オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や

書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。

中学校第３学年のイ，ウ及びエを受けて，目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めることを示している。

現代の社会生活で必要な論理的な文章や実用的な文章は，具体的な目的や働きといった明確な役割を担っている。この点は，「言語文化」で扱うような，社会的に高い評価を受け，文化的な価値を蓄積してきた評論や小説等とは異なっている。具体的な社会生活の場面の中でこれらの文章を読む際には，何らかの**目的に応じて**文章の内容が解釈され，読み手の判断や行動が促されていく。これらの文章の文脈を意識した読む資質・能力の育成が，これからの時代には求められる。

文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けるとは，読む対象の多様性と複数性を踏まえた情報の関連付けを意味している。読む対象には，同じ形式で書かれた一続きの文章のほか，異なる形式で書かれた文章が組み合わされているものがある。中には，概念図や模式図，地図，表など様々な種類の図表を伴う文章もある。文章と図表などの断片的な情報がどのように相互に関連しているかを確認するなどして，より的確に内容を捉えるとともに，その結果，どのような効果が生まれているのかを考える必要がある。

書き手の意図を解釈するとは，例えば，個々の段落の働きを確かめたり，段落相互の関係を読み取ったりすることで，文章に表れている書き手の思考の流れに目を向け，書き手の考えの強調点を読み取り，なぜこの文章を書いたのか，なぜこのように書いたのかということにまで迫ることである。

現代の社会生活で読まれる論理的な文章や実用的な文章における書き手の意図を解釈する場合，書き手は単一の個人である場合もあれば，組織や機関といった集団である場合もあることに留意する必要がある。

文章の構成や論理の展開などについて評価する場合，読み手の目的に照らして，文章の組立て方や筋の流れが効果的か，また意図を分かりやすく伝えているかなどの観点から，文章の構成や論理の展開についての適否や善し悪しを判断するとともに，どのような特徴があるかについても具体的に指摘できるようにすることが必要である。こうした文章に関する**評価**は，情報を鵜呑(うの)みにせず多角的に検討する，批判的に読むための基本となる。

批判的に読むとは，文章に書かれていることをそのまま受け入れるのではなく，文章を対象化して，吟味したり検討したりしながら読むことである。また，読み手の目的や必要に応じて，文章の中の情報を取り出したり，別の文章や情報と関連付けて解釈したりして，**考えを深める**ことにつなげていくことも批判的に読むことの内実である。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(2)の「ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇言語活動例

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　論説や報道などの文章を比較するなどして読み，理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめたりする活動。	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。	ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。
イ　詩歌や小説などを読み，批評したり，考えたことなどを伝え合ったりする活動。	イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。
ウ　実用的な文章を読み，実生活への生かし方を考える活動。		ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。 エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。 オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。

論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動を示している。

ここでの**論理的な文章**とは，現代の社会生活に必要とされる，説明文，論説文や解説文，評論文，意見文や批評文などのことである。一方，**実用的な文章**とは，一般的には，

実社会において，具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章のことであり，報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書などの実務的な文章，法令文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。また，インターネット上の様々な文章や電子メールの多くも，実務的な文章の一種と考えることができる。論理的な文章も実用的な文章も，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章である。

これらの文章を読んで，その内容や形式について論述したり批評したりする活動を行う際に，必要に応じて，**引用や要約など**をすることで，文章の構造と内容を的確に把握したり，解釈を深めたりすることができる。**論述**や**批評**をすることによって，把握した構造や内容のどこを重視しているか，表現の仕方の特長や課題など形式についての考えを明らかにすることができる。例えば，安全とは何かを論じた複数の論説文を読み比べて書き手の考えや論じ方の違いを明らかにし，どちらが適切かについて本文を引用しながら論述する活動などが考えられる。

イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。

異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動を示している。

例えば，条例文とその趣旨を分かりやすく解説した文章など，**異なる形式で書かれた複数の文章**を比較しながら読んだり，**図表等を伴う文章**を相互に関連付けながら読んだりして，解釈したことを聴衆に向けて**まとめて発表したり**，分かりやすく新聞などに**書き換えたりする活動**が考えられる。比較したり，関連付けたりする際には，相違点や対立点だけでなく，共通点や類似点などにも目を向けさせることで，推論のための基盤が整う。

例えば，自治体の条例をめぐる複数の意見文（複数の新聞の社説及び記事と，信頼できるインターネット上のコメント）等を読んで，議論の対立点を捉えるとともに，それぞれの論拠の妥当性を検討して，条例のどこをどのように修正すべきかを考えるといった活動が考えられる。

4　内容の取扱い

(1) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A話すこと・聞くこと」に関する指導については，20 ～ 30 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「A話すこと・聞くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に話したり，聞いたり，話し合ったりしている時間だけではなく，話題について検討したり，資料をまとめたりする時間なども含めている。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導には，**20～30単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「A話すこと・聞くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「B書くこと」及び「C読むこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，20～30単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「A話すこと・聞くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「A話すこと・聞くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「B書くこと」及び「C読むこと」の指導との関連を図ることも重要である。

> イ　「B書くこと」に関する指導については，30～40単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「B書くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「B書くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章や資料を読んだり，情報を整理したりする時間も含めている。

「B書くこと」に関する指導には，**30～40単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「B書くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「A話すこと・聞くこと」及び「C読むこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，30～40単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「B書くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「B書くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「B書くこと」に関する指導を，科目全体

の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「A話すこと・聞くこと」及び「C読むこと」の指導との関連を図ることも重要である。

ウ　「C読むこと」に関する指導については，10 ～ 20 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「C読むこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「C読むこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の⑴に示した指導事項について，⑵に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を読んでいる時間だけではなく，読んで形成された考えについて話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。

「C読むこと」に関する指導には，**10 ～ 20 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「C読むこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，10 ～ 20 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「C読むこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「C読むこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「C読むこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」の指導との関連を図ることも重要である。

⑵　内容の〔知識及び技能〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア　⑴のウの指導については，「言語文化」の内容の〔知識及び技能〕の⑴のイの指導との関連を図り，計画的に指導すること。

常用漢字の指導については，中学校における指導との系統性に注意し，共通必履修科目においては，常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに，主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることを求めている。したがって，「現代の国語」の内容の〔知識及び技能〕の⑴のウについて，「言語文化」の内容の〔知識及び技能〕の⑴のイの事項と同じとし，指導の関連を図り，計画的に指導することを示している。

他教科等の学習に必要となる漢字については，指導する時期や内容を意図的，計画的に位置付けるなど，当該教科等と関連付けた指導を行い，その確実な定着を図るとともに，漢字の成り立ちや特質に触れたり，具体的な用例で示したりするなど，生徒の学習意欲が高まるようにすることが必要である。

(3) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「A話すこと・聞くこと」に関する指導については，必要に応じて，口語のきまり，敬語の用法などを扱うこと。

口語のきまり，敬語の用法などについては，小学校及び中学校を通して一貫して指導している。「現代の国語」では，それを更に深めさせ，実際の言語活動において用いることができるようにする。なお，敬語については，中学校学習指導要領解説国語編に示しているように，基本となる尊敬語，謙譲語，丁寧語について理解することが求められる。なお，文化審議会答申「敬語の指針」（平成19年）に示されている尊敬語，謙譲語Ⅰ，謙譲語Ⅱ（丁重語），丁寧語，美化語の5種類については，生徒の発達や学習の状況に応じて取り上げることも考えられる。相手や場面に応じて適切に使い分けることができるようにすることが重要である。

また，敬語ではないが，相手に配慮した様々な表現について，適切に使い分けることができるようにすることも大切である。

イ 「B書くこと」に関する指導については，中学校国語科の書写との関連を図り，効果的に文字を書く機会を設けること。

身の回りの多様な表現に関心をもちながら，字形を正しく整える能力，配列などを整える能力，速く書く能力，楷書や行書を使い分ける能力など，中学校までに身に付けてきた書写の能力を総合的に発揮させ，実社会・実生活の中で文字を書くことを工夫し，様々に書き分けることができるよう，効果的に文字を書く機会を積極的に設けることが大切である。

情報化社会が進展している状況にあっても，実社会や実生活の中で文字を書く機会は多い。また，電子文書を作成する場合にも，字形や字体の選択，レイアウトなど，書写で身に付けた能力を活用することが求められる。こうした際にも，文字を効果的に書く意味や役割を併せて考えさせたい。

(4) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の教材は，現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章とすること。

論理的な文章とは，説明文，論説文や解説文，評論文，意見文や批評文などのことである。**現代の社会生活に必要とされる論理的な文章**とは，これらのうち，「言語文化」で扱うような，これまで読み継がれてきた文化的な価値の高い文章ではなく，主として，現代の社会生活に関するテーマを取り上げていたり，現代の社会生活に必要な論理の展開が工夫されていたりするものなどを指している。

一方，**実用的な文章**とは，一般的には，実社会において，具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章のことであり，新聞や広報誌など報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書などの実務的な文章，法令文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。また，インターネット上の様々な文章や電子メールの多くも，実務的な文章の一種と考えることができる。

現代の社会生活における実用的な文章には，図表や写真などを伴う文章が多いことから，指導のねらいに応じて，これらを教材として適宜取り上げることが必要である。図表や写真などを含むものとは，異なる形式で書かれた文章が組み合わされているものや，概念図や様式図，地図，表，グラフなどの様々な種類の図表や写真を伴う文章などが挙げられる。これらの関係は，断片的な情報が互いに内容を補完し合っている場合，文章が図表などの解説になっている場合などがある。なお，取り上げる場合には，表やグラフの読み取りが学習の中心となるなど，他教科等において行うべき指導とならないよう留意する必要がある。

論理的な文章も実用的な文章も，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章である。

読むことの教材については，単に文章や作品といった意味にとどめて読み取りに重点を置きすぎることなく，生徒自らが見通しをもって主体的に学習に取り組むことができるよう，具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

イ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」，「B書くこと」及び「C読むこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう**，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示している。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通し

て，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元などにおける具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を的確に理解する資質・能力を育成する「C読むこと」の領域の指導に当たっては，単に読ませるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすることも難しくなるため，読むとともに，把握したり解釈したり考えたりしたことを表現する必要がある。この場合，読む資質・能力を育成するために話し合う活動を取り入れることもある。ただし，話合いの活動だからといって必ず「A話すこと・聞くこと」の領域の指導であるとは限らず，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

ウ　教材は，次のような観点に配慮して取り上げること。

(ｱ) 言語文化に対する関心や理解を深め，国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。

(ｲ) 日常の言葉遣いなど言語生活に関心をもち，伝え合う力を高めるのに役立つこと。

(ｳ) 思考力や想像力を伸ばし，心情を豊かにし，言語感覚を磨くのに役立つこと。

(ｴ) 情報を活用して，公正かつ適切に判断する能力や創造的精神を養うのに役立つこと。

(ｵ) 科学的，論理的に物事を捉え考察し，視野を広げるのに役立つこと。

(ｶ) 生活や人生について考えを深め，人間性を豊かにし，たくましく生きる意志を培うのに役立つこと。

(ｷ) 人間，社会，自然などに広く目を向け，考えを深めるのに役立つこと。

(ｸ) 広い視野から国際理解を深め，日本人としての自覚をもち，国際協調の精神を高めるのに役立つこと。

ここでは，教材の選定に当たって，「現代の国語」の目標や内容の面から，話題や題材を偏りなく選ぶことができるよう，配慮すべき具体的な観点を8項目示している。

(ｱ)，(ｲ)及び(ｳ)は，教科の目標及び「現代の国語」の目標を受けて設定したものである。教材は，学習指導の目標や内容に沿って選定しなければならない。その際，特に，言語の教育としての立場を重視し伝え合う力を高めることに留意するとともに，読書により我が国の言語文化に触れるという点にも留意する必要がある。

(ｴ)及び(ｵ)は，情報化，科学技術の進展などの社会の変化に対応できる能力の育成に役立つ観点を示している。適切な教材を用いた学習活動を通して，情報を活用する能力を養い，公正に判断できる能力や創造的な思考力を育成することは，主体的に生きる力を培う上でも必要なことである。さらに，論理的な思考力や科学的なものの見方を養い，視野を広げて考えを豊かにするような教材を選ぶことは，考えを論理的に述べる能力を育成するためにも効果的である。

(ｶ)及び(ｷ)は，激しく変化していく社会の中で，自我の形成を図り，調和のとれた人間性，社会性を養うのに役立つ観点を示している。

(ｸ)は，国際化への対応を考慮した観点を示している。日本人としての自覚をもちながら世界の中の日本の立場や役割を考え，国際理解を深め国際協調の精神を養うことは，世界的視野に立って国際社会に貢献しようとする態度の育成につながる。

以上8項目の観点に配慮し，言語活動が十分行われるよう適切に教材を選定して，「現代の国語」の目標の実現や内容の習得がなされるよう学習指導を展開していくことになる。その際，総則の第1款の2の(2)に示す道徳教育の目標を意識し，道徳教育との関連も考慮して教材を選定する必要がある。

配慮して取り上げるとは，それぞれの教材が，(ｱ)から(ｸ)までのいずれに該当するものかを確認して，教材全体として(ｱ)から(ｸ)までの全てにわたるようにするということを示している。なお，教材の選定に当たっては，8項目の観点をそれぞれ個別の観点として捉えるだけでなく，幾つかの観点を組み合わせることもできる。

第２節　言語文化

１　性格

急速なグローバル化が進展するこれからの社会においては，異なる国や文化に属する人々との関わりが日常的になってくる。このような社会にあっては，国際社会に対する理解を深めるとともに，自らのアイデンティティーを見極め，我が国の一員としての責任と自覚を深めることが重要であり，先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し，豊かな感性や情緒を養い，我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成が必要である。

「言語文化」は，このことを踏まえ，上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き，全ての生徒に履修させる共通必履修科目として新設した。小学校及び中学校国語科と密接に関連し，その内容を発展させ，総合的な言語能力を育成する科目として，選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤，とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養（かんよう）し，社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

そのため，様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の２事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ａ書くこと」，「Ｂ読むこと」の２領域から内容を構成している。我が国の言語文化に対する理解を深めるための国語の資質・能力の育成を目指すため，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」を充実させるとともに，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ｂ読むこと」の指導事項を充実させ，言語文化に関する表現力の育成を目指すため，「Ａ書くこと」の指導事項を充実させている。

２　目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社

会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様，「言語文化」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。中学校第３学年において「社会生活に必要な国語の知識や技能」としていたものを受け，「言語文化」では，**生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能**としている。

生涯にわたる社会生活とは，高校生が日常関わる社会に限らず，現実の社会そのものである実社会を中心としながらも，生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している。こうした広く社会生活全般を視野に入れ，社会人として活躍していく高校生が，生涯にわたる社会生活において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

また，「言語文化」では，科目の性格を踏まえ，中学校第３学年において「我が国の言語文化に親しんだり理解したりする」としていたのを受け，**我が国の言語文化に対する理解を深める**としている。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。**論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力**については，中学校第３学年において「養い」としていたものを受け，**伸ばし**としている。また，**伝え合う力**の育成については，中学校第３学年で「社会生活における人との関わりの中で」としていたものを受け，**他者との関わりの中で**と発展させている。**他者**とは，広く社会生活で関わりをもち，世代や立場，文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには，こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達，相互理解を進めていく必要があり，状況や場面に応じた他者との関わりの中で，必要な事柄を正確に伝え，相手の意向を的確に捉えて解釈したり，効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

なお，この目標については，共通必履修科目としての性格を踏まえ，「現代の国語」と同じとしている。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，中学校第３学年において「認識する」としていたものを受け，「言語文化」では，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，中学校第３学年において「読書を通して自己を向上

させ」としていたものを受け，「言語文化」では，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ**るとしている。生涯にわたる読書習慣の基礎を築き，社会人として，考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては，中学校第３学年において「我が国の言語文化に関わり」としていたものを，「言語文化」では，教科の目標と同じく，**我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち**とし，より高めている。**我が国の言語文化**とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「言語文化」では，これらのうち，文化としての言語，文化的な言語生活，多様な言語芸術等に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては，小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり，全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は，国語科だけではなく他教科等も含めて，社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては，こうした態度を，**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は，以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力，人間性等」は，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

なお，この目標については，共通必履修科目としての性格を踏まえ，「現代の国語」と同じとしている。

3 内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。
イ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。
ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。
オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

○言葉の働き

中学校第2学年	現代の国語	言語文化
ア　言葉には，相手の行動を促す働きがあることに気付くこと。	ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。

ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。

小学校第1学年及び第2学年のアの「事物の内容を表す働き」，第3学年及び第4学年のアの「考えたことや思ったことを表す働き」，第5学年及び第6学年のアの「相手とのつながりをつくる働き」，中学校第2学年のアの「相手の行動を促す働き」を受けて，「言葉の働き」のうち，文化の継承，発展，創造を支える働きについて理解することを示している。

文化の継承とは，先人の築いてきた文化を自らに深く関わるものとして受け止め，その価値を後世に伝えるよう行動することである。文化の**発展**とは，先人の築いてきた文化を基盤として更にその価値を高めることである。文化の**創造**とは，これまでの文化とは異なる新たな文化を生み出すことである。これまで，文化の継承，発展，創造には，先人たちの言葉が介在し，前の世代から次の世代へと受け継がれたり新しい価値が生み出されたりしてきた。また，時間的・空間的に日々生み出されている**言葉**はそれ自体が文化でもあり，優れた言葉は文化遺産として継承されてきている。

このような言葉の働きを理解することを通して，言葉の価値を認識し，自らが用いたり触れたりする言葉の世界に対する気付きや関わりを実感するようにすることが重要である。

〇漢字

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　第２学年までに学習した常用漢字に加え，その他の常用漢字の大体を読むこと。また，学年別漢字配当表に示されている漢字について，文や文章の中で使い慣れること。	ウ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。	イ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。

イ　常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。

漢字を読むことについては，中学校第３学年のアを受けて，**常用漢字の読みに慣れ**ることを示している。中学校までで常用漢字の全ての音訓を学習するわけではない。そのため，新しく出てくる漢字の音訓を学習させることは言うまでもないが，中学校で学習済みの漢字の音訓についても注意を向けさせ，その習熟を図る必要がある。

漢字を書くことについては，中学校第３学年のアを受けて，**主な常用漢字を書**けるようになることを示している。

高等学校の共通必履修科目においては，中学校までの漢字の学習の上に立ち，常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに，主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることを求めている。文脈に応じて書く際には，どの語を漢字で書きどの語を仮名で書くと読みやすくなるかを考えさせることも重要である。

また，国語科をはじめ各教科・科目等における学習用語の多くは漢字で表記されていることを具体的な用例で示したりするなど，生徒の学習意欲が高まるよう工夫する必要がある。

なお，漢字の指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域における学習と関連付けながら，**文や文章の中で使う**資質・能力の育成が求められる。したがって，基礎的な漢字の習得ができていないなど生徒の実態にもよるが，漢字の学習のみをまとめて取り出して練習したり，短時間のテストなどを継続的に実施したりして指導することは望ましくない。

また，内容の取扱いの(2)のアに示しているとおり，「現代の国語」の内容の〔知識及び技能〕の(1)のウの指導との関連を図り，計画的に指導することが求められる。漢字の学習について，例えば「現代の国語」と同一の指導が無計画に行われるなど，二つの科目における漢字の学習の関連が図られることなく漢字に関する知識・技能が偏ったものとなることのないよう十分留意する必要がある。

〇語彙

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し，慣用句や四字熟語などについて理解を深め，話や文章の中で使うとともに，和語，漢語，外来語などを使い分けることを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

中学校第３学年のイを受け，我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることを示している。

言語文化とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指す。したがって，**我が国の言語文化に特徴的な語句**とは，外国の言語文化ではなく，我が国の言語文化の中で磨かれてきた，独特の文化的背景を有する語句のことである。**それらの文化的背景について理解を深める**とは，そのような語句の意味や用法を単に理解するだけではなく，それらの語句が背景としてもつ文化的な事柄や価値に対する理解を深めることを指す。

語彙とは，ある言語体系の中で用いられる語のまとまりのことである。例えば，「時間に関わる語彙」といえば，「時代」，「期間」，「季節」，「日」，「朝」，「昼」，「夕方」，「夜」などに関する語の全てを意味する。「夕方」を例に取れば，「夕」，「夕べ」，「夕暮れ」，「日暮れ」，「たそがれ」などの語を理解するとともに，これらの語は，日常語の「夕方」では表せない，独特の情緒を含んだり，特定の比喩的な用法をもったりすることを理解する必要がある。例えば，「夕暮れ」から「寂寥（りょう）感」を感じ取り，「たそがれ」には盛りが過ぎた状態の比喩としての用法があるが，それらは，我が国の様々な言語表現の中で培われてきた文化的背景を有している。

また，そうした文化的背景をもつ語句の中には，英語など他の言語には見られない，国語に特徴的な語句も指摘できる。例えば，「時雨」，「五月雨」，「むらさめ」，「驟雨（しゅう）」など，雨を細かく言い分ける語や，「わび」，「さび」，「あはれ」，「不易流行」など，我が国特有の美意識を表す語などである。

古典のほか，近現代の小説や詩歌，芸能などに触れる中で，これらの語句を理解するとともに，自らも使うことで語感を磨き，語彙を豊かにすることが必要である。

〇文や文章

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ウ　話や文章の種類とその特徴について理解を深めること。	オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。

エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。

文脈とは，文が連接して構成される文章の流れの中で，文を超えて存在する意味的なつながりを指す。**文章の意味**は，個々の文の意味を単に合わせただけのものではなく，**文脈の中で形成される**ことを理解することを示している。

例えば，「桜の花は薄紅色である。」という文は，「穏やかな足取りで川辺をゆっくりと歩いた。桜の花は薄紅色である。川面を渡ってくる風は爽やかそのものだった。」という文章の中に置かれていれば，歩いた人が薄紅色の桜の花を好ましいものと感じていることが分かる。一方，「川辺をたどる道に一本の桜の木が植えられていた。桜の花は薄紅色である。その川の底は深くて見えない。」という文章の中に置かれていれば，その桜が薄紅色の花を咲かせる植物だという事実が強調される。このように，同じ文でも，異なる意味を表すのは，前者の文章が，歩いている人の視点から書かれており，その人の見方や感じ方が前面に出ているのに対して，後者の文章は，道や桜や川の特徴やその状況の事実の説明を重視しており，書き手の見方や感じ方は，前者の文章に比べると前面に表れにくいからである。

つまり，文脈が異なることによって文章の意味も異なり，その中に置かれる文の意味も異なってくるのである。英語など西洋の言語と比べると，日本語は主語を明示しないという特徴があると言われることがあるが，文脈の中で意味が決まっていく仕組みが，文章に奥行きや含蓄をもたせることにもつながる。

対話文や会話文などについても同じことがいえる。例えば，「明日は試験だ。」という発話は，「明日，何か予定あるの。」という相手の発話に対する回答であれば，明日試験があるという事実を意味しているが，「今夜，映画を見に行こう。」という相手の誘いに対する回答であれば，誘いを断る意味を表すことにもなる。このように，話し手と聞き手の状況や場面が，文脈を作り，その文脈が話の意味を異なるものにしているのである。これは，断りの意思表明をせず，その理由を述べることで婉曲的に伝える言い方であるが，このような表現を行うことが人と人との関係を円滑にする効果を生むことがある。例えば，狂言や落語などには，文脈による文の意味の取り違えをモチーフとした笑いの言語文化として成立しているものもある。

このように，我が国の言語文化の形成に，文脈は大変重要な役割を果たしており，文章の意味を考える際には，語や句，文の意味を考えるとともに，文脈を踏まえることが必要

である。

〇表現の技法

中学校第１学年	現代の国語	言語文化
オ　比喩，反復，倒置，体言止めなどの表現の技法を理解し使うこと。	カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

中学校第１学年のオを受けて，本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解することを示している。

我が国の言語文化に特徴的であるとは，外国の言語文化ではなく，我が国の言語文化の中で磨かれ，言語表現に独特な効果を示してきたものであることを示している。

本歌取りとは，作品をつくる際に，優れた作品の表現や趣向などを意識的に踏まえた表現であり，和歌に多く見られる技法である。本歌に詠まれている世界を連想させることで，表現や情景が重層的に捉えられ作品に奥行きが生まれるという効果が期待できる。**見立て**も同様に，事物をある特徴に着眼することで他の事物になぞらえ，異なった二つの事物を同一のものと捉える表現である。他の事物になぞらえるという間接的な表現が取られることで連想が促され，どこに焦点を当てているのかという意図が明確に伝わるという効果が期待できる。

これらは，和歌など，我が国の詩歌に多く見られるものであるが，必ずしも詩歌にとどまるものではない。例えば，本歌取りについては，評論などにおける名言の部分的な言い換え，見立てについては，物語におけるある作品がそれ以前の作品の世界に見立てられることなどをも含んでいる。

本歌取りや見立ては二つの世界を重ねて表現する技法であるが，本歌取りはもちろん，見立ても，重ねられる片方が伝統文化として成立したものであることが多い。これらの技法に加えて，掛詞や枕詞など和歌における修辞なども我が国の言語文化に特徴的な表現の技法と考えることができる。

これらの表現技法を単に個別の知識として理解するのではなく，実際に文章や作品を読む中でその効果を味わったり，その効果を期待して文章や作品を書く際に使ったりすることができるようにすることが重要である。

(2) 我が国の言語文化に関する事項

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。

エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。

オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

○伝統的な言語文化

中学校第3学年	現代の国語	言語文化
ア　歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して，その世界に親しむこと。 イ　長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。		ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。 ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。

ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

中学校第3学年のアを受けて，我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解することを示している。

我が国の言語文化の特質とは，我が国の言語文化の独自の性格やその価値のことであり，微視的には作品一つ一つに表れた個性と価値，巨視的には作品を集合的に捉えた時代

全体の特質，さらに近現代につながる我が国の言語文化全体の独自性のことである。ここでは，我が国の言語文化として重要な位置を占めている古典や近代以降の文章を読み，それぞれの時代や社会の姿，その中で言語文化を生み出した人々のものの見方，感じ方，考え方に触れることを通して，生徒が我が国の言語文化の特質を理解することを求めている。

我が国の文化と外国の文化との関係を取り上げているのは，我が国の言語文化の特質を理解するに当たって，中国など外国の文化との関係が重要だからである。我が国は中国の文化の受容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ，古文と漢文の両方を学ぶことを通して，両文化の関係に気付くことが大切である。古来，我が国は，文字，書物を媒介にして，多くのものを中国から学んだ。その結果，漢語や漢文訓読の文体が，現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。漢文を古典として学ぶことの理由はこの点にもある。

ここで，外国の文化としているのは，中国に限らず，南蛮渡来といわれた，近世以前のヨーロッパの文化の影響や，近代以降の西洋を中心とした諸外国からもたらされた思想や事物が，我が国の近現代の言語文化の形成に大きな影響を与えてきたことなどを踏まえたものである。例えば，明治初期に西洋からもたらされた新しい概念を漢語で表現したことは，近世以前に行われてきた中国の文化の受容が，近代以降の西洋の新しい概念を自然に取り込むことに役立った例と考えることができる。

現代社会ではグローバル化が急速に進展しているが，その中にあって我が国の言語文化の独自性と価値を知り，我が国の文化と外国の文化との関係について理解することが，これまで以上に重要となっていることを認識する必要がある。

イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

中学校第 3 学年のアを受けて，古典の世界に親しむために，古典の作品や文章の歴史的背景や文化的背景を理解することを示している。

ここでの**歴史的・文化的背景**とは，作品や文章について，その著された時代が我が国や外国の歴史の中でどのような時代に位置し，また，当時の生活様式や社会制度，人々の価値観，人生観，美的観念などがどのような特徴をもっていたのかなどの事柄のうち，その作品や文章の成立に影響を与えていると思われる事柄を指す。この中には，作品が成立した舞台などの地理的状況や書き手の置かれていた状況といった作品成立の背景なども含まれる。

古典の世界に親しむとは，古典の世界に対する理解を深めながら，その世界を自らとかけ離れたものと感じることなく，身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する歴史的・文化的な情報などを単なる断片的な知識として理解するのではなく，作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して，古典の世界のもつ豊穣（じょう）さや魅力に気付かせることが重要である。

ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，

古典特有の表現などについて理解すること。

中学校第１学年の〔知識及び技能〕の(3)の「ア　音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り，古文や漢文を音読し，古典特有のリズムを通して，古典の世界に親しむこと。」を受けて，古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解することを示している。

生徒は，古典を音読するのに必要な文語のきまりや訓読の仕方について，中学校で学習している。ここではそれを踏まえ，**古典の世界に親しむ**ことを目指し，**文語のきまりや訓読のきまり**，**古典特有の表現**などを，**古典を読むために必要な**ものに限定している。**古典を読む**とは，古典の原文を逐語的に現代語訳にすることではなく，〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の(1)の指導事項を身に付けることを指している。そのためには，文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などを断片的な知識として理解することのみが目的とならないよう，原文に加え，内容の取扱いの(4)のイに示しているとおり，理解しやすいように教材を工夫したり，指導の方法を工夫したりする必要がある。

文語のきまりには，文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて，仮名遣いや活用の違い，主な助詞・助動詞などの意味・用法，係り結び，敬語の大体などについて指導し，古文を読むことの学習に役立つようにする。

訓読とは，元来中国の文語文である漢文を，国語の文章として読むことである。**訓読のきまり**とは，訓読に必要となる返り点，送り仮名，句読点などに関するきまりをいう。これらのきまりについての指導は，漢文に親しむために，教材の訓読に必要な範囲内で適切に行う必要がある。なお，訓読は，おおむね文語文法に沿った読み方をするが，普通の文語文法では扱われない訓読特有の伝統的な読み方もあることに注意する必要がある。

なお，内容の取扱いの(2)のイに示しているように，文語のきまり，訓読のきまりについては，詳細なことにまで及ぶことなく，読むことの指導に即して扱うとする考え方は従前と同様である。したがって，文語のきまりなどを指導するために，例えば，文語文法のみの学習の時間を長期にわたって設けるようなことは望ましくない。漢文の訓読のきまりの指導の場合も同様である。あくまでも，古典の世界に親しむことを目指していることに留意する必要がある。

古典特有の表現とは，古典特有の言葉のリズム，音便や係り結びなど文法上の現象，掛詞や縁語などの古典に多くみられる修辞など，古典の美しさ，深さ，面白さなどを味わえる古典の表現を広く指す。また，現代語とは異なった意味で用いられるようになったり，現代語では用いられなくなったりした古典の基本的な語句，故事成語など古典に由来した語句なども含まれる。このような古典特有の表現を理解し，古典の表現の美しさ，深さ，面白さに触れることが古典の学習では大切である。その際，知識を理解させることに終始するのではなく，古典に親しむことを重視し，様々な言語活動を通して指導する必要がある。

〇言葉の由来や変化，多様性

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ウ　時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いについて理解すること。		エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。 オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。

中学校第３学年のウを受けて，時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解することを示している。

時間の経過による**文字の変化**については，まず中国から借りてきた漢字のみを用いて書くことから始まり，やがて漢字を省略したり崩したりした片仮名，平仮名を漢字とともに組み合わせて用いるようになった。このことは文字だけに限らず，語彙や文体にも大きな変化をもたらした。一方，時間の経過による**言葉の変化**については，例えば，現代語の「かわいい」という言葉は，本来は「かわいそう」という意味であり，かつて，「かわいい」の意味を表したのは「うつくし」や「めぐし」であった。このうち，「うつくし」は，当初，妻子や老母など慈しみをもって対する人への感情だったところから，人一般や自然物に対する感情や評価としても使われるようになり，やがて人の行為や作品などに対する評価にも変化した。また，「めぐし」は，後世，京都や江戸・東京などでは使われなくなるが，現在東北地方の方言として使われている「めごい」，「めんこい」は，この語が形を変えたものである。このように，地域に特徴的な言葉には，時間による変化と関係しているものがあることを理解することも必要である。

なお，**地域の文化的特徴**には，上記のような昔の都の言葉が残存するものだけでなく，地域の風土や伝統に由来する言葉の違いが見られる場合も多い。例えば，人間の感覚や感情を音象徴で表すオノマトペ（擬音語，擬態語）は，地域差が大きく，「ぼちぼちでんな」（まあまあですね，大阪），「なだそうそう」（涙が止めどなく流れる，沖縄）などがある。

以上のような変化のほか，例えば，旧字体を新字体に改めたり，現代仮名遣いを制定したりするなどして，人為的に文字や言葉を変えてきたことを理解することも必要である。

なお，文字の変化については，第３款の１の(4)に示している「中学校国語科との関連」のうち，特に中学校第３学年の〔知識及び技能〕の(3)のエの「(ｱ) 身の回りの多様な表

現を通して文字文化の豊かさに触れ，効果的に文字を書くこと。」との関連を十分に図ることが重要である。

古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解するとは，以上のような，時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化についての理解を踏まえ，古典の言葉と現代の言葉とには時間的な連続性があり，両者を時代を超えた一続きの言語文化と捉えることの重要性について述べたものである。例えば，ことわざや故事成語をはじめ，日常生活で使われている現代の言葉の多くが古典の言葉や出来事などに由来しており，その意味や内容が現代に引き継がれていることを確かめることは，古典の言葉と現代の言葉とのつながりを理解させる際には大切となる。古典の言葉をその時代や社会におけるものとのみ捉えるのではなく，現代の言葉に生きているものであることを意識することは，言葉が，継承すべき文化遺産であることを認識させるとともに，言語文化に対する興味・関心を広げ，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことにつながる。

なお，言葉を学習する際には，生涯学習の観点からも，辞書や参考資料などの利用に慣れさせ，学習の効果を高めるようにする必要がある。

オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

歴史的な文体の変化とは，我が国が置かれた歴史的な事情から生じた我が国の伝統的な言語文化に特徴的に見られる変化である。文体の変化は文字や言葉の変化と密接な関係にある。

国語の書き言葉は，古事記など日本式の漢文で書くところから始まった。一方，日本人の情感や自然への感覚を詠った万葉集は，漢字の音を借りた万葉仮名で書かれることもあった。やがて，漢文を訓読するときに行間に書き加えられた漢字を省略した片仮名，万葉仮名を崩した平仮名が成立したことで，国語を自在に書き表すことができるようになった。

和漢混交文とは，平仮名を用いて書かれた和文と漢字と片仮名を混ぜ用いた漢文訓読文とが混じり合ってできた文体であり，明治時代前期まで国語の一般的な文体として使われ続けた。また，**言文一致体**とは，近代化によって，誰にとっても読みやすく書きやすい文体が必要とされ，話し言葉に近付けた書き言葉に変えていこうという言文一致運動の結果，生まれた文体である。この言文一致体が，現代の書き言葉の一般的な文体となっている。

このように，現代の文体は，和文と漢文訓読文の並立から和漢混交文へ，そして言文一致体へという歴史的流れの中にあることを理解することが重要である。

〇読書

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
オ　自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理	ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深め	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を

解すること。	ること。	深めること。

カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

中学校第３学年のオを受けて，我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

我が国の言語文化への理解とは，上代から近現代までの連続した時間の中で言語と文化の関わりについて，多様な視点で考えたり新たな認識を深めたりすることを指している。そのためには実体験だけでなく，読書を通して新しい知識を得たり，自分の考えを広げたり深めたりすることが必要となる。

具体的には，同一のテーマについて描かれた複数の作品を読み比べ，それぞれの作品の歴史的・文化的背景の違いを考えながら，人間，社会，自然などについて考えたり，当時の人々のものの見方，感じ方，考え方を味わったりすることなどが考えられる。古典を読む場合には，原文で味わうことも大切であるが，現代語訳を読んで作品の世界を身近に感じることに重点を置く読み方も重要となる。さらに，古典を翻案した近現代の物語や小説などを読むことによって，古典の世界を身近に感じることができるだけでなく，伝統的な言語文化が享受された一つの在り方に触れることができる。

また，物語や小説だけでなく，韻文や脚本，随筆，文化を論じた近現代の評論など幅広い分野の作品を視野に入れることも大切である。図書館などで図書に触れることに加え，新聞やインターネットなどの図書の紹介欄にも積極的に目を通し，読書に対する自分の興味・関心の幅を広げながら，多くの図書を読んでいくような読み方も大切である。

〔思考力，判断力，表現力等〕

A　書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。

イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。

〇題材の設定，情報の収集，内容の検討

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　目的や意図に応じて，社会生活の中から題材を決め，集めた材料の客観性や信頼性を確認し，伝えたいことを明確にすること。	ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。

ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。

中学校第３学年のアを受けて，自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすることを示している。

自分の知識や体験の中から適切な題材を決めるとは，自分の知識や体験として蓄積された事柄のうち，特に我が国の言語文化の特質に関わりの深い題材を決めることを指している。日々の体験から四季の変化を細やかに感じ取ったり，人々の行き届いた心遣いに胸を打たれたり，読書などを通して理解した，我が国の言葉や文化の特質（「もののあはれ」や「雪月花」など）に関する知識など，心に留まった事柄に興味・関心をもち，その中から興味深い事柄を選択することが大切である。

集めた材料のよさや味わいを吟味するとは，決めた題材に基づいて自ら取材した事柄がどのようなものであるか見つめ直し，それらがどのような文化的価値を有しており，読み手に感慨や感動をもたらすものであるかなどについて評価し，検討することである。ここにいう**材料**とは，例えば，生活の中で目に留めたり気付いたりした，季節の情景や我が国特有の言葉遣い，心遣いなどを広く指す。

表現したいことを明確にするとは，どのような読み手に対してどのようなことを，どのような方法で伝えたいのかなどについて，書き手としてはっきりさせることである。そのためには，学習場面において，メモなどの覚書や図などの視覚的な素材を用いて，表現したいことがより明確になるように工夫することが必要である。

〇構成の検討，考えの形成，記述，推敲，共有

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　文章の種類を選択し，多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて，文章の構成を工夫すること。	イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。

ウ　表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。 エ　目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて，文章全体を整えること。 オ　論理の展開などについて，読み手からの助言などを踏まえ，自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。	ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。 エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	

イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。

中学校第3学年のイからオを受けて，自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫することを示している。

決めた題材に基づいて明確にした自分の体験や思いを効果的に伝えるためにどのような工夫が適切かを検討する必要がある。

効果的に伝わるようとは，読み手を想定し，誰に何のためにどのようなことを伝えようとするのかといった観点に基づいて，我が国の言語文化に根差したより適切な表現を工夫することを指している。

例えば，詩歌を創作する際には，体言止め，対句，擬人化，倒置法，押韻といった様々な技法によって，余韻や余情などを感じさせることができる。また，五感に訴える語彙を選択することによって，読み手に鮮やかな情景を想像させることができる。こうした表現の効果を意識しながら，自分の体験や思いを伝えるための言葉の選択と組立てなどを工夫することが望まれる。

文章の種類には様々あるが，ここでは，我が国の言語文化の特質に関わる文学的な文章，具体的には詩歌，小説，随筆，戯曲などを指している。文章の種類を選ぶ際には，自分の体験や思いについて，どの程度具体的に伝えると効果的か，感動などを焦点化できるか，虚構の世界を通して描いた方が効果的かなどについての検討が必要となる。

構成，展開とは，文章の組立て方と述べる順序とを指す。短歌や俳句など韻文の場合は，定められた形式に則（のっと）ってどのような組立てで感動や情趣を表すかを工夫することになる。

文体については，和文体と漢文体と翻訳文体，散文体と韻文体，常体と敬体などのように文章を類型的に捉える立場や，語句の用い方，文の長短，文章の展開の仕方などのように，書き手の個性が現れたものと捉える立場などがある。さらには，写実的と象徴的，主観的と客観的などの観点で捉える立場もある。

描写とは，物事の様子や場面，行動や心情などを，読み手が言葉を通して具体的に想像できるように描くことである。そのためには，例えば，擬人化や声喩（オノマトペを用いた比喩）などによって，対象を比喩的に表現する工夫が求められる。

○言語活動例

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　関心のある事柄について批評するなど，自分の考えを書く活動。	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。
イ　情報を編集して文章にまとめるなど，伝えたいことを整理して書く活動。	イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。 ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。	

ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。

本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする言語活動を示している。

短歌や俳句の創作については，小学校第５学年及び第６学年の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(2)の「イ　短歌や俳句をつくるなど，感じたことや想像したことを書く活動。」，中学校第２学年の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(2)の「ウ　短歌や俳句，物語を創作するなど，感じたことや想像したことを書く活動。」として例示している。これらを受けて，「言語文化」においては，〔知識及び技能〕の(1)のオなどとの関連を図りながら，**本歌取りや折句など**の表現の技法を用いて，**感じたこと**

や発見したことを短歌や俳句で表す言語活動を示している。

指導に当たっては，単に短歌や俳句をつくって紹介したりするのではなく，指導事項との関連を図り，表現したい題材やテーマ，収集した材料に自らを取り巻く文化的価値がどのように認められるか，参考とした和歌などに言語文化としてどのような特徴や価値があるかなどについて考えさせることが重要である。例えば，風景を題材とした序詞をもつ和歌を取り上げ，その序詞によりふさわしい心情を考えたり，逆にその心情にふさわしい風景を考えたりして，本歌取りの和歌をつくったり，「桜花」というテーマで短歌をつくる際に，そのテーマでつくろうと思った理由や事情を示した上で，「さくらはな」の5文字を句頭に据えた，桜に関する折句の短歌をつくるなどの活動が考えられる。

また，**随筆などを書いたりする**活動については，中学校第1学年の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(2)の「ウ　詩を創作したり随筆を書いたりするなど，感じたことや考えたことを書く活動。」として例示している。「言語文化」においては，科目の性格を踏まえて，**伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする**言語活動を例示している。地域における祭りなどの伝統行事や季節の情趣を象徴した風物詩など，文化に関する題材を設定し，自分が感じたことや考えたことなどを，自分との関わりを踏まえて書かせることが重要である。

なお，これらの活動は，名歌や名句，名随筆などの創作を追求するための優劣を競うことが目的ではない。創作するという活動を通して，書く資質・能力を高めるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることが大切である。

B　読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。

ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。

エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。

オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。

イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。

ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論

じたり批評したりする活動。

エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。

オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

〇構造と内容の把握

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　文章の種類を踏まえて，論理や物語の展開の仕方などを捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

中学校第３学年のアを受けて，文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えることを示している。

文章の種類には，文語文と口語文，韻文体と散文体，和文体の文章と漢文体の文章と翻訳文体の文章などの文体による整理や，実用的な文章，論理的な文章，文学的な文章など書き手の目的や意図，虚構性の有無などによる整理などがある。これらの文章はそれぞれ特徴をもち，文章の用途に応じて適宜用いられる。**文章の種類を踏まえ**るとは，対象となる文章が，これらのどれに属し，どのような特徴をもっているかを把握しておくことを意味する。

内容や構成，展開などとは，文章を読む際に把握すべき事柄について示している。「言語文化」では，近代以降の評論や論説などの論理的な文章については，我が国の伝統と文化に関するものを活用することを示している。書き手は，我が国の伝統と文化について，何を述べようとしているのか，何を読み手に伝えようとしているのか，そのためにどのような筋道で文章を書き進めているのかなどを念頭に置き，話題の展開を推測しながら，思い込みや誤解がないように，叙述を注意深くかつ丁寧に捉えることが求められる。それによって，読み手の中に書き手のものの見方や考え方とその筋道がはっきりと浮かび上がることが重要である。文学的な文章の場合，**内容**には，作品や文章に明示されており的確に把握できる人物や心情，情景の描写などが含まれるが，ここでは，**叙述を基に的確に捉え**られるものを対象としている。特に，心情の把握については，文章に明示されている叙述により，読み手が読み取るべきものを間違いなくかつ過不足なく捉えることが重要である。読み手は，あくまでも叙述に即して，出来事や場面の推移などを把握することが求められる。また，登場する人物が他の人物や出来事などとどのような関係を形成しているのか，それがどう変化しているのかを，人物や情景の描写などを根拠として捉えることが，

精査・解釈の前提となる。

〇精査・解釈【①】

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
イ　文章を批判的に読みながら，文章に表れているものの見方や考え方について考えること。	イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。

イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。

主として中学校第３学年のイを受けて，作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈することを示している。

作品や文章には，書き手の**ものの見方，感じ方，考え方**が様々に表れている。それらは，文学的文章の場合には，登場人物の会話や行動などを通して，語り手や登場人物の**ものの見方，感じ方，考え方**として表されることもある。

作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとは，書き手や語り手の言葉，登場人物の言動などを通して，対象が，どのような視点，観点，立場によって，どのような感性や感情をもって，どのような認識や解釈の仕方によって捉えられているかについて把握することを指している。「言語文化」では，単に書き手や語り手などの思いや考えを理解するだけではなく，そのような思いや考えがどのようなものの見方，感じ方，考え方によるものかを捉えることが大切である。ものの見方，感じ方，考え方には，人生観や歴史や文化に対する価値観などが表れている。古典をはじめとした優れた作品や文章を読むことを通して，そこに表れている書き手や語り手などの優れた認識や感性などを内容の解釈を深めることにつなげることが求められる。

内容を解釈するとは，叙述を基に捉えた，作品や文章の内容や構成，展開などを踏まえ，それらを読み手が知識や経験なども踏まえて意味付けることを指している。特に，文学的文章における登場人物の心情などについては文章中に明示されていないものもある。読み手は，明示されていない空白部分を自分の知識や経験などと関係付けながら補い，登場人物の心情を解釈したり人物像をイメージしたりしながら，自らの作品世界を構築することになる。このような場合にも，単に恣意的に空白を補うのではなく，捉えた**作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方**を踏まえつつ，自らの解釈が他者に説明できるような整合性を有するものであるかどうか十分検討することが必要である。

○精査・解釈【②】

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ウ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について評価すること。	イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。

ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。

主として中学校第３学年のウを受けて，文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価することを示している。

文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色は，いずれも，何が書かれているかという内容ではなく，内容がどのように書かれているかという形式に関わっている。これらについて捉えた上で評価することを求めている。これらを評価する際には，文章が書かれた目的に照らし，その効果が適切なものであるか，自分の知識や経験に照らし合わせて優れた工夫といえるかなどについて検討することが必要である。例えば，しみじみとした情感を伝えることを目的として書かれた文章の場合には，その情感をより効果的に読み手に伝えるために，伏線や段落の組立てなどがどのように工夫されているか，その情感を具体的に伝えるために，臨場感を醸し出すような言葉が選択されたり表現の技法が的確に用いられたりしているかなどについて注意することが大切となる。

表現の特色については，語句の使い方，言い回しなどの特徴も含め，その作品や文章における表現上の際立った特徴を捉えた上で評価することが求められる。

評価するとは，読み手が価値判断することであり，例えば，文章の構成や展開，表現の巧みさなどについて，優れている点だけでなく課題とされる点も含めて指摘することを指している。読み手は，文章を完成されたものとして受け止めるのではなく，自分にとってどのような価値をもっているかを判断し，説明できるようになることが求められる。そのためには，優れた表現はどこにあるのか，文章にはどのような個性が認められるのか，文体や語句のうち，その巧みさや奥行きなどに感心したものは何か，逆に違和感を覚えたものはないかなどの観点から作品や文章を注意深く読むことが必要である。

○精査・解釈【③】

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
	イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの

	情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。

エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。

作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めることを示している。作品や文章がどのような歴史的・文化的事実を背景にして生まれたのか，また，他の作品や文章とどのように関わり合っているのかという点について理解を踏まえ，内容の解釈を深めることを目指している。

例えば，物語文学のうち，『源氏物語』や『平家物語』が，宮中貴族の生活や武家の合戦の様子を舞台としているように，それぞれの作品や文章には成立上の特有の背景がある。**作品や文章の成立した背景を踏まえ**るとは，読む対象とした作品や文章だけでなく，その成立した背景となった情報にも目を向け，調べるなどして知識を広げ，作品や文章の内容の解釈を行うに当たって，それらの知識を関係付けることである。

また，「言語文化」で教材とする作品や文章は，他の複数の作品と関わりをもって成立していることが少なくない。例えば，近代以降の小説の中には，古典の説話や中国の伝奇小説を基にしたものもあり，小説とその典拠と比較しながら読むことによって，より内容の解釈を深めることができる。**他の作品などとの関係を踏まえ**るとは，このように，対象とした作品や文章と関係のある他の作品を読み，両者の関係を理解した上で対象とした作品や文章の内容の解釈に向かうことである。

小説と原作とを比較すると，例えば，ある出来事の経緯や物語の構成にいくつかの相違が認められる。このことを踏まえて作品に描かれた人物像を解釈することによって，一つの作品だけを読むことでは得られない新たな発見や問いが期待できる。**内容の解釈を深める**とは，このように，作品や文章の内容を様々な観点から捉え直し，新たな発見や問いを抱きながらその意味付けを更新し，内容の解釈をより精緻で深いものに統合していくことである。

〇考えの形成，共有

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
エ　文章を読んで考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつ	イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化につい

こと。	図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	て自分の考えをもつこと。

オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

主として中学校第３学年のエを受けて，作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつことを示している。

読む対象とした**作品の内容や解釈**を踏まえ，それを自分と関係付けて，**自分のものの見方，感じ方，考え方を深め**ることを目指している。このことは，作品を読み深めて，単に内容を捉えたり解釈を深めたりすることにとどまらず，自分が対象をどのような視点，観点，立場によって，どのような感性や感情をもって，どのような認識や解釈の仕方によって捉えるかという，対象に対する向かい方自体の深まりを意味している。「言語文化」において読む対象は，伝統や文化の厚みの中で形成された対象へのものの見方，感じ方，考え方を基底として編み出され，磨き抜かれた言葉によって成立している。こうした言葉が含みもつ豊かで深遠な意味や内容世界に深く関わり，対象への認識の仕方やそれを感受する姿勢が充実することを示している。

我が国の言語文化について自分の考えをもつとは，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，上代から現代にわたる様々な作品や文章に表された内容やものの見方，感じ方，考え方などを尊重すべき文化的価値として認識し，我が国の言語文化を継承していく一員として，我が国の言語文化についての自分なりの考えをもつことを指している。生徒が，上代から現代に至る多種多様な価値ある作品や文章に触れ，それらに親しむことを通して自己を見つめ，我が国の言語文化の担い手として，未来に向けて自らのあるべき姿を展望することにつながることが期待される。

○言語活動例

中学校第３学年	現代の国語	言語文化
ア　論説や報道などの文章を比較するなどして読み，理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめたりする活動。	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。	ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。
イ　詩歌や小説などを読み，批評したり，考えた	イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を	イ　作品の内容や形式について，批評したり討論し

ことなどを伝え合ったりする活動。	伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	たりする活動。
ウ　実用的な文章を読み，実生活への生かし方を考える活動。		ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。 エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。 オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。

我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする言語活動を示している。

我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などには，我が国の歴史や伝統文化に関する様々な作品や文章が含まれるが，ここでは，**我が国の言語文化について論述したり発表したりする**ために必要となる知見を得るための情報を広く指している。古典はもとより，例えば，我が国の歴史や伝統文化についての概説，一定のテーマに基づいた歴史論，文化論，文芸論，古典論などの評論，伝統や文化のよさなどに触れた随筆などを幅広く読むことによって，我が国の伝統や文化に関する情報を幅広く獲得させることが大切である。

論述したり発表したりする際には，文章を読むことによって得た我が国の言語文化に関する知見を基に，伝統や文化の現代への継承や受容について調べて根拠を示して論じたり，調べたことを基に発表したりすることが考えられる。

イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。

作品の内容や形式について，批評したり討論したりする言語活動を示している。様々な作品を読み，書かれた内容や構成，展開，表現の仕方などについて，読み手の視点から批評したり，話題を決めて討論したりする活動である。

取り上げる文章としては小説，詩，短歌，俳句などの文学的な文章のほか，我が国の伝統と文化に関して書かれた評論などの論理的な文章など，広く考えられる。

批評するとは，対象とする事柄について，そのものの特性や価値などを，根拠をもって論じたり評価したりすることであるが，ここでは，作品の内容や文章の形式など，対象とするものの特徴や価値などについて，論じたり，評価したりすることを指す。また，**討論**するとは，ここでは，作品の内容や文章の形式など，対象とするものの特性や価値などについて，それぞれの立場からの考えを述べ合うなどして，考えの相違点や共通点を基に論じ合うことである。討論する際には，例えば，物語の展開の仕方や，文章の形式，表現の効果などについて，自分の考えの根拠となる部分や考察の過程を示しながら論じ合うことが考えられる。

ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。

異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする言語活動を示している。

時間軸の視点から，設定したテーマに基づいて作品や文章を通史的に比較し，それらの共通点や相違点を明確にし，その一貫性や変化の過程を自ら考える活動が考えられる。読み比べる対象としては，例えば，古典の作品と近代以降の作品との比較，時代の異なる古典の作品同士，明治期の小説と現代小説など，様々なものが考えられる。

比較して論じたり批評したりする際には，作品や文章の内容を比較するだけではなく，例えば，「うつくし」，「やさし」などという言葉の語義をテーマに据え，作品の成立した時代背景を基に読み比べ，時代の変化について図表でまとめたり，話し合ったりすることなども考えられる。

エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。

和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする言語活動を示している。

和歌や俳句などのいわゆる短詩型の作品は，情報量が比較的限られるため，読み手によって解釈の幅は多様なものとなることが想定される。他の文体や形式の文章に書き換えたり外国語に訳したりすることは，そうした読み手の多様な解釈を顕在化させることになり，解釈の違いについて話し合うには効果的である。**書き換え**るとは，ここでは，和歌や俳句などを，物語や短い詩，短評や解説，別の和歌や詩歌などに書き換えることを広く指している。また，**外国語に訳す**とは，例えば，生徒が短歌や俳句などを，中学校までに学

習した簡単な外国語を使って翻訳することや，既に外国語に翻訳されている我が国の作品を訳し直したり，その翻訳を原典と比べたりすることが考えられる。和歌や短歌，俳句などを読み，外国語に訳すに当たっては，単純な逐語訳に陥らないような工夫が必要となる。そのためには，生徒が題材を自分なりに理解し解釈するとともに，必要に応じて，外国語科の教師との連携を図ることが重要である。

和歌や俳句などを読み，**テーマを立ててまとめる**には，それらの内容や形式について，テーマに値する共通点などを見いだすことが重要である。例えば，春の訪れを歌った和歌，親しい人の別れを歌った俳句，人々の表情を題材とした俳句など，様々なテーマが考えられる。俳句については，必要に応じて，歳時記などを活用することも効果的である。

オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする言語活動を示している。**古典から受け継がれてきた詩歌や芸能**を対象として，我が国の言語文化の根幹を支える諸要素について調べて発表したり，考えをまとめたりする活動である。

取り上げる対象としては，古典から現代まで続いているもの，例えば，和歌や俳諧，近代短歌や俳句，漢詩，自由詩などの**詩歌**が考えられる。また，**芸能**については，能や狂言，歌舞伎といった舞台芸能のほか，講談や落語といった話芸が考えられる。

古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容については，自然や季節感，人間の感情など，文学的な文章の題材として普遍的に用いられてきたものを想定している。また，**表現の技法**とは，本歌取りや見立てなど我が国の言語文化に特徴的な技法のほか，色彩表現やオノマトペ（擬音語，擬態語）なども考えられる。

題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする際には，例えば，共通するテーマを基に作品を集めてその特徴について調べて発表したり，レポートにまとめたりすることが考えられる。

４　内容の取扱い

(1) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A書くこと」に関する指導については，５～10単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「A書くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「A書くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断

力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章を読んだりする時間も含めている。

「A書くこと」に関する指導には，**5〜10単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「A書くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「B読むこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，5〜10単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「A書くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「A書くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「A書くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「B読むこと」の指導との関連を図ることも重要である。

> イ　「B読むこと」の古典に関する指導については，40〜45単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導するとともに，古典における古文と漢文の割合は，一方に偏らないようにすること。その際，古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫すること。

「B読むこと」の古典に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「B読むこと」の古典に関する指導とは，「B読むこと」の指導のうち，古典を理解し古典に親しむために，古典としての古文と漢文を取り上げた指導のことであり，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)に示した指導事項のうち，関係する指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に古典を読んでいる時間だけではなく，古典を読んで考えたことについて書いたり話し合ったり，古典に関するテーマを立ててまとめたりする時間も含めている。

「B読むこと」の古典に関する指導には，**40〜45単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「B読むこと」の古典に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「A書くこと」及び「B読むこと」の近代以降の文章に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，40〜45単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「B読むこと」の古典に関係する指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

古典における古文と漢文との授業時数の**割合**に関しても，**一方に偏らないようにすること**としている。例えば，古文のみに多くの時間をかけたり，その取扱い方に深浅が生じた

りすることがないよう配慮し，全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

その際，古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫するとは，古典としての古文と漢文に関する指導の際に，古典について解説した近代以降の文章や，古典について書かれた随筆，古典の現代語訳などを活用するなどして，古典への抵抗感を軽減し，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することを指している。これは，答申で指摘された「古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらない」という課題の解決を図るための工夫であり，古典の原文のみを重視することのないよう配慮が必要である。

> ウ　「Ｂ読むこと」の近代以降の文章に関する指導については，20 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。その際，我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫すること。

「Ｂ読むこと」の近代以降の文章に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「Ｂ読むこと」の近代以降の文章に関する指導とは，「Ｂ読むこと」の指導のうち，言語文化を理解し言語文化に親しむために，近代以降の文章を取り上げた指導のことであり，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の⑴に示した指導事項のうち，関係する指導事項について，⑵に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に近代以降の文章を読んでいる時間だけではなく，文章を読んで考えたことについて書いたり話し合ったり，言語文化に関するテーマを立ててまとめたりする時間も含めている。

「Ｂ読むこと」の近代以降の文章に関する指導には，**20 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「Ｂ読むこと」の近代以降の文章に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「Ａ書くこと」及び「Ｂ読むこと」の古典に関する指導とは区別して計画することが必要である。

その際，我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫するとは，近代以降の文章に関する指導の際には，我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することを指している。これは，答申で指摘された「古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらない」という課題の解決を図るための工夫であり，古典のみならず，近現代まで受け継がれている我が国の言語文化を享受・発展・創造させ，言語文化の担い手としての自覚をもつことを目指すものである。

我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章とは，主として，我が国の伝統や

文化について書かれた解説や評論，随筆などを指している。また，**古典に関連する近代以降の文学的な文章**には，主として，古典を翻案したり素材にしたりした小説や物語，詩歌などを指している。いずれの文章も，科目の性格，目標，内容を踏まえ，我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することが求められる。

(2) 内容の〔知識及び技能〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア　(1)のイの指導については，「現代の国語」の内容の〔知識及び技能〕の(1)のウの指導との関連を図り，計画的に指導すること。

常用漢字の指導については，中学校における指導との系統性に注意し，共通必履修科目においては，常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに，主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることを求めている。したがって，「言語文化」の内容の〔知識及び技能〕の(1)のイについて，「現代の国語」の内容の〔知識及び技能〕の(1)のウの事項と同じとし，指導の関連を図り，計画的に指導することを示している。

他教科等の学習に必要となる漢字については，指導する時期や内容を意図的，計画的に位置付けるなど，当該教科等と関連付けた指導を行い，その確実な定着を図るとともに，漢字の成り立ちや特質に触れたり，具体的な用例で示したりするなど，生徒の学習意欲が高まるようにすることが必要である。

イ　(2)のウの指導については，〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の指導に即して行うこと。

〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。」の指導については，〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の指導に即して行うことを示している。

文語のきまり，訓読のきまりについては，網羅的に取り上げたり，詳細なことにまで及んだりすることなく，「読むこと」の指導に即して必要なもののみを扱うとする考え方は従前と同様である。加えて，今回の改訂では，文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現を「古典を読むために必要な」ものに限定するとともに，これらの指導が「古典の世界に親しむため」であることを示している。

したがって，文語のきまりなどを指導するために，例えば，文語文法のみの学習の時間を長期にわたって設けて網羅的に指導することのないよう留意する必要がある。漢文の訓読のきまり，古典特有の表現の指導の場合も同様である。

(3) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A書くこと」に関する指導については，中学校国語科の書写との関連を図り，効果的に文字を書く機会を設けること。

「言語文化」の「A書くこと」に関する指導については，科目の性格を踏まえ，書く学習活動を通して，書くことに臨む姿勢や相手への思いが書かれた文字から伝わることを背景に文字文化が受け継がれてきたことを踏まえて，効果的に文字を書くことの意味や価値を理解することが大切である。

中学校国語科の書写での学習内容を踏まえ，さらに，社会で通用する様々な書式のきまりや，相手や目的に応じて書くことの大切さを学習することを通じて，自らの生活や社会に生かすことができるよう，また，文字文化の担い手としての自覚をもつことができるよう，効果的に文字を書く機会を積極的に設けることが大切である。

イ　「B読むこと」に関する指導については，文章を読み深めるため，音読，朗読，暗唱などを取り入れること。

音読，朗読，暗唱の指導は，小学校及び中学校においても重視している。この言語活動については，活動そのものが目的となることがないよう，**文章を読み深めるため**ということに留意する必要がある。

音読とは，声を出して文章を読むことをいい，文章の内容や表現を理解し伝えることに重点がある。音読によって，文章特有のリズムに気付かせることも大切である。特に古文，漢文及び近代以降の詩歌などでは，音読することによって文章の調子に気付くことも多い。何回も繰り返し音読してそのリズムに慣れるよう指導することが大切である。

朗読とは文章の思想や感情を十分に理解したうえで，聞く人がよりよく理解できるよう表現性を高めて読むことである。文章の読みが深いものであればあるほど，優れた朗読が可能となる。また，朗読することによって読みが深まることも多い。

暗唱とは文章を読んで記憶したうえで声に出すことである。文章を記憶することで，読みが深まることは多い。また，暗唱を行うことでより感情豊かに表現することが可能となる。

音読，朗読，暗唱などとしたのは，演じることなども含めて，幅広く音声言語などによる表現活動を指導に取り入れることが可能であることを示すためである。

なお，古典の音読，朗読，暗唱については，小学校及び中学校の〔知識及び技能〕に次のように示している。

〈小学校〉

易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして，言葉の響きやリズムに親しむこと。〔第3学年及び第4学年〕

親しみやすい古文や漢文，近代以降の文語調の文章を音読するなどして，言葉の響きや

リズムに親しむこと。〔第５学年及び第６学年〕

〈中学校〉

音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り，古文や漢文を音読し，古典特有のリズムを通して，古典の世界に親しむこと。〔第１学年〕

作品の特徴を生かして朗読するなどして，古典の世界に親しむこと。〔第２学年〕

古典を教材とした授業においては，このことも踏まえる必要がある。

(4) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，古典及び近代以降の文章とし，日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに，我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう，我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。また，必要に応じて，伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，**古典及び近代以降の文章**としていることを示している。なお，**古典**とは，古典としての古文と漢文を指している。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，内容の取扱いの(1)のイ及びウに示した配慮事項を踏まえ，古典と近代以降の文章の両方にわたって選定する必要がある。その際，古典としての古文には，和歌，俳諧，物語，随筆，日記，説話，浮世草子，能，狂言など，漢文には，思想，史伝，詩文など，そして，近代以降の文章には，詩歌，小説，随筆，戯曲，説明，論説，評論，記録，報告，報道，手紙など，多種多様なものがあることに留意する必要がある。

その上で，これらに**日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを含める**ことを示している。**日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文など**は，教材選定に幅をもたせ，教材を具体的にイメージしやすくするために例示している。**日本漢文**とは，上代以降，近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文とをいう。これは本来，古典としての漢文に含まれるものである。我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや，日本人の思想や感情などが漢語，漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを考え併せると，日本漢文の適切な活用を図る必要があり，ここで改めて示している。**近代以降の文語文や漢詩文**は，時代的な範囲では古典に含まれないが，近代以降にあっても，古典の表現の特色を継承した優れた作品や文章などがあり，科目の性格を踏まえた上で，ここで改めて示している。

加えて，科目の性格を踏まえた上で，**我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう，我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げる**ことを，ここで改めて示している。**我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章**とは，我が国の

伝統と文化に関連する近代以降の文章，古典に関連する近代以降の文章のことである。前者には，例えば，我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などが，後者には，例えば，古典を翻案したり素材にしたりした小説や物語，詩歌などが考えられる。

また，**必要に応じて，伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる**ことを示している。これらについては，必要に応じて用いることができることとしていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。なお，画像の資料を用いる際には，言語の教育を目指す国語科の性格を踏まえ，画像と言葉とを結び付けた指導となるよう留意する必要がある。

イ　古典の教材については，表記を工夫し，注釈，傍注，解説，現代語訳などを適切に用い，特に漢文については訓点を付け，必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。

古典の教材としての古文と漢文を理解しやすくし，親しみやすくするためには，学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名をつけたり，難読な部分には，**注釈，傍注，解説，現代語訳などを適切に用い**たりする配慮が必要となる。言うまでもなく，古典の学習において原文は尊重される必要がある。したがって，例えば現代語訳などを取り上げるにしても，おのずと適切な範囲はあり，原文との関わりにおいて取り上げることが大切となる。具体的には，原文と対比できるよう現代語訳などを取り上げたり，原文の前後を現代語訳などで補ったり，原文と同一の文種や形態に属する他の文章や作品を現代語訳などで取り上げたりすることなどが考えられる。このように，現代語訳などを活用しつつ，それらを通して，古典そのものに対する興味・関心を広げていくよう配慮することが大切である。

訓点とは，返り点，送り仮名，句読点など漢文を読みやすくするために古来工夫されてきた符号である。漢文は国語科の古典の一分野として取り扱うものであり，訓点をつけて読みやすくする必要がある。

書き下し文は，生徒の実態や指導の段階などを考慮して効果的に利用することが大切である。

古典を読み味わうためには，古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし，従来その指導を重視しすぎるあまり，多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで，指導においては，古典の原文のみを取り上げるのではなく教材に工夫を凝らしながら，先人のものの見方，感じ方，考え方に触れ，それを広げたり深めたりする授業を実践し，まず，古典を学ぶ意義を認識させ，古典に対する興味・関心を広げ，古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そして，そのような指導を通して，古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。

ウ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」及び「B読むこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう**，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示している。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通して，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元などにおける具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を的確に理解する資質・能力を育成する「B読むこと」の領域の指導に当たっては，単に読ませるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすることも難しくなるため，読むとともに，把握したり解釈したり考えたりしたことを表現する必要がある。この場合，読む資質・能力を育成するために書く活動を取り入れることもある。ただし，書く活動だからといって必ず「A書くこと」の領域の指導であるとは限らず，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

エ　教材は，次のような観点に配慮して取り上げること。
(ｱ) 言語文化に対する関心や理解を深め，国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。
(ｲ) 日常の言葉遣いなど言語生活に関心をもち，伝え合う力を高めるのに役立つこと。
(ｳ) 思考力や想像力を伸ばし，心情を豊かにし，言語感覚を磨くのに役立つこと。
(ｴ) 情報を活用して，公正かつ適切に判断する能力や創造的精神を養うのに役立つ

こと。
(ｵ) 生活や人生について考えを深め，人間性を豊かにし，たくましく生きる意志を培うのに役立つこと。
(ｶ) 人間，社会，自然などに広く目を向け，考えを深めるのに役立つこと。
(ｷ) 我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め，それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
(ｸ) 広い視野から国際理解を深め，日本人としての自覚をもち，国際協調の精神を高めるのに役立つこと。

ここでは，教材の選定に当たって，「言語文化」の目標や内容の面から，話題や題材を偏りなく選ぶことができるよう，配慮すべき具体的な観点を8項目示している。

(ｱ)，(ｲ)及び(ｳ)は，教科の目標及び「言語文化」の目標を受けて設定したものである。教材は，学習指導の目標や内容に沿って選定しなければならない。その際，特に，言語の教育としての立場を重視し伝え合う力を高めることに留意するとともに，神話・伝承などから現代の文学に至るまでの我が国の言語文化に触れるという点にも留意する必要がある。

(ｴ)は，情報技術の進展などの社会の変化に対応できる能力の育成に役立つ観点を示している。適切な教材を用いた学習活動を通して，情報を活用する能力を養い，公正に判断できる能力や創造的な思考力を育成することは，主体的に生きる力を培う上でも必要なことである。

(ｵ)及び(ｶ)は，激しく変化していく社会の中で，自我の形成を図り，調和のとれた人間性，社会性を養うのに役立つ観点を示している。

(ｷ)及び(ｸ)は，国際化への対応を考慮した観点を示している。我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め，それらを尊重することは，我が国と郷土を愛する態度を育成することになる。また，それは異文化理解の基礎を培うことにもなる。日本人としての自覚をもちながら世界の中の日本の立場や役割を考え，国際理解を深め国際協調の精神を養うことは，世界的視野に立って国際社会に貢献しようとする態度の育成につながる。

以上8項目の観点に配慮し，言語活動が十分行われるよう適切に教材を選定して，「言語文化」の目標の実現や内容の習得がなされるよう学習指導を展開していくことになる。その際，総則の第1款の2の(2)に示す道徳教育の目標を意識し，道徳教育との関連も考慮して教材を選定する必要がある。

配慮して取り上げるとは，それぞれの教材が，(ｱ)から(ｸ)までのいずれに該当するものかを確認して，教材全体として(ｱ)から(ｸ)までの全てにわたるようにするということを示している。なお，教材の選定に当たっては，8項目の観点をそれぞれ個別の観点として捉えるだけでなく，幾つかの観点を組み合わせることもできる。

オ　古典の教材は，次のような観点に配慮して取り上げること。
(ｱ) 伝統的な言語文化への理解を深め，古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。

（イ）人間，社会，自然などに対する様々な時代の人々のものの見方，感じ方，考え方について理解を深めるのに役立つこと。
（ウ）様々な時代の人々の生き方や自分の生き方について考えたり，我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。
（エ）古典を読むのに必要な知識を身に付けるのに役立つこと。
（オ）現代の国語について考えたり，言語感覚を豊かにしたりするのに役立つこと。
（カ）中国など外国の文化との関係について理解を深めるのに役立つこと。

古典の教材選定の具体的な観点は，従前「古典Ａ」に示していたが，今回の改訂では「言語文化」で示している。ここでは，教材の選定に当たって「言語文化」の目標や内容から偏りなく選ぶことができるよう，配慮すべき具体的な観点を６項目示している。

(ア)は，古典を学ぶ意欲や態度の育成に役立つ観点，(イ)は，生徒の認識力や思考力を伸ばし感性や情緒をはぐくむことに役立つ観点，(ウ)は，自己を見つめたり，我が国の伝統と文化を尊重し，我が国と郷土を愛する態度を育成したりすることに役立つ観点，(エ)は，古典を読むための資質の向上に役立つ観点，(オ)は現代の言語生活を豊かにするのに役立つ観点，(カ)は，国際化につながる異文化理解に役立つ観点を示している。

配慮して取り上げるとは，それぞれの教材が，(ア)から(カ)までのいずれに該当するものかを確認して，教材全体として(ア)から(カ)までの全てにわたるようにするということを示している。なお，教材の選定に当たっては，６項目の観点をそれぞれ個別の観点として捉えるだけでなく，幾つかの観点を組み合わせることもできる。

第３節　論理国語

１　性格

グローバル化や情報化が進むこれからの社会においては，立場や考えの異なる他者との的確な意思疎通や共通理解，課題を発見しその解決を導いていくための創造性や合理性を重視した他者との協働などがより重要になると考えられる。このような社会にあっては，示された情報の信頼性や妥当性を見極めながら，他者の主張や考えを的確に理解するとともに，自らの主張や考えについても，相手に受け入れられるよう，論拠に基づいて効果的に構築する資質・能力の育成が必要である。

「論理国語」は，このことを踏まえ，新たに置いた選択科目である。共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成する科目として，実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視している。

そのため，様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」，「(3)我が国の言語文化に関する事項」の３事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ａ書くこと」，「Ｂ読むこと」の２領域から内容を構成している。実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする国語の資質・能力の育成を目指すため，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)情報の扱い方に関する事項」を充実させるとともに，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ｂ読むこと」とともに「Ａ書くこと」の指導事項を充実させている。

この科目では，実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について，根拠や論拠の吟味を重ねたり文章全体の論理の明晰（せき）さを確かめたりして論理的な文章や実用的な文章を書く指導事項，資料との関係を把握したり，主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討したりして論理的な文章や実用的な文章を読む指導事項を設けるとともに，課題を自ら設定して探究する指導事項を設けている。

２　目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

(2) 論理的，批判的に考える力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様，「論理国語」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。共通必履修科目「現代の国語」と同じく，「論理国語」では，**実社会に必要な国語の知識や技能**としている。

実社会とは，私たちが生きる現実の社会そのものである。**実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける**とは，学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも，社会人として活躍していく高校生が，他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。

論理的，批判的に考える力については，共通必履修科目において「論理的に考える力」としていたものを受けている。**批判的に**としたのは，「論理的に考える力」に加えて，文章や資料における情報や，情報と情報との関係などをそのまま受け入れるのではなく，文章や資料を対象化して，その正誤や適否を吟味したり検討したりしながら考える力や，それを踏まえて自分自身の思考を意識的に吟味する力を重視したことを示している。また，**創造的に考える力**とは，他者の考えと自分の考えを吟味したり検討したりすることを通して，自分で新しい考えを生み出す力のことである。

また，**伝え合う力**の育成については，共通必履修科目と同じとしている。中学校第３学年で「社会生活における人との関わりの中で」としていたものを受け，**他者との関わりの中で**と発展させている。**他者**とは，広く社会生活で関わりをもち，世代や立場，文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには，こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達，相互理解を進めていく必要があり，状況や場面に応じた他者との関わりの中で，必要な事柄を正確に伝え，相手の意向を的確に捉えて解釈したり，効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，共通必履修科目と同じとしている。中学校第３学年において「認識する」としていたものを受け，「論理国語」では，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，共通必履修科目と同じとしている。中学校第３学年において「読書を通して自己を向上させ」としていたものを受け，「論理国語」では，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ**るとしている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち，生涯にわたる読書習慣の基礎を築き，社会人として，考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては，共通必履修科目では，「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち」としていたものを，**我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め**とし，より高めている。**我が国の言語文化**とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「論理国語」では，これらのうち，現代社会における様々な問題の解決に資する言語の価値に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては，小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり，全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は，国語科だけではなく他教科等も含めて，社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては，こうした態度を，**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は，以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力，人間性等」は，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

3　内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　言葉には，言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解すること。
イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
ウ　文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。
エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

○言葉の働き

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解すること。

ア　言葉には，言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解すること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。」を受けて，言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解することを示している。

言葉の働きについては，「事物の内容を表す働き」（小学校第1学年及び第2学年），「考えたことや思ったことを表す働き」（小学校第3学年及び第4学年）について学習しているとおり，何かを考えたり，考えたことを述べたり伝えたりすることは言葉によって初めて可能になる。そして**言葉そのもの**について考えたり，その内容を述べたりすることも，やはり言葉によって初めて可能になっている。例えば，ある語の意味を定義したり，ある語の文法的な働きに言及したり，語句と語句との微妙な意味の違いを説明したりすることも，全て言葉を使ってなされるのである。

この事項は，そのような**言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする**という言葉の働きを理解することを求めている。自分たちが日常的に用いている言葉について改めて考え，その仕組みや役割を知ることは，言葉をより適切に用いるために欠かせないことであり，それを可能にする言葉の働きは極めて重要なものとして理解される必要が

ある。

〇語彙

現代の国語	言語文化	論理国語
エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のエを受けて，論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることを示している。

論証するとは，証拠を示しながら，結論に至る過程を筋道立てて述べることである。論証に必要な語句とは，その過程を明確にしながら述べるために用いられる語句である。例えば，「ゆえに」，「すなわち」，「ただし」，「および」，「かつ」のような接続語句，また「妥当」，「示唆（される）」，「矛盾（しない）」など，思考の過程や判断を表す語句，また，「仮説」，「検証」，「定義」，「根拠」，「論拠」，「参照」など論証の形式や方法に関する語句などである。

客観的な根拠に基づき，一定の手続きを経て結論に至る論証の過程では，日常生活で使う語句とは異なる語句を選択して用いることが必要となる。また，日常生活で使う語句（例えば，「場」，「視野に入れる」，「テキスト」など）も，通常とは異なる特定の意味で，論証のための語句として使われる場合もある。

また，**学術的な学習の基礎を学**ぶために必要な語句とは，専門的な学習を始めるために身に付けておくべき語句であり，例えば，「定量・定性的」，「蓋然性」，「変数」，「パラダイム」など，様々な分野で広く用いられる学術的な見方・考え方に関わる語句や，それらを学ぶ場で接する「概説」，「方法論」などである。なお，心理学における「学習」，言語学における「談話」のように，ある分野において特定の意味で使われる語句もあり，定義を確認しながら学ぶ必要がある。

〇文や文章

現代の国語	言語文化	論理国語
オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。	ウ　文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。 エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

ウ　文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。」を受けて，事象を説明する文章や意見を述べる文章，特に，客観的な内容を一義的に示すための文章や論証のための文章などにおいて，文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めることを求めている。

事象を説明する文章を書くとは，対象となる事象について，表面に表れている事実を説明するのみならず，その事実が生起した背景や原因，経過などを整理して書き表すことであり，意見を述べる文章を書くとは，理由や事例を明確にしながら，筋道を立てて自分の考えを述べることである。

論文・レポートのような論証のための文章や，法令・契約書のような客観的な内容を一義的に示すための文章においては，書き手の意図を明確に伝え，読み手の解釈に揺れが生じる可能性を極力避けるために，**文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方**に工夫が必要となる。

このような文章を構成する**文**については，例えば，語句の選択や成分の順序，必要に応じた定義や，「全国学力・学習状況調査（以下「調査」という）」といった略記の仕方，「ここでは，～県は…地方に含めないものとする」のような多義的な解釈を許さない述べ方，読点や記号の使い方などに注意して，一つの文の意味が必ず一つに定まるような文の組立て方や接続の仕方について理解を深めることが求められる。

また，**文章**については，例えば，個々の段落の内容と段落相互の関係を吟味し，「第一に…，第二に…」と内容のまとまりごとに序列を付けて文や段落を接続したり（ナンバリング），内容のまとまりごとに項目立て（ラベリング）をしながら文章を組み立てたりする方法について理解を深めることや，事象を説明する文章には時系列や因果律による記述の方法があり，適切に使い分けて文章を組み立てることが重要であることなどについて理解を深めることが求められる。

エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。」を受けて，特に論証のための文章や客観的な内容を一義的に示すための文章における**効果的な段落の構造**など，**文章の構成や展開の仕方について理解を深めること**を求めている。

また，「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　推論の仕方を理解し使うこと。」と関連して，論証のための文章において様々な形式の推論がどのような要素をどのように組み立てて構成されているのかなど**論の形式**の特徴について理解を深めることを示している。

文章の種類に基づくとは，学術論文やレポートなどの論証のための文章や，法令や契約書などの客観的な内容を一義的に示すための文章など，主として論理的な文章の様々な種類に基づくことをいう。

例えば，学術論文には，要旨，目的，方法，結果，考察，結論のような典型的な構成や展開の型があり，それに従って書かれている。また，法令や契約書なども，定められた構成に従って書く文章である。そのように書くことで，その文章は求められる内容を必要十分に備えるものとなる。また，読み手が必要な情報を効率的に探し出すことも可能となる。よって，それらの典型的な構成について理解を深めることは，論理的な文章を的確に書いたり読んだりするために重要である。「目的」の部分に「方法」に書くべき内容が混じったり，「結果」の部分に「考察」に書くべき内容が混じったり，「要旨」を述べる部分に「目的」だけが書かれたりすることのないように，構成について理解を深める必要がある。

段落の構造とは，段落内部における文の組立てと，段落相互の関係の両方を指している。例えば，論証する文章においては，一つ一つの段落も典型的な構造をもっている。一般に，一つの段落には，中心となる一つの文と，その内容を支える（言い換えたり，例を挙げたりする）文のみが含まれ，中心となる文が複数含まれることはない。典型的な学術論文は，各段落の中心文だけをつなげて読めば，文章全体の論旨が理解できるように構成されている。このような段落の構造のほか，必要に応じて他の資料を引用し，段落中で適切に示しながら展開する仕方などについて理解を深めることを求めている。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。」との関連を図ることが考えられる。また，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)のウや，「B読むこと」の(1)のアなどと関連付けて学習することが考えられる。

(2) 情報の扱い方に関する事項

(2) 文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

イ　情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め

使うこと。
ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。

〇情報と情報との関係

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。 イ　個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。		ア　主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

ア　主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(2)の「ア　主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。」を受けて，主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めることを示している。

主張とその前提との関係について理解を深めることは，「隠された前提（言及されない前提）」に気付き，検討する力につながる。「隠された前提」の検討は，批判的な思考の重要な手続きの一つである。例えば，「彼は本校の生徒ではない。よって彼は本校の図書室を利用できない。」という論理における「隠された前提」＝「本校の生徒だけが図書室を利用できる。」に気付くような力である。

主張に対する**反証**は，異なる根拠や論拠をあげて，主張とは別の結論を得る筋道である。同じ根拠から異なる論拠によって，全く異なる主張がなされる場合もある。例えば「昨年は倍率が低かった」という根拠からは，「今年は倍率が高くなる」，「今年も倍率は低い」の二つの主張が導かれ得る。ある主張とそれに対する反証との関係を理解するためには，両者の根拠や論拠，主張のそれぞれを対比的に検討することが必要となる。そのほか，例えば，「おそらく」，「でない限り」，「とも言える」など，主張の確からしさを「限定」する記述に注意を払うことも必要である。

指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)のエや，「B読むこと」の(1)のウなどとの関連を図ることが考えられる。

〇情報の整理

現代の国語	言語文化	論理国語
ウ　推論の仕方を理解し使うこと。		イ　情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。

エ　情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。 オ　引用の仕方や出典の示し方，それらの必要性について理解を深め使うこと。		ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。

イ　情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。

中学校までの情報の整理についての学習を踏まえ，情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うことを示している。

話や文章には，雑多な情報が混在していることが多い。それらを**重要度や抽象度**，時系列などの観点から整理することで，話や文章に含まれる情報の構造を明確にすることができる。

抽象度とは，具体性の度合いである。例えば，結論を述べる文よりも理由を述べる文の方が具体的であるのが普通である。また，一文ごとに具体性を増しながら理由を説明することもある。

論証する文章においては，一つの段落は最も抽象度の高い一文（中心となる文）と幾つかの具体的な文（中心文を支える文）から構成される。抽象度による整理という考え方は，論証する文章の学習にとって不可欠である。

また，雑多な情報を，段階を設定して整理するのが**階層化**の考え方である。一冊の書物や一本の論文の内容も「章・節・項…」と階層化されている。例えば，「第一章　明治の小説」，「第二章　大正の小説」を第一の階層とすれば，第一章の下の階層には「第一節　森鷗外の小説」，「第二節　夏目漱石の小説」などが位置付けられる。ここで「第三節」に「昭和の詩人」を位置付ければ誤りとなる。さらに各節の下には，「第一項　初期の作品」，「第二項　晩年の作品」などが位置付けられる。

そのほか，関連のありそうな情報と情報との関係（例：夏の日照時間が少ないと穀物の収穫量が減る。）について，それが因果関係なのか，相関関係なのか，あるいは疑似相関に過ぎないのかを適切に判断するためにも，情報同士の関係付け方についての理解が重要となる。

こうした階層化の考え方の理解には，視覚的に情報を整理する手法を適切に用いることが効果的である。ICT などの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，XY チャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。また，書籍の目次など階層構造が視覚化された例を参照させて理解を深めることも重要である。

指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)のアや，「B

読むこと」の(1)のイなどとの関連を図ることが考えられる。

ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　推論の仕方を理解し使うこと。」を受けて，推論の仕方について理解を深め使うことを示している。

推論とは，ある事実を基に未知の事柄を推し量ることであり，**推論の仕方**には演繹(えき)的な推論と演繹(えき)的ではない推論（帰納，類推，仮説形成など）があると考えられている。

演繹(えき)的な推論は，ある前提のうちに隠れているが，それに直観的にはすぐに気付けないような情報を明示化する場合に有効である。例えば，海に生息しているという事実からクジラを魚類と勘違いしているような場合，クジラがエラ呼吸ではなく肺呼吸をしていることに気付かせて，その誤りを正すことが考えられる。この背景には，「ほ乳類は肺呼吸をする。クジラはほ乳類である。したがって，クジラは肺呼吸をする。」という演繹(えき)的な推論が働いている。

演繹(えき)的ではない推論のうち，帰納は，「猿の仲間は背骨を持つ。鹿の仲間は背骨を持つ。猫の仲間は背骨を持つ。クジラの仲間は背骨を持つ。」という個別の事例を積み上げ，「したがって，全てのほ乳類は背骨を持つ。」という一般化された法則を導く推論のことである。

類推は，例えば，ラットを使った動物実験の結果をヒトにあてはめて考える時のように，類似する点を基に推し量るような場合の推論のことである。また，仮説形成は，ある現象が起きる理由を客観的な根拠を挙げて説明することができない時に，ある仮定をすることでその理由をうまく説明することができるようになる場合の推論のことである。

ここでは，「現代の国語」で学習したことを受け，実際に様々な推論を用い，筋道を立てて考えることを通して，推論の具体的な方法について理解を確実なものにすることを求めている。

指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)のオ，キなどとの関連を図ることが考えられる。

(3) 我が国の言語文化に関する事項

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。

○読書

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。	ア　新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。

ア　新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。

中学校までに学習した読書の意義や効用についての理解を踏まえるとともに，「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(3)の「ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。」を受けて，新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

読書は，時間や空間を共有しない他者の意見や考えに触れる機会である。直接，意見を交わし合えない他者とも，読書を通じて互いの思考の過程を比べ，意見を交流することが可能となる。そうした批判的な読書の経験を重ねることで創造的な思考力が養われ，新たな認識が生まれ，これまでにない価値の創出やパラダイムシフトにつながる可能性がある。この事項はそのような読書の意義と効用について理解を深めることを求めている。

〔思考力，判断力，表現力等〕
A　書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について，書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集，整理して，目的や意図に応じた適切な題材を決めること。

イ　情報の妥当性や信頼性を吟味しながら，自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠をそろえること。

ウ　立場の異なる読み手を説得するために，批判的に読まれることを想定して，効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。

エ　多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にすること。

オ　個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰（せき）さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

カ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　特定の資料について，様々な観点から概要などをまとめる活動。

イ　設定した題材について，分析した内容を報告文などにまとめたり，仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。

ウ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして，自分の考えを短い論文にまとめ，批評し合う活動。

エ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

〇題材の設定

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。	ア　実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について，書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集，整理して，目的や意図に応じた適切な題材を決めること。

ア　実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について，書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集，整理して，目的や意図に応じた適切な題材を決めること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の⑴の「ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。」を受けて，題材の設定の範囲を**実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄**に広げ，伝えたいことを明確にして，**目的や意図に応じた適切な題材を決めること**を示している。また，その過程における**情報**の**収集**，**整理**に際して，様々な立場の書き手による，様々な論点の文章・資料に広く目を配ることを求めている。

学術的な学習の基礎とは，専門的な学習を始めるために身に付けておくべき基礎的な内容である。ここでは，興味・関心をもったことの中から更に学びを深めようと考えたことや，課題として意識し，解決策を探ろうと考えたこと，また，高校卒業後に専門的に学問として学び深めていきたいと考えたことなどから題材を見いだすことを求めている。

書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集するとは，ある立場に賛成か反対かなど，書き手としての立場や論じたいことの中心となる問題点など，様々な観点から情報を集めることである。社会には膨大かつ多種多様な情報が氾濫している。それらの情報の中から，目的や課題に応じた情報を適切に収集することのできる能力を育成する必要がある。

また，**収集**した情報を**整理**するとは，収集した情報を観点に沿って比較，分類，関係付けなどをすることである。具体的には，書く目的や意図に応じて，材料を比較しながら取捨選択したり，観点ごとに分類したり，情報と情報との間に事柄の順序，原因と結果，意見と根拠などの関係を見いだして整えたりすることである。

情報を整理する際には，分類，比較，関係付けを行い，それぞれの共通点を見いだして組み合わせたり，幾つかをまとめて抽象化したりすることで，題材に対する個々の情報の重要度や位置付けなどを明確にすることができる。その際，検討の過程を明確にできるよう，ICTなどの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，XYチャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。

目的や意図に応じた適切な題材を決めるとは，問いたいことや言いたいことを明確に伝

えるために，論じる視点や範囲を十分に考えて適切な題材を判断することである。その題材が適切なものかどうかは，自分の具体的な問題意識に根差したものか，自分が論じる価値があるものか，自分の力で時間内に扱い得るものかなど，様々な観点から考える必要がある。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(2)の「イ　情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

○情報の収集，内容の検討

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。（再掲）	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。（再掲）	イ　情報の妥当性や信頼性を吟味しながら，自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠をそろえること。

イ　情報の妥当性や信頼性を吟味しながら，自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠をそろえること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(1)の「ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。」を受けて，情報の妥当性や信頼性を吟味しながら，自分の立場や論点を明確にして，主張を支える適切な根拠をそろえることを示している。

情報の妥当性とは，その情報が正しいものであるということに加えて，その情報を根拠として挙げる場合などに，根拠としての適切さを備えていることであり，その情報が置かれる場の中で相対的かつ不断に判断されるものである。

情報の信頼性とは，その情報の発信源などから，その情報が確かなものであると判断できることである。その際，出典の示し方から確認するだけでなく，誰が，いつ，どこで発信したものかを確認した上で判断する必要がある。

妥当性や信頼性を**吟味**するとは，主張を支える根拠として適切か，最も有効か，ほかに有効な情報はないかなどを検討したり，書き手の立場や発信された文脈を適切に踏まえたものかどうかを詳しく検討したりすることである。

自分の立場や論点を明確にするとは，調査・観察・実験などによって収集した情報や資料をどのように分析・解釈したのかを整理し，どの立場で論じるか，また，論じたいことの中心となる問題点は何かを明確にすることである。

主張とは，相手を説得したり納得させたりすることをねらって自分の意見を述べたものであり，問いと結論を合わせたものを指す。**主張を支える適切な根拠**とは，立てた問いに対する結論を読み手に納得させるための客観的な証拠や経験的な事実のことである。主張

の真偽の確認過程で得られた情報も一つの根拠と考えることができる。その根拠でその主張を導くことができるのか，主張に対する一つ一つの根拠の整合性を確認することが大切である。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(2)の「ア　主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○構成の検討

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。 ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。	ウ　立場の異なる読み手を説得するために，批判的に読まれることを想定して，効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。

ウ　立場の異なる読み手を説得するために，批判的に読まれることを想定して，効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(1)の「イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。」を受けて，立場の異なる読み手を説得するために，批判的に読まれることを想定して，効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することを示している。

不特定多数の多様な読み手に対して書く場合，読み手は様々な立場にあったり様々な考えをもっていたりすることを想定し，どのような読み手からも一定の理解が得られるよう論理の展開を工夫することが求められる。特に，書き手と反対の立場の読み手を説得できるような文章の構成を考えることは，書き手の考えをより一層明確にすることにつながる。

立場の異なる読み手を説得するためには，読み手にとって納得できる根拠が示されていることと，納得しやすい構成や展開で示されていることが必要である。納得できる根拠とは，その根拠に十分な信頼性と妥当性が備わっていることである。納得しやすい構成や展開とは，読み手の立場に応じて，主張を支える具体的な事例の数や種類を増やして多面的に説明を加えたり，論理の展開がたどりやすい構成を工夫したりすることである。

また，予想される反論に対する適切な対応を用意したり，例えば，「確かに～であるが」などの譲歩表現を使ったりすることでより説得力のある文章を書くことができる。また，演繹と帰納などの推論の仕方を内容に応じて適切に選択して説得力のある文章を書くこともできる。

批判的に読まれることを想定するとは，様々な立場の多様な考えをもつ読み手が，その文章の根拠や論拠，構成や論理の展開を吟味することを想定することである。読み手は，根拠そのものの適否や，文章中で述べられている主張と根拠との関係の適否を確かめたり，書かれている情報を重要度や信頼度によって分類，整理し，それらを多面的・多角的に分析，考察したりして，述べられている内容の信頼性や客観性を吟味・検討しながら読むことが想定される。このように批判的に読まれることを書き手としてあらかじめ考え，想定される反論の数や種類を増やしておく必要がある。

それらの読み手を説得したり納得させたりするためには，想定される反論や異論を踏まえて，例えば，「～の限りでは」のように限定して述べるなど，自らの論を確かなものにする方法を考えることが大切となる。

効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することは説得力のある文章を書き，自らの考えを相手に納得させ，同意や共感を得るために欠くことができない。

論理の展開とは，結論や主張を導くための筋道の通った考えの進め方のことである。文章全体や部分における構成や論理の展開を把握した上で，なぜそのような構成にしたのか，論理の展開に飛躍がないかなどについて，自分なりの考えをもつことができるようにすることが重要である。

ここで「構成や論理の展開」と併置しているのは，文章を書くためには，書き手が自らの思考の進め方を整理し，文章を論理的に組み立てていく必要があることを明示するためである。

例えば，全体が筋道の通った展開になるように，主張との関係を考えながら根拠となる情報を取捨選択し，「問い」から「答え」に至る筋道が明確に見えるような構成を工夫することが考えられる。具体的には，問題意識の説明と具体的な課題の説明，調査の方法と手順，調査の結果，結果の分析，分析を基にした考察と残された課題といった順で書くことも効果的な構成の工夫の一つである。

また，論証する文章においては，一つの段落には，中心となる一つの文と，その内容を支える（言い換えたり，例を挙げたりする）文を配置するが，例えば，中心となる文だけをつなげて読めば，文章全体の論旨が理解できるように考えて書いたり，中心となる文とそれを支える文を，文の内容の抽象度によって階層的に配列したりするような工夫が考えられる。さらに，中心となる文をなるべく段落の先頭に置けば，読み手にとって，論の展開や文章全体の論旨を素早く把握することを可能にすることになる。段落と段落との関係についても，階層化して構成を考えたり，接続語句を効果的に使用して緊密な構成を考えたりする工夫が求められる。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(1)の「エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。」，(2)の「イ

情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇考えの形成，記述

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。（再掲） ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	エ　多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にすること。 オ　個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰（せき）さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

エ　多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の⑴のウを受けて，多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり，根拠や論拠の吟味を重ねたりして，主張を明確にすることを示している。

多面的・多角的な視点から自分の考えを見直すとは，説明しようとしている対象に関して十分に情報を集め，異なる立場や考え方に思いを巡らし，対象のもつ様々な面に着目して観察したり，立場を変えて考えたりすることによって自分の考えを相対化し，様々な可能性について検討することである。例えば，ある施策の利点だけでなく問題点にも目を向けたり，経済性のほかに安全性の観点からも考えたりするなど，一つの事柄を多面的に見たり多角的に考えたりして，相対的に適切な判断を下せるようになることである。

収集し分析した情報を基にして，自分の考えを適切な形にまとめる過程を通して，事実についての認識や事実に向き合う態度を自らの内部に形成するという点からも，**自分の考えを見直**すことは，考えを形成する重要な段階であると言える。

根拠の吟味とは，考えや言動の拠（よ）り所となる客観的な事実や情報の正誤などについて，精査し判断することであり，**論拠の吟味**とは，**主張**がなぜ成り立つのかを説明するための理由付けの適否などについて検討し判断することである。

その上で，**主張を明確にすること**は，考えの妥当性を裏付ける客観性や信頼性の高い資料を用いて，自らの論が成り立つ根拠を示し，自分の考えが確実な根拠に支えられ，前後

矛盾することなく論理的に展開された文章を書く中で，自分の考えがまとまっていき，更に緻密なものや確固としたものになっていくことである。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　推論の仕方について理解を深め使うこと。」などとの関連を図ることが考えられる。

オ　個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(1)のウを受けて，個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰さを確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫することを示している。

個々の文の表現の仕方を吟味するとは，例えば，一つの文の意味は，書き手が意図しない解釈を生むように書かれていないか，接続表現が効果的に使用されているか，対比や類比が適切か，引用は適切かなど，読み手と目的にふさわしい表現となっているかを考えることである。様々な表現の仕方が，文章の内容や書き手の考えを正確に伝えたり印象付けたりする上で効果を上げているかを検討する必要がある。

段落の構造を吟味するとは，例えば，段落内部の文の組立ては適切か，個々の段落の役割は明確か，段落相互の関係は適切か，主張や結論に向かって，考えの筋道を反映した組立てになっているかなどについて検討することである。

文章全体の論理の明晰さを確かめるとは，設定された問いから答えに向かって，明快な筋道で論理が展開されているかどうかを確かめることである。全ての根拠・論拠は適切か，根拠から導かれた結論は妥当か，飛躍や逸脱はないか，また，論証に過不足はないか，当初の問いにきちんと対応した結論になっているかなど，様々な観点から論理の整合性と一貫性を検討，吟味することである。

自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫するとは，書く目的を実現するのにふさわしい文章の形態や文体，語句を選び，言葉遣いなど表現の仕方に様々な工夫を凝らすことであるが，ここではそれに加えて，自分の主張がどのような根拠に基づき，どのような論証の過程を経たものであるのかを明確に示し，他者の批判的な読みにも堪えるように細部にまで注意を払うことを求めている。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(1)の「ウ　文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めること。」，「エ　文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○推敲，共有

現代の国語	言語文化	論理国語
エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	カ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

カ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の⑴のエを受けて，ここでは推敲の観点をいっそう明確化し，文章の構成や展開，表現の仕方などについて，自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることを示している。

文章の構成や展開とは，どのような題材に関して述べ，材料としてどのようなものを選び，それをどのように組み立て，どのような筋道，順序で考えなどを述べているのかということであり，段落の働きや段落相互の関係や論理の展開の仕方，結論の述べ方や，具体的な事例の挙げ方などのことである。

表現の仕方とは，文章の形態や文体，語句などを工夫することをはじめとして，簡潔な述べ方や丁寧な述べ方，断定的な述べ方や婉曲（えん）的な述べ方，さらに論理的な文章での中心的な部分と付加的な部分との関係や事実と意見との関係など，記述に関わる表現全般のことである。

例えば，短い論文などの論理的な文章を記述する場合は，全ての部分が，結論に向かう論証の中で明確な役割をもっているかどうか，全体が問いと答えの関係で一貫しているかといった論理の構成や展開を見直すことによって，主張を一貫した流れに沿って整理しながら明確に表現することが大切である。

また，報告書などの実用的な文章を書く場合は，出来事や状態などを対象に忠実かつ正確に，順序や論理を追って読み手によく分かるように書くことが求められるが，それには事実や手順を具体的に説明する場合と，理由や原理を論理的に説明する場合などがあることを理解し，間違いなく，過不足無く説明し，情報伝達が効果的に行われているかを見直すことによって，読み手に伝わりやすい表現の工夫をすることが必要である。

自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味するとは，例えば，重要な概念等の語句の定義が明確で具体的に表現されているか，論証された内容は一定の形式で構成されているか，結論に至る過程の論理の展開に一貫性があるか，重複している部分がないか，不要な内容が含まれていないか，各文の抽象度による並びは適切か，情報の用いられ方は適切かつ効果的か，などといったことを様々な読み手の立場に立って，客観的な視点から検討することである。ここでは結論の内容の正しさよりも，論証の的確さ，適切さを確認することが求められる。

その上で，「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(1)の「エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。」を踏まえ，読み手からの助言や自己評価や相互評価を通して自分の文章のよさを確認したり課題を発見したりして，自分の表現に役立てるとともに，自らの書くことの活動や，書いたものを推敲する活動に生かすための具体的な視点を得ることも重要である。書いたものが後々まで残る可能性を考慮し，書き手と読み手というそれぞれの立場で自分の文章を捉え直すことが必要である。

〇言語活動例

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。	ア　特定の資料について，様々な観点から概要などをまとめる活動。
イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。 ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。		イ　設定した題材について，分析した内容を報告文などにまとめたり，仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。 ウ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして，自分の考えを短い論文にまとめ，批評し合う活動。 エ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々

		な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

ア　特定の資料について，様々な観点から概要などをまとめる活動。

実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について資料を読み，様々な観点から概要などをまとめる言語活動を示している。

特定の資料とは，設定した題材に即して選んだある一つの資料のことである。この資料について，書き手の立場，論点，文章の形式，書かれた時期，誰を対象として書かれたものかなどといった**様々な観点**から情報を整理し，まとめることが求められている。この活動を通して，実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について報告書や論文を書く際にはまず，様々な観点から情報を収集，整理して，目的や意図に応じた適切な題材を決めることが必要となることを理解することが必要である。

指導に当たっては，資料や観点を提示し，賛否両論から考えたり，異なる立場から考えたり，また，情報を整理する際に，目的に応じて図表を用いて視覚化するなどといった工夫も必要である。

イ　設定した題材について，分析した内容を報告文などにまとめたり，仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。

設定した題材について，分析した内容や考察した内容を，自分の意見を含む文章にまとめる言語活動を示している。

報告文とは，例えば，活動の記録など，調査したり観察したりして得た事実とそれを分析した内容について自分の意見や見解を述べたものを報告するための文章である。また，**意見文**とは，報告文で整理された情報に基づいて仮説を立てて考察する内容を含み，自分の意見や見解を主張するための文章である。

実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄の中から関心をもった話題について，具体的な観点を設定し，調査・分析した内容を報告文にまとめたり，実社会に関するある一つの共通のテーマについて，自分の主張を仮説として，その仮説を裏付ける根拠を情報の妥当性や信頼性を吟味しながら集めて検証し，自分の考えを意見文にまとめたりするなどの活動が考えられる。

ウ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして，自分の考えを短い論文にまとめ，批評し合う活動。

社会的な話題について書かれた資料を集めて読み，条件を付加したり，立場を変えたりして，論文を書き，批評し合う言語活動を示している。

論説文とは，ある事柄についての書き手の分析を踏まえた解説と主張が含まれた論理的な文章のことである。**その関連資料**とは，分析や主張の根拠となった図表などを含む情報や，同じ話題についての異なる立場で書かれた文章などの様々な資料のことである。

論文とは，要旨，目的，方法，結果，考察，結論のような論証の手続きを備えた文章のことである。**短い論文**を書く場合は，あらかじめ重要な論点を絞って書く指導が必要である。

ここでの**批評し合う**とは，短い論文に記された自分の考えが，適切な根拠に基づいて述べられているか，文章の構成や論理の展開が適切かどうかを多様な観点から互いに吟味し合い，主張が明確に伝わっているか確認し合うことである。例えば，予想される反論について検証したり，良い論文についての条件を考え，互いの論文の良い点，改善点を確認し合ったりすることなどが考えられる。批評し合うことは，根拠や論拠を吟味し，客観的な表現になっているか，段落の構造に矛盾がないか等に注意を払い，慎重に語句を選び一文一文を注意して書き進める姿勢を育てる。自らの文章や主張を批判的に見直して書き直す活動につなげていくことが求められる。

エ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理して，様々な観点から自分の意見や考えを論述する言語活動を示している。

多様な資料を集めるとは，設定した題材に関するあらゆる資料のことを指す。題材についての異なる論点をもつ資料や，新聞記事，統計資料，映像など多様な媒体で表現されたものも含めて，情報を収集，整理して，それらの真偽を確かめ，論述するために活用できるようにまとめることが重要である。

様々な観点から自分の意見や考えを論述するためには，多様な資料を集め，調べたことを整理する中で，自分の考えを組み立てた過程を振り返り，複数の視点から再検討することが必要となる。論述する活動には，論文を書くだけでなく，意見文や論説文などの文章も含まれる。社会的な話題について関連する資料を読み，様々な観点からそれらの概要をまとめるとともに，それらに関連した自分の意見などを明確にして論文にまとめるなどの活動が考えられる。

B　読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などを的確に捉え，論点を明確にしながら要旨を把握すること。

イ　文章の種類を踏まえて，資料との関係を把握し，内容や構成を的確に捉えること。

ウ　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。

エ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。

オ　関連する文章や資料を基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深

めること。

カ　人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深めること。

キ　設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に，必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，批評したり討論したりする活動。

イ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を読み，それらの内容を基に，自分の考えを論述したり討論したりする活動。

ウ　学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み，自分の考えを論述したり発表したりする活動。

エ　同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。

オ　関心をもった事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書や短い論文などにまとめたりする活動。

〇構造と内容の把握

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などを的確に捉え，論点を明確にしながら要旨を把握すること。 イ　文章の種類を踏まえて，資料との関係を把握し，内容や構成を的確に捉えること。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などを的確に捉え，論点を明確にしながら要旨を把握すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の(1)の「ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。」を受けて，特に論点を明確にしながら要旨を把握することを示している。

文章の種類を踏まえるとは，ここでは，文章の内容や構成などを捉えたり要旨を把握したりする際に，その前提として，評論や説明，論説，学術論文などの文章の種類によっ

て，書かれる目的と対象，表現方法などが異なることを踏まえることを指している。

内容や構成，論理の展開などを的確に捉えるとは，その文章が書き手の主張を支えるために，材料としてどのようなものを選び，それをどのように組み立て，どのような筋道で考えなどを述べているのかなどを的確に捉えることである。

論点とは議論の中心となる問題点や議論の要点のことである。論証を目的とする文章には，一つまたは複数の論点がある。**論点を明確にしながら**とは，例えば，学術論文など，一つ一つの段落が典型的な構造をもっている文章を読む手立てとして，各段落の中心となる文に着目して読むことなど，適切な手立てを用いて文章の中心となる部分を明らかにしながら理解することである。

また，ある文章の中にどのような論点があるのか，複数の論点の中で何が中心として述べられているのか，などを常に考えながら読むことも重要である。

その上で，書き手による構成や展開の仕方をたどりながら，書き手のものの見方や考えの進め方を捉えることで，書き表そうとした中心的な内容を誤りなく把握することが大切である。例えば，論説や評論などでは，文章の中心となる主要な論点と，具体例，説明，補足，反証など主張を支える従属的な論点とがある。**要旨を把握する**際には，主要な論点と従属的な論点とを判別し，その関係を押さえた上で，主要な論点を的確に読み取ることが重要である。

イ　文章の種類を踏まえて，資料との関係を把握し，内容や構成を的確に捉えること。

中学校第２学年の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｃ読むこと」の「ウ　文章と図表などを結び付け，その関係を踏まえて内容を解釈すること。」及び「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｃ読むこと」の⑴の「ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。」を受けて，様々な文章の種類を踏まえて，資料との関係を把握し，内容や構成を的確に捉えることを示している。

文章の種類を踏まえるとは，例えば，提案書や契約書，法令文など，それぞれの文章の種類に固有の特徴を踏まえることである。ここでの文章の種類とは，特に図や表を含む複数の資料とともに記された，論理的な文章や実用的な文章のことであり，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章の種類をいう。

資料との関係を把握するとは，主張とそれを支える資料が，書き手の主張に対してどのような役割を果たしているかを把握することである。例えば，論理的な文章において主張を支える根拠となるデータが示されていたり，実用的な文章において内容を簡潔に示した図が示されていたりする場合においては，文章が書かれた目的と文章，資料の関係を合わせて把握することが必要である。なお，ここでの**資料**とは，統計などの情報を整理した図表，写真，地図などのデータとしての情報や，関連する法令，主張を検討するうえで参考となる文献など，文章の主張を支える多様な情報を含めたものである。

内容や構成を的確に捉えるとは，資料も含めた文章の内容や構成について，書き手の意図を踏まえて的確に捉えることである。その際，文章が誰を対象として，どのような主張

をするために書かれているか，主張を支えるために資料がどのように効果的に用いられているか，などを考えることが必要である。

〇精査・解釈【①】

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。	ウ　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。

ウ　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の(1)のイを受けて，主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味することを示している。

主張を支える根拠とは書き手の意見を述べるために，提示された種々の情報のこと，**結論を導く論拠**とは，結論を導くための証拠となる根拠と理由付けのことを示している。

根拠や論拠を**批判的に検討**するとは，例えば，文章の中で述べられている主張が，確実な根拠や論拠によって導かれているかどうかを読み取り，その適否を判断するなど，文章の内容と，論理の構成や展開との相関がいかに文章全体の明晰（せき）さに寄与しているかなどを考察することである。

書き手の思考過程を**批判的に検討**することで，書き手がどのような根拠やどのような論拠を用いているかなど，書き手の思考を追体験することができ，根拠や論拠の働きについて検討することができる。

文章や資料の妥当性や信頼性を吟味するとは，論証に用いられた根拠や例示の適切さ，論拠の妥当性，出典の信頼性，書き手の意図などを吟味し，文章全体を批判的に検討しながら解釈することである。

○精査・解釈【②】

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。	エ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。

エ　文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。

主に「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「C読むこと」の(1)のイと，「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)のウを受けて，文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価することを示している。

文章の構成や論理の展開，表現の仕方について，書き手の意図との関係を捉える際には，文章から明らかに捉えることのできる意図だけでなく，文脈から想定される意図も考えることが必要である。この文章で書き手は何を伝えようとしているのかということを誤りなく把握するためには，文章に表れている書き手の思考の進め方に着目し，書き手の考えや強調点を読み取ることが大切である。例えば，学術論文などの論理的な文章で示される書き手の意図と，ある事例の報告書などの実用的な文章で示される書き手の意図とでは，文章から捉えることのできる書き手の意図の明晰（せき）さについては，異なることに留意する必要がある。なお，書き手の意図には，文章の内容に表れている書き手の考えのみならず，なぜこの文章を書いたのか，なぜこのように書いたのかということも含まれる。

その上で，書き手の意図との関係において**多面的・多角的な視点から評価する**とは，文章の種類を踏まえて，書き手の意図に対して，例えば，相手や目的を考えた適切な構成や展開になっているか，資料の示し方が分かりやすいかなど，文章の表現を検討して書き手がどのように伝えようとしているか，その意図を推測し評価することをいう。

○精査・解釈【③】

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。	オ　関連する文章や資料を基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深めること。

図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）		

オ　関連する文章や資料を基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深めること。

関連する文章や資料などを基に，書き手の立場や目的を考えながら，内容の解釈を深めることを示している。

関連する文章とは，書き手の主張に関連する分野の他の書き手による文章や，書き手の主張と異なる立場から書かれた文章，書き手が過去に記した文章のことである。また，**資料**とは，書き手の提示した資料以外の関連する様々な情報のことを示している。

文章の解釈を深めるためには，与えられた情報をうのみにせず，何が確かで何が不明確かを見分け，批判的に検討することが必要である。そこでは，確かな情報群を比較・分析して，その差を明らかにしたり，情報の送り手はどんな意図でこの文章を書いたのかについて推測したりする営みが重要となる。

関連する様々な情報と文章とを比較することで，その文章が書かれたときの書き手の立場や目的を推測し，それが他の書き手とどのように違うか，またそれがどのように変化してきたのかを考えることで，背景を理解して内容の解釈を深めることができる。

〇考えの形成，共有【①】

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。	カ　人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深めること。

カ　人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深めること。

文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて，新たな観点から自分の考えを深めることを示している。

人間，社会，自然などについて，文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び

付けるとは，文章の中で書き手が表現した人間，社会，自然などに対する事実やものの見方や考え方を理解し，自分の考えをもった上で，例えば，相反する立場で書かれた文章や評価の異なる文章，多様な資料で述べられているものの見方や考え方とを結び付けて，物事を多面的・多角的に見て考え，それについて論じたり，評価したりして自分の考えを再検討する過程を想定している。

新たな観点から自分の考えを深めるとは，複数の文章や情報を読んで得ることのできた視点と，自分の既有の知識や経験を基に，新たに発想したり，多様な論点や異なる価値観で述べられた文章や多様な資料と相互に関連付けて主体的に考えたりすることで，自分の考えを新たな観点で見つめて吟味し，再構成することである。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(3)の「ア　新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇考えの形成，共有【②】

現代の国語	言語文化	論理国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。（再掲）	キ　設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に，必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

キ　設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に，必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

主体的に学習に取り組む態度を育成するためには，与えられた課題について学習を進めるだけでなく，それまでの学習経験や身に付けた能力などを生かしながら，課題を自ら設定し探究していく学習が大切である。文章を読んだ後の生徒の興味・関心のもち方は多様であり，設定する課題も，内容，表現の両面にわたる。

題材には，人文科学系，社会科学系，自然科学系等の別を問わず，例えば，新書や新聞の社説などで取り上げられる様々な分野の学術的な学習の基礎的な課題に対して，論点が明確になるようなものを設定する必要がある。

関連する複数の文章や資料を基にとは，題材を考察するための手立てである。学校図書館，地域の図書館，インターネットなどで参考となる資料を調べたり，現地に出かけて取材したりするなど，様々な方法によって設定した題材に関する情報を収集，整理し，それについて分析，考察を行って分かったことや考えたことをまとめるなどの学習を取り入れることである。

必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりするとは，例えば，学術的な学習の基礎について，資料を読んで得た様々な知識や思想を通して，自分の思想を新たな視点で捉え直して，より深めたり発展させたりすることである。

○言語活動例

現代の国語	言語文化	論理国語
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。	ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。	ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，批評したり討論したりする活動。
イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。	イ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を読み，それらの内容を基に，自分の考えを論述したり討論したりする活動。
	ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。	ウ　学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み，自分の考えを論述したり発表したりする活動。
	エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。	エ　同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。
	オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。	オ　関心をもった事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書や短い論文などにまとめたりする活動。

ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，批評したり討論したりする活動。

現代の社会生活で必要とされる論理的な文章（論説文や解説文，社会生活に関する意見文や批評文等）や実用的な文章（法令文・記録文・報告文，宣伝文等）を，目的をもって読み，文章の中心的な内容を引用したり要約したりしながら，批評したり討論したりする活動を示している。

批評するとは，文章の内容や形式など，対象とするものの特性や価値などについて，論じ，評価することである。**討論**するとは，文章の内容や形式など，対象とするものの特性や価値などについて，それぞれの立場からの考えを述べ合うなどして，考えの相違点や共通点を基に論じ合うことである。

批評したり討論したりする活動には，論理的な文章や実用的な文章など文章の種類を踏まえて，その文章が書かれた目的や対象を明確にしながら，要旨を把握し，あらかじめ**内容や形式**に対する自分の考えをもつことが必要である。

内容や形式については，書き手の考えの妥当性や適切さを判断することや，賛否の立場を明確にすることのほか，論点が妥当かどうか検証することや，論理の形式や展開を検証すること，資料との関連の適合性を判断することなどが必要となる。

その上で**批評したり討論したりする**とは，内容や形式について，吟味の結果を評価として述べたり，評価として述べられたことを，互いに共有して，その適否や妥当性を検討して自分の考えを深めたりする活動である。

イ　社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を読み，それらの内容を基に，自分の考えを論述したり討論したりする活動。

論説文やその関連資料とは，ある事柄について書き手の分析を踏まえて書かれた解説と主張が含まれた論理的な文章や，分析や主張の根拠となった図表などを含む種々の情報，同じ話題について異なる立場で書かれた文章などの様々な資料のことである。

自分の考えを論述するとは，論文を書く活動のほか，意見文や論説文などの文章を書く活動も想定できる。様々な観点から自分の意見や考えを論述するためには，多様な資料を集め，調べたことを整理する中で，自分の考えを組み立てた過程を振り返り，再検討することが必要となる。

また**討論**する活動とは，評価として述べられたことを，互いに共有して，その適否や妥当性を検討して深める活動である。

これらの指導に当たっては，**社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料**を読んだ内容を基に，自分の考えを構築する場面を適切に設定することが重要である。

ウ　学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み，自分の考えを論述したり発表したりする活動。

学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文とは，例えば，専門的な学習の入門者向けに書かれた概説書や新書の文章，また論文の要旨などを指す。指導に当

たっては，これらの文章を読んだ内容を基に，自分の考えについて新たな視点から検証して再構築する場面を適切に設定することが重要である。

自分の考えを論述したり発表したりするとは，論文を書くほか，意見文，論説文などの文章を書いたり，ポスターセッションやプレゼンテーションなどの発表の方法を用いたりすることができる。その際には，自分の考えを書いたり，発表したりするだけでなく，読み手や聞き手に対してどのように伝わったか，改めて検討する場面を設定すると効果的である。これらの活動を通して，学術的な文章に対しての理解を深めることを意図している。

エ　同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。

同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章とは，例えば，ある事柄について賛否が分かれる文章や，同じ書き手の考え方の変遷が分かる文章，対立する視点をもつ文章などを指し，近代以降の論理的な文章や現代の社会生活に必要とされる実用的な文章のほか，翻訳の文章や古典における論理的な文章なども含んでいる。

これらの文章を，**読み比べて比較**することで，それぞれの文章がもつ論点の共通点や相違点を整理して論じることができる。その上で，**論じたり批評したりする**際には，対象となる事柄について，そのものの特性や価値などについて，異なる論点をもつ複数の文章を読み比べることによって得た情報を踏まえて，根拠をもって論じたり評価したりすることが効果的である。

オ　関心をもった事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書や短い論文などにまとめたりする活動。

関心をもった事柄について様々な資料を調べる際には，題材を考察するための手立てとして，学校図書館，地域の図書館，インターネットなどで参考となる資料を調べたり，実地に調査したりして得た資料を整理，分析して，分かったことや考えたことをまとめるなどの学習を取り入れることが大切である。

探究する過程においては，それらの集めた情報を整理して，それらの内容を基に，仮説を設定したり推論したりするなどの過程を経て，自分の考えを形成することが必要である。形成された自分の考えを，場面や目的に応じて，適切に必要な文章にまとめて，分かりやすく伝える場面を設定することが重要である。

4　内容の取扱い

(1) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A書くこと」に関する指導については，50 ～ 60 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「A書くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「A書くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章や資料を読んだり，情報を整理したりする時間も含めている。

「A書くこと」に関する指導には，**50 ～ 60 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「A書くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「B読むこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，50 ～ 60 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「A書くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「A書くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「A書くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「B読むこと」の指導との関連を図ることも重要である。

イ　「B読むこと」に関する指導については，80 ～ 90 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「B読むこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「B読むこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を読んでいる時間だけではなく，読んで形成された考えについて話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。

「B読むこと」に関する指導には，**80 ～ 90 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「B読むこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「A書くこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，80 ～ 90 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，

「Ｂ読むこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「Ｂ読むこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「Ｂ読むこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「Ａ書くこと」の指導との関連を図ることも重要である。

(2) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「Ｂ読むこと」に関する指導については，必要に応じて，近代以降の文章の変遷を扱うこと。

「論理国語」の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」に関する指導における文章の扱いは，実際にそれを読むことによってその構造と内容を把握し，必要な情報を見付けたり，論の進め方について考えたりして，考えを深めたり発展させたりすることに主眼を置いている。したがって，それに資するよう，**近代以降の文章の変遷**については，**必要に応じて**扱うこととしている。

近代以降の文章の変遷とは，近代以降の文章や文体の移り変わりのことである。また，読んだ文章の書き手がそれぞれの書かれた時代にどのような考えをもち，それをどのような文章や文体で書いているのかを知ることは，文章についての理解を更に深め，それを契機にして発展的な読書に結び付いていく。

必要に応じて扱うとは，これらのことを踏まえ，生徒の発達の段階や科目の趣旨などを考え合わせ，文章の内容や特質を理解する上での必要に応じて取り上げるということである。

(3) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章とすること。また，必要に応じて，翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，**近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章**とすることを示している。

近代以降の論理的な文章とは，明治時代以降に書かれた，説明文，論説文や解説文，評論文，意見文や批評文，学術論文などの論理的な文章のことである。

一方，**実用的な文章**とは，一般的には，実社会において，具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれた文章のことであり，報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書などの実務的な文章，法令文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。また，インターネット上の様々な文章や電子メールの多くも，実務的な文章の一種と考えることができる。これらのうち，ここでは，**現代の社会生活に必要とされる**ものを取り上げることを示している。

論理的な文章も実用的な文章も，小説，物語，詩，短歌，俳句などの文学的な文章を除いた文章である。論理的な文章や実用的な文章については，その目的が言語表現としてどのように実現されているか，その言語表現が社会生活などにおける目的の達成のために実際にどのように機能することが期待されているか，などの視点に立って読んでいくことが求められている。

また，**必要に応じて，翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができる**ことを示している。**翻訳の文章**については，近代以降の我が国の学術及び科学技術の発展への寄与という観点から考えるとき，思想，社会学，科学論文などの翻訳の文章は，現代の我が国の論理的な文章の基本的な枠組みを考える上での重要な要素となっていること，また，グローバル化の進展に伴って多様な考え方を理解し，国際理解を深めることが一層求められているということを踏まえている。また，**古典における論理的な文章**については，ここでは，例えば，古典における，歌論や俳論，芸術論，思想家による諸論などを指している。これらは，古典と近代以降の論理的な文章との差異を考えたり，書かれた時代における論理の在り方を知り，それらを比較・対照したりすることが，近代以降の我が国の文章に表れる論理の在り方の理解に資することを踏まえている。これらについては，必要に応じて用いることができることとしていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。

> イ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」及び「B読むこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう**，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示している。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通して，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元など

における具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を的確に理解する資質・能力を育成する「B 読むこと」の領域の指導に当たっては，単に読ませるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすることも難しくなるため，読むとともに，把握したり解釈したり考えたりしたことを表現する必要がある。この場合，読む資質・能力を育成するために書く活動を取り入れることもある。ただし，論述の活動だからといって必ず「A 書くこと」の領域の指導であるとは限らず，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

第４節　文学国語

１　性格

国語は，長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤をなすものであり，また文化そのものでもある。特に文学は，人々の心の機微を描き，日常の世界を見つめなおす契機として，我々の文化を築く上で重要な役割を果たしてきた。豊かな感性や情緒を備え，幅広い知識や教養をもち，思考力，判断力，表現力等を身に付けるためには，文学作品などの文学的文章を通した様々な学習が必要不可欠であり，今後の文化の継承と創造にも欠くことができないものである。

「文学国語」は，このことを踏まえ，新たに置いた選択科目である。共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力，判断力，表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する科目として，深く共感したり豊かに想像したりして，書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視している。

そのため，様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の２事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ａ書くこと」，「Ｂ読むこと」の２領域から内容を構成している。深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばしたり，創造的に考える力を養ったりなどして，書いたり読んだりする資質・能力の育成を目指すため，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」を充実させるとともに，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ｂ読むこと」とともに「Ａ書くこと」の指導事項を充実させている。

この科目では，読み手の関心が得られるような，独創的な文学的な文章を創作するなどの指導事項，文学的な文章について評価したりその解釈の多様性について考察したりして自分のものの見方，感じ方，考え方を深めるなどの指導事項を設けるとともに，課題を自ら設定して探究する指導事項を設けている。

２　目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2) 深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに，創造的に考える力を養い，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様，「文学国語」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。共通必履修科目「言語文化」と同じく，「文学国語」では，**生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能**としている。

生涯にわたる社会生活とは，高校生が日常関わる社会に限らず，現実の社会そのものである実社会を中心としながらも，生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している。こうした広く社会生活全般を視野に入れ，社会人として活躍していく高校生が，生涯にわたる社会生活において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

また，「文学国語」では，科目の性格を踏まえ，共通必履修科目「言語文化」と同じく，**我が国の言語文化に対する理解を深める**としている。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。**深く共感したり豊かに想像したりする力**については，共通必履修科目と同じく，**伸ばす**としている。「文学国語」においては，特に文学的な文章や作品などを書いたり読んだりして，その内容や表現等を吟味したり評価したりすることなどを通して，言葉の適切さや美しさなどを判断する感覚を洗練し，自らの言葉に対する感性を磨いていくことなどを示している。**創造的に考える力**とは，他者の考えと自分の考えを吟味したり検討したりすることを通して，自分で新しい考えや発想を生み出す力のことである。

また，**伝え合う力**の育成については，共通必履修科目と同じく，**他者との関わりの中で**としている。**他者**とは，広く社会生活で関わりをもち，世代や立場，文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには，こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達，相互理解を進めていく必要があり，状況や場面に応じた他者との関わりの中で，必要な事柄を正確に伝え，相手の意向を的確に捉えて解釈したり，効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，共通必履修科目と同じく，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，共通必履修科目と同じく，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させる**としている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち，生涯にわたる読書習慣の基礎を築き，社会人として，考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては，共通必履修科目では，「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち」としていたものを，**我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め**とし，より高めている。**我が国の言語文化**とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「文学国語」では，これらのうち，特に，文化としての言語，多様な言語芸術や芸能などの価値に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては，小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり，全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は，国語科だけではなく他教科等も含めて，社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては，こうした態度を，**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は，以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力，人間性等」は，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

3 内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　言葉には，想像や心情を豊かにする働きがあることを理解すること。
イ　情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
ウ　文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。
エ　文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使うこと。

○言葉の働き

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，想像や心情を豊かにする働きがあることを理解すること。

ア　言葉には，想像や心情を豊かにする働きがあることを理解すること。

言葉には，想像や心情を豊かにする働きがあることを理解することを示している。

例えば，「夏の太陽に焼かれた丹色の砂の大海が，肉体から容赦なく水分を奪っていく」という表現には，見える，感じる，聞こえるという言葉は使われていないものの，赤茶けた砂漠が眼前に広がる視覚情報や「灼熱の炎天下」という体感を伴った感覚情報，あるいはそうした過酷な環境下にある書き手（話し手）の激しい息遣いといった聴覚情報などが内包されており，そうした環境を直接的に経験したことのない読み手（聞き手）は，書かれた表現から言外の情報を読み取ることで，想像力を働かせ，具体的な像を脳裏に描き出すことができる。言葉にはこのように**想像を豊かにする**働きがある。

なお，想像力を働かせることは，**心情を豊かにする**ことにも通じる。例えば，「土砂降りの中を泣きながら家に戻った彼は，もう一度彼女に思いを伝えたくて電話を手に取り画面を見つめた。一時間後，ゆっくりと電話を切った彼が窓の外を見ると，雨はいつしかやんでいた」という表現には，喜怒哀楽といった具体的な心情を表す言葉は使われていないものの，読み手は，「土砂降り」，「泣きながら」，「ゆっくりと」といった天気や行動の描写に「彼」の心情を重ねることで，「彼」の心の動きを理解することができる。具体的な喜怒哀楽を表す言葉を用いなくても，心情を表現することは可能であり，想像力を働かせるこうした言葉のもつ効果に触れることによって**心情を豊かにする**ことができる。

文学的な文章においては，このように，読み手の想像を喚起したり，人物の心の機微を

表したりする表現が見られる。絵画や映像のように，視覚による情報から対象を捉えなくても，言葉によってあたかも目の前にあるかのように対象を捉えることができ，実際に存在しない世界や人物の心の動きでさえも，言葉によって表現したり想像を喚起したりすることができる。ここではそうした言葉の働きを示している。

〇語彙

現代の国語	言語文化	文学国語
エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	イ　情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

イ　情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることを示している。

情景の豊かさや心情の機微を表すとは，読み手が文章の一場面を，様々な景物を想起して奥行きをもって捉えたり，人物の心の微妙な動きや変化について，実感を伴って理解できたりするように表現することである。こうした表現をするために必要な語句の獲得については，すでに「言語文化」を中心として学習している。

情景の豊かさを表す語句には，例えば，漢語として，「爛漫（らんまん）」，「錦繡（きんしゅう）」，和語として「つややか」，「かぐわしい」，成語として「山が笑う」などがあり，**心情の機微を表す語句**には，例えば，漢語として，「慙愧（ざんき）」，「悄然（しょうぜん）」，和語として，「誇らか」，「すげない」，成語として「肩をいからす」などがある。また，「愛日」や「寂寥（せきりょう）」は**情景の豊かさ**や**心情の機微**のどちらも表す語である。文学的な文章を読み，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深めていくために，日常的な使用頻度にかかわらず広く語彙の理解を深め，知識として語彙量を増やしていくことは重要である。一方で，「夜の底が白くなる」や「握った手はいつもより冷たかった」のように，一つ一つの語句「夜」，「底」，「白い」，「握る」，「手」，「冷たい」が情景や心情を表さない比較的平易なものであっても，語句の組合せや心情を投影できる語句の使用など，文の構成や表現の技法などを工夫することで，情景や心情の機微を巧みに表すことができる。

文学的な文章を読む場面だけでなく，文学的な文章を書く場面も適宜設定し，生徒が表現によって生まれる効果を考えながら語句を選択していくことで，言葉の適切さや美しさ

についての感覚を磨き，表現の効果について判断する能力を一層向上させることが大切である。

〇文や文章

現代の国語	言語文化	文学国語
オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。	ウ　文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。

ウ　文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。

中学校第３学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ウ　話や文章の種類とその特徴について理解を深めること。」を受けて，文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めることを示している。

文学的な文章の種類には，散文として小説，随筆，紀行文，日記などが，韻文として詩や俳句，和歌，漢詩，連歌などがある。

さらに，小説には，長編小説，短編小説といった分量に即した種類や，歴史小説，私小説，SF 小説，推理小説といった内容・形式に即した種類などがあり，詩や俳句にも，定型詩，自由詩や，有季定型俳句，自由律俳句などの種類がある。

文学的な文章の特徴には，構成の特徴や表現の特徴がある。構成の特徴には，時系列に沿って出来事が述べられているもの，冒頭に配置された結部から時間を遡って出来事が述べられるもの，プロローグとエピローグに本編が挟まれているものなどがあり，表現の特徴には，詩などに見られるような，図や柄として見えるように文字列の配置を工夫したり，抽象的な言葉を用いて作品全体のテーマを読み手に想起させたりするものなどがある。

こうした**文学的な文章の種類や特徴**に関する理解を深めることは，例えば，文学的な文章を読み進めていく中で，書き手と主人公の人生に共通点を読み取り，今読んでいる文章が私小説であると気付くことでその面白さを探求しようとすることがあるように，文学的な文章を読み進める際の読みの観点を獲得することにも通じ，文章の内容を読み取る上での一助となる。

一方で，文学的な文章の種類や特徴は多角的に捉えるべきものであることにも留意する必要がある。短編小説として捉えていた作品群が，作品群全体として長編小説として捉えることができたり，単体の作品として捉えていた和歌がある和歌の返歌になっていることに気付いたりすることで，文学的な文章を捉える観点が変わることがあるということについても理解する必要がある。

指導に当たっては，例えば，「A書くこと」の(1)のイとの関連を考え，文学的な文章の種類や特徴に関する理解を深めることで，文学的な文章を創作する際に，読み手の関心を引き付ける文章の構成や展開を工夫することが考えられる。さらに，「B読むこと」の(1)

のアとの関連を考え，文章の種類を踏まえて内容等を的確に捉えることができるよう指導することも考えられる。

なお，**それに関する文章**とは，文学的な文章について論じた文章などであり，文学評論や書評などがそれにあたる。文学評論の種類には，一つ一つの文学作品について論じた作品論，特定の作家について論じた作家論，文学における読者の役割について論じた読者論，文学の歴史について論じた文学史論，時間軸や空間軸の観点から複数の文学作品について論じた比較文学論などがある。文学的な文章について論じた文章の種類についても同様に理解を深め，「B読むこと」の(1)のキとの関連を図ることが考えられる。

〇表現の技法

現代の国語	言語文化	文学国語
カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。	エ　文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使うこと。

エ　文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使うこと。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のカ及び「言語文化」の〔知識及び技能〕の(1)のオを受けて，文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について，体系的に理解し使うことを示している。

文体については，文章を類型的に捉える立場や，書き手の個性が表れたものと捉える立場などがある。前者における**文体の特徴**としては，和文体や漢文体，和漢混交文体のように言語の構造や表記に基づく分類，常体（である調）や敬体（です・ます調）のように文章の様式に基づく分類などがあり，時代や社会的慣習によって異なる文章の構成や様式の違いがある。後者，特に**文学的な文章における文体の特徴**としては，書き手によって，常体と敬体といった文章の様式や，一文の長さ，改行のタイミング，カギ括弧や「…」，「！」，「？」といった文章記号の採用，主体や客体の省略，**修辞**や用語の使い方などに違いがあり，こうした違いは書き手の個性として捉えることができる。

修辞とは，書き手が自分の思いや考え，ものの見方，感じ方，考え方などをより効果的に表現しようとする言語的な作為のことを広く指すが，ここでは特に，比喩，擬音語・擬態語，体言止め，押韻，畳語など言葉を効果的に用いて適切に表現する**表現の技法**を指す。これら表現の技法の特色について理解するとともに，適切な場面で使用できるようにすることが大切である。

体系的に理解し使うとは，例えば，修辞であれば，比喩にも直喩や隠喩にはじまり，提喩，諷喩，換喩などがあることについて，それらの共通点や相違点を踏まえた上で，個別の**文体の特徴や修辞などの表現の技法**を，文学的な文章が書かれた時代や，文章の中で使

用されている場面などに即して整理し，それら文体の特徴や表現の技法が使われるようになった背景をその効果とともに理解し，効果的な文章を書くために実際の場面で使用していくことを示している。

指導に当たっては，例えば，「B読むこと」の(1)のアとの関連を図り，文学的な文章を読む上で，文体の特徴及び用語や修辞表現の使い方，また，それによって生まれる効果を理解することで，文章の表現を味わい，深い内容の理解につながるように指導することも考えられる。また，「A書くこと」の(1)のウとの関連を図り，文学的な文章の文体の特徴や修辞表現の特色に関する理解を深めることで，読み手を引き付ける独創的な文章の創作に役立てられるように指導することも考えられる。

(2) 我が国の言語文化に関する事項

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深めること。
イ　人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

○伝統的な言語文化，言葉の由来や変化，多様性

現代の国語	言語文化	文学国語
	ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。 ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。 エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながり	ア　文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深めること。

	について理解すること。 オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。	

ア　文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深めること。

「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)のアを受けて，文学的な文章を読むことを通して，我が国の言語文化の特質について理解を深めることを示している。

我が国の言語文化の特質とは，古典や外国の文化を享受して形成された我が国の言語文化の独自の性格やその価値を指す。

書き手のものの見方や考え方が小説や詩，短歌などの形をとって表れているのが作品や文章である。個々の作品や文章には，それぞれの書き手の個性が表れていることはもちろんだが，巨視的に捉えると，作品や文章を集合的に捉えた時代の特質，さらには現代につながる我が国の文化全体の独自性がある。文学的な文章を読むことを通して，それらを生徒が理解することを求めている。

グローバル化が進展する社会においては，我が国の文化における自然の捉え方や死生観など，先人から脈々と受け継いできた言語文化やその背後にある精神性を生徒一人一人が自覚するとともに，それらを尊重する態度を育成していくことが大切である。

〇読書

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。	イ　人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

イ　人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(3)のア，「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)のカを受けて，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

ものの見方，感じ方，考え方を豊かにするためには，書き手の意図を捉え，共感したり，疑問に思ったり，思索したりして，文章を読み味わうことが大切である。特に文学的な文章の多くは，様々な言葉によって豊かな情景や心情が表現されている。文学的な文章を読むことで，生徒は物語や詩歌の世界に身を置き，物語の登場人物に我が身を重ねて喜

びや悲しみを共有したり，書き手の心情に寄り添い，書き手の人生を追体験したりすることができる。人と人とのつながりの大切さや人生を謳歌する素晴らしさを感じたり，また時には，世の中の理不尽さや生きていくことの大変さについて文章を通して悟ったりすることもある。文学的な文章を読むことによって生徒は自らの心情を豊かにし，思考力や想像力を伸ばし，人間，社会，自然などに対して自分の考えをもつようになっていく。

また同じ文学的な文章を読んだとしても，年を重ねたり，ある具体的な経験をしたりすることで，以前読んだ時とは異なる印象や感想をもったり，文章から受け取るメッセージが変化したりすることがあり，新たなものの見方，感じ方，考え方の獲得につながることがある。目標にあるように，生涯にわたって読書に親しむことで，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにすることは，充実した人生を送るうえで欠かせないことであるという**読書の意義と効用**について，理解を深められるよう指導していく必要がある。

指導に当たっては，例えば，「B読むこと」の⑴のカやキとの関連を図ることなどが考えられる。その際，学校図書館を活用し，司書教諭や司書などとも連携して適切な読書指導を行い，生涯を通じて読書に親しむ姿勢を養うことが大切である。

〔思考力，判断力，表現力等〕
A　書くこと

⑴ 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　文学的な文章を書くために，選んだ題材に応じて情報を収集，整理して，表現したいことを明確にすること。

イ　読み手の関心が得られるよう，文章の構成や展開を工夫すること。

ウ　文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。

エ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

⑵ ⑴に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　自由に発想したり評論を参考にしたりして，小説や詩歌などを創作し，批評し合う活動。

イ　登場人物の心情や情景の描写を，文体や表現の技法等に注意して書き換え，その際に工夫したことなどを話し合ったり，文章にまとめたりする活動。

ウ　古典を題材として小説を書くなど，翻案作品を創作する活動。

エ　グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど，共同で作品制作に取り組む活動。

〇題材の設定，情報の収集，内容の検討

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。	ア　文学的な文章を書くために，選んだ題材に応じて情報を収集，整理して，表現したいことを明確にすること。

ア　文学的な文章を書くために，選んだ題材に応じて情報を収集，整理して，表現したいことを明確にすること。

文学的な文章を書くためには，**題材**とともに文章の種類を決めることが必要である。そのためには，何について書くのかという内容だけではなく，どのような形式で書くのかということについても考えなければならない。物語や小説であれば，身の回りの出来事を基にしたものにするのか，想像した世界を描くのかを決めた上で，描こうとする舞台や人物をどのような言葉で表現するのかということを明らかにしていくことになる。詩歌であれば，自己の経験を振り返りつつ内省したり，描こうとする情景を思い浮かべたりしながら，題材を決めることになる。題材は，社会生活の一部として身の回りにあるものから想像の世界に至るまで，広く可能性を認めることで，創作の幅が広がり，創作を楽しむ態度が養われる。

選んだ題材に応じて情報を収集，整理する際には，まず，設定した題材に関連する情報を，なるべく幅広く，多く集めることが必要である。収集した情報を整理するという過程を通し，設定した題材の妥当性について再度検討を行い，自らが伝えたいことや感じてもらいたいことは何か，どのような方法で表現したいのかについて，より明確にしていくことが重要である。その際には，相談や協議などを通して他者の意見を取り入れ，できるだけ詳しく情報を集めて，書こうとする題材を多角的に考察する機会を設けることが大切である。また，**整理**には，自分がこれから創作しようとする文章が，他者が既に創作した作品と類似していないかどうか，といったことについて情報機器等を用いて精査することも含まれる。

〇構成の検討

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。	イ　読み手の関心が得られるよう，文章の構成や展開を工夫すること。

ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。		

イ　読み手の関心が得られるよう，文章の構成や展開を工夫すること。

読み手の関心が得られるようとは，自らが伝えたいことや感じてもらいたいことを，想定する**読み手の関心**を引くように伝えることを意味している。例えば，物語や小説を書く際に，筋立ての上でどのような工夫があれば，読み手がその先を読み進めようとするかを考えたり，読み手が読後感として作品全体に興味をもつか検討したりすることなどが，読み手の関心を得るためには必要である。

構成や展開を工夫するとは，物語や小説の場合，例えば，筋立てにおいて，登場人物の間に対立や葛藤などを設定したり，一見重要性に乏しいように思われる内容を物語の結末に関わる伏線として配置したりするなど，登場人物や場面，物語の結末をどのようにするのかという設定などを工夫することである。これは物語や小説に限らず，例えば，短歌や俳句などを連作するときの配列の工夫なども考えられる。その際には，自分の書く文章の読み手に，どのようなことを考えてほしいか，その考えを引き出すためには，どのような構成や展開がふさわしいかなどについて検討することも必要である。

〇考えの形成，記述

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。（再掲） ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	ウ　文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。

ウ　文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して，読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。

文体の特徴については，和文体と漢文体，散文体と韻文体，常体と敬体といった形式に基づくものから，文の長短，語句の用い方，展開の仕方といった書き手の個性に基づくものまで，様々な捉え方や整理の仕方がある。**修辞の働き**については，書き手が自分のものの見方，感じ方，考え方をより効果的に表現するためのものであり，比喩法，倒置法，擬人法など散文・韻文の両方に使われる技法や，枕詞，序詞，掛詞，縁語，本歌取りなど主に和歌の世界で用いられる技法などがあるが，これらは，豊かな表現のために時を経て練り上げられてきたものである。これらを適切に用いることにより，自らの伝えたい内容をより効果的に表現することが可能となる。特に，伝統的に用いられてきた修辞を取り入れることは，先人の知恵を借り，豊かな表現をすることにつながる。

読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫するとは，言葉一つ一つのもつ意味や役割，用い方を十分に理解した上で，それらを，自らが伝えたいことや感じてもらいたいことに的確に結び付けて用いることである。同じ題材であっても，文体を変えたり，修辞を取り入れたりすることで，文章の印象とともに内容の把握や解釈が変わるということを生徒に実感させる必要がある。このようなことを踏まえて表現を工夫していくことが，その書き手ならではの表現をしていくことになる。そのような書き手らしさをどのような言葉を使えば表せるかということについても工夫を凝らす必要がある。文学的な文章の創作の場合，書き出しの工夫として，登場人物の紹介や描写から始めたり，登場人物の印象的な行動や行為の叙述から始めたり，登場人物が抱える問題を提示して読み手の注意を引き付けたりすることなどが考えられる。また，登場人物同士の会話文から始めたりすることも，**読み手を引き付ける**工夫となる。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)のイとの関連を図り，文章の書き手が，日常生活や社会生活における読書において印象に残った，情景の豊かさや心情の機微を表す語句や表現を書き留めるなどして，それを自分の書く文章の中で使うことが大切である。

○推敲，共有

現代の国語	言語文化	文学国語
エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	エ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を

		捉え直したりすること。

エ　文章の構成や展開，表現の仕方などについて，伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

ここでの**吟味**とは，創作した文章について，学習活動としての自己評価や相互評価を通し，自分が意図したことを読み手が感じているか，また自分が意図していなかったことを読み手が感じていることはあるのかということを確認したり，物事の様子や場面，登場人物の行動や心情が，表現を通してありありと想像できるかということを検討したりすることである。その上で，自らの伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるような文章にするための工夫について考えることである。なお，吟味を行うためには，「B読むこと」の指導との関連を図ることが必要である。

読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりするとは，これまでの創作活動で自らが行ってきた表現の工夫や，意図したものではない自らの表現の特長などについて，改めて客観的に整理し認識することを指す。これにより，次に創作を行う際には，より効果的な表現の工夫を行うことが可能となる。

他者に自分の書いた文章の読み手となってもらい，意味の通じないところはないか，登場人物の言動が効果的に描かれているか，登場人物の間の対立や葛藤などが効果的に描かれているか，話の展開に引きつけられたか，登場人物像が捉えやすいか，結末に満足したか，文字や表現に間違いはなかったか，気に入った部分はどこか，などの質問をして，**読み手からの助言**を受けることで，自分の文章をよりよくする手掛かりが得られ，**自分の文章の特長や課題を捉え直**すことができる。

なお，作品を読んだ教師が，ほめる，質問する，書き出し方のアイディアを伝えるなど，生徒に指導・助言することも重要である。

○言語活動例

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。	ア　自由に発想したり評論を参考にしたりして，小説や詩歌などを創作し，批評し合う活動。
イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知		イ　登場人物の心情や情景の描写を，文体や表現の技法等に注意して書き換え，その際に工夫したこ

文などを書いたりする活動。 ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。		となどを話し合ったり，文章にまとめたりする活動。 ウ　古典を題材として小説を書くなど，翻案作品を創作する活動。 エ　グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど，共同で作品制作に取り組む活動。

ア　自由に発想したり評論を参考にしたりして，小説や詩歌などを創作し，批評し合う活動。

自分が表現したいことを，小説や詩歌などの形式を用いて自由に表現する言語活動を示している。

小説や詩歌などを創作することは，小学校及び中学校においても取り上げられているが，高等学校においては，物事を見つめ，思考し，想像し，構想し，それを表現する活動の一層の充実が必要となる。

自由に発想するとは，固定概念に捕らわれずに豊かに発想することである。**評論を参考にする**とは，文章の書き方について述べた説明的な文章や既存の作品に関する評論を読むことで自分の文章を創作する際の着想を得ることである。それらによって新しい視点を獲得し，自らの創作に生かすということもある。

創作する文章としては，小説や詩歌のみならず，随想や戯曲，伝記他あらゆる文学作品が想定される。それらの中から，授業や生徒の状況に応じて適宜選択することが望ましい。

また，創作した作品について相互に**批評し合う**ことによって，書き手は作者という立場からは想像し得なかった読み手の受け止め方を知ることができる。読み手の受け止め方を踏まえ，作品全体の構成や語句の選択などについて振り返るなど，その内容を分析することで，自らの文章をよりよいものにしていくことについての見通しをもつことができる。なお，**批評**するとは，ここでは，対象とする作品などの，どこが大切なのかを見極めることが中心であり，その上で論評することが含まれる行為である。

イ　登場人物の心情や情景の描写を，文体や表現の技法等に注意して書き換え，その際に工夫したことなどを話し合ったり，文章にまとめたりする活動。

登場人物の心情や情景の描写を，文体や表現の技法等に注意して書き換える言語活動を示している。既存の文学的文章を**文体や表現の技法等に注意して書き換える**に当たっては，書き換えることによって生まれる効果を想定する必要がある。その効果を考慮しながら，文章の目的に応じて，表現上の工夫を意図的に行うことは，読み手を引き付ける独創

的な文章を創作するためには欠かすことができない。

例えば，三人称の視点で書かれた小説の一場面を特定の登場人物からの一人称の視点で書き換える場合，当該人物の心情描写は三人称で書かれたものよりも，自ずと詳細なものとなる。視点を変えて書き換えることによって，内容や表現はどのように変化するのか，あるいは逆に変化させないためにはどのようにすればよいのか，書き換えの方法を工夫することにより，**文体や表現の技法**についての理解を深めることができる。

また，書き換える前と後の文章を比較して，その特徴や効果の違いを明らかにした上で，「場面設定で工夫したこと」というテーマで話し合ったり，書き換えによって生まれた効果についての解説を文章にまとめたりすることは，自己の気付きを客観的に捉えることにつながる。

ウ　古典を題材として小説を書くなど，翻案作品を創作する活動。

古典を題材として小説を書くなど，文学作品を翻案する言語活動を示している。

翻案作品を創作するためには，基になる文学作品を客観的に，分析的に読む必要がある。ただし，この言語活動では書き手が基の作品から読み取った内容が，読み手に効果的に伝わる構成や表現の工夫をすることに重点を置く。

古典を題材として小説を書く場合，まず題材となる古典には，それ自身がもつ特徴的な世界観や背景，設定，表現などがある。ここでの**翻案**とは，現代語訳のような単純な置き換えとは異なり，題材となる古典が元来もっているものを損なわずに，作品としての新規性を出すためにどれくらいどのように変えるのか，ということも含めて書き手に委ねられており，文学的な文章の創作を行う活動だといえる。

古典の作品や文章には，登場人物の心情に関する表現がやや平板である一方で，情景描写という点では，風景や衣装等を詳細に描写するというように，近代以降の文章とは異なる特徴が見られるものもある。このような特徴を踏まえながら，作品を翻案するということは，古典の表現と近代以降の文章による表現を行き来し，それぞれの言葉や表現のもつ意味を比較し分析することとなり，自由な発想で一から創作を行う場合とは違う視点をもって，言葉や表現の特徴を捉えることができる。

我が国の言語文化においては，しばしばこうした翻案が新しい言語文化を担う行為として機能してきた。口承文芸だけでなく，和歌の本歌取りや謡曲などもまたその産物といえる。近世や近代以降の小説の多くもまた我が国や中国の伝統的な言語文化を基にしていることは言うまでもない。このような背景を踏まえ，翻案という言語活動を通して，言語文化への理解を深め，読書活動に生かしていくことも大切である。

エ　グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど，共同で作品制作に取り組む活動。

複数の生徒が共同で文学作品を創作する言語活動を示している。

ここで触れている共同での創作には，複数の書き手があらかじめ相互に情報を共有した上で一つの作品を創作する場合と，事前に相互の情報共有をしないで書き手の情報を別の

書き手が受け取って表現しながら一つの作品を創作する場合とが想定される。

複数の書き手があらかじめ相互に情報を共有した上で一つの作品を創作する場合には，例えば，複数の書き手が題材を共有し，その題材に基づいた随筆を創作し，それを踏まえて別の生徒が新たに随筆を書き継いで一つの作品にするといった活動などが考えられる。こうした活動のためには，題材の決定からイメージの共有まで様々なことを想定して，事前にグループ内で話し合っておかなければならない。また，効果的に書き継いでいくために，文体や表現の特徴についても，アイディアを出し合い，自分たちが表現したい内容にふさわしいものを決定していくということは，言葉の多様性や多義性について考えることにつながる。また，イメージを共有していても，複数の人間が共同で一つの作品を書き継ぐことは，想定外の展開を生み，創作の可能性を広げていくこととなる。

一方，事前に相互の情報共有をしないで書き手の情報を別の書き手が受け取って表現しながら一つの作品を創作する場合には，例えば，創作した短歌の上の句を踏まえて別の生徒が下の句を創作する活動などが考えられる。この活動は，生徒にとって表現の効果がいかなる理由で生まれたのかを考える契機となり，次の創作活動に生かすことにつながることが期待される。

共同で作品制作に取り組むことは，集団の中に自らを置き，自分の個性を共同作業の中でどのように生かしていくかを考えるという，自己相対化の視点として必要な活動である。こうした活動が，自分のものの見方，感じ方，考え方を客観的，分析的に捉える契機となる。

B　読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉えること。

イ　語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈すること。

ウ　他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察すること。

エ　文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察すること。

オ　作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深めること。

カ　作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めること。

キ　設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　作品の内容や形式について，書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。

イ　作品の内容や形式に対する評価について，評論や解説を参考にしながら，論述したり討論したりする活動。
ウ　小説を，脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。
エ　演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる活動。
オ　テーマを立てて詩文を集め，アンソロジーを作成して発表し合い，互いに批評する活動。
カ　作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。

〇構造と内容の把握

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉えること。

ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉えること。

「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)のアを受けて，文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開，描写の仕方などを的確に捉えることを示している。

文章の種類とは，ここでは，散文としての小説，随想，紀行文，日記など，韻文としての詩や俳句，和歌，漢詩，連歌などのことである。

内容や構成，展開とは，特に「散文」において，時系列に沿って出来事が述べられているもの，冒頭に配置された結部から時間を遡って出来事が述べられるもの，プロローグとエピローグに本編が挟まれているもの，などが考えられる。この事項では，文学的な文章のそのような構成や展開の仕方の特徴を的確に捉えながら読むことを求めている。例えば，小説の伏線に気づいてそれを作品の理解に役立てていくことなどが，構成や展開の仕方を的確に捉えることになる。**描写の仕方など**は，例えば「彼女には遠ざかる彼の姿がにじんで見えた」といったように，視点人物の視界に映った情景の描かれ方のことであり，こうした情景の描かれ方を吟味することは，その作品や文章の内容を深く理解することにつながる。

それらを**的確に捉える**とは，その作品や文章の文体上の特色や工夫，比喩，擬音語・擬態語，押韻や繰り返し使われている言葉などに気付き，内容や構成，展開，描写の仕方などを誤りなく把握することである。

○精査・解釈【①】

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。	イ　語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈すること。
	ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。	ウ　他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察すること。 エ　文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察すること。

イ　語り手の視点や場面の設定の仕方，表現の特色について評価することを通して，内容を解釈すること。

語り手の視点とは，詩歌や物語や小説などを語る者（語り手）の視点のことである。物語や小説が客観的な外部の視点から語られる時，語り手の視点から語られることになる。語り手が登場人物の一人であったり，登場人物の心理を説明したりするときに語り手の視点は「登場人物の視点」と重なる。このような語り手の視点を吟味することは，物語や小説などを深く理解することにつながる。複数の登場人物の「視点」の違いを意識することによって，多面的・多角的なものの見方を獲得することにもつながり，文章の深い意味付けが可能になる。

場面の設定とは，文学的な文章における状況や舞台の作られ方のことである。物語や小説の登場人物の言動や出来事の展開は，具体的な状況や舞台の中で行われている。その状況や舞台がどのようにかたちづくられているのかということを詳しく調べることは，その文章をより深く理解することにつながる。例えば，潜水具を装着した人物が海に潜るという「場面」で，人物に見えているもの（潮の流れに漂う海藻），聞こえるもの（チューブを通して大きく聞こえる呼吸音），匂い（マスクの防水剤），質感とそこから受ける感覚（口にマウスピースをはめたときのぎこちなさ），を調べるとその人物の置かれた状況が詳しくわかる。このように，文学的文章における場面の設定を分析することは，その作品のもつ意味を深く探る上で重要である。

表現の特色とは，ここでは，その文章の叙述がもつ独自性のことを指している。例え

ば，その文章に繰り返し現れる言葉などは，読者に重要なイメージを伝えていくために使われている。そのように繰り返し使われている言葉や特徴的な表現に注目し，その働きを吟味することによって，その文章の深い意味付けが可能になる。

ウ　他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察すること。

他の作品と比較するなどして，文体の特徴や効果について考察することを示している。

文体の特徴とは，作家や作品，書かれた時代によって異なる文章の構造や表記の特徴のことであり，その**効果**は，文体の特徴が読書を通して読者の感想や印象としてもたらされるものである。

一つ一つの作品を吟味・検討するだけでなく，**他の作品と比較する**ことによって，その作品の文体の特徴や効果を明らかにすることが可能になる。例えば，「文体」という観点で翻案小説とその原典とを読み比べることによって，それぞれの特徴やその効果を吟味することができる。

文体の特徴や効果について考察するには，他の作品と比較するほか，例えば，作家論や作品論のように，研究の成果として明らかにされている事柄を検証する方法が考えられる。

エ　文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察すること。

文章の構成や展開，表現の仕方を踏まえ，解釈の多様性について考察することを示している。

解釈は，**文章の構成や展開，表現の仕方**に対して，読み手がどのような意味付けをするかによって変わってくる。これは，作品や文章における言葉の意味が，作品や文章の中にあらかじめ埋まっているわけではなく，作品や文章に対する読み手の関わり方によって異なってくるからである。解釈は作品や文章の中にあらかじめ備わっている不変のものではなく，読み手がある根拠を基にして作品や文章との関わりの中で作り出すものである。

したがって，読み手に既有の知識や経験によって**解釈の多様性**が生み出される。そして，読み手に既有の知識や経験は絶えず変化するものであるため，作品や文章に対する唯一絶対の解釈を想定することは困難である。だからこそ，はじめから作品や文章の解釈が一つしかないと決め付けず，生徒の解釈に耳を傾けて，それを豊かに意味付け，解釈の根拠を確かめながらより広く深いものに育てていく必要がある。

また，初読のときと再読のときとで読み手の解釈が異なることもある。例えば，10 歳代で読んだ時と，30 歳代で読んだ時と，50 歳代で読んだ時とでは，同じ作品や文章でもその解釈が異なることは少なくない。一つの作品の再読の度に作品や文章に対する解釈が異なるのも，解釈に多様性があることの何よりの証である。

このように，読み手の知識や経験などによって，一つの作品や文章の解釈が異なり，どのような作品や文章に対しても解釈の多様性が見られることを授業の中で考察することが望まれる。解釈の多様性について考察し，読み手や，読み手の置かれた状況などによって解釈が異なることを学ぶことは，文学的文章を通じて，読み手同士が互いの解釈を理解し

ながら相互に関わり合うことであり，人生を豊かにするための大切な思いや考えを学ぶことにつながる。

〇精査・解釈【②】

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。	オ　作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深めること。

オ　作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深めること。

作品に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉えるとともに，作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，作品の解釈を深めることを示している。

作品に表れているものの見方，感じ方，考え方とは，作品の叙述や表現から捉えることのできる，書き手の認識や価値観のことである。そのような認識や価値観は，その作品の書き手が他の作品やその作品が書かれた時代の社会情勢や流行などの影響を受けている場合がある。その作品が書かれた当時の人々の価値観などや，社会的・文化的な背景がその作品に与えている影響などについて考え，**作品が成立した背景や他の作品などとの関係**を捉えることによって，作品の解釈を深いものにすることができる。

例えば，『平家物語』が『史記』の叙述に影響を受けていることを知ることで，『平家物語』の作り手が，平家の滅びに対する見方を物語として表現しようとして，先行する中国の史書を繙（ひもと）きながら苦心したことを学ぶことができる。また，『源氏物語』桐壺巻の叙述の一部が『白氏文集』を踏まえつつ登場人物の悲嘆を表現していることを知ることで，文化的教養を踏まえながら作品が成り立っていることを学ぶことができる。このように，文化伝統や同時代の教養を踏まえて作品が作られてきたことを学ぶことによって，作品がいつの時代であっても共同体の産物であることを知ることができる。

作品の独創が，文化的な慣習の受容と批判の中から生まれてきたことを知ることは，文学の創造と受容に関する考察を深めることになる。さらに，ある作品とそれと関連する資料（文書，映像，音声）とを比較したり，関係付けたりすることは，その作品に対する理解だけでなく，自分の視野を広げることにつながり，それまでの自分の**ものの見方，感じ方，考え方**を見つめ直し，より深めることにつながる。

このように，古典に限らず，近代以降の文章についても，様々な作品が，それに先立つ

作品との関係のなかで成り立っていることを知り，比較して読むことによって，それぞれの**作品の解釈を深める**ことができる。それは，文化や人間に対するものの見方，感じ方，考え方を豊かにすることでもある。

○考えの形成，共有【①】

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。	カ　作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めること。

カ　作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めること。

作品の内容や解釈を踏まえ，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めることを示している。

文学的な文章を読み，登場人物の考え方や生き方に共感したり，疑問を抱いたりして思索を深めることが，**人間，社会，自然など**人生の諸事についての自らの**ものの見方，感じ方，考え方を深める**出発点となる。小説などの文学的な文章における様々な個性をもつ人物との出会いによって人事の深みを知ったり，また韻文などから，社会や自然に対する書き手独自の見方を捉えたりすることによって，自分の既有の知識や経験が相対化され，それまでとは異なる価値をもつものとして，新たに意味付けられることがある。

作品を読むことを通して新たに形成した自分の考えを，それまでの自分の考えや他の読み手の考えと比較しながら，その共通点と相違点を整理し，広げたり深めたりすることによって，人間，社会，自然などに対するものの見方，感じ方，考え方を深めることができるようになる。

○考えの形成，共有【②】

現代の国語	言語文化	文学国語
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化につい	キ　設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める

図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	て自分の考えをもつこと。（再掲）	こと。

キ　設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

設定した題材に関連する複数の作品などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めることを示している。なお，**設定した題材に関連する複数の作品など**には，作品以外の資料，記録，映像，音声が含まれる。

一つの作品だけでなく，設定した題材に関連する複数の作品や資料，記録，映像，音声を集め，それらを比較したり，関連付けたりすることが，設定した題材に関する**自分のものの見方，感じ方，考え方を深める**ことにつながる。

また，設定した題材に関連する複数の作品を比較・考察することは，時空を超えた作品間のつながりを捉え，我が国の伝統や文化の理解や，多文化理解についての考えを深めることになる。

例えば，古典と近代以降の作品との比較・考察や，外国の作品との比較・考察，同時代の作品相互の比較・考察，同じジャンルの異なる作家による複数の作品の比較・考察などが考えられる。

比較する作品や資料，記録，映像，音声を収集するに当たっては，学校図書館やインターネットなども積極的に利用し，その過程で自らにとって新しい情報収集の方法や，情報利用のルールなどを学ぶ機会になるようにしたい。収集した作品などを，関連付けることによって，自分がそれまでに未知であったり，考察が不十分であったりした問題に気付き，探究するための新たな視点を獲得することも，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めるための貴重な学習となる。

学習の成果は，個人やグループで，短い論文や報告書，プレゼンテーション資料などにまとめ，それを互いに受け止め合って，共有する機会を設けることが望ましい。

なお，題材の設定に当たっては，生徒の学習状況を踏まえた上で，興味・関心や問題意識などを尊重して，生徒が自ら取り組む意欲を引き出すことのできるように留意することが望ましい。また，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める学習となるように，各自のものの見方，感じ方，考え方を意識することができるような題材を設定することが大切である。

〇言語活動例

現代の国語	言語文化	文学国語
ア　論理的な文章や実用的	ア　我が国の伝統や文化に	ア　作品の内容や形式につ

な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。	ついて書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。	いて，書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。
イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。	イ　作品の内容や形式に対する評価について，評論や解説を参考にしながら，論述したり討論したりする活動。
	ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。	ウ　小説を，脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。
	エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。	エ　演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる活動。
	オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。	オ　テーマを立てて詩文を集め，アンソロジーを作成して発表し合い，互いに批評する活動。
		カ　作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。

ア　作品の内容や形式について，書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。

文学的な文章を読んで，内容や形式などについて解釈したり考察したりしたことを表現

する言語活動を示している。

書評とは，書物の内容を批評・紹介した文章のことであり，作品の紹介とともに内容に関する評価について書かれている必要がある。新聞や文芸雑誌における書評では新刊の書物や文章に関するものが一般的であるが，ここでは発表された時期にかかわらず，すべての文学的な文章を対象とする。

書評を書いたり，自分の解釈や見解を基に議論したりするに当たっては，作品の構成，展開などを捉えること，書かれている内容を捉えること，書かれている内容から書き手のものの見方，感じ方，考え方を捉えること，構成や展開の工夫が作品の内容とどのように関連しているのかについて捉えることが大切である。なお，**見解**とは，作品の解釈を踏まえて形成された，作品についての自分の意見や考えを指している。

書評を書いたり，議論したりするという具体的な言語活動の場面を設定することで，生徒は明確な目的をもって主体的に作品と向き合うことが期待できる。なお，考えを書いたり述べたりする場合は，事実と考えを明確に分けることや，適切な論拠に基づくことなどに注意する必要がある。

イ　作品の内容や形式に対する評価について，評論や解説を参考にしながら，論述したり討論したりする活動。

作品の内容や形式に対する評価について，評論や解説を参考にしながら，論述したり討論したりする言語活動を示している。

評価したことを**論述したり討論したりする**際には，作品の中で書き手によって設定され，表現された人物や情景などを的確に捉え，文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を理解することが大切である。ここでは，その上で，**作品の内容や形式**に対して生徒が評価したことについて，**論述したり討論したりする**ことを指している。

参考の対象となる**評論や解説**には，文学的な文章の解釈などについて広く論じた文章や，特定の作品について論じた研究論文などが考えられる。また，文庫本の解説のような文章もこれに含むことができる。これまでの研究の成果として確立している文学理論や，特定の作家について研究している研究者による文章を読むことで，生徒は自分の読みを相対化することができ，自分はどうして最初にこのような読みをしたのか，どうしてこのような読みができるのかといった疑問をもつことで新たな視点を獲得することができる。

論述したり討論したりする際には，必ず具体的な相手が存在し，その相手に向かって言語活動を行うことになる。その際には，相手の立場や状況なども把握して，自分の考えを分かりやすく伝えることができるよう工夫することが必要である。

ウ　小説を，脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。

小説を，脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える言語活動を示している。

他の形式の作品に書き換えるために，**小説**を自分の知識や経験などと照合させながら繰り返して読むことは，読み手の認識の変容を促すとともに，文章を客観的，分析的に読むことになるため，文章の内容や表現の工夫に着目した，より深い小説の理解につながる。

脚本に書き換えるとは，自分が読み取った，人物，情景，心情などを，せりふとト書きとによって描き出すことである。この言語活動は，戯曲という文学的な文章の一つの種類に親しむことにも通じる。

絵本に書き換える過程においても，脚本に書き換える時と同じように，自分が読み取った人物，情景，心情などを原典となる作品と違った方法で描き出す必要があるが，絵本という作品の性質上，記載できる言葉による情報量は限られる。なお，ここでの，小説を絵本に書き換える活動では，絵を描く技能を高めることではなく，小説の内容や解釈を，場面ごとの絵に応じた文章として表現する資質・能力を高めることが重要である。

他の形式の作品に書き換えるには，ほかにも，例えば，長編小説を短編小説や掌編小説に書き換えたり，一人称小説を三人称小説の形式に書き換えたりする活動などが考えられる。

原典となる作品を書き換える過程には，字数の制限や対象となる読み手の制限など，何かしらの制約が発生する。この制約があるために，生徒は原典の作品と向き合い，作品に描かれている書き手のものの見方，感じ方，考え方について考えを深めることになる。

なお，我が国の言語文化においては，こうした書き換え（翻案）が新しい言語文化の担い手として機能してきた。こうした言語活動を通して，言語文化への理解を深めていくことも必要である。

エ　演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる活動。

演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して，批評文や紹介文などをまとめる言語活動を示している。

ある文学作品が映画化されたり，ドラマ化されたりすることは少なくない。主に文章で表現された作品と，それが脚色されて**演劇や映画**などになった作品とを**比較**することによって，原作の特徴をより鮮明にしたり，脚色するに当たって原作のなかで強調された部分や省略された部分に気付いたり，脚色した人の原作の解釈の特徴を明らかにしたりすることが考えられる。

脚色された作品の場合，原作が言葉によって表現したところを，独自の表現法によって置き換えたり，原作では表現されていない登場人物の心理などを映像で表現したりしている。そのようなところに気付くことは，原作の言葉による表現の独自性を考察することにもつながる。

比較することによって気付いたことや考えたことを基にして，映像化された作品と基になった文学作品との双方についての**批評文**を書くことで，映像と言葉との関係を深く考えることにつながる。なお，「批評」とはここでは，対象とするものの「大切なところを見極める」ことが中心で，その上で論評することが含まれる行為である。

また，それぞれの特色を分かりやすく伝える**紹介文**を書くことによって，各自が受容した作品像を具体化することが可能になり，それぞれの作品についての理解を深めることにつながる。

また，映像，音声，言語等の複数の表現様式によって構成される作品を取り上げることも可能である。多様なメディアが生み出され，使われる時代における読書の意義を考える活動になると考えられる。なお，批評文や紹介文のほかには，ポスターセッションの発表資料として用いるポスターやプレゼンテーションのスライド資料のような文書，資料，記録，音声，映像が考えられる。

オ　テーマを立てて詩文を集め，アンソロジーを作成して発表し合い，互いに批評する活動。

テーマを立てて詩文を集め，アンソロジーを作成して発表し合い，互いに批評する言語活動を示している。

アンソロジーとは，詩文などの複数の作品を，主題や時代など特定の基準に沿って一つの作品集としてまとめたものである。**テーマ**の選択には，読み手の人間，社会，文化，自然などに対する問題意識が明らかになるが，人間，社会，文化，自然についてどのような考えをもち得ているかが鍵となる。テーマを決めるに当たって，自分の身の回りの生活や日頃は目を向けることのない伝統や文化，自然の事象などに目を向けたり耳を傾けたりすることが重要である。そのように注目した事柄について，どのような作品が生み出されてきたのかということに思いを馳せることが**アンソロジーを作成**するためには大切である。

もちろん，各自の作成したアンソロジーを**互いに批評する**ことが，各々の選択したテーマを直接に議論することにとどまらないことに留意する必要がある。あくまでもアンソロジーに集められた**詩文**に媒介されて，各自の選び取ったテーマのもつ意味を掘り下げていくということが，人間の生み出し続けてきた言葉の吟味につながるところにこの活動の大きな意義がある。

カ　作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。

作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする言語活動を示している。

様々な資料を調べ，その成果を発表したり短い論文などにまとめたりすることは，学習した作品についての読みを深めるが，この活動の意義はそれにとどまらない。**作品に関連のある事柄**を知ることによって，単独で読んでいた時には気付かなかったその作品の意味や価値が浮かび上がることになる点が重要である。

様々な資料とは，その作品を生み出した作家についての資料ばかりでなく，その作品が生み出された時代についての資料や，同時代評も含めた評論や，論争などその作品の受容のされ方についての資料も含まれる。

また，調査し考察した**成果を発表したり短い論文などにまとめたり**して，他者と共有することによって，作品との関わり方について，新しい観点を獲得し，作品について独自の取り組み方を生徒がつくり出すきっかけにもなる活動である。

4　内容の取扱い

(1) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A書くこと」に関する指導については，30 ～ 40 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「A書くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「A書くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章や資料を読んだり，情報を整理したりする時間も含めている。

「A書くこと」に関する指導には，**30 ～ 40 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「A書くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「B読むこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，30 ～ 40 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「A書くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「A書くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「A書くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「B読むこと」の指導との関連を図ることも重要である。

イ　「B読むこと」に関する指導については，100 ～ 110 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「B読むこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「B読むこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を読んでいる時間だけではなく，読んで形成された考えについて話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。

「Ｂ読むこと」に関する指導には，**100 ～ 110 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「Ｂ読むこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「Ａ書くこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，100 ～ 110 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「Ｂ読むこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「Ｂ読むこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「Ｂ読むこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「Ａ書くこと」の指導との関連を図ることも重要である。

(2) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「Ｂ読むこと」に関する指導については，必要に応じて，文学の変遷を扱うこと。

「文学国語」の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」に関する指導における作品や文章の扱いは，実際にそれを読むことによってその内容や表現の特色に迫り，考えを深めたり発展させたりすることに主眼を置いている。したがって，それに資するよう，**文学の変遷**については，**必要に応じて**扱うこととしている。

文学の変遷とは，文学史のことである。異なる時代や時期に書かれた文章が，文学史上，どのような性格や特徴を有するものとして位置付けられるかを理解することは，様々な文学的文章を読む上で重要である。また，読んだ文章の書き手がどのような考えをもち，ほかにどのような文章を書いているのかを知ることは，文章についての理解を更に深め，それを契機にして発展的な読書に結び付いていく。

必要に応じて扱うとは，これらのことを踏まえ，生徒の発達の段階や科目の趣旨などを考え合わせ，文章の内容や特質を理解する上での必要に応じて取り上げるということである。

(3) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ読むこと」の教材は，近代以降の文学的な文章とすること。また，必要に応じて，翻訳の文章，古典における文学的な文章，近代以降の文語文，演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の教材は，**近代以降の文学的な文章**とすることを示している。

近代以降の文学的な文章とは，明治時代以降に書かれた，小説，詩歌，随筆，戯曲などの文学的な文章を指している。

また，**必要に応じて，翻訳の文章，古典における文学的な文章，近代以降の文語文，演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができる**ことを示している。

翻訳の文章については，主に近代以降の我が国の言語文化の特質，ヨーロッパ文化の移入，紹介という観点から考えるとき，明治初期の翻訳作品は，現代の我が国の文章，文学，思想の解釈にとって欠かせない要素となっていること，また，グローバル化の進展に伴って諸外国の文化を理解し，国際理解を深めることが一層求められているということを考慮している。なお，外国人作家による作品にも配慮する必要がある。

古典における文学的な文章については，例えば，古典としての古文には，和歌，俳諧，作り物語，歌物語，歴史物語，随筆，日記，説話，仮名草子，浮世草子，能，狂言，人形浄瑠璃，歌舞伎など，漢文には，史伝，辞賦，古体詩，近体詩，寓話，説話，小説などがある。これらは，我が国の言語文化の萌芽や隆盛を理解する上で欠かすことができない。古典における文学的な文章においても，近代以降の文学的な文章と同じように，情景の豊かさや心情の機微を読み手に想起させる表現が多く含まれている。これらの表現から，現代に生きる我々と共有できるものはあるか，また現代に生きる我々にとって，理解が難しいものがあるかなどの視点に立って読んでいくことが求められていることを考慮している。

近代以降の文語文については，古典と近代以降の文章とのつながりを考えたり，それらを比較対照したりすることが，近代以降の我が国の言語文化の特質の理解に資することを考慮している。

演劇や映画の作品については，戯曲や脚本などを読むだけではなく，映像作品を視聴することを考慮している。なお，映像作品を用いる際には，言語の教育を目指す国語科の性格を踏まえ，映像と言葉とを結び付けた指導となるよう留意する必要がある。

文学などについての評論文は，論理的な文章に含まれるものであるが，科目の性格を踏まえ，広く文学を論じたり，具体的な文学作品や作家や詩人などについて論じたりしている文章を対象とすることを考慮している。

これらについては，必要に応じて用いることができることとしていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。

> イ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A書くこと」及び「B読むこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げ**

る言語活動が十分行われるよう，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示している。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通して，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元などにおける具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を的確に理解する資質・能力を育成する「Ｂ読むこと」の領域の指導に当たっては，単に読ませるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすることも難しくなるため，読むとともに，把握したり解釈したり考えたりしたことを表現する必要がある。この場合，読む資質・能力を育成するために書く活動を取り入れることもある。ただし，書く活動だからといって必ず「Ａ書くこと」の領域の指導であるとは限らず，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

第５節　国語表現

１　性格

グローバル化，情報化が進展し，価値観が多様化している中，人々の生活環境，言語環境がこれまでとは比較にならないほど急速に変化し，社会生活もますます多様になってきている。その中にあって，様々な情報を適切に判断し取捨選択する力や，筋道立てて物事について考える力，豊かな発想の基となる創造する力などを身に付けることが一層求められるようになり，その基盤となる，言語により理解し，思考し，表現する能力を確実に身に付ける必要性がますます高まっている。とりわけ自らの思いや考えを表現し，他者とのコミュニケーションを図る資質・能力を高めることは，これからの社会に生きていくためには必要不可欠なことである。

「国語表現」は，共通必履修科目により育成された資質・能力を基盤とし，主として「思考力，判断力，表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を育成する科目として，実社会において必要となる，他者との多様な関わりの中で伝え合う資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

内容の〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の２事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「Ａ話すこと・聞くこと」，「Ｂ書くこと」の２領域から内容を構成し，実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けることができるようにするとともに，論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにすることを重視している。さらに，言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養うことを重視している。

２　目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様,「国語表現」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」,「思考力，判断力，表現力等」,「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は,「知識及び技能」に関する目標を示したものである。共通必履修科目「現代の国語」と同じく,「国語表現」では，**実社会に必要な国語の知識や技能**としている。

実社会とは，私たちが生きる現実の社会そのものである。**実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける**とは，学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも，社会人として活躍していく高校生が，他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

(2)は,「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。**論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力**については，共通必履修科目と同じく，**伸ばし**としている。また，**伝え合う力**の育成については，共通必履修科目では,「他者との関わりの中で」としていたものを受け，**実社会における他者との多様な関わりの中で**と発展させている。**他者**とは，広く社会生活で関わりをもち，世代や立場，文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには，こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達，相互理解を進めていく必要があり，状況や場面に応じた他者との関わりの中で，必要な事柄を正確に伝え，相手の意向を的確に捉えて解釈したり，効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

(3)は,「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，共通必履修科目と同じく，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，共通必履修科目と同じく，**生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させる**としている。現代社会に関わる話題や問題に幅広く関心をもち，生涯にわたる読書習慣の基礎を築き，社会人として，考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては，共通必履修科目では,「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち」としていたものを，**我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め**とし，より高めている。**我が国の言語文化**とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「国語表現」では，これらのうち，現代社会における様々な問

題の解決に資する言語の価値に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては，小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり，全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は，国語科だけではなく他教科等も含めて，社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては，こうした態度を，**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は，以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力，人間性等」は，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の育成を支えるものであり，併せて育成を図ることが大切である。

3　内容

〔知識及び技能〕
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　言葉には，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。
イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けること。
ウ　自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
エ　実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めること。
オ　省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うこと。

〇言葉の働き

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　言葉には，認識や思考を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。	ア　言葉には，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。

ア　言葉には，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。

中学校第2学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ア　言葉には，相手の行動を促す働きがあることに気付くこと。」を受けて，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解することを示している。

自己と他者の相互理解を深める働きとは，小学校第5学年及び第6学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ア　相手とのつながりをつくる働き」，中学校第2学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ア　相手の行動を促す働き」を発展させたものである。小学校では，挨拶などに見られるように，話し手と聞き手（送り手と受け手）の間に好ましい関係を築き継続させる働き，中学校では，行動を促す際には，聞き手（言葉の受け手）に働き掛け，行動するように促す働きについて学習している。「国語表現」では，言葉には，人間と人間との関係を築く際に，互いの立場や考えを尊重しながら，言葉を通して適切に表現したり理解したりして，**自己と他者の相互理解を深める働きがある**ことを示している。

自己と他者の相互理解を深めるとは，言葉によって合意形成に至ることを求めることと必ずしも同義ではない。認識したことや思考したことを言葉で伝え合うことによって，互いの共通点や相違点を知り合った上で，「好ましい人間関係」を構築し継続させることが重要である。なお，自己と他者の相互理解を深めるには，言葉の多義性をよく理解するこ

とが重要である。例えば，言葉には，明示的な意味（概念的意味）とは別に，暗示的な意味（内包的意味）を含む場合がある。表現する際には，自分がプラスイメージで用いた語句であっても，歴史的背景や時代状況や文脈によって，受け手がマイナスイメージを連想することもあることに留意する必要がある。

こうした言葉の働きに気付き，実社会で用いられている言葉を見つめ直すことが，言語能力の向上につながる。

指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「ウ　自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○話し言葉と書き言葉，言葉遣い

現代の国語	言語文化	国語表現
イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を踏まえ，正確さ，分かりやすさ，適切さ，敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し，使うこと。		イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けること。

イ　話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のイを受けて，話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色を一般的な知識として理解し，使うだけではなく，個々の交流の場における話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色について理解を深め，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けることを示している。

話し言葉と書き言葉の特徴や役割，表現の特色については，「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のイにおいて学習している。**話し言葉**は，相手の反応やその場の状況などの影響を強く受けながら理解されたり表現されたりするものである。即時的に内容を伝える役割をもち，双方向性をもつという特徴がある。また，切れ目がはっきりしない短い文を重ねたり，繰り返しや省略も頻繁に行ったりする一方で，話す速度や，声の調子，身振りや表情など，言葉以外の手段で伝えたいことを補うことができるという表現の特色をもつ。一方，**書き言葉**は，話し言葉のように相手の反応を得ながら表現を変えることはできないが，書き手が十分に考え推敲することができるなどの特徴をもつ。持続的に内容を伝える役割をもつが，必ずしも双方向性をもつとは限らないという特徴がある。また，文を相互の関係を明確にして並べたり，省略や繰り返しをすることなく，主語，述語，修飾語などを，書き手の目的や意図に応じて順序よく組み立てたりすることで，書き手の意図が，その場を離れても誤りなく伝わるように工夫することができるという表現の特色をも

つ。

伝え合う目的や場面，相手，手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し，使い分けるとは，実社会の様々な場面に対応した使い分け方を身に付けることである。

実社会における具体的な交流の場においては，相手や目的などの違いに応じて円滑に伝え合うために，敬語をはじめとして，相手に配慮した適切な表現や言葉遣いを使い分けることが求められる。また，手書きや電子メールなどの表現媒体や，報告や案内などの目的の違いに応じて適切な表現や言葉遣いを使い分ける必要もある。具体的には，互いの立場や役割，年代などを意識した表現や言葉，挨拶の言葉や定型句に添える一言や配慮を示す前置きの言葉などを適切に使うことを示している。また，場面に応じて，直接的な表現を避けたり，適切に言い換えたりすることを示している。

実社会に目を向けると，話し言葉と書き言葉の接近と融合が進んでおり，その傾向は更に加速していくものと考えられる。例えば，SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で使われる言葉は「書き言葉」であるが，相手の反応や状況に即時的に対応して表現される点では「話し言葉」の特徴ももつ。こうした表現媒体の特徴にも対応し，言葉を使い分けることが重要である。

指導に当たっては，例えば，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(2)の「ア　聴衆に対してスピーチをしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする活動」や，「B書くこと」の(2)の「ア　社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く活動」などとの関連を図ることが考えられる。

○語彙

現代の国語	言語文化	国語表現
エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

ウ　自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。」

を受けて，自分の思いや考えを多彩に表現することを意識して必要な語句の量を増し，語感を磨き語彙を豊かにすることを示している。

自分の思いや考えを相手に伝えるためには，通り一遍の言葉ではなく，相手との関係，相手と関わりをもつ状況や場面，目的や手段の違いなどに応じて，多彩に表現することが必要である。

自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句としては，伝統的に用いられてきた数々の慣用的表現や，自分の思いや考えを形成するに至った事象を具体的に描写する語句などが考えられる。例えば，悲しい思いの表現には，「悲しい」，「哀れむ」，「悲嘆」，「ほろり」などの，多彩な品詞や語種にわたる語や，「胸がふさがる」，「断腸の思い」，「涙にむせぶ」，「血の涙」などの慣用句があり，「悲しみ」という名詞も，「悲しみが込み上げる」，「悲しみがあふれる」，「悲しみに暮れる」のように特定の語と結び付くことで表現が広がっている。

また，自分の考えを表現するには，その考えを形成するために行った思考の過程を適切に表す語句の理解が不可欠である。例えば，情報と情報との関係を整理する行為について，「比べる」，「対比する」，「対照する」，「照らし合わせる」，「引き当てる」といった動詞や，「仕組み」，「構造」，「構成」，「体系」，「体制」，「システム」などの名詞を使い分けることが望まれる。

一方，慣用的な語句を用いず，事象を具体的に描写することによって自分の思いや考えを多彩に表現するという方法もある。例えば，花の色に感動した場合に，「美しい」や「きれいだ」という形容詞や形容動詞を使わず，「こぬか雨の中で燃えるように咲く薔薇（ばら）の色彩が目に焼き付いて離れなかった」など言葉を費やして具体的に表現することによって，自分の思いを実感をもって伝えることができる。こうした具体的な描写については，特定の語句があらかじめ用意されているわけではない。雨の降り方や色彩を表す言葉にも様々な表現があるように，事象や心情を表す言葉にも，多種多様な類語・類句などがあることを知っておくことが必要である。

こうした多彩な語句を適切に使えるようになるには，使える語句の量を増やすだけでなく，話や文章の中で使う経験を重ねることを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることが重要である。

その際，〔知識及び技能〕の(2)の「ア　自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。」との関連を図り，日常の読書活動と結び付けることが考えられる。

指導に当たっては，例えば，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)の「エ　相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。」や，「B書くこと」の(1)の「オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〇文や文章

現代の国語	言語文化	国語表現
オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。	エ　実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めること。

エ　実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めること。

中学校第３学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ウ　話や文章の種類とその特徴について理解を深めること。」，「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。」を受けて，実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めることを示している。

実用的な文章とは，一般的には，具体的に何かの目的やねらいを達するために書かれた文章である。報道や広報の文章，案内，紹介，連絡，依頼などの文章や手紙のほか，会議や裁判などの記録，報告書，説明書，企画書，提案書，契約書などの実務的な文章，法律の条文，キャッチフレーズ，宣伝の文章などがある。こうした文章は，必要な情報を漏れなく書くことを基本としつつ，相手や目的に応じて伝えるべき事柄を取捨選択したり再構成したりして簡潔に分かりやすく書くことが重要である。

また，実用的な文章には社会通念となっている一定の様式があり，それらを使いこなせるようになることが求められる。例えば，企画書を書く場合は，「題目（タイトル）」，「背景」，「目的」，「内容」，「日程」などの項目を立てて文章をまとめることが多い。また，同じ企画書であっても，行程を伝えることが目的の場合は「時間帯」に沿って内容をまとめたり，物流を伝えることが目的の場合には「移動する物の内容と量」に沿って内容をまとめたりすることになる。

さらに，手紙を書く場合においては，「前文」，「主文」，「末文」，「後付け」，「副文」などの様式に沿って文章をまとめたりすることが求められる。また，ビジネス文書においては，「記書き」も多用される。

指導に当たっては，自分の考えや思いを的確に伝えるとともに，こうした様式について理解を深め，使うことに留意する必要がある。

構成や展開の仕方については，統括する内容を文章のどこに位置付けるかによって，「頭括型」，「尾括型」，「双括型」などに分けられることが多いが，この他，時間的・空間的順序に沿って展開する「追歩式」，印象的な描写を一脈の筋に沿って列叙していく「散叙式」などもある。このような構成や展開の仕方を形式的に真似るだけの学習にならないように，文章構成の型が成立した理由や背景，効果などについて理解することにも留意する必要がある。

指導に当たっては，例えば，〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(2)の「ウ　説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える活動」などとの関連を図ることが考えられる。

〇表現の技法

現代の国語	言語文化	国語表現
カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。	オ　省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うこと。

オ　省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うこと。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)の「カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。」を受けて，省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うことを示している。

省略とは，章句を簡潔にして，言外のニュアンス，余韻，暗示を読者に読み取らせる修辞法である。また，**反復**とは，同一または類似の語句を繰り返す技法である。

省略の仕方は多様であるが，よく用いられるものに，「接続語省略」がある。例えば，ジュリアス・シーザーの「私は来た，見た，征服した」というせりふのように，接続語を省略し，短い言葉で畳みかけることによって，言葉に速さと力強さとを与えるような技法である。

このように，主語や述語や接続語などを省略することによって，冗長さを避けることができる。ただし，省略は適切に用いることができれば「ことばのあや」として評価されるが，過度の場合は「欠陥」とされてしまうことになるので，注意する必要がある。

反復は，日常会話でもよく使用されるものである。「お母さん聞いて，聞いて」と繰り返すことによって願望を強調したりする技法は，話し言葉においては決して珍しいものではない。一方，書き言葉の世界では，話し言葉に比べて反復を繰り返すことは少なく，同一の語句が2回繰り返されるだけでも，目を引くものとなる。

反復の効果については，単に強調することにとどまらないものがあることに注意する必要がある。同一語句を安易に繰り返すと，その語句の元来の意味を薄め，かえってコミカルな印象を与えることになりかねない。一方，効果的に用いられた場合には，同一語句を繰り返すたびに，文脈に沿ってその語句に異なるニュアンスが付け加わり，書き手の心情の複雑さが醸し出されてくるということになる。反復についても「ことばのあや」として生かせるような効果的な使い方を理解することが大切である。

なお，**表現の技法**としては，これらのほか，列挙される項のあいだに徐々に力を高める（まれに弱めたりする）効果を加味した「漸層」や，さらに短い語を重ねてスピード感をもたせた「たたみかけ」がある。「漸層」や「たたみかけ」は，「列叙」の技法である。

表現の技法について理解を深め使うとは，表現の技法の種類や効果を知識として理解するだけでなく，目的に応じて適切な表現の技法を使えるようになることを示している。例えば，自分の決意の固さを伝えることを目的にする場合，「私の決意は，あなたが，この国に住む人全員が，全人類が反対しても変わることはない」と漸層法を用いて伝えること

などが考えられる。

指導に当たっては，例えば，〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(1)の「オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

(2) 我が国の言語文化に関する事項

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

〇読書

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。	ア　自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

ア　自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(3)の「ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。」を受けて，自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

読書は，多様な考え方や生き方を追体験したり対象化したりすることによって，自己の認識を広げ深めるとともに，多様な表現方法に触れることで，自身の**言語表現を豊かにする**ものである。こうした読書を通して拡充した言語表現を用いて**自分の思いや考えを伝える**ことで，他者との関わりが更に深まっていくことを実感させることが重要である。

指導に当たっては，例えば，〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(1)の「ア　目的や意図に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め，情報の組合せなどを工夫して，伝えたいことを明確にすること。」や，(1)の「オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。」などとの関連を図ることが考えられる。

〔思考力，判断力，表現力等〕

A　話すこと・聞くこと

(1)　話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　目的や場に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め，他者との多様な交流を想定しながら情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。

イ　自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。

ウ　自分の思いや考えが伝わるよう，具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫すること。

エ　相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。

オ　論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすること。

カ　視点を明確にして聞きながら，話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして，自分の思いや考えを広げたり深めたりすること。

キ　互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

(2)　(1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　聴衆に対してスピーチをしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする活動。

イ　他者に連絡したり，紹介や依頼などをするために話をしたり，それらを聞いて批評したりする活動。

ウ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する活動。

エ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評する活動。

オ　設定した題材について調べたことを，図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ，聴衆に対して説明する活動。

〇話題の設定，情報の収集，内容の検討

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。		ア　目的や場に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め，他者との多様な交流を想定しながら情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。

ア　目的や場に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め，他者との多様な交流を想定しながら情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)の「ア　目的や場に応じて，実社会の中から適切な話題を決め，様々な観点から情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討すること。」を受けて，話題を設定する範囲を**実社会の問題や自分に関わる事柄の中**からとするとともに，**他者との多様な交流を想定**することに重点を置いている。

目的や場に応じてとは，何のために，誰に向かって，どのような条件で話したり聞いたり話し合ったりするのかを具体的に考え，それらにふさわしいかを判断することである。ここでの**場**とは，話すことが実際に行われる個々の様々な状況を指す。

実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決めるとは，テレビや新聞，インターネットなどの様々な媒体を通じて伝えられる実社会の事象や社会的な問題，さらには個人的な体験や自分自身に関することの中から，何について話したり聞いたり話し合ったりするのかという事柄や対象を決めることである。例えば，将来どのような仕事がしたいのか，どのような生き方をしたいのかなど，進路選択に関する事柄や，自分の生き方を見つめ直すきっかけとなった他者とのエピソードなどが考えられる。なお，話題を決めるに当たっては，実社会の問題と自分に関わる事柄を関連させながら考えていくことも重要である。

他者との多様な交流を想定しながら情報を収集，整理して，伝え合う内容を検討するとは，自分とは異なる多様な意見や考え方があることを前提にした上で，互いの思いや考えをはっきりと言葉にして伝え合い，相互理解を図るために，目的や場や相手にふさわしい情報を収集，整理し，伝え合う内容を検討することである。

情報を整理する際には，分類，比較，関係付けを行い，それぞれの共通点を見いだして組み合わせたり，幾つかをまとめて抽象化したりすることで，話題に対する個々の情報の重要度や位置付けなどを明確にすることができる。その際，検討の過程を明確にできるよう，ICTなどの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，XYチャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視

化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。

実社会では，初対面の人，異世代の人，立場や考え方や生活習慣の違う人たちなどとの交流が求められる。そこで，互いの異なりや多様性を認め，他者と関わりながら社会を生きていくためには，話すこと，聞くこと，話し合うことの活動について相互評価をすることなどにより，互いの思いや考えなどをやりとりし，相互理解を図ることが必要である。異なりが大きく，相互理解を図ることが困難な場合でも，互いが異なる思いや考えをもっていることを理解し，尊重し合うことが大切である。

なお，相手に何かを説明する場合，まず相手が何を求めているか，何を知りたがっているかを的確に把握，想定することが重要になる。その上で，相手によく伝わるように説明するために，自分自身の知識を確認したり，新たに情報を収集したりするなどして，説明者自身が十分に説明対象を理解することが求められる。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(1)の「ア　言葉には，自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。」との関連を図ることが考えられる。

〇構成の検討，考えの形成（話すこと）

現代の国語	言語文化	国語表現
イ　自分の考えが的確に伝わるよう，自分の立場や考えを明確にするとともに，相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。		イ　自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。 ウ　自分の思いや考えが伝わるよう，具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫すること。

イ　自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のイを受けて，自分の主張の合理性が伝わるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど，話の構成や展開を工夫することを示している。

自分の主張の合理性とは，自分の主張が矛盾なく理路整然としていることである。

適切な根拠を効果的に用いるとは，自分の主張を裏付けるために準備された根拠で，しかもその内容の信頼性や客観性が確かなものを，筋道立てて配置することを示している。

適切な根拠とは，例えば実験や調査によって得られたデータや専門機関の見解，実際に経験した出来事などのことである。

相手の反論を想定して論理の展開を考えるとは，物事の捉え方や主張の根拠の適否などについて相手と相違があることを前提とし，相手から反論や質問など批判的な反応があることを想定しながら，分かりやすく伝えるために，話す内容を相手の関心や理解の筋道に沿って展開させるなどの工夫を考えることである。

構成とは，話の組立て（話の骨組み）のことであり，**展開**とは，話の進め方（話の筋道）のことである。**話の構成や展開を工夫する**とは，自分の主張の合理性を明確にするために，話の構成や展開について確かめるだけではなく，話の全体を俯瞰（ふかん）して，相手を意識した論理の展開を工夫することである。具体的には，自らの主張の根拠となる事柄を箇条に分けて示したり，考えをまとめるに至った過程をたどりながら説明したり，結論を簡潔にまとめて話したりするなどの工夫をすることである。

どのようなまとまりを設け，どのような順序で伝えるかは，相手の受け止め方に大きく影響を与えることになる。つまり，自分が意図した構成や展開は，相手の理解を促す反面，理解の筋道を限定してしまう恐れがあることにも留意する必要がある。常に相手を意識し，何からどのような順序で話していくか，適切な構成や展開を工夫することが大切である。

ウ　自分の思いや考えが伝わるよう，具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のイを受けて，自分の思いや考えが伝わるよう，具体例を効果的に配置するなど，話の構成や展開を工夫することを示している。

具体例を効果的に配置するとは，相手（聞き手）に話の内容に関心をもってもらい，共感を得られるようにするために，伝達すべき内容がよく伝わるよう，具体例を配置することである。具体例を効果的に配置することによって，聞き手の注目を引き付けることができ，臨場感のある問題として共に考えてもらい，具体的な行動を起こさせる道をも開くことになる。

例えば，他者に何らかの依頼をしたいとき，「実例」，「主旨」，「理由」の順で話を展開するという方法が考えられる。話の冒頭において，無駄な前置き（謝罪や弁解など）を語ったり，いきなり結論を述べたりするのではなく，まず，一番相手に伝えたいことを具体的に示す「実例」を挙げて説明する。次に，明解かつ明快に「主旨」を述べて聞き手のどんな行動を望んでいるかを正確に伝える。第三に，その「理由」（聞き手にもたらす利益など）を述べる，という話の展開である。

このように，具体例を効果的に配置することによって，聞き手の関心を引き付けたり，話の主旨を補強したり，具体的な行動を呼び掛けたりすることができるということを理解し，構成や展開について工夫することが重要である。

指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(1)の「エ　実用的な文章などの種類や特徴，構

成や展開の仕方などについて理解を深めること。」との関連を図ることが考えられる。

〇表現，共有（話すこと）

現代の国語	言語文化	国語表現
ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。		エ　相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。

エ　相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のウを受けて，相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の同意や共感が得られるように表現を工夫することを示している。

相手の反応に応じて言葉を選ぶとは，相手のうなずきや応答，聞くときの表情などから，相手の話の受け止め方や理解の状況を捉えて言葉を適切に選択していくことである。言葉の選択については，人によって用いる言葉の意味や用法が異なったり，言葉に対して抱いているイメージが異なったりするなど，自分と相手との相違を十分に意識するとともに，自分の言葉が意図したとおりに伝わっているとは限らないことに留意する必要がある。例えば，相手の反応から，自分の思いや考えが十分に伝わっていないと感じられた時には，分かりやすい語句に言い換えたり内容を補足したりするなどの工夫をすることが求められる。聞き手のうなずきや表情に注意し，場合によっては，話の途中で相手に問いかけたり質問を促したりしながら理解を深めていくなど，聞き手の反応や場の状況を判断しながら適切な働き掛けをすることも重要となる。

場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするとは，ここでは場の雰囲気や公私の別，相手の人数や立場，年齢構成，会場の広さなどを踏まえ，伝達すべき内容がよく伝わるように，話の内容に関する本，図表，グラフ，写真などを含む資料，コンピュータのプレゼンテーションソフトなどのICT機器を，目的や場に合わせて選んで効果的に使うことである。

資料や機器を用いることについては，「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)の「ウ　話し言葉の特徴を踏まえて話したり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど，相手の理解が得られるように表現を工夫すること。」を踏まえ，ここでは，同意や共感が得られるよう，場の状況にふさわしい資料や機器を選び，分かりやすく表現することを示している。

例えば，表現の要点を捉えやすくするために，問題点を図解した資料を作成したり，自分の思いや考えを的確に伝えるために，ICT 機器を活用したりすることなどが考えられる。

相手の同意や共感が得られるようにするためには，相手の反応に応じて言葉を選んだり，場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりしながら，課題のありかを明確にしたり，解決方法を具体的に提案したりするなど，相手との感じ方や考え方の相違を乗り越え，共に考えていこうとする姿勢をもち続けることが重要である。

〇構造と内容の把握，精査・解釈，考えの形成，共有（聞くこと）

現代の国語	言語文化	国語表現
エ　論理の展開を予想しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。		オ　論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすること。 カ　視点を明確にして聞きながら，話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして，自分の思いや考えを広げたり深めたりすること。

オ　論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のエを受けて，論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き，話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとともに，聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすることを示している。

論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞くとは，議論などにおいて何が問題や課題になっているかという点を明確に聞き分け，自分の関心や問題意識などと比較し，賛成か反対か，納得できるか納得できないかなどの判断を繰り返しながら，論点についての自他の考えとの共通点や相違点を整理し，相手の話を受け止めていくことである。

話の内容や構成，論理の展開，表現の仕方を評価するとは，話の内容を理解するととも

に，意見や主張に対する根拠の適切さを確かめたり，自分の立場や考えとの違いを明確にしたりするとともに，話の構成や展開，声の出し方や言葉遣い，伝えたいことに即した的確な語句の選択や表現の技法を用いた工夫，資料や機器の活用の仕方などについて価値付けることである。

聞くという行為は，過去の自分の経験や価値観，場の状況などの諸情報に基づいて，相手の話した情報を自分（聞き手）なりに理解，解釈していく行為である。相手の話の内容を自分の考えと結び付け，確認や質問をしたり，賛意を示したり，反論したりするなどして検討することが重要である。

聞き取った情報を吟味するとは，聞き取った情報が正確なものであるか，適切な根拠に支えられたものであるか，自分にとって必要な情報であるかなど，様々な視点から情報を精査し，取捨選択することである。例えば，テレビや新聞，インターネットなどの様々な媒体を通じて伝えられる情報は，発信者にとって利用しやすい形や内容に整理されていることが多いが，その情報がどのような立場から切り取られ，どのように組み立てられているかを慎重に吟味する必要がある。

相手の話を聞くに当たっては，共感的に受け入れるだけでなく，批判的に聞く姿勢も求められる。また，言葉の意味を表面的に理解するだけでなく，発音の仕方や言葉遣い，表情などから，話の奥に隠された相手の気持ちを察することも必要となってくる。聞き取った話を比較，評価することを通して，多様な考えを理解したり自分の考えを見直したり，新しい考えを生み出したりして，自分の考えを広げたり深めたりすることが重要である。

カ　視点を明確にして聞きながら，話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして，自分の思いや考えを広げたり深めたりすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のエを受けて，視点を明確にして聞きながら，話の内容に対する共感を伝えたり，相手の思いや考えを引き出したりする工夫をして，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることを示している。

視点を明確にして聞くとは，インタビューや対談などの場面において，相手の話を聞くに当たって，そのねらいや目的など，何が聞きたいのかを明確にし，問題意識をもって相手から話を引き出そうとすることである。

相手の話を「聞く」あるいは「聴く」（傾聴する）ことにとどまらず，視点を明確にして相手に「訊く」（尋ねる）ことによって，他者の生き方や考え方に触れることは，新しい視点を獲得したり自分の生き方を見つめ直したりする契機となり，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることにつながる。

話の内容に対する共感を伝えるとは，相手の立場を尊重していることや相手の話に関心をもっていること，思いや考えを受け止めていることなどを意思表示することである。うなずきや表情，視線だけでなく，場合によっては，「なるほど」，「そうですね」などと，積極的に相槌を打つなどして相手に同意や共感を示すことが求められる。メモをとることも共感を伝えるのに効果的である。

相手の思いや考えを引き出すとは，相手の話をただ聞いているだけでなく，話をしっかりと聞き，さらに理由を尋ねたり，詳しく聞き出したりするなど，話を発展させるための工夫をすることである。相手との信頼関係を形成し，具体的に話を訊くことによって，相手のこれまで余り語られることのなかった思いや考えが表出されてくるということがある。例えば，インタビューなどにおいては，話を深めるため，あらかじめ準備した質問をするだけでなく，相手の話に応じて分からない点を聞いたり，確認したり，話題を広げたり，深めたりしていくことが重要である。その際，話を詳しく聞き出すために，「例えば」，「具体的には」などと質問をしたり，理由や動機を尋ねるために，「なぜ」，「どういうきっかけで」などと質問をしたりすることが効果的である。

〇話合いの進め方の検討，考えの形成，共有（話し合うこと）

現代の国語	言語文化	国語表現
オ　論点を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの目的，種類，状況に応じて，表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。		キ　互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

キ　互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)のオを受けて，互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど，考えを広げたり深めたりしながら，話合いの仕方や結論の出し方を工夫することを示している。

互いの主張や論拠を吟味するとは，互いの主張や，その根拠となる事実，拠り所，話の筋道などの適切さを精査することである。相手の主張だけでなく，自らの主張についても，なぜそうした論理の展開が可能なのか，その論理を支える根拠は適切であるかなどについて吟味する必要がある。

話合いの進行や展開を助けるとは，話合いの参加者全てが，話合いのゴールを意識しながら，発話の促し，発言の整理，逸脱の修正などで話合いの進行や展開を助け合い，話合いが計画的に進むよう，その流れに配慮することである。

互いの主張や論拠を吟味したり，話合いの進行や展開を助けたりするためには，相手の話の妥当性を精査しながら情報を取捨選択したり，出された意見同士の内容を分類しながら問題点を整理したり，目的に向かって考えの違いを統合して合意を生み出したり，話合

いが深まるように別の見方を提案したり，適切なタイミングで話題を切り替えたりするなど**発言を工夫する**ことが求められる。

話合いに当たっては，全ての参加者が一方的に自分の考えばかりを主張するのではなく，目的に合った話合いの進め方を提案したり，話合いの進み具合を把握したり，それまでの話合いの経緯を振り返ってこれからの展開を考えたりすることが重要である。

話合いの仕方や結論の出し方については，立場や考えの違いを認めつつ互いが納得出来る結論を目指して，それぞれが建設的な意見を述べながら話し合うことが重要である。

実社会は，考え方が様々に異なる人の集まりである。そのため，場合によっては，一つの結論に収斂（れん）されず，部分的な留保を残す結論になることもある。あるいは，次回までにさらなる調査を必要とする結論や，目的に応じて参加者や論題の変更を要する結論になることも想定される。そのような話題に対しても，相互理解を促し，新たなものの見方や考え方が導き出せるように，互いの思いや考えをしっかり伝えられるような状況を作り出す工夫が重要になる。

〇言語活動例

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動。 イ　報告や連絡，案内などのために，資料に基づいて必要な事柄を話したり，それらを聞いて，質問したり批評したりする活動。 ウ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。 エ　集めた情報を資料にまとめ，聴衆に対して発表する活動。		ア　聴衆に対してスピーチをしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする活動。 イ　他者に連絡したり，紹介や依頼などをするために話をしたり，それらを聞いて批評したりする活動。 ウ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する活動。 エ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの

		仕方や結論の出し方について批評する活動。 オ　設定した題材について調べたことを，図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ，聴衆に対して説明する活動。

ア　聴衆に対してスピーチをしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする活動。

聴衆に対してスピーチしたり，面接の場で自分のことを伝えたり，それらを聞いて批評したりする言語活動を示している。

聴衆に対してスピーチするためには，多様な考えをもつ不特定多数の聞き手が何を求めているか，何を知りたがっているかを的確に把握・想定し，その上で自分の思いや考えを分かりやすく伝えるために，自分の主張の根拠となる事柄を箇条に分けて示したり，考えをまとめるに至った過程をたどりながら説明したり，結論を簡潔にまとめて話したりするなどの工夫が必要となる。

面接の場で自分のことを伝えるためには，これらに加えて，聞き手が興味・関心を抱くような，自分のこととは何か，自分のことを分かりやすく伝える具体的なエピソードなどを，表現の仕方などに工夫しながら話すことが必要である。

それらを聞いて批評したりするとは，対象とする事柄について，そのものの特性や価値などについて，根拠をもって論じたり評価したりすることである。例えば，スピーチにおいては，論点の明確さ，主張や論拠の妥当性，例示の適切さなどに注意しながら聞き，スピーチを聞いた後に，相手（話し手）に対して，内容を確認したり，質問したり，根拠を示しながら反論したり，自分の考えと関連付けて意見を述べたりする学習などが考えられる。

また，模擬面接などを行い，面接を受ける側だけでなく，面接担当者の立場になって，自分のことを聞き手に分かりやすく伝えるには何が必要かと振り返ってみる学習などが考えられる。

イ　他者に連絡したり，紹介や依頼などをするために話をしたり，それらを聞いて批評したりする活動。

他者に連絡したり，紹介や依頼などをするために話をしたり，それらを聞いて，批評したりする言語活動を示している。

連絡とは，相互に共有しておきたい情報などを，関係がある人々に知らせることである。**紹介**とは，相手にとって未知の事柄について解説し，人々に知らせることであり，目的，内容，相手がはっきりしている点に特徴がある。**依頼**とは，様々な用件を人に頼むことであり，その内容は個人的なものや公的なものに区別される。また，伝え方としては，

対面で直接話したり，電話で伝えたりすることなどが考えられる。

連絡，紹介や依頼などをするための表現は，用件や内容を，聞き手に誤解されないよう，過不足なく正確に伝えられるものでなければならない。表現するに当たっては，相手に応じた待遇表現の選択や目的に応じた用語の選択など，相手や目的に応じた表現を工夫する必要がある。

また，聞き手も，話し手の話を整理しながら聞き，内容を確認したり質問したりすることが求められる。**それらを聞いて批評したりする活動**としては，伝えたいことが正確に伝わっているかどうか，社会生活で実際に役立つような工夫となっているかどうかなどという観点から，相互評価を行うことなどが考えられる。

ウ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する活動。

異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり，報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する言語活動を示している。

異なる世代の人や初対面の人の中には，異なる価値観や意見をもっていたり立場が異なったりする人もいることが考えられるが，そうした人から話を聞くことは，聞き手の視野を広げることにつながるだけでなく，生き方，在り方を深く考える機会となる重要な活動である。

インタビューとは，目的意識をもって特定の相手に質問し，必要な情報を聞き取ることである。その形式には，一問一答式のインタビューや，おおまかな質問事項を決め，答えによって相手からさらに言葉を引き出していくインタビューなどがある。インタビューするに当たっては，その目的を明確にし，どのような形式のインタビューとするかを考えたり，メモの取り方，どのように質問したら求める答えを引き出しやすいのか等を考えたりする学習を取り入れることが重要である。

報道や記録の映像とは，例えば，新聞やテレビ，インターネットなどを媒体にして伝えられる文字や映像の情報のことである。

報道や記録の映像などを見たり聞いたりするに当たっては，情報の信頼性に注意しながら，伝えられる情報がどのような意図の基に編集されたものであるか，その背景を含めて読み取るなど，テレビや新聞，インターネットなどの様々な媒体を通じて伝えられる情報を掘り下げ，まとめる学習が必要である。

見たり聞いたりしたことをまとめて，発表する際は，聞き取ったり見たり聞いたりした情報を，無批判に受け入れたり用いたりすることなく，重要度や信頼度などによって適切に取捨選択することが求められる。また，伝えられる情報の何に視点を置いて話を聞くのか，さらに聞き取った内容をまとめ何を伝えたいのかによって，聞き取る情報が変わっていくことに留意する必要がある。

エ　話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評する活動。

話合いの目的に応じて，結論を得たり多様な考えを引き出したりするための議論や討論を行い，その記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評する言語活動を示している。

話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論とは，ここでは，ある結論を得ることを目的にした問題解決的な話合いと，互いの多様な考えを引き出し，考えを深め合うことを目的とした相互啓発的な話合いのことを示している。

議論とは，それぞれの立場から考えを述べ合いながらも，話合いの目的に応じて一定の結論を導くために，参加者が互いに意見を交わす中からよりよい位置，考え，方法を発見しようとするために論じ合うことである。**討論**とは，それぞれの立場からの多様な考えを引き出し，互いの考えの違いなどを基にして論じ合うことである。例えば，裁判の公判で，互いに証拠を出し合って問題を争うように，相克的な主張を交わすことなどが考えられる。

記録を基に話合いの仕方や結論の出し方について批評するとは，議事録や映像などの記録を基に，話合いの手順や目的，整理・結論付けなどが適切に行われていたかなどについて振り返り，評価することである。話合いは音声言語を使って表現されるため，時間とともに消えてしまう。そこで，話合いの過程を俯瞰（ふかん）し，振り返るためには，話合いを記録する必要がある。記録媒体としては，議論や討論における発言を録音したり，映像として録画したりする方法が考えられる。また，議事録として書き留めたり，発言内容を想起できる簡単なキーワードを付箋紙に書き留め模造紙に貼ったりすることも効果的である。

オ　設定した題材について調べたことを，図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ，聴衆に対して説明する活動。

設定した題材について調べてまとめたことや考えたことを，効果的に表現するために，図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ，聴衆に対して説明する言語活動を示している。

題材は，実社会の問題や自分に関する事柄などの中から，課題意識をもって見付けることが大切である。

設定した題材について調べたことを，**図表や画像なども用いながら発表資料にまとめる**ことは，調査結果を整理することにとどまらず，自分の考えの整理や説明内容の明確化につながるものである。**図表や画像**は，言語を用いた説明をより分かりやすくするための補完的な役割を果たすものである。編集された図表や画像は，言語を用いて伝えること以上の情報を提示することもでき，調べたことやまとめたこと，考えたことを分かりやすく伝える上で有効である。

図表や画像をつくるに当たっては，コンピュータを活用し，その作成や編集を行うことも効果的であり，プレゼンテーションソフトを活用して作成した資料や，用紙一枚に伝えたい情報を過不足なく盛り込んだ資料などが考えられる。

聴衆に対して説明するに当たっては，聞き手を引き付ける手法を用いるなど，相手によ

り伝わりやすい工夫が求められる。

なお，この活動は話し言葉によって説明をすることを目指すものであることから，指導に当たっては，発表資料の作成を目的とした言語活動とならないよう留意する必要がある。

B　書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　目的や意図に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め，情報の組合せなどを工夫して，伝えたいことを明確にすること。

イ　読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，文章の構成や展開を工夫すること。

ウ　読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫すること。

エ　自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫すること。

オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。

カ　読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く活動。

イ　文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する活動。

ウ　説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える活動。

エ　紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。

オ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理したり話し合ったりして，自分や集団の意見を提案書などにまとめる活動。

カ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを，報告書などにまとめる活動。

〇題材の設定，情報の収集，内容の検討

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。	ア　自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。	ア　目的や意図に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め，情報の組合せなどを工夫して，伝えたいことを明確にすること。

ア　目的や意図に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め，情報の組合せなどを工夫して，伝えたいことを明確にすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の⑴の「ア 目的や意図に応じて，実社会の中から適切な題材を決め，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して，伝えたいことを明確にすること。」を受けて，「題材の設定」の範囲を**実社会の問題や自分に関わる事柄の中から**として，実社会の問題に一層強い関心をもち続けるとともに，社会と自分との関わりを強く意識し，問題の本質について深く考察することへと発展させている。また，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味した上で，さらに**情報の組合せなどを工夫**することによって，自分の思いや考えを伝える材料として活用したり，伝えたいことを一層明確にしたりすることへと発展させている。

実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決めるとは，広くは世界で生起する政治・経済上の出来事や，科学，文化，芸術，スポーツについての知識や話題，狭くは身の回りで起きる様々な諸問題の中から，考察するに値する題材を決めることである。

題材を探すに当たっては，新聞，テレビ，インターネットなどのマス・メディアを通じて伝えられる事象や問題だけでなく，まだ顕在化していない諸問題や，予想される未来社会の諸課題などについても関心をもち，自分に関わる事柄として捉え直すことが必要である。

自分に関わる事柄としては，個人的な体験や自分自身に関すること，例えば，将来どのような仕事がしたいのか，どのような生き方をしたいのかなど，進路選択や，日常的な人間関係についての事柄も考えられる。

実社会では，多様な立場から異なった意見や情報が数多く提供される状態になっている。こうした時代にあって，自分の思いや考えを確実に読み手に伝えていくには，日頃から，実社会の問題に関心をもち続けるとともに，それらを自分に関わる問題として受け止め，自分なりの明確な考えをもつようにしておくことが重要である。

情報の組合せなどを工夫するとは，設定した題材について，集めた情報の妥当性や信頼性を吟味するとともに，内容や種類の異なる複数の情報を適切に選択し，組織したり統合したりして，活用していくことである。

主題を支える具体例として各種の情報を用いる際には，自らの体験だけでなく，文献調

査や聞き取り調査やインターネット等を通じて収集した情報を組み合わせて用いるようにするとよい。収集し分析した情報を基に，その使い方について吟味しながら，伝えたい内容を検討していくことによって，自分の主張や意見が客観的な裏付けを伴ったものになる。

必要な情報を適切に選択し組織したり統合したりする際に重要なのは，何のために読んでもらうのかという目的意識と，誰に読んでもらうのかという相手意識である。目的と読み手が明確になれば，伝えたい内容（主題）も焦点化してくる上に，主題を支える具体例も，読み手にふさわしいものが選べるようになる。

また，目的や読み手に応じて，情報を選択したり組織したりする基準が変わるということにも留意する必要がある。例えば，旅行の行程表を作成する場合は，読み手が「時間帯ごとの行程」が知りたいのか，「人数ごとの行程」が知りたいのかによって，情報の組合せ方や整理の方法が大きく異なってくる。

なお，情報を整理する際には，分類，比較，関係付けを行い，それぞれの共通点を見いだして組み合わせたり，幾つかをまとめて抽象化したりすることで，話題に対する個々の情報の重要度や位置付けなどを明確にすることができる。その際，検討の過程を明確にできるよう，ICT などの機器や紙を用いるとともに，ベン図，イメージマップ，ＸＹチャート，マトリックス，ピラミッドチャート，座標軸，フィッシュボーン，熊手図など，情報の可視化に役立つ資材（いわゆる思考ツール）を活用することも効果的である。

情報化社会は今後，更に進んでいくものと予想される。そうした社会の状況に対応し，情報を受信する立場と発信する立場の両面から，目的や読み手に応じて，情報を組み合わせて整理する方法を理解することが重要である。

〇構成の検討

現代の国語	言語文化	国語表現
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。 ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。	イ　読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，文章の構成や展開を工夫すること。 ウ　読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫すること。

イ　読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，文章の構成や展開を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の⑴のイを受けて，文章を書く目的や意図の違いを意識して，読み手の同意が得られるよう，適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるなど，文章の構成や展開を工夫することを示している。

読み手の同意が得られるとは，自分の考えを筋道立てて主張し，その妥当性や合理性について了解してもらえることである。そのためには，主張する内容を確実な根拠に基づいた妥当な推論によって導き，またそれを明晰に示すことが求められる。この論理性と明晰性は，主張の根拠となる材料の収集・選択，構成から記述に至る全ての過程に求められる。そこでは，例えば，最初に主張を述べ，２番目に根拠となる分かりやすい具体例を精選して挙げ，３番目に一つ一つの根拠について的確かつ簡潔に説明し，最後により分かりやすい裏付けを加えて相手を説得するなどという，論理の構成についての工夫が大切となる。

適切な根拠を効果的に用いるとともに，反論などを想定して論理の展開を考えるとは，自分の考えを支えるのにふさわしい根拠を選んで適切な場所に配置するとともに，想定される反論や異論に対して再反論を試みる論理の展開方法を考えることである。例えば，「もちろん」，「確かに」，「なるほど」などの語句を用いて，読み手が抱くと想定される反論や異論や疑問などを取り上げ，その一部を認めながらも，再び反論をして自説の正しさを主張していくことによって，更に説得力を増すことができる。

なお，この場合，異論に対して論理的に説得することだけが目的なのではなく，同じ題材についても，多様な考え方や見解があることに目を向け，それぞれの長短を考えていくことが大切である。**文章の構成や展開**についてこうした工夫を重ねていくことによって，多面的に物事を捉えていく思考が育てられるとともに，説得力のある文章が書けるようになる。

ウ　読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の⑴の「イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。」を受けて，文章を書く目的や意図の違いを意識して，読み手の共感が得られるよう，適切な具体例を効果的に配置するなど，文章の構成や展開を工夫することを示している。

読み手の共感が得られるとは，論理の展開だけでなく，心情に訴える工夫によって，思いを共有できる状態になることである。読み手の共感を得るには，読み手を引き付ける適切な具体例を取り上げ，共に考えてみようという気持ちになってもらうことが必要である。

適切な具体例を効果的に配置するとは，読み手を具体的に想定し，読み手の心情に訴え

ることができるかどうかを判断規準として，伝え合う場の条件にふさわしい具体例を選ぶことである。

具体例の内容としては，誰もが興味をもっている平易で親しみやすい事例を取り上げる場合もあれば，意外性のある事例を挙げて興味や関心をもってもらう場合もある。思わず笑みがこぼれるようなユーモラスなエピソードを取り上げる場合もあれば，命の尊厳に関わるような深刻な事態を具体的に紹介する場合もある。

具体例の配置としては，冒頭に具体例を紹介して同じ立場から考えてもらえるように導く場合もあれば，問い掛けから始めて読み手に問題意識をもってもらえるように導く場合もある。

読み手の共感が得られるようにするには，一方的に自分の思いや考えを述べるのではなく，適切な具体例を挙げ，読み手とともに様々な観点から検討を重ねた上で，結論に導くなどの工夫が考えられる。

指導に当たっては，一つの型に拘(こだわ)ることなく，複数の構成や論の展開の仕方を紹介するなどして，目的や意図や相手に応じて最も適切なものを選択させるのが望ましい。

〇考えの形成，記述

現代の国語	言語文化	国語表現
イ　読み手の理解が得られるよう，論理の展開，情報の分量や重要度などを考えて，文章の構成や展開を工夫すること。（再掲）	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）	エ　自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫すること。
ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。（再掲）		オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。

エ　自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の⑴の「ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。」を受けて，自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するなど，表現の仕方を工夫することを示している。

いかなる場合であっても，読み手に伝わる文章を書くには，目的や意図や相手に応じ

て，どのような文章の種類を用いたらよいかを考える必要がある。「文体」の工夫としては，同じ内容の情報を話し言葉で伝えるか書き言葉で伝えるかの選択，場に応じた言葉の選択（くだけた言葉遣いをするか改まった言葉遣いをするかの選択，常体を用いるか敬体を用いるかの選択，和語を多くするか漢語を多くするかの選択など），文章の形式の選択（章や節の構成の仕方，箇条書きや項目分け，見出しの付け方など）などを適切に行うことが大切である。

自分の考えを明確にし，根拠となる情報を基に的確に説明するとは，漠然とした状態にある自分の考えを明確にし，的確な言葉で端的に述べるとともに，自分の考えの根拠となる情報を正確に分かりやすく説明することである。誤りのない情報に基づいて判断した考えを的確な言葉で表現すること，信頼できる事例を挙げること，主張と根拠との関連性を筋道立てて説明すること，誤解されないような言い方をすること，独りよがりの表現を用いないこと，などに留意することが大切である。

オ　自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫すること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「Ｂ書くこと」の(1)の「ウ　自分の考えや事柄が的確に伝わるよう，根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに，文章の種類や，文体，語句などの表現の仕方を工夫すること。」を受けて，ここでは，読み手の共感が得られるように，自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするなど，表現の仕方を工夫することを示している。

自分の思いや考えを明確にし，事象を的確に描写したり説明したりするとは，自分の感動や思いを触発する契機となった人物・事件・自然現象などが，自分にどのような印象を与えたのか，その特徴はどうであったのかなどを的確に把握するとともに，読み手に，実際にそれを見聞きするのと同様のイメージや印象を与えるように描写したり，説明したりすることである。

そこでは，全体的な特徴や部分的な特徴を具体的に描き，相手に確かなイメージを与えるなどの工夫が大切となる。その際，自分の思いや考えが深まる契機となった出来事や場面を的確に切り取って，印象に残った言葉を会話文で再現したり，様子を想像しやすくするために比喩表現を用いたりするという工夫が考えられる。また，その出来事や言葉と出会う前後の自分を対比して述べるという工夫なども考えられる。

〇推敲，共有

現代の国語	言語文化	国語表現
エ　目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて，文章全体を整えたり，読み手からの助言な	イ　自分の体験や思いが効果的に伝わるよう，文章の種類，構成，展開や，文体，描写，語句などの	カ　読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章

どを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。	表現の仕方を工夫すること。（再掲）	全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

カ　読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

「現代の国語」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(1)のエを受けて，読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して，文章全体を整えたり，読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることを示している。

読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味するとは，文章表現が表現の目的や意図に合致したものになっているかどうか，書き手がその個性を発揮するものとなっているかどうか，個々の表現の技法が表現全体を構成する上で効果的に使われているかどうかなどについて，分析的に読み，それぞれの表現が発揮している効果を検討することである。

効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味する際の観点としては，表現の仕方に関すること，文章の構成や展開に関することなどが挙げられる。

表現の仕方とは，敬体と常体などの文体，語句や文末表現を工夫することをはじめとして，簡潔な述べ方と詳細な述べ方，断定的な述べ方と婉曲的な述べ方，説明的な文章での中心的な部分と付加的な部分との関係や，事実と意見との関係，文学的な文章での描写の仕方や比喩などの表現の技法など，記述に関わる表現全般のことである。また，文章の種類によっては，例えば，内容のまとまりごとに見出しを付けたり番号を振ったり，注釈を付けたりする工夫も考えられる。こうした表現の仕方に関する工夫が，表現の意図と整合しているかどうかを考えるだけでなく，読み手にどのように伝わるかという観点から検討を加えることが大切である。

表現の技法については，例えば，比喩，反復，倒置，省略，対句などが適切に用いられているか，その効果はどうかなどについて考えることが大切である。

文章の構成や展開については，例えば，頭括型や尾括型や双括型，演繹法や帰納法などが適切に用いられているか，その効果はどうかなどについて考えることが大切である。

読み手からの助言などを踏まえて，自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることについては，文章を推敲する際に，各人が内省するだけでなく，それぞれが読み手となって意見交換したり，助言し合ったりして，自分の文章の特長を確認したり，課題を発見して，自ら修正するように導くことが大切である。相互評価や共有の指導に当たっては，評価の観点を明確にしておくとともに，書き上げられた文章（作品）だけを分析・考察の対象とするのではなく，言葉にまとめることができないでいる思い（表現のねらいや意図，

あるいは迷っている点や困っている点）を尊重し，互いによさを見つけ合ったり，助言し合ったりできるように進めることが必要である。推敲の指導に当たっては，文法的な整合性や用語の適否や表記の正誤を検討することにとどまらず，文章全体を俯瞰（ふかん）して捉え，アイディアに肉付けをしたり，無駄な表現を削ったりすることも，大切な学習内容であることを自覚させることが重要である。

〇言語活動例

現代の国語	言語文化	国語表現
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，本文や資料を引用しながら，自分の意見や考えを論述する活動。	ア　本歌取りや折句などを用いて，感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり，伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで，随筆などを書いたりする活動。	ア　社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く活動。
イ　読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり，書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。		イ　文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する活動。
ウ　調べたことを整理して，報告書や説明資料などにまとめる活動。		ウ　説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える活動。 エ　紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。 オ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理したり話し合ったりして，自分や集団の意見を提案書などにまとめる活動。 カ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを，報告書などにまとめる活動。

ア　社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く活動。

社会的な話題や自己の将来などを題材に，自分の思いや考えについて，文章の種類を選んで書く言語活動を示している。

社会的な話題とは，広くは世界で生起する政治・経済上の出来事や，科学，文化，芸術，スポーツなどに関する時事的な話題である。実社会で話題になっていることに関心をもち，多様な情報を集め，多面的に分析しながら，自分なりの考えを明確にして，論理的に述べていく学習である。また，高等学校では**自己の将来**や進路を考えて，入学試験や就職試験のために小論文などを書く機会も増えてくる。自己を表現する力の向上を目的とした活動として位置付けられる。

文章の種類を選んで書くとは，目的や意図や場の条件に応じて最も適切な文章の種類を選択して書くことである。論理的に自分の考えを述べる意見文や小論文だけでなく，自分の思いを自由に述べる随筆，ものに仮託して述べる虚構の作文など，発想豊かに多様な表現方法を試みるとよい。

イ　文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する活動。

文章と図表や画像などを関係付けながら，企画書や報告書などを作成する言語活動を示している。

文章と図表や画像などを関係付けるとは，文章と図表や画像との対応関係やそれぞれの役割を明確にしていくことである。文章と様々な種類の図表（概念図や模式図，地図，表，グラフなど）や画像（写真やイラストなど）との関係としては，文章の内容をより分かりやすくするために図表などを補完的に使う場合と，図表などの解説として文章を使う場合とがある。

ここに示したのは，実社会で作成する機会が増える**企画書や報告書**など，形式の整った文章を書く言語活動であるから，企画内容や報告内容の補完的役割を果たすものとして図表や画像を用いるようにすることが大切である。

例えば，企画書の場合であれば，企画理由の概念図，企画内容の構造図や模式図，完成予想図や写真，進行計画表などを添えることによって，企画内容が伝わりやすくなる。報告書の場合であれば，報告内容を裏付ける事実を写真として示したり，調査結果を図や表に整理したりすることによって，報告内容が伝わりやすくなる。このように，図表や画像を効果的に用いることによって，説得力のある文章が書けるようになることが大切である。

指導に当たっては，この言語活動は，企画書や報告書などの文章作成を目指すものであることから，親しみの感じられるイラストを添えるというレイアウト上の工夫にとどまったり，図表を作成することが学習の目的となったりしないように留意する必要がある。

ウ　説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える活動。

説明書や報告書の内容を，目的や読み手に応じて再構成し，広報資料などの別の形式に書き換える言語活動を示している。

説明書や報告書は，内容が正確であり，さらにそれが妥当な論拠に基づいたものであることが求められる。そこでは，関心をもった事柄について調査したことを整理することが前提となる。調査したことを整理するとは，収集した情報を無批判に受け入れたり用いたりすることなく，多面的・多角的に分析，考察して必要なものを取捨選択し，解説や論文などにまとめる際の資料として活用できるような形に整えることである。その際，必要に応じて，過去の事例や理論的背景などについても調べた上で，まとめる必要がある。

広報資料などの別の形式に再構成し書き換える具体的な場面としては，例えば，少数の関係者を想定してまとめられた説明・報告の内容を，多数の読者に伝える場合を想定して広報資料用の原稿として書き改めたりすることなどが考えられる。この学習を通して，目的や想定される読み手によって内容や用語を変える必要性が生じてくるということを理解させるとともに，その方法を習得できるように導くことが大切である。

エ　紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。

紹介，連絡，依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く言語活動を示している。

紹介，連絡，依頼とは，「A話すこと・聞くこと」の(2)のイで定義したとおりである。

紹介の実務的な手紙や電子メールとしては，例えば，物や人の推薦，本の紹介，部活動の紹介，製品のカタログ，広告，宣伝などがある。**連絡の実務的な手紙や電子メール**としては，例えば，個人あての文書，掲示，ホームルーム便り，生徒会便り，図書館便り，回覧，ミニコミ紙などがある。また，**依頼の実務的な手紙や電子メール**としては，例えば，ゲストティーチャーの派遣依頼，行事への参加依頼，調査のための訪問依頼などの公的なものと，個人的なお願いを伝える私的なものとがある。

実務的な手紙や電子メールを書くに当たっては，伝達媒体や内容による違いに留意して，適切な言葉遣いができるようにする必要がある。

これらの言語活動を行う際には，箇条書きにする，図表を入れる，キャッチフレーズを用いるなど，読み手に的確に伝わるように様々な工夫をすることが大切である。また，挿絵やカットなどの画像を入れて，楽しく見て読めるものにするなどの工夫は，表現の楽しさや喜びを与えることにもなる。

なお，指導に当たっては，〔知識及び技能〕の(1)の「エ　実用的な文章などの種類や特徴，構成や展開の仕方などについて理解を深めること。」との関連を図ることなどが考えられる。

また，学習課題としては，実務的な連絡や紹介よりも，謝罪やお断りや辞退などの否定的な内容を伝えたり依頼したりする方が，読み手への配慮がいっそう強く求められる難度の高いものとなることに留意して，指導計画を立てることなどが考えられる。

オ　設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理したり話し合ったりして，自分や集団の意見を提案書などにまとめる活動。

設定した題材について多様な資料を集め，調べたことを整理したり話し合ったりして，自分や集団の意見を提案書などにまとめる言語活動を示している。

設定した題材について多様な資料を集める具体的な場面としては，学校図書館や地域の図書館などで本や辞典，図鑑などを読んで情報を収集したり，日々の報道やインターネットなどを活用したりすることが考えられる。情報科担当教員や司書教諭などとも連携して，インターネットを利用したり，学校図書館や地域の図書館などで必要な情報の収集，選択を行ったりする必要がある。

調べたことを整理したり話し合ったりする具体的な場面としては，編集会議などが考えられる。調べた情報の信頼性や妥当性を確かめるとともに，その情報の重要性や情報と情報との関係を検討しながら，意見をまとめていく必要がある。

自分や集団の意見を提案書などにまとめる際には，客観性や正確性が求められる報告や説明をすることにとどまらず，必要性や実現可能性を予測して，新しい企画を立ち上げ，その趣旨や実行方法などを具体的に述べることが求められる。

カ　異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを，報告書などにまとめる活動。

異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを，報告書などにまとめる言語活動を示している。

異なる世代の人や初対面の人にインタビューをする具体的な場面としては，地域の職業人や達人などに取材して，仕事の内容や生きがいなどについて詳しく聞き出すことなどが考えられる。この学習は，個別的な経験や事実の中にある普遍的な意味をつかむ力を育てることにもつながるものである。そして，この学習をさらに意義深いものにするために重要なことは，聞き出したことを文章化し，**報告書などにまとめる**ことである。

報告書などにまとめる際の具体的な様式としては，取材の経過も含めてルポルタージュ風にまとめる場合，取材相手の業績や人柄を紹介するためのプロフィール記事風にまとめる場合，問い掛けと答えのやりとりを再現するように対談風にまとめる場合，語り手の独り語り風にまとめる場合などが考えられる。

インタビュー内容を書き言葉に改める場合には，聞いたことを整理し直して小見出しを付けるなど，文章の構成や展開について工夫することが必要である。また，語り手の口調を残したり，語っている時のしぐさなどをト書き風に補足説明したりするなど，記述や表現について工夫することも必要となる。話し言葉を書き言葉に改める過程を経験することは，言葉の特徴や使い方について改めて考え直す機会として生かせるものである。

4　内容の取扱い

(1) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア　「A話すこと・聞くこと」に関する指導については，40 ～ 50 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「A話すこと・聞くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に話したり，聞いたり，話し合ったりしている時間だけではなく，話題について検討したり，資料をまとめたりする時間なども含めている。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導には，**40 ～ 50 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「A話すこと・聞くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「B書くこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，40 ～ 50 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「A話すこと・聞くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「A話すこと・聞くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「B書くこと」の指導との関連を図ることも重要である。

イ　「B書くこと」に関する指導については，90 ～ 100 単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

「B書くこと」に関する指導を，指導計画に適切に位置付け，確実に実施するよう，配当する授業時数を示している。「B書くこと」に関する指導とは，内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B書くこと」の(1)に示した指導事項について，(2)に示した言語活動例を通して指導することを示している。したがって，実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章や資料を読んだり，情報を整理したりする時間も含めている。

「Ｂ書くこと」に関する指導には，**90 ～ 100 単位時間程度を配当する**ものとしている。この配当時間は「Ｂ書くこと」に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり，「Ａ話すこと・聞くこと」に関する指導とは区別して計画することが必要である。また，90 ～ 100 単位時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校においては，適切な配当時間に基づいた指導を通じて，「Ｂ書くこと」の指導事項に示した資質・能力の確実な育成を図っていくことが求められる。

「Ｂ書くこと」に関する指導の充実を図るためには，指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を立てることが大切である。「Ｂ書くこと」に関する指導を，科目全体の計画のどの位置に，どのように設定するかについては，単元を設定してある時期にまとめて行うことなどが考えられるが，生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切である。この場合，〔知識及び技能〕，「Ａ話すこと・聞くこと」の指導との関連を図ることも重要である。

(2) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「Ａ話すこと・聞くこと」に関する指導については，必要に応じて，発声や発音の仕方，話す速度などを扱うこと。

目的や場に応じて他者との多様な交流を行うためには，話の構成や展開を工夫したり，相手の反応に応じて言葉を選んだりするとともに，**発声や発音の仕方，話す速度など**についても留意する必要がある。

発声や発音の仕方は，相手に内容を正確に伝えるために重要であり，話す速度，言葉の抑揚や強弱，間の取り方は，話の中心や話す場面を意識して話し方を工夫する上で重要である。これらのことについては，小学校，中学校及び共通必履修科目「現代の国語」と一貫して指導してきているが，その一層の定着を図ることが大切である。

発声や発音の仕方，話す速度などについては，**必要に応じて**としていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。例えば，専門的なアナウンスの指導に偏ったりすることがないよう留意する必要がある。

イ 「Ｂ書くこと」に関する指導については，必要に応じて，文章の形式などを扱うこと。

文章の形式とは，文章の構成の仕方，論の進め方，段落の作り方，箇条書きや項目分けの仕方，見出しの付け方など，それぞれの文章の目的に応じて一般的に用いられるようになっている書式やスタイルである。

とりわけ，企画書や報告書，手紙や電子メールなどの実用的な文章の場合には，目的をうまく遂行できるようにするために，一定の形式が成立していることが多い。これらを活用していくと，必要な情報が漏れ落ちることなく，読み手の心理の動きに沿った構成の文章が書けるようになり，文章作成の効率化を図ることができる。文章の形式の習得は，実社会に必要な国語の知識や技能の一つである。このことについては，小学校，中学校及び共通必履修科目「現代の国語」と一貫して指導してきているが，その一層の定着を図ることが大切である。

ただし，**文章の形式**については，**必要に応じて**としていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。例えば，手紙や案内などの文章の細かな形式にこだわり過ぎて，生徒の自由な発想や表現，創造の意欲を損なったりすることがないよう留意する必要がある。

(3) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の教材は，必要に応じて，音声や画像の資料などを用いることができること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の教材は，**必要に応じて，音声や画像の資料などを用いることができる**ことを示している。

「話すこと・聞くこと」は，音声言語を通して行われるものであり，その学習は，**音声**（音声言語）と密接に関連している。

音声（音声言語）は，相手の反応やその場の状況を受けながら理解されたり表現されたりするものであり，即時的に消えていくことが特徴である。スピーチや面接や話合いの仕方などを振り返ったり批評し合ったりする際には，機器を用いて録音あるいは録画したものを教材として用いることが効果的である。

一方，**画像**は，言語を直接的に用いてはいないが，国語科の指導においては，言語による情報をより分かりやすくするための補完的な役割を果たすものである。言語を用いて伝えること以上の情報を提示することもでき，調べたことやまとめたこと，考えたことを分かりやすく伝えられることが特徴である。

必要に応じてとしていることから，音声や画像の特徴を理解した上で，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。

イ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」のそれぞれの(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう**，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示して

いる。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通して，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元などにおける具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を適切に表現する資質・能力を育成する「A話すこと・聞くこと」や「B書くこと」の領域の指導に当たっては，単に話したり書いたりさせるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすることも難しくなるため，話したり書いたりするとともに，話題や題材に基づいて収集した情報を理解する必要がある。この場合，話したり書いたりする資質・能力を育成するために読む活動を取り入れることもある。また，書く資質・能力を育成するために話し合う活動を取り入れることもある。こうした場合においても，あくまでも，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

第６節　古典探究

１　性格

時代がいかに変わろうとも普遍的な教養があり，かつてはその教養の多くが古典などを通じて得られてきた。これらの教養は，先人が様々な困難に直面する中で，時代を越えた「知」として蓄積されてきたものであり，そのようにして古典は文化と深く結び付き，文化の継承と創造に欠くことができないものとなってきた。国際化や情報化の急速な進展に伴って，未来がますます予測困難なものになりつつある中，社会でよりよく生きるためには，我が国の文化や伝統に裏付けられた教養としての古典の価値を再認識し，自己の在り方生き方を見つめ直す契機とすることが重要である。

「古典探究」は，このことを踏まえ，共通必履修科目「言語文化」により育成された資質・能力のうち，「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため，ジャンルとしての古典を学習対象とし，古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し，自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

この科目では，古典などを読んで，我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めたり，先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で伝え合う力を高めたり，生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させたりすることをねらいとしている。小学校，中学校及び共通必履修科目「言語文化」の指導との一貫性を図り，伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり，我が国の文化の特質や我が国の文化と中国など外国の文化との関係について考察したりして，古典への興味や関心を広げることを重視している。

そのため，様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう，〔知識及び技能〕においては，「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」，「(2)我が国の言語文化に関する事項」の２事項を，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，「A読むこと」の１領域から内容を構成し，その充実を図っている。

２　目標

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって古典に親しみ自己を

向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

高等学校国語科の目標と同様，「古典探究」において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理し，それぞれに整理された目標を(1)，(2)，(3)に位置付けている。

(1)は，「知識及び技能」に関する目標を示したものである。共通必履修科目「言語文化」と同じく，「古典探究」では，**生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能**としている。

生涯にわたる社会生活とは，高校生が日常関わる社会に限らず，現実の社会そのものである実社会を中心としながらも，生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している。こうした広く社会生活全般を視野に入れ，社会人として活躍していく高校生が，生涯にわたる社会生活において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

また，「古典探究」では，共通必履修科目「言語文化」において「我が国の言語文化に対する理解を深める」としていたのを受け，科目の性格を踏まえ，**我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深める**としている。

(2)は，「思考力，判断力，表現力等」に関する目標を示したものである。**論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力**については，共通必履修科目と同じく，**伸ばし**としている。また，**伝え合う力**の育成については，共通必履修科目では，「他者との関わりの中で」としていたものを受け，**古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で**と発展させている。古典などを読むことで，先人が何を感じて何を考えたのか，いかに生きたのかということを知ることができる。古典に表れている，人間，社会，自然などに対する，ものの見方，感じ方，考え方には，現代と共通するものや，現代とは異なる古文特有，あるいは漢文特有のものもある。古典の学習を通して古典の豊かな世界に触れるとともに，古典についての解説や評論なども必要に応じて参考にしながら，それらの様々なものの見方，感じ方，考え方に，主体的に関わることを通して，思考力や想像力を伸ばし，豊かな感性や情緒をはぐくむことで，社会人としての資質の形成に資することをねらいとしている。このような力を育成して，生徒が**自分の思いや考えを広げたり深めたりする**ことを目指している。

(3)は，「学びに向かう力，人間性等」に関する目標を示したものである。

言葉がもつ価値については，共通必履修科目と同じく，**認識を深める**としている。言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること，言葉から様々なことを感じたり，感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること，言葉を通じて他者や社会と関わり自他の存在について理解を深めることなどがある。こうした言葉がもつ価値への認識を深めることを示している。

自己を向上させることについては，共通必履修科目では，「生涯にわたって読書に親し

み自己を向上させ」としていたものを受け,「古典探究」では,**生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ**るとしている。生涯にわたって古典を読む習慣を築き,社会人として,考えやものの見方を豊かにすることを目指している。

我が国の言語文化への関わりについては,共通必履修科目では,「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち」としていたものを,**我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め**とし,より高めている。**我が国の言語文化**とは,我が国の歴史の中で創造され,継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの,つまり,文化としての言語,また,それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活,さらには,古代から現代までの各時代にわたって,表現し,受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「古典探究」では,これらのうち,特に,古典を中心とした文化としての言語,多様な言語芸術や芸能などの価値に重点を置き,理解したり尊重したりすることにとどまることなく,自らが継承,発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

言葉を通して他者や社会に関わろうとするについては,小学校及び中学校の各学年において「思いや考えを伝え合おうとする」としていたものを受けたものであり,全科目同じとしている。他者や社会に関わろうとする態度は,国語科だけではなく他教科等も含めて,社会人となる高校生に広く育成する必要がある。国語科においては,こうした態度を,**言葉を通して**養うことを示している。

(3)に示した目標は,以上のような**態度を養う**ことを目指している。このような「学びに向かう力,人間性等」は,「知識及び技能」及び「思考力,判断力,表現力等」の育成を支えるものであり,併せて育成を図ることが大切である。

3 内容

〔知識及び技能〕

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。
ウ　古典の文の成分の順序や照応，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。
エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。

○語彙

現代の国語	言語文化	古典探究
エ　実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに，語句や語彙の構造や特色，用法及び表記の仕方などを理解し，話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

ア　古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。

「言語文化」のウを受けて，古典に用いられている語句の意味や用法を理解し，古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることを示している。

古典に用いられている語句の意味や用法を理解することは，古典を読むことの出発点であるとともに，伝統的な言語文化についての認識を深め，言語感覚を養う基本でもある。**古典を読むために必要な語句**とは，古文，漢文の作品や文章を読むのに必要な語，慣用句，成句などをいう。古典の内容を的確に読み取るためには，これらの語句の意味や用法を理解し，量を増すことが大切である。

古典に用いられている語句には，現代の言葉と同じ意味や用法のものも多いが，「あはれ」や「あたらし」など，現代の言葉とは意味が異なったり，「道（いう）」や「釈（ゆる

す)」という読み方など，現代ではほとんど用いられなかったりするものもある。また，古典の語句の意味は単一ではなく，豊かな広がりをもっており，中心的，一般的な意味のほかに，その周辺に幾つかの派生的な意味を含んでいるものも多い。例えば，「河の流れ」という語句は，古文では無常な世界の有り様も表すことがある。また，「山河」という語は，漢文では遠く隔たっているということや永久不変で堅固なものの比喩としても用いられている。

語句の用法とは，作品や文章における語句の用いられ方をいう。例えば，古典の敬語の用法に関する理解は，古典を読む際の人物関係などの理解につながるとともに，現代の言葉の特色を理解することにも役立つ。また，同じく「ゆるす」と読む漢字である，「赦」，「許」，「容」や，「あり」と読む漢字である，「有」，「在」などは，それぞれ用法が異なっており，古典の作品や文章を読む際には注意が必要である。このような現代の言葉との相違点と共通点，意味の広がり，用法に着目して理解を深めることは，**語句の量を増す**とともに，古典のみならず現代の言葉に対する**語感を磨き語彙を豊かにする**ことにもつながっていく。

なお，古典の文章を読む際には，古典の言葉に対する理解を深めるために，現代語訳や辞書などを適切に活用したり，現代の言葉と比較対照したりするなどの指導を通して，古典を読むことへの抵抗を少なくする必要がある。また，文脈に即して意味や用法を習得する指導や，書き手の意図や文章中の人物の心情などを，語句を手掛かりにして的確に読み取り，作品の理解につなげていく指導を工夫することが大切である。

〇文や文章

現代の国語	言語文化	古典探究
オ　文，話，文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。	エ　文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること。	イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。 ウ　古典の文の成分の順序や照応，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。

中学校第3学年の〔知識及び技能〕の(1)の「ウ　話や文章の種類とその特徴について理解を深めること。」を受けて，古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めることを示している。

作品や文章の種類には，文学的な作品や文章（物語，小説，詩歌など），論理的な作品や文章（評論，論説など），実用的な作品や文章（記録，手紙など）などがある。特に伝統的な言語文化の精華である**古典の作品や文章の種類**は豊富であり，例えば，古文には，和歌，俳諧，作り物語，歌物語，歴史物語，随筆，日記，説話，詩歌などに関する評論，

仮名草子，浮世草子，能，狂言，人形浄瑠璃，歌舞伎など，また，漢文には，思想，史伝，辞賦，古体詩，近体詩，寓話，説話，論，説，記，小説など，多種多様な形態がある。

その特徴とは，作品や文章の種類がそれぞれ備えている音韻やリズム（五七調，七五調，五言，七言など），構成や展開の仕方などをいう。例えば，歌物語には，和歌にまつわる物語，章段による構成，会話と地の文，統一的な主人公の有無などの特徴があり，冒頭に「今は昔」，「むかし」など共通する語句が見られるものもある。

古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めることは，古典の作品や文章に対する理解を深めるだけでなく，構成や展開の仕方などを的確に捉えることや，古典に特有な表現に注意して内容を的確に捉えること，書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈すること，表現の特色について理解することにも役立つ。また，時代や地域による表現様式の変化，書き手特有の表現上の特色を把握することにもつながる。その特徴についての理解を深めることで，伝統的な言語文化の理解も一層深まっていく。

なお，指導に当たっては，既存の知識を理解させるだけではなく，生徒の気付きを重視して，古典への興味や関心を広げたり深めたりすることが大切である。

ウ　古典の文の成分の順序や照応，文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

中学校第２学年の〔知識及び技能〕の(1)のオの「文の成分の順序や照応など文の構成について理解するとともに，話や文章の構成や展開について理解を深める」ことを受けて，古典の文の成分の順序や照応，文章の構成や展開の仕方について理解を深めることを示している。

文の成分の順序とは，文を組み立てている主語，述語，修飾語，接続語，独立語などの並ぶ順序，つまり語順のことである。また，**照応**には，主語と述語との照応，修飾語と被修飾語との照応などがある。語順や語の照応は表現の意図と深く関わることがあるため，文の成分の順序や照応などに着目することが必要である。特に，**古典の文の照応**においては，主語が明示されないことが多い。また，漢文の訓読では，簡便さや口調のよさが優先され，文の成分の順序や照応が明確に示されない場合がある。文の成分の順序や照応，順接，逆接，因果などの文と文，句と句との関係などに着目して，文章の構成や展開の仕方について理解を深めることは，内容の正確な把握や深い理解にとって欠くことができないことである。

文章の構成や展開の仕方とは，文脈や段落相互の関係，時系列による叙述，叙景と叙情，頭括型，尾結型，双括型，起承転結など，文章の構成や展開の仕方をいう。特に，古典の文章にはもともと段落が構成されないものもあるため，段落相互の関係以外の文章の構成や展開の仕方に着目することが大切である。例えば，説話の場合は，物事の由来や出来事，人物の逸話などを伝承や伝聞の形で物語るために，「今は昔」や「語り伝えたるとや」など，伝聞であることを示す語句が用いられることが多いこと，筋（ストーリー）や事件の展開が叙述の中心となること，教訓や寓意を含むものが多いことなどの構成や展開の仕方が見られる。

古典の文章を読む際にも，内容を読み取るだけではなく，書き手が表現したいことをどのように構成し展開しているかということを把握することが重要であり，そのためには文章の構成や展開の仕方について理解を深めることが求められる。

〇表現の技法

現代の国語	言語文化	古典探究
カ　比喩，例示，言い換えなどの修辞や，直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。	オ　本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。	エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。

エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。

「現代の国語」の〔知識及び技能〕の(1)のカ，「言語文化」の〔知識及び技能〕の(1)のオを受けて，古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めることを示している。

古典の作品や文章では，言葉の響きやリズムを工夫し，修辞などの表現技巧を用いることで，書き手や文章中の人物の思想や感情が，それにふさわしい言葉で表現されている。したがって，古典に親しむためには，**古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色**を捉え，思想や感情などがどのように表現されているかを理解し，巧みな描写，繊細な表現，簡潔な語調，言葉の響きやリズムなどを味わうことが大切である。

言葉の響きやリズムは，特に文学的な作品や文章の表現の根幹にかかわる要素であり，古典の作品や文章では固有の特徴となっている場合がある。例えば，和歌の五七調や七五調，漢詩の四言，五言，七言などの音数律は，基本的なリズムである。また，漢文のみならず，『方丈記』や『平家物語』の冒頭などのように，対句表現を多用することによって，文章全体に独特のリズム感が生じる場合もある。

言葉の響きもまた，古典の作品や文章の重要な要素である。例えば，漢詩の押韻，同じ語句の繰り返し，しりとりの要領で同じ語句を連ねたりすることや，「彷彿」などの双声語や「混沌」などの畳韻語，「悠悠」などの畳語の使用は言葉の響きを意識したものである。また，字音を中心とした漢文の訓読には，独特な歯切れのよい言葉の響きがある。一方，古文の作品や文章においても，擬声語や擬態語，繰り返しの表現が効果的に用いられている。また，風の音を「いささ」や「かそけし」などという語句によって想起させるなど，言葉の響きを効果的に用いた表現も見られる。作品や文章を音読するなどしながら，**言葉の響きやリズム**について理解を深め，古典に親しむことが求められる。

修辞とは，広くは，書き手が自分のものの見方，感じ方，考え方を，より効果的に表現しようとする言語的な活動のことをいうが，ここでは，枕詞，序詞，掛詞，縁語，句切

れ，典故（文学作品が踏まえる故事や先行作品の使用），押韻，対句，倒置，比喩などの表現の技法を指す。**表現の特色**には，会話体，独白体，起承転結などの文章の構成や展開の仕方のほか，時代を超えて用いられ，あるいは特定の時代，特定の書き手の作品や文章に繰り返し用いられる，「花」，「月」，「死生観」，「恋愛観」，「無常観」など表現の題材や素材となるもの，さらには，「報恩譚（たん）」，「変身譚」，「貴種流離譚」，「仙界遊行」などの物語の類型も含まれる。なお，古文における音便や係り結びなどの文法的な現象を理解すること，掛詞や縁語などの様々な修辞法の使用による表現効果について理解を深めること，「花鳥風月」や「雪月花」などがどのように詠じられているかを表現の差異に着目して深く理解すること，さらには物語を類型の視点から分析して表現の特色について理解を深めることは，作品や文章の構成・展開を的確に捉えるためにも重要である。

(2) 我が国の言語文化に関する事項

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。

イ　古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。

ウ　時間の経過による言葉の変化や，古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

エ　先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

○伝統的な言語文化

現代の国語	言語文化	古典探究
	ア　我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。	ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。
	イ　古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。	イ　古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。
	ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓	

	読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。	

ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。

我が国の文化の特質や外国の文化との関係を理解するための指導事項である。「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)のアを受けて，古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めることを示している。

我が国の文化の特質としての人生観，社会観，自然観，美意識，言語観などは，我が国の伝統的な言語文化として重要な位置を占めている古典の作品や文章にも表れている。優れた伝統的な言語文化である**古典などを読むことを通して**，それぞれの時代における社会の姿，その中で言語文化を生み出した人々のものの見方，感じ方，考え方に触れることで，我が国の文化の特質について理解を深めることが大切である。

我が国の文化と中国など外国の文化との関係については，外国，とりわけ中国からもたらされた学問，芸術，宗教などの文化が，我が国の文化の形成に大きな影響を与えてきたことを理解することが必要である。その際，我々の先人は，それをただ受け入れただけでなく，そこから我が国独自の文化を育て上げてきたということを理解することも古典の学習では不可欠である。この関係を理解するためには，関連する資料を調べたり，古典などを読み比べたりして，分かったことや考えたことなどをまとめる学習も必要となる。

特に，我が国の言語，文学，思想などは，近世までの歴史においては，中国から強い影響を受けつつ独自の発展を遂げてきた。漢文を古典として学ぶことの理由は，このような影響を学ぶ点にもある。漢文の訓読などを通して漢字文化と接触し，その受容によって日本語が形成されてきたこと，現代の日本語にも漢文の影響が残っていること，孔子や孟子，老子や荘子などの思想が我が国の文化に大きな影響を与えていること，漢詩もまた我が国で愛好され，優れた漢詩が数多く作られたことなどについて理解を深めることも大切である。

イ　古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。

「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)の「ウ　古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。」を受けて，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めることを示している。

古典を読むために必要な文語のきまりには，文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含まれる。古文特有のきまりに重点を置いて，仮名遣いや活用の違い，助詞や助動詞などの意味や用法，係り結びや敬語の用法などについて理解を深め，古文を読むことの学習に役立

つようにすることが必要である。

訓読のきまりとは，元来中国の文語文である漢文を，国語として訓読する際に必要な返り点，送り仮名，句読点など訓点に関するきまりをいう。訓読はおおむね文語文法に沿った読み方をするが，普通の文語文法では扱われない訓読特有の伝統的な読み方もあることに注意する必要がある。また，訓読が口調のよさや簡便さを優先させることがあること，助詞や助動詞などの助字がもっている意味などに着目し，訓読の仕方について理解を深める指導が求められる。

なお，内容の取扱いの(1)のアに示しているように，指導に当たっては，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の指導に即して行うことが重要であるが，必要に応じて体系的に指導するなど，まとまった学習もできることとしている。ただし，その場合でも，あくまでも共通必履修科目「言語文化」における「古典に親しむため」の学習を踏まえた上で，「古典を読むために必要な」ものに限定することとし，断片的な知識の習得に終始しないよう留意する必要がある。

〇言葉の由来や変化，多様性

現代の国語	言語文化	古典探究
	エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。 オ　言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。	ウ　時間の経過による言葉の変化や，古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

ウ　時間の経過による言葉の変化や，古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)の「エ　時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め，古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。」を受けて，時間の経過による言葉の変化や，古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めることを示している。

時間の経過による言葉の変化とは，古典の言葉と現代の言葉には時間的な連続性があり，その間に言葉の意味が移り変わったことを指している。また，**現代の言葉の成り立ち**とは，現在使われている言葉がたどってきた変遷の過程を指している。**古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響**について理解を深めることとは，自分たちが現在使っている言葉が，上代から現代に至るまでにどのような過程をたどってきたかということについて

理解を深めることである。

古典の言葉と現代の言葉とには時間的な連続性があり，両者が時代を超えた一続きの言語文化であると捉えることが重要である。例えば，文語における動詞の四段活用が口語では五段活用に変化したり，『詩経』の歌謡の「風」と「雅」に基づく「風雅」という言葉が，我が国にもたらされてからは「雅やかな趣」という意味で用いられたりするようになった。また，『論語』の中にも「以上」，「未定」，「使者」など，現代の社会生活の中でもしばしば使用されているような語も多く見られる。このように，古典が現代の言葉の成り立ちに大きな影響を与えていることを知ることは，伝統的な言語文化に対する興味や関心を広げることにもつながる。なお，学習する際には辞書や参考資料などを活用して，学習効果を高めるようにする必要がある。

〇読書

現代の国語	言語文化	古典探究
ア　実社会との関わりを考えるための読書の意義と効用について理解を深めること。	カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。	エ　先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

エ　先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

「言語文化」の〔知識及び技能〕の(2)の「カ　我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。」を受けて，先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めることを示している。

古典に表れている，**先人のものの見方，感じ方，考え方**には，現代と共通するものがあると同時に，古文には古文特有の，漢文には漢文特有のものがある。古典の文章や作品を読んだり，古典についての解説や現代語訳なども必要に応じて参考にしたりして，それらの様々なものの見方，感じ方，考え方に親しむことで，思考力や想像力を伸ばし，豊かな感性や情緒をはぐくむことが大切である。

情報化が進展する現代社会において，**自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする**ためには，幅広く古典に親しむことで読書の幅を広げ，読書の習慣を養い，知識や情報を収集し活用し探究する力を身に付けることが必要である。読書は，長い歴史の中で蓄積されてきた先人の知識や知恵を継承し，豊かな人間性を涵養（かん）するのに欠くことができないものである。このような**読書の意義と効用**について深く認識することで，生涯にわたる主体的な読書へとつながるような指導をすることが重要である。

〔思考力，判断力，表現力等〕

A　読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　文章の種類を踏まえて，構成や展開などを的確に捉えること。

イ　文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。

ウ　必要に応じて書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈するとともに，文章の構成や展開，表現の特色について評価すること。

エ　作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。

オ　古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。

カ　古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

キ　関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　古典の作品や文章を読み，その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動。

イ　同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

ウ　古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

エ　古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。

オ　古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。

カ　古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動。

キ　往来物や漢文の名句・名言などを読み，社会生活に役立つ知識の文例を集め，それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

〇構造と内容の把握

現代の国語	言語文化	古典探究
ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え，要旨や要点を把握すること。	ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。	ア　文章の種類を踏まえて，構成や展開などを的確に捉えること。 イ　文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。

ア　文章の種類を踏まえて，構成や展開などを的確に捉えること。

主として「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の「ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。」を受けて，古典を読む際に必要となる，文章の種類を踏まえて，構成や展開などを的確に捉えることを示している。

構成や展開などを的確に捉えるとは，文脈や段落相互の関係を踏まえ，文章の構成や展開を過不足なく読み取ることである。古典の作品や文章の内容を正しく読み取るためには，近代以降の文章と同様に，文脈や段落相互の関係を捉えるなど，文章の構成や展開を把握することが求められる。その際，本文の叙述を離れて観念的に捉えたり，部分にこだわり読みを狭めたりすることがないように留意することが必要である。古典を読む学習では，語句の意味の理解や，文の解釈が中心になりがちであるが，表面的な意味を捉えることに終わらせず，内容を把握するために，文章の構成や展開の仕方を学ぶことも大切である。

構成や展開を的確に捉えるには，**文章の種類を踏まえ**ることが重要である。文章の種類を踏まえるとは，論理的な文章，文学的な文章，実用的な文章といった文章の種類とその特徴を正しく踏まえるということである。例えば，和歌や漢詩では，伝統的な形式的特徴に留意することが必要である。文章の種類を正しく踏まえた上で，その種類に即した文章の構成や展開を的確に捉えることは，古典を読む上で基本的かつ重要なことである。

なお，指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

イ　文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。

主として「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の「ア　文章の種類を踏まえて，内容や構成，展開などについて叙述を基に的確に捉えること。」を受けて，文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えることを示している。

文章の種類を踏まえて，古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えることは，文章の種類に固有の特徴や修辞，文体などを正しく理解した上で，巧みな描写，繊細な表現，簡潔な語調などを味わいながら，書き手や登場人物の思想や感情，場面の設定，自然や季節の情景などといった作品や文章の内容を正確に捉えることである。そのことは，単に作品や文章の内容の理解に役立つだけではなく，広く上代から近世に至るまでの作品や文章に対する認識を深めることにつながる。

古典特有の表現とは，例えば，言葉のリズム，音便や係り結びなどの文法上の現象，修辞などのことである。これらに注意することは，古典特有の表現の美しさ，深さ，面白さを理解し，味わうことを通して，内容を的確に捉えることにつながる。現代の文章とは異なるリズムや響きなどの古典の魅力に気付くことで興味・関心が広がり，主体的な読み取りを促すことになる。さらに，文脈を捉え，語句や表現に注意することで，間違いなく過不足なく内容を理解することにつながる。また，読むことだけではなく書くことにも関連し，言語感覚を豊かにすることにも役立つことが期待される。その際，古典の知識を理解することに終始するのではなく，古典の知識を活用して文章や作品に親しむことも重視しつつ，言語活動を通して指導をすることが大切である。

なお，指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「イ　古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。」や，「エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○精査・解釈【①】

現代の国語	言語文化	古典探究
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。	イ　作品や文章に表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。 ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。	ウ　必要に応じて書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈するとともに，文章の構成や展開，表現の特色について評価すること。

ウ　必要に応じて書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈するとともに，文章の構成や展開，表現の特色について評価すること。

「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の「イ　作品や文章に

表れているものの見方，感じ方，考え方を捉え，内容を解釈すること。」や，「ウ　文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。」を受けて，書き手の考えや目的，意図を捉えて内容を解釈するとともに，文章の構成や展開，表現の特色について評価することを示している。

必要に応じてとは，**書き手の考えや目的，意図を捉え**ることを，読み手の目的に応じて行うことを指している。古典の作品や文章における内容の解釈は常に書き手の考えや目的，意図を捉えなければ成立しないわけではない。ただし，読み手の目的によっては，書き手の考え，書き手がその作品や文章を書いた目的や意図を捉えることにより，内容の解釈が深まる場合がある。例えば，書き手独自の思想や論の進め方の特徴，作品や文章の優れた点を考察したりするために読むような場合である。このような場合には，単に対象とした文章でのみ内容を解釈するだけでなく，書き手の考えや目的，意図と関係付けることにより，書き手や登場人物の思想や感情，場面の設定，自然や季節の情景などといった内容の解釈を深めることができる。

文章の構成や展開を正しく踏まえることで，内容や要旨などを文章の叙述から離れて観念的に捉えたり，部分にこだわって読みを狭めたりすることを少なくすることができる。それらを**評価する**とは，その文脈や段落相互の関係の妥当性や優劣などを判断することである。また，**表現の特色について評価する**とは，文章の修辞，文体など表現の仕方の特色を捉えた上で，思想や感情などの内容が効果的に表現されているかなどの観点から，そのような表現の特色について価値判断することである。

これらはいずれも，作品や文章を読み味わうことにつながるため，伝統的な言語文化である古典の学習にとっては，大きな意義をもつものである。

なお，指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(1)の「エ　古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○精査・解釈【②】

現代の国語	言語文化	古典探究
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。	エ　作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。

エ　作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内

容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。

「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の「エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ，内容の解釈を深めること。」を受けて，作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察することを示している。

作品の成立した背景とは，ある作品がどのような状況でできあがったかということであり，時代・時期，書き手・語り手の状況，制作の意図など，成立に関わる諸条件を示している。**他の作品など**とは，同じ時代に書かれた他の作品や，同じ題材やテーマをもつ異なる時代に書かれた他の作品のことである。**作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ**る必要があるのは，成立の背景に着目することで，作品の**内容の解釈を深め**ることが可能になることが多いためである。また，古典の作品は，他の作品を踏まえて成立することも多いため，作品や文章との関係を押さえることが必要となる。

作品の価値について考察するとは，時代の変遷の中で様々な評価を受けつつ読み継がれてきた作品がもつ価値について認識することである。小学校，中学校及び共通必履修科目「言語文化」などと系統的に学んできた古典の学習を踏まえ，古典の原文のみならず，古典についての評論文なども活用して，古典の普遍的価値や，その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味について考えを深めるとともに，その作品が自らにとってどのような価値をもつのかについて考えることも大切である。

○考えの形成，共有【①】

現代の国語	言語文化	古典探究
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。	オ　古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。 カ　古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

オ　古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。

「言語文化」の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B読むこと」の「オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。」を受けて，古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすることを示している。

古典の作品や文章について読む場合にも，近代以降の文章を読む場合と同様に，全体の構成や展開を捉えてあらすじなどをつかむ，情景や人物の心情を把握して内容を理解するなどのプロセスが必要となる。文学的な文章ならば，内容を読み取るだけでなく表現の美しさを味わうなど，想像力や感性を働かせた情緒的な読み方になり，論理的な文章ならば，書き手の思考などの論理の展開を把握しながら要旨を捉える読み方になる。**内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりする**とは，古典の作品や文章を読んで得た内容や解釈を，知識や経験に基づいた一定の見識としての**自分の知見**と照らし合わせ，読むことで得た思想や感動などを捉え直しながら深化させたりすることで，自分自身の考えを豊かにすることである。古典を読むことは，古典の作品や文章から一方的に知識や情報を受け取るという受け身の活動ではない。古典の文章や作品に表れた，人間，社会，自然などについての見方や考え方などを読み取り，それらについて考察することを通して，自身の人間観，社会観，自然観などを広く確立して深めることが大切である。

カ　古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

古典の作品や文章などに表れているものの見方や感じ方などを読み深めることを通して，自分の考えを拡張したり深化させたりする指導事項である。

古典の作品や文章などとは，古典の原文だけではなく，古典の現代語訳や古典に関する解説や評論など，古典を翻案した近代以降の小説や戯曲など，古典に関連する様々な作品や文章を示している。**古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方**とは，古典の作品や文章などにおける書き手や登場人物などの先人が具体的に対象をどのように受け止めたり感じたり考えたりしてきたかということを指している。このような**ものの見方，感じ方，考え方を踏まえ**るためには，古典の作品や古典の文章などの内容，書き手の意図を捉え，共感したり，疑問に思ったり，思索したりして，読み味わうとともに，書き手や登場人物が物事をどのように捉えているかという点に注意することが大切である。それによって生徒は，思考力や想像力を伸ばし，**人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりする**ようになる。また，幅広く様々な古典の作品や文章などを読むことも大切である。

古典の作品や文章などには，それらが成立した時代や背景の違いによって，書き手や登場人物の，人間，社会，自然などに対する様々なものの見方，感じ方，考え方が表現されている。例えば，『平家物語』は因果観や無常観を基調として，登場人物の心情などが描かれている。それらを的確に捉えることは，伝統的な言語文化である古典の学習の重要な

目的でもある。古典に表れた様々なものの見方，感じ方，考え方には，現代にも通じて共感できるものや，逆に，違和感を覚えたり理解が難しかったりするものがある。また，優れた洞察力や創造性に感動するものもある。このように，古典の作品や文章を読む学習では，論理的に考えるとともに，感性や情緒を働かせることで思考力や表現力を豊かにし，他者や先人との関わりの中で，自分の思いや考えを広げたり深化させたりすることができる。

〇考えの形成，共有【②】

現代の国語	言語文化	古典探究
イ　目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。（再掲）	オ　作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。（再掲）	キ　関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。 ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

キ　関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

興味や関心をもつ題材やテーマに関連する古典などを主体的に読むことを通して，自分のものの見方，感じ方，考え方を深める指導事項である。古典の作品や文章の題材やテーマなどに関連する課題を自ら設定し，古典の作品や文章を読んで探究することで，その解決を図る学習が考えられる。

関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，そこに表れた様々な思想や感情などを的確に捉え，分析し整理し探究することは，**自分のものの見方，感じ方，考え方を深め**て，心情を豊かにすることにもつながる。古典の学習においては，このように生徒の思考力や想像力を伸ばすことも大切である。そのためには，学校図書館などと連携した読書指導を行い，多くの古典の作品や文章などに親しむ機会を設けることが必要である。

古典の作品や文章などには，それらが成立した時代に生きた先人の思想や感情などが込められており，書き手や登場人物の人間，社会，自然などに対する思想や感情が，書かれた時代や環境の違いによって，様々に表現されている。それらを通して，古典特有のものの見方，感じ方，考え方を知り，我が国の伝統的な言語文化の特質の理解を深めることが大切である。例えば，関心をもった事柄に関連する同時代，または異なる時代の，様々な古典の作品や文章などを読み比べることで，主体的に自分の読みを深めることができる。

さらに，先人の思想や感情を理解することを通して，自らが具体的に対象をどのように受け止めたり感じたり考えたりしているかという，**自分のものの見方，感じ方，考え方**を見つめ直すことが重要である。

なお，指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(2)の「エ　先人のものの見方，感じ方，考え方に親しみ，自分のものの見方，感じ方，考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

古典の作品や文章の価値について，感じたり考えたりしたことを共有し合って評価するとともに，我が国の言語文化に関する課題を設定し，探究してその解決を図る指導事項である。

古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価するとは，例えば，ある作品や文章のもつ価値について，同じ時代の我が国の他の作品や文章，同じ時代の外国の作品や文章などと，共時的な観点から比較して評価したり，異なる時代の同じ題材やテーマをもつ他の作品や文章などと，通時的な観点から比較して評価したりすることである。

課題の設定に当たっては，例えば，季節や人事をはじめ様々な事柄に対する先人のものの見方，感じ方，考え方について，現代の人々との違いや中国など外国の人々との違い，古典作品の文体の特色，古典作品に表れたテーマの変遷，古典作品に表れた中国など外国からの影響などを，時間的あるいは空間的な比較を通して生徒が考え，我が国の伝統的な言語文化の特色が明確になることで，**我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりする**ことが可能になるものを選択する必要がある。なお，課題の設定の例としては，言語文化に直接関係するもののほか，自然や天候，先人の死生観，仕事や学問，病気や健康，宗教や道徳，恋愛と結婚など，現代社会に共通するものを選択することも考えられる。

伝統的な言語文化についての課題を探究する学習が，自ら設定した課題の解決にとどまらず，我が国の言語文化についての理解の深まりに資することが大切である。国際化，情報化が進む知識基盤社会に生きる生徒にとって，我が国の伝統的な言語文化の在り方について自分の考えをもつことは，極めて重要な意味がある。とりわけ古典は，我が国の文化の中で重要な位置を占めており，古典を読むことを通して我が国の文化の特質を考え，国際化の時代における国語の在り方を考えることには大きな意義がある。また，伝統的な言語文化に対する深い理解は，他者や社会との関係だけではなく，自己と対話しながら自分の考えを深めていく上でも大切なことである。このような学習を重ねる過程で，我が国の伝統的な言語文化についての課題も，次第に明確になることが考えられる。その課題を自ら設定して探究することは，学習意欲を高めるとともに，言語文化に関する課題を解決しようとする態度を育成することにもつながる。

なお，指導に当たっては，例えば，〔知識及び技能〕の(2)の「ア　古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。」などとの関連を図ることが考えられる。

○言語活動例

現代の国語	言語文化	古典探究
ア　論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。	ア　我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論，随筆などを読み，我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。	ア　古典の作品や文章を読み，その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動。
イ　異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。	イ　作品の内容や形式について，批評したり討論したりする活動。	イ　同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。
	ウ　異なる時代に成立した随筆や小説，物語などを読み比べ，それらを比較して論じたり批評したりする活動。	ウ　古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。
	エ　和歌や俳句などを読み，書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動。	エ　古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。
	オ　古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材，内容，表現の技法などについて調べ，その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。	オ　古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。
		カ　古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などに

		まとめる活動。 キ　往来物や漢文の名句・名言などを読み，社会生活に役立つ知識の文例を集め，それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

ア　古典の作品や文章を読み，その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動。

古典の作品や文章を読んで，興味をもったり疑問に感じたりしたことについて調べて，発表したり議論したりする言語活動を示している。

取り上げる**古典の作品や文章**としては，古文では，作り物語，歌物語，歴史物語，随筆，日記，説話，評論，仮名草子，浮世草子，和歌，俳諧，能，狂言，人形浄瑠璃，歌舞伎など，また，漢文では，思想，史伝，詩，随筆，説話，評論，小説などの形態の中から，古典の原文のみならず，古典に関連する近代以降の文章も含めた様々なものが考えられる。調べる対象についても，古典の作品や文章の**内容や形式など**に関連して，例えば，動物寓話に登場する動物の種類と性格，我が国と中国など外国の季節感，古典における喜怒哀楽などの描かれ方，書き手や登場人物など，生徒が**興味をもったこと**や，自分たちの生き方と比較して**疑問に感じたこと**などを，主体的に選択することが求められる。

調べて発表したりする際に参考とする資料についても，古典の作品や文章の解説書などの書籍に加えて，インターネットなどの様々なメディアを活用することも考えられる。また，調べて発表したりする際の手段についても，口頭をはじめ，紙の補助資料を作成して聞き手に配布をしたり，ポスターを用いたりする他にも，コンピュータを活用し，図表や画像など視覚に訴えるものを使用するなどの方法が考えられる。**議論したりする**場合についても，テーマを設定してペアやグループで話す形式や，ディベート形式などが考えられる。

イ　同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

同じ題材の複数の古典の作品や文章を読み比べて，それぞれの作品や文章に描かれている思想や感情などの共通点や相違点を整理して，論述したり発表したりする言語活動を示している。

書かれた時代は異なるが，**同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べる**ことで，時代を超えて我が国の文化の底流にある，**思想や感情**などに触れることができる。それらは，例えば，生，老，病，死など，人間にとって不可避なことに関する思想や，恋愛や友情，親子の愛情など，いつの時代も人間が変わらずにもっている感情などの

共通点が考えられる。あるいは，受けるイメージの違いを感じ取ったり，書き手の意図による違いなどの**相違点**を見いだしたりすることも考えられる。また，「送別」，「詠懐」，「自然」などをテーマとした漢詩に表れた思想や感情，『長恨歌』や謡曲『楊貴妃』などでの楊貴妃の描かれ方の**共通点や相違点**などについて考察することも考えられる。

読み比べる際には，原文はもちろん現代語訳や解説書なども活用して，より多くの作品や文章に接することも重要である。また，読み比べて分かった**共通点や相違点**について論述する際には，自分の考えの根拠となる部分を，古典の作品や文章の中から明確に指摘をして文章を書くことが求められる。さらに，読み比べたことについて，**論述したり発表したりする**ためには，分かったことや考えたことをまとめることも必要となり，作品や文章の理解を深めることにもつながる。

ウ　古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

古典を読んだことを基に，語彙や表現の技法などを参考にして和歌や俳諧，漢詩を創作したり，文語の文章を書いたりする言語活動を示している。

古典を読むことを通して身に付けた文語のきまりや訓読のきまり，古文や漢文などで用いられている語彙や，修辞や押韻などの表現の技法を活用するなど，**その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩**などの韻文を**創作したり**，学校行事をテーマとした生活作文や日記文など，**体験したことや感じたことを文語で書いたりする**ことなどが考えられる。

なお，漢詩を創作する際には，多くの場合，五言の句は意味の上で二字と三字の構成となり，七言句は四字（二字と二字）と三字の構成になっていることや，絶句の起承転結の展開を確認することが必要である。そのうえで，押韻は正確でなくてもよいことにするなどとして，絶句や律詩などを創作することが考えられる。韻文を創作する際には，古典の作品を模倣したり，文語で文章を書く際には，短い分量の文章を書いたりするなど，使い慣れていない古文や漢文などで用いられている語彙を使用することに配慮した指導の工夫も必要になる。

エ　古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。

古典の作品の全体，あるいはその一部を朗読する言語活動を示している。

朗読には，捉えた内容を基に表現の仕方を工夫するなどの学習を通して，解釈を一層深める効果がある。古典の文章には，独特の言い回しや美しい響きがある。それらを生かして朗読することにより，古典の世界のイメージも広がり，内容の把握の深まりも期待できる。**古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する**ことは，文章の解釈を自覚したり，生徒同士が文章の内容についての解釈の有り様を確認し合ったり，評価し合ったりすることにもつながる。

朗読をする際には，古文や漢文がもつ特有の調子などを味わいながら行うことが大切である。特に，漢文の**朗読**では，「長恨歌」などの長編の古体詩や，「鴻門の会」などの作品

を，内容の解釈や表現の強調点などがグループごとに異なるよう工夫して群読をする活動も考えられる。古典は，現代の文章とは異なるリズムや響き，表現の美しさ，深さ，面白さに満ちている。朗読に加えて，音読や暗唱などを通してこのような古典の魅力に気付かせることは，古典への興味・関心を広げ，生徒の主体的な学習を促すことに効果がある。

オ　古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。

古典に関する課題を設定し，古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べるなどしながら探究して，成果を発表したり報告書にまとめたりする言語活動を示している。

主体的に学習に取り組む態度を育成するためには，与えられた課題について学習を進めるだけでなく，それまでの学習経験や身に付けた資質・能力などを生かしながら，生徒が課題を自ら設定し探究する学習が大切である。**古典の作品に関連のある事柄について**とは，そのような学習活動の前提としての課題設定の範囲を示している。古典の作品を読んだ後の生徒の興味・関心のもち方は多様であり，設定する課題も，文章の内容や形式の両面にわたることが想定される。

様々な資料を調べるとは，学校図書館，地域の公共図書館，インターネットなどで参考となる書籍や資料などを調べたり，現地に出かけて取材したりするなど，様々な方法によって課題に関する情報を収集，整理し，それについて分析，考察を行うことである。このような活動を基に，設定した課題について自分なりの意見をもち，判断を下して，成果とすることが考えられる。**発表したり報告書などにまとめたりする**とは，成果の公表の仕方を示している。口頭で発表したり，文章にまとめて報告書などに編集したりすることは，一連の学習について成就感を味わわせ，生徒の学習意欲を高めることにもつながる。報告書などの編集に当たっては，一人の生徒のものを編む場合や，グループごとやホームルーム全体など，複数の生徒のものを編む場合などが想定される。この言語活動は，大学等や社会で調査研究活動などを行い，その成果を発表する基礎ともなる。

カ　古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動。

古典の言葉と現代の言葉を比較し，その変遷について分かったことや考えたことを論文などにまとめる言語活動を示している。

言葉は長い年月にわたって変遷しつつ現代に至っている。そのため，**古典の言葉を現代の言葉と比較**することに意義がある。時代の推移の中で大きく変化した言葉，変化の小さい言葉などを様々な角度から取り上げて比較し対照することは，国語の特質の一端に触れることになる。例えば，古文では「ありがたし」，「あからさまなり」，「やがて」など，漢文では「故人」，「迷惑」，「遠慮」などを取り上げ，古典の言葉と現代の言葉との間で意味や用法についてどのような相違点や類似点があるか，「文学」，「文化」，「勉強」などの言葉が，どのような変遷の過程を経てきているかなどについて調べることは，伝統的な

言語文化のみならず，国語についての認識を深めることにつながる。

その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読みとは，古典の言葉と現代の言葉とを比較し，その変遷について，国語辞典，古語辞典，漢和辞典，その他の関係資料を用いて，それぞれの言葉が用いられた当時の社会の状況などとの関係に留意しつつ考察することを示している。**分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる**という表現活動を行うことは，学習の成果を筋道立ててまとめるとともに，一連の学習について成就感を味わわせ，古典について探究する意欲を更に高めることにもつながる。

キ　往来物や漢文の名句・名言などを読み，社会生活に役立つ知識の文例を集め，それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

古典の実用的な文例や名句・名言などの現代における意義や価値について，随筆などにまとめる言語活動を示している。

往来物とは，往復書簡（往来）の形式を採った文例集に由来しており，中国の影響を受けながら，『十二月往来』などの書簡の文例を示したものや，『庭訓往来』などの書簡形式を採った単語集など，近代以前に我が国で独自に発展していった日常生活に必要な実用知識を示したものである。**漢文の名句・名言など**とは，例えば『論語』，『孟子』，『菜根譚』，『言志録』などにみられる。

社会生活に役立つ知識の文例を集める際には，原文のみならず，解説文や評論文なども活用して，それらの普遍的価値や，それらが古典として現代まで読み継がれてきた意味や理由について探究することも大切である。その結果として，時代の変遷の中で様々な評価を受けつつ読み継がれてきた作品や文章の**現代における意義や価値**について，生徒が認識し考察を深めることが期待される。また，**往来物や漢文の名句・名言など**に用いられている文体などの表現の仕方の特色を捉え，中心となる思想などがどのように表現されているかを理解するとともに，描写や語調などの特徴にも留意しながら，感想や考察したことを**随筆などにまとめる活動**は，書くことを通して読む能力を高めることにも結び付く点で重要である。

4　内容の取扱い

(1) 内容の〔知識及び技能〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア　(2)のイの指導については，〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の指導に即して行い，必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにすること。

文語のきまりや訓読のきまりなどの文語文法の指導は，古典の作品や文章の読みを確かなものにしたり，深く読み味わったりするために行うという，これまでと変わらない原則的な考えを明示している。文語文法の指導は，古典などを読むために必要な指導を，読む

ことの学習に即して行うという考え方である。必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにするとしたのは，文語文法をある程度まとまった形で学ぶことを通して，古典に対する興味や関心を更に広げ，そのことが古典などを主体的に読むことの学習にも生かされるよう配慮したものである。そこで，生徒の実態に応じて，そのような学習の必要性の有無を適切に判断するとともに，文語文法の暗記に偏るなど，興味や関心を広げることを軽視した指導に陥らないような配慮と工夫をする必要がある。なお，漢文の訓読の指導に際しても，読むことの学習に即して行うという考え方であり，文語文法との関連に注意させる必要がある。

(2) 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア　古文及び漢文の両方を取り上げるものとし，一方に偏らないようにすること。

「古典探究」の内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の指導においては，**古文及び漢文の両方を取り上げるものとし，一方に偏らないようにする**ことを示している。

「古典探究」では，科目の目標として，古典などを通した先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で伝え合う力を高めることと，生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させることを示している。**古文と漢文**は我が国の古典として共に重要なものであり，それを読むことができるよう，両方を取り上げて生徒に学習させることが求められる。そこで，古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり，取扱い方に深浅が生じたりすることがないよう配慮し，全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

イ　古典を読み深めるため，音読，朗読，暗唱などを取り入れること。

音読とは，声を出して文章を読むことをいい，文章の内容や表現を理解し伝えることに重点がある。音読によって，古典の文章の特有のリズムに気付かせることも大切である。特に古文や漢文などでは，音読することによって文章の調子に気付くことも多い。何回も繰り返し音読してそのリズムに慣れるよう指導することが大切である。

朗読とは，文章の思想や感情などの内容を十分に理解した上で，聞く人がよりよく理解できるよう表現性を高めて読むことである。文章の読み味わいが深いものであればあるほど，優れた朗読が可能となる。また，朗読することによって，読みが深まることも多い。

暗唱とは文章を読んで記憶した上で，その文章を声に出すことである。文章を記憶することで，読みが深まることは多い。また，暗唱を行うことで，より感情豊かに表現することが可能となる。

音読，朗読，暗唱などとしたのは，演じることなども含めて，幅広く音声言語などによる活動を指導に取り入れることが可能であることを示すためである。指導に当たっては，

活動そのものが目的となることがないよう，古典を読み深めるためというねらいに留意し，音読，朗読，暗唱などを取り入れる必要がある。

ウ　必要に応じて，古典の変遷を扱うこと。

「古典探究」における作品や文章の扱いは，実際にそれを読むことによってその内容や表現の特色をつかみ，考えを深めたり発展させたりすることに主眼を置いている。したがって，それに資するよう，古典の作品や文章の変遷については，**必要に応じて**扱うこととしている。

古典の変遷とは，近世以前の文章史や文学史のことである。上代から近世に至る時代の推移と，文章や文学の変遷とは密接な関連がある。読んだ作品や文章の書き手がどのような考えをもち，その時代の他の書き手はどのような考えをもっているのかを知ることや，散文や韻文といった文章の種類が，書かれた時代によってどのように変遷しているのかなどについて理解を深めることが，主体的で多面的・多角的な視点からの読書にも結び付いていく。このことを踏まえ，生徒の発達の段階や科目の趣旨などを考慮して，作品や文章の内容や特質を理解するために，必要に応じて取り扱うということである。

(3) 教材については，次の事項に留意するものとする。

ア　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の教材は，古典としての古文及び漢文とし，日本漢文を含めるとともに，論理的に考える力を伸ばすよう，古典における論理的な文章を取り上げること。また，必要に応じて，近代以降の文語文や漢詩文，古典についての評論文などを用いることができること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の教材は，**古典としての古文及び漢文**としていることを示している。**古典としての古文及び漢文**とは，近世までに書かれた古文と漢文のことである。

その上で，古典としての古文及び漢文に**日本漢文を含める**ことを示している。**日本漢文**とは，上代から近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文とをいう。これは本来，古典としての漢文に含まれるものである。我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや，日本人の思想や感情などが，漢語，漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを考え併せると，日本漢文の適切な活用を図る必要があり，ここで改めて示している。

加えて，科目の性格を踏まえた上で，**論理的に考える力を伸ばすよう，古典における論理的な文章を取り上げる**ことを，ここで改めて示している。古典を読む学習では，教材として文学的な文章を重視する傾向がある。しかし，例えば，古文の歌論や俳論などの評論，漢文の思想など，**論理的に考える力を伸ばす**ため，教材としてふさわしい古典における論理的な文章も存在する。これらを，古典としての古文及び漢文の教材として取り上げ

ることを示している。

また，**必要に応じて，近代以降の文語文や漢詩文，古典についての評論文などを用いることができる**ことを示している。これらについては，必要に応じて用いることができることとしていることから，指導のねらい，生徒の興味・関心，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。

近代以降の文語文や漢詩文は，時代的な範囲では古典に含まれないが，近代以降にあっても，古典の表現の特色を継承した優れた作品などがある。**古典についての評論文など**を示したのは，近代以降の文章にも，古典の翻案などのほか，古典の魅力や現代的な意義などを平易な言葉で記した解説は多く，指導の段階や時期などに配慮し，親しみやすく効果的なものを適切な分量で教材として扱うことで，古典の作品や文章の価値について考察すること，言語文化の変遷についての理解を深めること，古典についての興味や関心を広げることなどに資することができるためである。

> イ　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「A読むこと」の(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実を図るため，各領域の**(2)に掲げる言語活動が十分行われるよう**，教材を偏りなく取り上げるように配慮することを示している。

特に，言語の教育としての立場を重視する国語科においては，生徒の言語活動を通して，〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導の充実に役立つ適切な教材を選定する必要がある。その際，〔知識及び技能〕と〔思考力，判断力，表現力等〕に示した資質・能力がバランスよく育成されることを重視し，教材を単に文章や作品といった意味にとどめることなく，単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう，単元などにおける具体的な学習の手立てや方向性も併せて示したものとして考えていくことが大切である。

今回の改訂も従前と同じく，内容の(2)に言語活動例を示しているが，その趣旨を踏まえ，それらの言語活動が十分行われるよう，生徒の実態に応じて適切な教材を作成し，選定することが大切である。ねらいとした資質・能力の育成に向けた適切な教材を選定することによって，生徒の主体的・対話的で深い学びが促進され，必要な情報を収集し活用して，報告や発表をするなどの積極的な言語活動につながる場合が多い。このような点からも，教材の適切な選定は，この科目の学習に重要な役割を果たすことを認識する必要がある。

言語活動を行う際に留意すべきことは，あくまでも，その単元で育成しようとしている資質・能力を考えた場合に，どのような言語活動が適切であるかを考えた上で，活動を選定することである。特に国語を的確に理解する資質・能力を育成する「A読むこと」の領域の指導に当たっては，単に読ませるだけでは学習を深めたりそれを評価したりすること

も難しくなるため，読むとともに，把握したり解釈したり考えたりしたことを表現する必要がある。この場合，読む資質・能力を育成するために話したり書いたりする活動を取り入れることもある。こうした場合においても，あくまでも，育成する資質・能力と言語活動との整合性を的確に見極める必要がある。

教材の選定に当たっては，古典に親しむ態度を育成すること，読むことの能力を育成すること，我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることをねらいとして，生徒の発達の段階や国語の資質・能力の程度，興味や関心などに配慮し，適切な古典の作品や文章などをバランスよく取り上げることが大切である。そのためには，古文と漢文の作品や文章の両方にわたって，適切に選定する必要がある。その際，古文には，和歌，俳諧，物語，随筆，日記，説話，浮世草子，能，狂言，評論など，漢文には，思想，史伝，詩文など，多種多様な種類の作品や文章があることに留意する必要がある。

ウ　教材は，言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう，文章の種類，長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。

言語文化の変遷について理解を深めるとは，例えば，『古事記』や『万葉集』など漢字のみを用いて表記された作品から，仮名文字が用いられるようになった作品へといった文字表記の変遷，女性文学から隠者文学，庶民文学へといった文学の担い手と思潮の変遷などを理解したり，軍記物語の文体に漢文訓読の影響を見いだしたり，俳諧の学習においてその成立に至るまでの和歌，連歌の歴史を通観したりというように，読むことの学習と関連して言語文化の変遷について理解を深めるということを示している。

文章の種類に配慮するとは，文章の種類や類型，形態に偏りなく，幅広い範囲で教材を取り上げることで，古典の多様な世界に触れさせるということである。**長短や難易などに配慮**するとは，短く平易なものがよいということではなく，ある程度まとまった量の教材を読むことで，古典を読む能力が養われるという側面もあることを踏まえている。古典を読む資質・能力を養うためには，生徒の発達の段階や指導の時期に即応して，長短難易様々なものをバランスよく取り上げ，その配列を工夫するなどの配慮が必要である。

第３章　各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

１　指導計画作成上の配慮事項

○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(1) 単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質･能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること。

この事項は，国語科の指導計画の作成に当たり，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を進めることとし，国語科の特質に応じて，効果的な学習が展開できるように配慮すべき内容を示したものである。

選挙権年齢や成年年齢の引き下げなど，高校生にとって政治や社会が一層身近なものとなる中，学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには，これまでの優れた教育実践の蓄積も生かしながら，学習の質を一層高める授業改善の取組を推進していくことが求められている。

指導に当たっては，(1)「知識及び技能」が習得されること，(2)「思考力，判断力，表現力等」を育成すること，(3)「学びに向かう力，人間性等」を涵養（かん）することが偏りなく実現されるよう，単元など内容や時間のまとまりを見通しながら，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが重要である。

主体的・対話的で深い学びは，必ずしも１単位時間の授業の中で全てが実現されるものではない。単元など内容や時間のまとまりの中で，例えば，主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか，対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか，学びの深まりをつくりだすために，生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか，といった観点で授業改善を進めることが求められる。また，生徒や学校の実態に応じ，多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていくことが重要であり，単元など内容や時間のまとまりを見通した学習を行うに当たり基礎となる「知識及び技能」の習得に課題が見られる場合には，それを身に付けるために，生徒の主体性を引き出すなどの工夫を重ね，確実な習得を図ることが必要である。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり，特に「深い学び」の視点に関して，各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を，習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて，より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

国語科においては，様々な事物，経験，思い，考え等をどのように言葉で理解し，どの

ように言葉で表現するか，という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。**言葉による見方・考え方を働かせ**るとは，生徒が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。この「対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりする」とは，言葉で表される話や文章を，意味や働き，使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し，理解したり表現したりすること，また，その理解や表現について，改めて言葉に着目して吟味することを示したものと言える。

なお，このことは，話や文章を理解したり表現したりする際に必要となるものであるため，これまでも国語科の授業実践の中で，生徒が言葉に着目して学習に取り組むことにより「知識及び技能」や「思考力，判断力，表現力等」が身に付くよう，授業改善の創意工夫が図られてきたところである。

国語科において授業改善を進めるに当たっては，言葉の特徴や使い方などの「知識及び技能」や，自分の思いや考えを深めるための「思考力，判断力，表現力等」といった指導事項に示す資質・能力を育成するため，これまでも国語科の授業実践の中で取り組まれてきたように，生徒が言葉に着目し，言葉に対して自覚的になるよう，学習指導の創意工夫を図ることが期待される。

○各科目の履修に関する配慮事項

> (2)「論理国語」,「文学国語」,「国語表現」及び「古典探究」の各科目については，原則として,「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に履修させること。

ここでは,「論理国語」,「文学国語」,「国語表現」及び「古典探究」の履修についての配慮事項を述べている。すなわち，これらの各科目の履修に当たっては，原則として，共通必履修科目である「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に選択して履修させることとしている。各学校においては，共通必履修科目の履修学年や選択科目の履修順序，履修学年などについて十分な検討を行い，生徒の特性や学校の実態等に応じた教育課程の編成や指導計画の作成が行われるようにする必要がある。

高等学校国語科には,「現代の国語」,「言語文化」,「論理国語」,「文学国語」,「国語表現」及び「古典探究」の６科目がある。科目構成の上からこの６科目の関係をみると，教科の基本的な科目として,「現代の国語」及び「言語文化」が総合的な言語能力を育成することを目指す共通必履修科目として置かれている。その他の選択科目は，共通必履修科目の〔知識及び技能〕,〔思考力，判断力，表現力等〕のそれぞれについて，各科目の性格や特性に応じて深化，発展を図る形で配置されている。したがって，選択科目の指導計画の作成に当たっては,「現代の国語」及び「言語文化」の内容の各事項との十分な関連を図る必要がある。

「現代の国語」及び「言語文化」については，今回の改訂でも履修する学年は特に示し

ていないが，これらの科目が，共通必履修科目であること，２科目で教科の目標を全面的に受け，中学校との接続を重視し，内容も〔知識及び技能〕，〔思考力，判断力，表現力等〕の各事項を中学校から発展させているなど，高等学校における国語の基礎・基本を身に付けさせることをねらいとしていること，他の選択科目は「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に履修するようにしていることなどに留意して，履修学年を設定する必要がある。

選択科目については，**原則として，「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に履修させる**としているだけで，選択科目相互の履修順序は示していない。ここで**原則として**としているのは，例えば，「現代の国語」，「言語文化」を２以上の連続する年次にわたって分割履修するような場合に，２年次目においては，選択科目を同時に履修することができることを可能とするものである。

なお，ここで定めている各科目の履修の順序は，この教科の系統性に基づき，後に履修する科目の内容が前に履修する科目の内容を前提として定められていることによるものであり，生徒にはこの順序に則（のっと）って履修させることが求められる。

○〔知識及び技能〕に示す事項の指導

> (3) 各科目の内容の〔知識及び技能〕に示す事項については，〔思考力，判断力，表現力等〕に示す事項の指導を通して指導することを基本とすること。

各科目の内容の〔知識及び技能〕に示す事項は**〔思考力，判断力，表現力等〕に示す事項の指導を通して**行うことを基本とすることを示したものである。したがって，〔知識及び技能〕に示す事項が生きて働く資質・能力として育成されるためには，〔思考力，判断力，表現力等〕に示す各事項との関連が図られることが重要である。したがって，〔知識及び技能〕に示す事項のみを取り上げて繰り返し指導したり，まとめて単元化して扱ったりすることは最小限にとどめる必要があることを示している。

○中学校との関連

> (4)「現代の国語」及び「言語文化」の指導については，中学校国語科との関連を十分に考慮すること。

「現代の国語」及び「言語文化」は，いずれも共通必履修科目であり，中学校を卒業した全ての生徒が，原則として，選択科目に先んじて高等学校で履修する科目である。したがって，これらの科目の指導については，**中学校国語科との関連**について十分配慮することが必要である。例えば，指導計画の作成の際に，中学校学習指導要領や教材などを確認したり，中学校国語科で学習したことを生徒に確かめたりするなどして，中学校の学習内容との円滑な接続について十分留意することが必要である。

○他教科等との関連

(5) 言語能力の向上を図る観点から，外国語科など他教科等との関連を積極的に図り，指導の効果を高めるようにすること。

言語能力は，全ての教科等における学習の基盤となる資質・能力である。このため，第１章総則の第３款の１の(2)において，「言語能力の育成を図るため，各学校において必要な言語環境を整えるとともに，国語科を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて，生徒の言語活動を充実すること。」とされているとおり，言語能力の育成に向けて，国語科が中心的な役割を担いながら，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが重要である。

指導計画の作成に当たっては，他教科等の内容の系統性や関連性を考慮することが求められる。その際，国語科と同様，言語を直接の学習対象とする外国語科との連携は特に重要なものとなる。

例えば，国語科の学習内容が外国語科等の学習に結び付くよう指導の時期を工夫すること，関連のある学習内容や言語活動を取り上げた単元の設定を工夫することなどが考えられる。

○障害のある生徒などへの指導

(6) 障害のある生徒などについては，学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的，組織的に行うこと。

障害者の権利に関する条約に掲げられたインクルーシブ教育システムの構築を目指し，生徒の自立と社会参加を一層推進していくためには，通常の学級，通級による指導，特別支援学校において，生徒の十分な学びを確保し，一人一人の生徒の障害の状態や発達の段階に応じた指導や支援を一層充実させていく必要がある。

通常の学級においても，発達障害を含む障害のある生徒が在籍している可能性があることを前提に，全ての教科等において，一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援ができるよう，障害種別の指導の工夫のみならず，各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図，手立てを明確にすることが重要である。

これを踏まえ，今回の改訂では，障害のある生徒などの指導に当たっては，個々の生徒によって，見えにくさ，聞こえにくさ，道具の操作の困難さ，移動上の制約，健康面や安全面での制約，発音のしにくさ，心理的な不安定，人間関係形成の困難さ，読み書きや計算等の困難さ，注意の集中を持続することが苦手であることなど，学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意し，個々の生徒の**困難さに応じた指導内容や指導方法**を工夫することを，各教科等において示している。

その際，国語科の目標や内容の趣旨，学習活動のねらいを踏まえ，学習内容の変更や学

習活動の代替を安易に行うことがないよう留意するとともに，生徒の学習負担や心理面にも配慮する必要がある。

例えば，国語科における配慮として，次のようなものが考えられる。

・自分の立場以外の視点で考えたり他者の感情を理解したりするのが困難な場合には，生徒が身近に感じられる文章（例えば，同年代の主人公の物語など）を取り上げ，文章に表れている心情やその変化等が分かるよう，行動の描写や会話文に含まれている気持ちがよく伝わってくる語句等に気付かせたり，心情の移り変わりが分かる文章の中のキーワードを示したり，心情の変化を図や矢印などで視覚的に分かるように示してから言葉で表現させたりするなどの配慮をする。

・比較的長い文章を書くなど，一定量の文字を書くことが困難な場合には，文字を書く負担を軽減するため，手書きだけではなくＩＣＴ機器を使って文章を書くことができるようにするなどの配慮をする。

・声を出して発表することに困難がある場合や人前で話すことへの不安を抱いている場合には，紙やホワイトボードに書いたものを提示したりＩＣＴ機器を活用したりして発表するなど，多様な表現方法が選択できるように工夫し，自分の考えを表すことに対する自信がもてるような配慮をする。

なお，学校においては，こうした点を踏まえ，個別の指導計画を作成し，必要な配慮を記載し，他教科等の担任と共有したり，翌年度の担任等に引き継いだりすることが必要である。

２　内容の取扱いに当たっての配慮事項

○言語活動に関する配慮事項

> (1) 各科目の内容の〔知識及び技能〕に示す事項については，日常の言語活動を振り返ることなどを通して，生徒が，実際に話したり聞いたり書いたり読んだりする場面を意識できるよう指導を工夫すること。

〔知識及び技能〕に示す事項の取扱いを示している。

〔知識及び技能〕に示す事項は，個別の事実的な知識や，一定の手順や段階を追って身に付く技能のみを指すものではないため，**実際に話したり聞いたり書いたり読んだりする場面**において，生きて働く「知識及び技能」として習得することが求められる。

そのため，指導に当たっては，生徒が，日常の言語活動の中にある言葉の特徴やきまりなどに気付くことや，学習したことを日常の話したり聞いたり書いたり読んだりする場面に生かすことを意識しながら学習できるようにすることが重要である。

○読書，文字・活字文化に関する配慮事項

(2) 生徒の読書意欲を喚起し，読書の幅を一層広げ，読書の習慣を養うとともに，文字・活字文化に対する理解が深まるようにすること。

読書意欲を喚起し，読書の幅を一層広げ，読書の習慣を養うとともに，文字・活字文化に対する理解が深まるよう指導することが必要であることを示している。

読書は，国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。一方，高校生の読書活動については，小・中学生に比べて近年極めて低調であることが指摘されている。このため，今回の改訂では，読書に関連する事項を全ての科目の〔知識及び技能〕に位置付けている。〔知識及び技能〕の「読書」に関する事項及び〔思考力，判断力，表現力等〕の各領域の指導を通して，**生徒の読書意欲を喚起し，読書の幅を一層広げ，読書の習慣を養う**ことが重要である。

読書の幅を広げるには，生徒自らが学校図書館の司書や司書教諭，地域の図書館の司書などによる適切な助言を受けることが有効である。そのためには，広く関係する機関と連携して指導することが必要となる。

読書の幅を広げ，読書の習慣を養うことは，生徒個人の人間性を培うばかりでなく，書物から知識や情報を収集し活用する資質・能力を身に付ける基盤ともなる。今後ますます情報化が進展する社会において，よりよく生きるために，読書の幅を広げ，読書の習慣を養うことの重要性は一層高まっていくことを認識する必要がある。

○情報機器の活用等に関する配慮事項

(3) 生徒がコンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設けるなどして，指導の効果を高めるよう工夫すること。

コンピュータや情報通信ネットワークの活用について示している。情報化社会の進展を見据え，国語科の学習においても，情報収集や情報発信の手段として，インターネットや電子辞書等の活用，コンピュータによる発表資料の作成やプロジェクターによる提示など，**コンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設ける**ことが重要である。

○学校図書館等の利活用に関する配慮事項

(4) 学校図書館などを目的をもって計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること。

学校図書館は，生徒の読書活動や生徒への読書指導の場である「読書センター」，生徒

の学習活動を支援したり授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」，生徒や教職員の情報ニーズに対応したり生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を有している。

〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕に示す事項の指導に当たっては，本などの種類や配置，探し方など，中学校で学習した内容を踏まえながら，学校図書館などを利用する目的を明確にした上で計画的に利用し，これらの機能の活用を図ることが必要である。

○教材についての留意事項

> (1) 教材は，各科目の内容の〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕に示す資質・能力を偏りなく養うことや読書に親しむ態度を育成することをねらいとし，生徒の発達の段階に即して適切な話題や題材を精選して調和的に取り上げること。また，必要に応じて音声言語や画像による教材を用い，学習の効果を高めるようにすること。

教科及び各科目の目標，〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕に示す資質・能力を偏りなく養うことや読書に親しむ態度の育成をねらいとして，教材を選定することを示している。生徒の発達の段階に即して**適切な話題や題材**，話や文章の種類などを調和的に選定し，特に，〔思考力，判断力，表現力等〕においては，各領域の指導が適切に行われるよう，年間を通してバランスよく教材を配当することが重要である。

また，国語科はとかく文字言語だけを教材としがちであるが，それだけではなく，必要に応じて，**音声言語や画像**による種々の教材も用い，〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕の全般にわたって学習の効果を高めるようにする必要がある。

> (2)「論理国語」及び「国語表現」は，「現代の国語」の３の(4)のウに示す事項について，「文学国語」は「言語文化」の３の(4)のエに示す事項について，「古典探究」は「言語文化」の３の(4)のイ及びオに示す事項について留意すること。

科目ごとの目標を実現し，内容を習得するために，教材については，各科目の内容の取扱いにおいてそれぞれの配慮事項を示している。

各科目の教材に共通する基本的な配慮事項は，「現代の国語」の３の(4)のウ及び「言語文化」の３の(4)のエ，古典の教材に関する配慮事項は，「言語文化」の３の(4)のイ及びオに示している。そこで，「論理国語」及び「国語表現」は，「現代の国語」の３の(4)のウに示した教材選定の具体的な観点について，「文学国語」は，「言語文化」の３の(4)のエに示した教材選定の具体的な観点について，「古典探究」は，「言語文化」の３の(4)のイ及びオに示した古典の教材選定の具体的な観点についてそれぞれ留意する必要がある。

3　総則関連事項

○道徳教育との関連（総則第１款２(2)の２段目）

学校における道徳教育は，人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことによりその充実を図るものとし，各教科に属する科目（以下「各教科・科目」という。），総合的な探究の時間及び特別活動（以下「各教科・科目等」という。）のそれぞれの特質に応じて，適切な指導を行うこと。

高等学校における道徳教育については，各教科・科目等の特質に応じ，学校の教育活動全体を通じて生徒が**人間としての在り方生き方**を主体的に探求し，豊かな自己形成ができるよう，適切な指導を行うことが求められている。

このため，各教科・科目においても目標や内容，配慮事項の中に関連する記述があり，国語科との関連をみると，特に次のような点を指摘することができる。

国語科においては，国語で的確に理解したり効果的に表現したりする資質・能力を育成する上で，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高めることは，学校の教育活動全体で道徳教育を進めていくための基盤となるものである。また，思考力や想像力を伸ばすこと及び言語感覚を磨くことは，道徳的心情や道徳的判断力を養う基本になる。さらに，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことは，伝統と文化を尊重し，それらを育んできた我が国と郷土を愛することなどにつながるものである。

教材選定の観点として，道徳性の育成に資する項目を国語科の特質に応じて示している。

○学校設定科目（総則第２款３(1)エ）

エ　学校においては，生徒や学校，地域の実態及び学科の特色等に応じ，特色ある教育課程の編成に資するよう，イ及びウの表に掲げる教科について，これらに属する科目以外の科目（以下「学校設定科目」という。）を設けることができる。この場合において，学校設定科目の名称，目標，内容，単位数等については，その科目の属する教科の目標に基づき，高等学校教育としての水準の確保に十分配慮し，各学校の定めるところによるものとする。

学校設定科目の名称，目標，内容，単位数等は各学校において定めるものとされているが，その際には，**その科目の属する教科の目標に基づき**という要件が示されていること及び科目の内容の構成については関係する各科目の内容との整合性を図ることに十分配慮する必要がある。

○義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る工夫（総則第２款４(2)）

(2) 生徒や学校の実態等に応じ，必要がある場合には，例えば次のような工夫を行い，義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るようにすること。

ア　各教科・科目の指導に当たり，義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けること。

イ　義務教育段階での学習内容の確実な定着を図りながら，必履修教科・科目の内容を十分に習得させることができるよう，その単位数を標準単位数の標準の限度を超えて増加して配当すること。

ウ　義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目等を履修させた後に，必履修教科・科目を履修させるようにすること。

本項では，従来に引き続き，学校や生徒の実態等に応じて義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を行うことを指導計画の作成に当たって配慮すべき事項として示し，生徒が高等学校段階の学習に円滑に移行できるようにすることを重視している。

義務教育段階の学習内容の確実な定着を図る指導を行うことが求められるのは，**生徒や学校の実態等に応じ，必要がある場合**であり，全ての生徒に対して必ず実施しなければならないものではないが，前述の必要がある場合には，こうした指導を行うことで，高等学校段階の学習に円滑に接続できるようにすることが求められている。

これは，高等学校を卒業するまでに全ての生徒が必履修教科・科目の内容を学習する必要があるが，その内容を十分に理解するためには，義務教育段階の学習内容が定着していることが前提として必要となるものであることから，それが不十分であることにより必履修教科・科目の内容が理解できないということのないよう，必履修教科・科目を履修する際又は履修する前などにそうした学習内容の確実な定着を図れるようにする配慮を求めたものである。